

# 会報

第38号

平成22年度



東京都立高等学校副校長会



## 会報第 38 号の発刊によせて



会長 都築 功  
(東京都立雪谷高等学校)

「会報第 38 号」の発刊にあたり一言ご挨拶申し上げます。副校长会の事業、研究活動にご協力、ご尽力いただき厚く御礼申し上げます。

昨年の 8 月より、急遽会長事務取扱として会長の仕事を代行することになり、1 月の臨時総会で会長に選出されました。器ではないと思いつつも、副会长という立場であった以上、お引き受けすることにいたし、現在に至っております。

平成 22 年度は、23 年度からの全日制副校长会と定時制通信制副校长会の統合による東京都公立高等学校副校长協会の発足準備が最大の課題でした。全定合同の役員会を何度も重ね、副校长協会の規約の作成をしていきました。同時に並行して、全日制部会、定時制通信制部会それぞれで細則を決めていきました。それぞれの部会で、全国組織とのつながりや外部諸団体との関連もありますし、勤務時間の関係から会議や活動のための共通の時間設定ができにくいという点で、統合されたとはいえ当面、全体での行事は 6 月の総会と 8 月の副校长研究協議会のみで日常的には全日制部会、定時制通信制部会それぞれの活動が主であり、ゆるやかに徐々に統合を進めしていくという形になろうかと思います。印刷物の統合等、できる所から行ってまいりたいと思います。

22 年度の 8 月から会長の仕事を引き継ぎましたが、前会長が掲げておられた「繋がり」を大切にし、「発言する副校长会」の路線を継承しようと心がけ、また、指導部との連携もより深められるよう努めてまいりました。

8 月の副校长研究協議会の後の教育懇談会、1 月の臨時総会の後の賀詞交歓会では指導部から 10 名以上が出席してくださり、副校长会からも 40 名を超える方々が参加し非常に有意義な懇談の場をもつことができました。お忙しい中参加してくださった副校长の皆様に感謝申し上げるとともに、指導部が副校长会との連携を大切にしてくださるのを本当にありがとうございます。

さて、副校长研究協議会で中部 B による「副校长の職務実態と効率化の工夫について」というテーマの研究発表がありました。言うまでもなく、22 年度に入ってからも業務の広がりや要求されることは増加の一途です。TAIMS が導入され、成績等管理サーバ、旅費システム、自己申告システムが稼動して何ヶ月たっても相変わらず職員室でヘルプデスクの役割をしなければならないとか……。22 年度は年度末の忙しい時期に「既存 PC から TAIMS へのデータ移行」が加わったり、年間 10 回も ICT 研修の講師対応をしたり、……きりがありません。

副校长同士がお互いに心身の健康が保てるよう、そして少しでも早く帰れるよう、知恵を出し合い助け合えるような、副校长会でありたいと思っています。また、確かに多忙だけど、そんな中でも元気が出るような話や視野を広げてくれるような話を聴いたりして識見を高められるような、そんな活動も大切にしたいと思っています。

最後になりましたが、「会報第 38 号」を発刊するにあたり、教育庁指導部高等学校教育指導課、東京都公立高等学校長協会、東京都公立高等学校定時制通信制副校长会をはじめとする関係各位に、今年度一年間のご支援に対し感謝を申し上げます。また、編集・発刊にご尽力いただいた事務局の皆様、各地区の常任幹事をはじめとする役員の皆様に心より感謝申し上げます。

# 目 次

会長あいさつ（発刊によせて）

## 1. 教頭会・副校長会のあゆみ

1. 本会創設以前の教頭会	.....	1
2. 会員数と会費の変遷	.....	3
3. 本会のあゆみ	.....	7
4. 本会のあゆみ一覧	.....	11

## 2. 総務部会報告

1. 本部の活動	.....	16
2. 平成 22 年度予算	.....	17
3. 平成 22 年度事業報告	.....	19
4. 総会	.....	20
5. 幹事会	.....	20
6. 総務部会・常任幹事会	.....	21
7. 指導部との賀詞交歓会	.....	23
8. 特別委員会	.....	24

## 3. 主な活動報告

1. 全国高等学校教頭・副校長会	…	25
2. 都立高校副校長研究協議会	…	26
3. 関東大会報告	.....	27

## 4. 地区別支部副校長会報告

1. 東部 A 地区副校長会	.....	29
2. 東部 B 地区副校長会	.....	30
3. 東部 C 地区副校長会	.....	31
4. 東部 D 地区副校長会	.....	32
5. 中部 A 地区副校長会	.....	33
6. 中部 B 地区副校長会	.....	34
7. 中部 C 地区副校長会	.....	35
8. 中部 D 地区副校長会	.....	36
9. 西部 A 地区副校長会	.....	37
10. 西部 B 地区副校長会	.....	38
11. 西部 C 地区副校長会	.....	39
12. 西部 D 地区副校長会	.....	40

## 5. 学科別副校長会報告

1. 工業科副校長会	.....	41
2. 商業科副校長会	.....	43
3. 農業科副校長会	.....	45

## 6. 研究部会報告

1. 管理運営研究部会		
第 1 委員会（学校管理関係）	…	47
第 2 委員会（職務、待遇関係）	…	50
2. 高校教育研究部会		
第 1 委員会（教育課程）	…	52
第 2 委員会（教育対策）	…	55
3. 生徒指導研究部会		
第 1 委員会（生活指導・進路指導）	…	57
第 2 委員会（教科以外の教育指導）	…	60
7. 退任者の声	…	62
8. 転任者の声	…	65
9. 新任者の声	…	75

## 10. (1) 講演「高校教育の展望と課題」

京都造形芸術大学教授		
寺脇 研 先生	…	92

## (2) 講演「日本一のマグロ船に学ぶ！ 職場 をよりイキイキさせる仕事術」

ネクストスタンダード		
齊藤 正明 氏	…	102

## (3) 講演「志～人物記念館の旅」

多摩大学経営情報学部教授		
久恒 啓一 先生	…	109

## (4) 講話「東京都の教育施策と課題 —最近の動き」

教育庁指導部指導企画課長		
金子 一彦 先生	…	116

## 11. 会員異動

会員異動	…	122
------	---	-----

## 編集後記

## 1. 教頭会・副校長会のあゆみ

### 1. 本会創立以前の教頭会

明治19年10月勅令65号「尋常師範学校官制」第3条「教頭ハ教諭中ヨリ之ニ兼任シ、學校長ノ監督ニ属シ、教務ヲ整理シ教室ノ秩序ヲ保持スルコトヲ掌ル」とあり、また昭和16年3月勅令第148号「国民学校令」で「學校長及ビ教頭ハ其ノ学校ノ訓導ノ中ヨリ之ヲ補ス、教頭ハ學校長ヲ補佐シ校務ヲ掌ル」と定めるなど、戦前は教頭職制度があった。その当時の教育制度は5年制の中学校・高等女学校・工業学校・商業学校・農業学校などに分かれていた。戦前の教頭会は関係の深い学校同志が校務連絡と親睦のため集まる程度の会はあったが教頭会としての組織化されたものはなかった。

戦後の昭和22年3月法律第26号「学校教育法」公布により、教頭職は法制的になくなつたので、校長の命ずる校務分掌の一部として名ばかりの教頭が存在していた。昭和30年都教委は、「校務主任」の制度を設け、教頭全員に「校務主任」の辞令を渡し、12月1日付で任命した。このようなことから普・工・商・農などの教頭会は規約をもうけるなどし、各々「校務主任会」

を組織、やや教頭会的活動を行うようになった。その後昭和38年に全都の高校で組織する本会を創設した。本会が創立する以前の教頭会の歴史は次の通りである。(昭和49年2月内山調)

### 東教会（普通科）

昭和12年創立。昭和38年本会の創立により、昭和38年発展的解散

昭和12年春、府立第7高女に府立高女全校の教頭10名が集り親睦と校務連絡を目的に会を創設した(故松岡忍岡高女教頭の日記より)。昭和18年に都政がしかれ、府立高女も市立高女も全部都立高女と呼ばれるようになった。そのとき全都立高等女学校25校が忍岡高女に集り総会を開き組織を強化した。その後、戦争のため会は開けなかつたが、昭和24年より開けるようになり、昭和30年頃より男子系高校の入会も増加し会は発展してきた。昭和32年に都立高校校務主任会が発足したがこれと並行して会は存続、昭和38年都立高校教頭会が創立したので昭和39年1月23日、南多摩高校で最後の総会を開き発展的解散した。

年 度	昭 12 年	昭 13 年	昭 18 年	昭 19 年	昭 24 年	昭 25 年
会 員 数	10 校	10 校	25 校	25 校	31 校	35 校
会 費	—	—	—	戦争のため昭和24年まで中断する	300 円	300 円
当番幹事 校と会場	府立第7高女	昭14~17年 不明	忍 岡		駒場、富士、忍岡、足立	竹台、井草、千歳、鷺宮

昭 26 年	昭 27 年	昭 28 年	昭 29 年	昭 30 年	昭 31 年	昭 32 年
35 校	35 校	35 校	38 校	40 校	42 校	46 校
300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円
八潮、市谷、紅葉川、明正	京橋、本所、台東、三田	不 明	不 明	豊島、玉川、桜町、深川	雪谷、武蔵、北野、大崎	南多摩、目黒、神代、江北

昭 33 年	昭 34 年	昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年	昭 38 年	昭 39 年
48 校	50 校	50 校	60 校	63 校	63 校	63 校
300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円
千歳丘、一橋、足立、荻窪	白鷗、南多摩、富士森、府中	竹早、本所、広尾、青山	志村、板橋北多摩	不 明	不 明	不 明

会合は毎年5回を目指にし、4回は学校、1回は外部の会場を選んだ。

(昭和49年2月神藤調、昭和50年神藤訂正)

### 東京都立高等学校校務主任会（普通科）

昭和32年創立。昭和38年本会創立全校入会、その後普通科高校教頭会支部となる。

昭和32年1月17日駒場高校で普通科高校が集り、各学区から幹事を出し、その中から代表幹事をきめる組織で創立総会を行った。目的は親睦と校務連絡が主なもので、第1回の総会と

年2~3回の幹事会を行う程度の会であった。組織は普通科高校全体であるが、大島・三宅・八丈の島関係は未加入、昭和35年府中高、昭和38年は深沢・小岩・小平・南・大山の5校新設入会とし、86校となる。

年 度	昭 32 年	昭 33 年	昭 34 年	昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年
会 員 数	76校	76校	76校	77校	77校	77校
会 費	500円	500円	500円	500円	500円	500円
代表 幹 事	鈴木 菊雄 (駒 場)	森本久次郎 (日比谷)	岸田 文男 ( 西 )	渡辺 元 (板 橋)	細沼 清 (白 鷗)	田代清三郎 (両 国)

(昭和49年2月神藤、内山調、昭和50年2月神藤、内山訂正)

### 東京都立工業高等学校教頭会

昭和25年創立。昭和38年本会創立全校入会、その後工業高校教頭会支部となる。

はじめは校長会主催の教頭をねぎらう親睦の会であったが、昭和31年に校務主任会と名称を変え、会則を設けるなどし、会長と幹事3名で運営するようになり、昭和38年には幹事長と副幹事長、幹事4名に変更され現在に至ってい

る。組織は工業高校全校であるが、昭和31年共同実習所入会、昭和34年一橋工と羽田工が合併、同年鳥山工新設、昭和38年は練馬・荒川・足立・葛西・田無・多摩・砧・杉並・町田・府中の新設10校、同年航空工廃止し、共同実習所を含めて29校となる。

年 度	昭 25 年	昭 26 年	昭 27 年	昭 28 年	昭 29 年	昭 30 年	昭 31 年	昭 32 年	昭 33 年	昭 34 年
会 員 数	19校	19校	19校	19校	19校	19校	20校	20校	20校	20校
会 費	会場校の負担から必要に応じ徴収するようになる						500円	500円	500円	500円
備 考	校長会主催の会から教頭会に発展						都立工業高校校務主任会			

昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年
20校	20校	20校
500円	500円	500円
都立工業高校校務主任会		

(昭和19年2月内山・遊佐調、昭和50年2月内山・元田訂正)

### 東京都立商業高等学校教頭会

創立は昭和26年頃らしい。昭和38年本会創立時に全校入会。その後商業高校教頭会支部となる。

はじめのうちは記録がないので不明である

が、昭和32年に組織を強化し、幹事長制度を設け、年に数回の会合を行っている。

その後、昭和38年に四谷・赤羽の2校新設入会し、25校となった。

年 度	昭 32 年	昭 33 年	昭 34 年	昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年
会 員 数	不	明			25校	
会 費	不	明			1,000円	
備 考	都立商業高校校務主任会					

(昭和49年2月八田調)

## 東京都立農業高等学校教頭会

昭和24年創立。昭和38年本会創立時に全校入会。その後農業高校教頭会支部となる。

はじめは記録がないので不明であるが、教頭の集まる会はあった。昭和30年に会則を設け、持ち廻り幹事で運営していたが、昭和36年に幹

事を2名に強化し、毎年6回の会合を行っている。会員数は昭和32年に農産高が独立、昭和36年大島・三宅・八丈の農業科3校入会、昭和40年瑞穂農芸高独立し、9校となる。

年 度	昭 24 年	昭 25 年	昭 26 年	昭 27 年	昭 28 年	昭 29 年	昭 30 年	昭 31 年	昭 32 年	昭 33 年
会員数	4校	4校	4校	4校	4校	4校	4校	4校	4校	5校
会 費	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	500円	500円	500円	500円
備 考	教頭の集まる会はあったが細部不明									

昭 34 年	昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年
5校	5校	8校	8校
500円	500円	500円	500円
都立農業高校校務主任会			

(昭和49年2月池田調、昭和50年2月山本訂正)

## 2. 会員数と会費の変遷

本会創立から現在まで、学校数・会員数・会費・新設校のあゆみを次の表にまとめた。

### <変遷表について>

1. 本会が設立した昭和38年度は新設17校と廃校1校があるので125校から140校となった。
2. 昭和38年～昭和45年は普+商・普+農・本校+分校・共同実習所など各々1校として入会、会員数は実際の学校数より多い。

3. 昭和38年大森高馬込分校(定)は南高として新設、同年代々木高(定)は3部制となり入会。

4. 昭和40年浅草高(定)は東高(全)に変り新設、昭和46年大島高差木地分校は大島南校に変り新設。
5. 昭和44年秋川高、昭和48年大島南高に専監長制度が新設され入会、昭和48年だけ世田谷工高は2人教頭であった。(昭和52年2月神藤・内山調、その後追加)

[会員数と会費の一覧表] (昭和38年以降)

年 度	学 校 数	会員数(人)					年会費(円)				新設高校名 ※ 募集停止校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普 通	工 業	商 業	農 業	計	都 費	私 費	個 人	計		
昭和38年	140校	86人	28人	25人	8人	148人	—	500円	—	500円	深沢 小岩 小平 南 大山 四谷商 赤羽商 荒川工 杉並工 砧工 練馬工 足立工 萩西工 田無工 多摩工 町田工 府中工 (計17校)	杉並共実 北多摩 三宅 代々木 五日市 八丈 赤坂 大島
" 39	141	88	30	25	8	151	—	500	—	500	練馬 (計1校)	杉並共実 赤坂 浅草(定) 八丈 江東共実 北多摩 大島 代々木 五日市 三宅 (計10)
" 40	144	90	30	24	9	153	—	500	—	500	秋川 久留米 東 瑞穂農芸 (計4校)	杉並共実 赤坂 大島 江東共実 北多摩 三宅 代々木 五日市 八丈 (計9)
" 41	145	91	30	20	6	147	—	500	—	500	日野 (計1校)	杉並共実 江東共実 (計2)

年 度	学 校 数	会員数(人)					年会費(円)				新設高校名 ※ 募集停止校名 ○ 転校した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普 通	工 業	商 業	農 業	計	都 費	私 費	個 人	計		
昭和 42年	146	92	29	20	6	147	—	1,000	—	1,000	羽田 (計1校)	杉並共実 (計1)
# 43	147	94	29	20	6	149	—	1,000	—	1,000	東村山 (計1校)	秋川(舍監長) 杉並共実 (計2)
# 44	149	97	28	20	6	151	—	1,000	—	1,000	国分寺 小笠原 (計2校)	秋川(舍監長) 差本地分校(大島) (計2)
# 45	149	97	28	20	6	151	1,000	—	—	1,000	— (なし)	前年に同じ (計2)
# 46	155	102	28	20	6	156	1,000	—	—	1,000	潤江 福生 新島 東大和 忠生 大島南 (計6校)	秋川(舍監長) (計1)
# 47	161	108	28	20	6	162	1,000	—	—	1,000	片倉 府中東 神津 永山 保谷 芸術 (計6校)	前年に同じ (計1)
# 48	164	112	29	20	6	167	9,000	—	—	9,000	葛西南 猪江 清瀬 (計3校)	秋川(舍監長) 大島南(舍監長) 世田谷工(2人制) (計3)
# 49	168	116	28	20	6	170	9,000	—	—	9,000	高島 足立西 調布北 久留米西 (計4校)	秋川(舍監長) 大島南(舍監長) (計2)
# 50	172	120	28	20	6	174	9,000	—	2,000	11,000	水元 府中西 武蔵村山 野津田 (計4校)	前年に同じ (計2)
# 51	177	125	28	20	6	179	9,000	—	5,000	14,000	光丘 八王子東 青梅東 足立東 武蔵村山東 (計5校)	前年に同じ (計2)
# 52	184	132	28	20	6	186	9,000	—	5,000	14,000	青井 調布南 稲城 羽村 篠崎 小平西 秋留台 (計7校)	前年に同じ (計2)
# 53	191	139	28	20	6	193	9,000	—	6,000	15,000	蒲田 八王子北 昭島 大泉北 成瀬 坂東 清瀬東 (計7校)	前年に同じ (計2)
# 54	196	144	28	20	6	198	9,000	—	6,000	15,000	永福 足立新田 南野 砂川 武蔵野北 (計5校)	前年に同じ (計2)
# 55	202	150	28	20	6	204	9,000	—	6,000	15,000	大森東 大泉学園館 小川 日野台 小金井北 (計6校)	前年に同じ (計2)
# 56	202	152	28	20	6	206	9,000	—	6,000	15,000	田柄 松ヶ谷 (計2校)	前年に同じ (計2)
# 57	204	152	28	20	6	206	9,000	—	6,000	15,000	— (なし)	前年に同じ (計2)
# 58	207	155	28	20	6	209	9,000	—	6,000	15,000	小平南 田無 山崎 (計3校)	前年に同じ (計2)
# 59	209	157	28	20	6	211	9,000	—	6,000	15,000	東大和南 東村山西 (計2校)	前年に同じ (計2)
# 60	210	159	28	20	6	213	11,300	—	6,000	15,000	南平 (計1校)	秋川(舍監長) 大島南(舍監長) 紅葉川中央校舎 (計3)
# 61	210	160	28	20	6	214	11,300	—	6,000	17,300	— (なし)	秋川(舍監長) 大島南(舍監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 (計4)

年 度	学 校 数	会員数(人)					年会費(円)				新設高校名 ※募集停止・閉校校名 ○転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普 通	工 業	商 業	農 業	計	都 費	私 費	個 人	計		
昭和 62年	210	160	28	20	6	214	11,300	—	6,000	17,300	— (なし)	前年に同じ (計 4)
# 63	211	162	28	20	6	216	11,300	—	8,000	19,300	八王子高陵 (計 1 校)	秋川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 国際 (開設) (計 5)
平成 元	212	162	28	20	6	216	11,300	—	8,000	19,300	国際 ※赤坂台 (計 1 校)	秋川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 (計 4)
# 2	213	163	28	21	6	218	11,300	—	8,000	19,300	単位制 (計 1 校)	秋川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 単位制 (普・商) (計 5)
# 3	212	162	28	21	6	217	11,300	—	8,000	19,300	単位制を新宿山吹と改称	秋川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 新宿山吹 (普・商) (計 5)
# 4	212	160	28	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	※紅葉川中央校舎 ○赤坂 (普→商) ○五日市 (普→商)	前年に同じ (計 5)
# 5	212	160	29	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	— (なし)	前年に同じ (計 5)
# 6	213	160	28	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	(公立学校開設)	秋川 (舎監長) 大島南 (舎監長) 隅田川堤校舎、新宿山吹 (普・商) (計 4)
# 7	214	161	28	23	6	218	11,300	—	10,000	21,300	※北京橋、京橋南 飛鳥開設	前年に同じ (計 4)
# 8	214	161	28	23	6	218	11,300	—	10,000	21,300	靖海総合高校開設 (計 1 校)	前年に同じ (計 4)
# 9	211	159	28	22	6	215	11,300	—	10,000	21,300	— (なし)	前年に同じ (計 4)
# 10	211	159	28	22	6	215	11,300	—	10,000	21,300	※江東工	前年に同じ (計 4)
# 11	211	158	28	22	6	214	11,300	—	10,000	21,300	—	新宿山吹 2名から 1名となる
# 12	212	167	33	21	6	230	11,300	—	10,000	21,300	桐ヶ丘南工開設 ※羽田、坂北、秋川	教頭複数配置校大幅増 (計 18)
# 13	208	169	40	21	6	239	11,300	—	10,000	21,300	※明正、墨田川堤、 桜水商、牛込商、 清瀬東 (英語コース) ○町田工 (機械・電気情報、 工業化学→総合情報) 墨田工 (自動車科新設)	教頭複数配置校 31 校 (計 31)
# 14	207	170	39	20	6	238	11,300	—	10,000	21,300	つばさ総合 ※坂南、大森東、永福、 大泉北、館、武蔵村山東、 稲城、八王子高陵、 池袋商、港工業、 大泉学園 (国際教養コース)	同上 (計 31)
# 15	207	173	37	19	9	238	11,300	—	10,000	21,300	芦花 ※南、大泉学園、南野 新宿 (進学重視型単位制)	同上 (計 31)
# 16	200	167	37	18	9	231	0	—	19,000	19,000	六郷工科、千早、大江戸 上水、杉並総合 ※忍岡、北野、青梅東 砂川、本所工業	同上 (計 31)

年 度	学 校 数	会員数(人)					年会費(円)				新設高校名 ※ 募集停止 ▲ 閉校名 △ 閉課程校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名	
		普 通	工 業	商 業	農 業	その 他	計	都 費	私 費	個 人	計		
平成 17	194	165	34	18	8		225	0	—	19,000	19,000	一橋、六本木、美原 大泉桜、上野（一橋分校） 翔陽、砂川、若葉総合	副校長複数配置校 (計 26)
" 18	212	177	32	17	8		234	0	—	19,000	19,000	桜修館中等、小石川中等 尚国附属中学、浅草、 青梅総合、総合工科 ※水元、深川商業、四谷商業 第二商業（全日）	同 上 (計 29)
" 19	191	167	26	12	7		214	0	—	19,000	19,000	板橋有徳、橋 八王子桑志、葛飾総合 東久留米総合 ※九段（普通科）、玉川 忠生（普通科）、第二商業（定） 王子工業（工業科） 赤坂（商業科） 市ヶ谷商業（商業科）	同 上 (計 23)
" 20	201	138	23	12	7	29	209	0	—	19,000	19,000	世田谷総合 ※小金井工業（工業科） ▲九段、忠生、王子工業 赤坂、市ヶ谷商業 農林、世田谷工業 王子工業、台東商業	同 上 (計 17)
" 21	201 <small>九段 中等 含む</small>	138	21	11	6	32	208	0	—	18,000	18,000	大田桜台 ▲久留米、向島工業 八王子工業、向島商業 四谷商業、第二商業 △定期制で11校	同 上 (計 16)
" 22	204 <small>九段 中等 ・ 分校 含む</small>	135	21	11	5	36	208	0	—	18,000	18,000	富士附属中学、大泉附属中学 総合芸術、総合芸術駒場校舎 町田総合、多摩科学技術 南多摩中等、三鷹中等 ▲小石川、都立大学附属	同 上 (計 16)

「その他」には総合学科、産業、芸術、国際、中等教育学校、開設準備等を含む。



### 3. 本会のあゆみ

昭和 32 年度 12 月 : 文部省は「学校教育法施行規則」を改正、第 22 条に教頭職を位置づけた。

昭和 35 年度 4 月 : 都教委は「東京都公立学校の管理運営に関する規則」に教頭職を設け、「校務主任」を「教頭」に改め、辞令を渡した。

4 月 : 文部省は教頭を「管理または監督の地位にある管理職手当支給対象」に入れた。都教委は教頭を管理職と位置づけ、はじめて管理職手当 7% を支給した。

昭和 37 年度 38 年 1 月 : 全国高等学校教頭会は、都立両国高校で創立総会を開催した。

昭和 38 年度 6 月 20 日 : 都立高校校務主任会(普通科教頭会)と各職業高校校務主任会(各職業科教頭会)が合同し、「東京都立高等学校教頭会」が誕生した。当時の会員数は 140 校 148 人であった。

昭和 39 年度 40 年 1 月 : 「I L O 78 号条約批准にともなう国内法の改正」により「人事院規則 17-0」を改正した。都教委は管理職手当を 8% に増額した。

昭和 41 年度 7 月 9 日 : 文部省は教頭を正式に管理職の範囲に指定した。

昭和 42 年度 6 月 : 都教委は教頭の管理職手当を 10% に増額した。

昭和 45 年度 : 都教委は教頭の管理職手当を 10% から 15% に増額、教頭会に教育研究団体会費(都費) 1 校あたり 1,000 円の割で補助された。本会はこの年「全国高等学校教頭会」に正式加入し、本会会則の一部改正により、毎年交代制の代表幹事を、継続できる会長制に改め、組織を強化した。この年から東京都立高等学校教頭研究協議会が箱根三昧荘にて 1 泊 2 日で始まった。翌年からは 2 泊 3 日の研究協議会になった。

昭和 46 年度 5 月 : 「教育職員の給与等に関する特別措置法」の公布があり、教諭に 4% の教職調整額が支給された。

47 年 1 月 : 都教委は教頭が教諭なので、管理職手当を 15% から 13% に減額した。

昭和 47 年度 「教頭職の法制化」を望む世論の高まりと共に教頭会意識も強まり、「親睦会的体質」から「活動できる体質」へ改善に着手した。役員組織、学区分・学科別支部教頭会、研究部会組織、継続活動のできる独立した事務局、これらの運営に必要な資金等を調査研究し、翌年度から 3 年計画で実施することにした。

昭和 48 年度 会則を変更し、活動のための細則を新設した。また、全国高等学校教頭会と協力し事務所を新設した。本会は新役員組織と活動組織を新しくスタートさせ、本会の基礎となる大改革に着手した。都教委のご理解により、教育研究団体会費(都費)が 1 校 1,000 円から 9,000 円に増額された。そのお蔭で研究集録・会報の増刊号が刊行できた。

49 年 2 月 25 日 : 法律第 2 号「教員の人材確保に関する特別措置法」の公布があり、教頭職の法制化を望む世論の高まりと共に教頭会の活動に期待をよせる声が高まった。本会は全国高等学校教頭会に協力し、教頭職法制化と教頭職 1 等級格付に全力をあげ活動した。

昭和 49 年度 6 月 1 日 : 法律第 70 号「学校教育法の一部を改正する法律」の公布により、教頭職が法制化されたので、都教委は 10 月 1 日教頭に「教頭職」を命ずる辞令伝達式を挙行した。

50 年 3 月 31 日 : 法律第 9 号「一般職の職員の給与に関する法律の一部を改正する法律」が公布される。(昭和 49 年神藤、内山調)

昭和 50 年度 4 月 1 日 : 都教委は教頭職の 75% を 1 等級に昇格発令した。これで「3 年計画」の 3 年目、永年の念願が法律上完成了。本会の活動のため、会則の一部改正と各種内規を設け、活動資金 1 名 5,000 円(個人負担)の特別会費を 10 月に臨時総会を開き決定した。「活動できる体質」改善 3 年計画は、全員一致協力のもとでめでたく完了した。

12 月 : 文部省は主任制度化のための学校教育法施行規則の改訂を公布した。

昭和 51 年度：石油ショックで、東京都立高等学校教頭研究協議会は宿泊研修を中止し、2日の日程で、都内実施となった。

昭和 53 年度 6 月 8 日：総会で、特別会費 5,000 円から 6,000 円に改正された。

昭和 55 年度 5 月 22 日：法律第 57 号改正「教頭定数法」が施行され、教諭定数内で扱われていた教頭は、正式定数と定められた。その給与は地方交付税制度により、保証が受けられる。

5 月：事務局は渋谷区宇田川のアパートから、同区道玄坂の島田ビル 4 階へ移転した。

7 月 15 日：東京都条例第 71 号改正給与条例の公布と、東京都教育委員会規則第 29 条「昇給等に関する規則」の改正により、本年 4 月 1 日付で、校長は特 1 等級、教頭は 1 等級に全員格付けされた。これは昭和 52 年 12 月 21 日「給与法の一部改正」の公布によるものである。

昭和 57 年度：創立 20 周年を迎えて、3 月 4 日「創立 20 周年記念号」を発行した。

昭和 59 年度 8 月：臨時教育審議会設置法が公布された。

昭和 60 年度 6 月 13 日：総会で、教育研究団体会費（都費）1 校あたり 9,000 円から 11,300 円へ改正され、通常会費が増額された。そのお陰で全日制・定時制合同の東京都立高等学校教頭研究協議会「研究協議会報告」創刊号が刊行できた。

昭和 62 年度：臨時教育審議会第 3 次答申（4 月）と最終答申（8 月）があった。これらに呼応して、研究部が中心となり、新しい時代の高校教育の改善と充実に務めていくことにした。

昭和 63 年度 5 月：文部省は、初任者研修法を公布した。

6 月 9 日：総会で、特別会費 6,000 円から 8,000 円に改正された。

平成 2 年度 9 月：都教委は、校長・教頭・指導主事の任用制度を改正した。

3 月 1 日：文部省は校長・教頭・永年勤続教諭に、期末・勤勉手当の傾斜配分加算率を通知した。

平成 3 年度 12 月：文部省は生徒数急減のため、学級定員を 45~40 名に学級編成基準を弾力化した。

平成 4 年度 6 月 23 日：本会の 30 周年記念式を挙行し、総会で、特別会費 8,000 円から 10,000 円に改正された。

9 月：学校 5 日制を目指し、月 1 回土曜日が休業日になる。これに対応するよう総務部が中心となり、各校の校内態勢整備に務めてきた。

（平成 4 年 赤津改訂）

平成 6 年度 4 月：普通科等の学級編成が 1 学級 40 人となり、入学選抜制度が、グループ選抜から各学校単独選抜となった。この制度は平成 6 年度の入学者から適用された。また、今年度から、高等学校学習指導要領が改定され、各校新教育課程の実施が始まった。本教頭会では、平成元年度から研究部が中心になって、これに伴う研究を継続してきた。

6 月：平成 8 年 7 月に行われる全国大会（東京大会）を主管するため、本会は企画委員会を発足させた。

12 月：都教委は、全都立学校の校長及び教頭に、職務に関する目標と成果及び職務に関する希望を自己申告させ、それらを参考して今年 12 月の期末手当から、勤勉手当へ成績率を導入し経過措置として人事管理の適正を図った。

平成 7 年度 5 月：全国大会（東京大会）準備委員会が総務部を母体にして結成され、11 月に団結式が行われた。

6 月：都教委は教頭問題等検討委員会を設立し、教頭の職務・任用制度・表彰制度・再雇用制度等について検討を始めた。本会からは川島副会長がその担当となった。 （平成 7 年 奥井追加）

平成 8 年度 4 月・5 月：「補欠募集要項」、「全日制間の転学」について改正が行われた。

7 月～11 月：「教頭問題等検討委員会報告」（平成 8 年 3 月）、を受けて「校長及び教頭の任用に関する基準及び東京都教育委員会表彰実施要項の一部改正」（7 月）、「教頭職務の明確化のための規定整備について」（10 月）、「校長・教頭

業務実態調査について」(11月)、「東京都立学校事業決定規程の制定」(1月)等が相次いで出された。

7月23・24日：全国高等学校教頭会総会・研究協議大会が本会の主管で開催された。

10月：本会の研究部活動活性化に向けての「アンケート調査」が行われた。

1月25日：「これから都立高校の在り方」についての答申が公表された。

平成9年度 6月：第15期中央教育審議会が「21世紀を展開したわが国の教育の在り方について」、審議のまとめを答申した。

7月：教育職員養成審議会第1次答申が提出された。

8月：教育改革プログラムの主な改訂点が公表された。

9月：都立高校の予算について、検討報告書(案)が提出された。

10月：都立高校改革推進計画の概要が公表され、向う10年間の長期計画が具体化されることになった。

本年度の特徴的な活動として、都教委(指導部)との協議(2回)、定通・事務長との話し合いが持たれた。

3月：「都立学校あり方検討委員会報告書」が答申された。

平成10年度 6月：学校教育法の一部改正により、公立の中・高一貫校の設置が可能になった。都立高校では都立大学付属高校、三宅高校が発足する予定である。

7月：「東京都公立学校の管理運営に関する規則」の一部改正が行われた。

12月：東京都教員の「人事考課に関する研究会」より中間まとめが公表された。

3月：「高等学校学習指導要領」が公布された。

教頭会は都教委と本部役員会との連絡会を2回開催し、諸課題について情報交換を行い、全教頭に周知徹底に努めた。

平成11年度 10月：都立高校改革・二次実施計画により、全日制23校、定時制17校が統廃合または再編成計画の対象として発表された。

12月：教員人事考課制度につき検討委員会報告が出され、平成12年度より実施されることとなった。

平成12年度 4月：教頭複数配置校が複数学科、工業・農業学科、単位制その他の高校を中心に15校増加された。従来からの舎監・分校を含め計18名となった。

同月：教員人事考課制度発足。

9月：全定教頭研究協議会が教育庁主催から全定教頭会の共催に変更された。教育予算削減等によるものであり、この会の意義については認識に変化なく引き続き教育庁の指導・支援を得ながら運営すべきことが確認された。

平成13年度 4月：教頭複数配置校が31校になる。都教委主催の教頭連絡会が発足。教頭会への出席の服務の取り扱いが、職免へと変更。教頭の管理職手当が15%になる。

6月：学校運営連絡協議会が全都で実施される。

10月：学校運営組織に「主幹」の設置が決定され、実施は平成15年度からとなる。

平成14年度 4月：管理職降格制度の導入。

10月：都立学校改革推進計画、新たな実施計画の策定(15-18年)

11月：主幹選考の実施。

12月：自律経営推進予算の導入。

1月：入試学区の廃止。

平成15年度 4月：学校経営計画の導入。

11月：毎年11月第1土曜日を「東京都教育の日」とする。

11月：都からの分担金一挙全廃さる。

11月：事務局は渋谷区道玄坂の島田ビル4階から、文京区湯島のナーベルお茶の水2階へ移転した。

1月：「東京都教育ビジョン」中間まとめ発表。

3月：16年度より教頭の名称を副校長と変更。

平成16年度 4月：補助金なしの団体となる。(会費年1人19,000円)

6月：団体名を東京都立高等学校  
副校長会とする。

副校長任用一次筆記試験実施最終年度。

平成17年度 4月：副校長複数配置校が26校  
となる。

副校長研究協議会が9月から8月に変更。

平成18年度 4月：副校長複数配置校が29校  
となる。

7月：26～28日 第45回全国高  
等学校教頭会・研究協議大会が本会の主  
管で開催された。

副校長研究協議会が日程の関係で8月か  
ら9月に変更。

平成19年度 4月：副校長複数配置校23校と  
なる。

8月：副校長研究協議会が日程の  
関係で9月から8月に変更。

管理職再雇用・再任用制度改革される。

平成20年度 9月：学校経営における副校長の  
役割の明確化（検討委員会最終報告）

12月：主任教諭制度の設置（平成  
21年度より）

平成21年度

定通副校長会との合併協議始まる。

教員用TAIMS端末が配備される。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

平成22年度

定通副校長会との合併が総会で承認され  
る。

全日制部会の規約の改正が臨時総会で承  
認される。

副校長研究協議会後に教育懇談会を実施  
した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

成績管理サーバー、旅費システム、自己  
申告システムが導入される。



#### 4. 本会のあゆみ一覧

本会運営は、昭和38年創立当初は幹事長制度、45年から会長制度、48年度には役員組織と部会組織の規定を設け、現在に至っている。

年 度	幹 事 長	総 会	刊 行 物
昭和 38	内山（立 川）	創立総会、白鷗（-）	会員名簿（13P）
〃 39	中馬（九 段）	総会、日比谷（-）	〃 （13P）
〃 40	志村（玉 川）	〃 白鷗（-）	〃 （13P）私費軽減（10P）
〃 41	小鎌（富 士）	〃 教育会館（-）	〃 （13P）
〃 42	鈴木（向 丘）	〃 私学会館（80名）	〃 （13P）年間行事状況（4P）
〃 43	岸野（足 立）	〃 精養軒（90名）	〃 （13P）会報（4P）
〃 44	池田（小松川）	〃〃（90名）	〃 （13P）〃（4P）
〃 45	青木（北 園）	〃〃（90名）	〃 （13P）調査（5P） 高校生徒指導研究協議会発表要旨（都教委編）不明 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）不明
全国高等学校教頭会に東京都全員入会			
〃 46	青木（北 園）	総会 出版クラブ（90名）	会員名簿（13P） 高校生徒指導研究協議会発表要旨（都教委編）33P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）40P

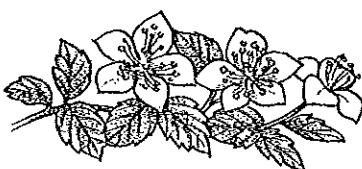
年 度	○ 会 長 副 会 長	事務局長 次 長	総 会 総 務 部 会	研 究 部 部員数(部長名)	刊 行 物
昭和 47	○神 藤（桜 町） 波多野（江東商）	な し	総会、青山会館（100名） 臨時総会、私学会館（80名） 常任幹事会 5回 体質改善計画立案と実施準備	な し 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿 15P 教頭勤務実態 10P 49P 40P
〃 48	○若 林（ 東 ） 波多野（江東商） 内 山（鳥山工）	○神 藤	総会、青山会館（110名） 臨時総会（90名） 総務部会 14名 5回 「体質改善3年計画」初年度着手 全国教頭会事務局内に本会事務局を設置	管理研 25名（安 部） 高校研 24名（西 村） 生徒研 23名（古 賀） 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）	会員名簿 16P 会報創刊号 40P 研究集録創刊号 43P 67P 不明
〃 49	○内 山（鳥山工） 波多野（江東商） 安 部（北多摩）	○神 藤	総会、青山会館（100名） 総務部会 18名 6回 全国大会運営委員会（22名） 全国大会（九段会館・都市センター）	管理研 28名（吉 野） 高校研 24名（長 里） 生徒研 22名（古 賀） 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編） 文部大臣特別出席	会員名簿 18P 会報第2号 58P 教頭職に関する調査・研究 25P 32P 48P 出席 520名

年 度	○会 長 副 会 長	事務局長 次 長	總 會 總 務 部 會	研 究 部 部員數(部長名)	刊 行 物
昭和 50	○内 山(鳥山工) 千 野(井 草) 石 坂(小石川)	○神 藤	総会、出版クラブ(130名) 臨時総会、〃(85名) 総務部会 19名 5回 教頭会「体質改善3年計画」完了	管理研 28名(吉 野) 高校研 26名(長 里) 生徒研 22名(小 林) 高校教頭研究協議会発表要旨(都教委編) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 18P 会報第3号 49P 研究集録第2号 72P 28P 44P
" 51	○千 野(井 草) 西 村(千 歳) 吉 野( 西 )	○神 藤 内 山	総会、青山会館(125名) 総務部会 29名 5回	管理研 29名(金 井) 高校研 30名(長 里) 生徒研 37名(小 林) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 19P 会報第4号 69P 研究集録第3号 75P 校長選考方法調査 5P 54P
" 52	○千 野(井 草) 梅 本(北 園) 伊 藤(忍 岡)	○神 藤 内 山	総会、青山会館(135名) 総務部会 26名 5回 全国大会運営委員会(79名)	管理研 35名(金 井) 高校研 39名(山 崎) 生徒研 37名(諫訪部) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 24P 会報第5号 75P 教頭研究協議会資料(研究集録第4号兼全国大会資料) 72P 44P
" 53	○青 木( 南 ) 乃 方(目 黒) 大 烟(広 尾)	○神 藤 内 山	総会、市ヶ谷会館(136名) 総務部会 29名 6回	管理研 48名(杉 江) 高校研 51名(浅 川) 生徒研 46名(吉 田) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 24P 会報第6号 81P 研究集録第5号 33P 46P
" 54	○青 木( 南 ) 吉 田(志 村) 安 西(農 林)	○神 藤 内 山	総会、市ヶ谷会館(142名) 総務部会 29名 5回	管理研 50名(高 橋) 高校研 73名(佐 藤) 生徒研 52名(大 滝) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 26P 会報第7号 83P 研究集録第6号 34P 63P
" 55	○川 島(四谷南) 船 沢(戸 山) 大 滝(葛西南)	神 藤 代 ○内 山 古 賀	総会、市ヶ谷会館(161名) 総務部会 30名 5回 全国大会準備委員会(6名)	管理研 59名(高 橋) 高校研 78名(田 辺) 生徒研 54名(松 井) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 26P 会報第8号 82P 研究集録第7号 42P 49P
" 56	○船 沢(戸 山) 赤 津(大 森) 桑 原(板 橋)	○内 山 神 藤 古 賀	総会、市ヶ谷会館(175名) 総務部会 32名 5回 全国大会運営委員会(69名)	管理研 65名(山 田) 高校研 72名(鈴 木) 生徒研 66名(白 井) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 28P 会報第9号 88P 研究集録(全国大会資料兼) 42P
" 57	○赤 津(大 森) 牛 辻(鷺 宮) 岡 田(国 立)	○内 山 神 藤 古 賀	総会、市ヶ谷会館(176名) 総務部会 36名 4回	管理研 65名(山 田) 高校研 70名(鈴 木) 生徒研 69名(白 井) 創立20周年臨時号 (教頭の職務に関する研究特集) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 26P 会報第10号 74P 研究集録第8号 66P 研究集録第9号 138P 53P

年 度	○会 長 副 会 長	事務局長 次 長	總 會 總 務 部 會	研 究 部 部員數(部長名)	刊 行 物
昭和 58	○大 森(田園調布) 剣 持(杉並) 鈴 木(三商)	○内 山 古 賀	總会、市ヶ谷会館(174名) 総務部会33名 4回	管理研 66名(高橋) 高校研 71名(大山) 生徒研 72名(永井)	会員名簿 26P 会報第11号 78P 研究集録第10号 66P
〃 59	○高 橋(明正) 飯 島(蒲田) 村 上(練馬工)	○内 山 古 賀	總会、市ヶ谷会館(154名) 総務部会34名 4回 全国大会調査委員会8名	管理研 66名(高橋) 高校研 75名(篠田) 生徒研 70名(山本)	会員名簿 26P 会報第12号 81P 研究集録第11号 67P
〃 60	○山 本(駒場) 杉 内(江北) 清 水(国分寺)	○内 山 古 賀	總会、市ヶ谷会館(164名) 総務部会34名 4回 全国大会準備委員会34名 4回	管理研 68名(高橋) 高校研 78名(篠田) 生徒研 67名(岡本)	会員名簿 26P 会報第13号 83P 研究集録第12号 77P 研究協議会報告創刊号 54P
〃 61	○山 本(駒場) 杉 内(江北) 小 宮(富士森)	○内 山 古 賀 赤 津	總会、市ヶ谷会館(177名) 総務部会35名 4回 全国大会運営委員会64名 4回 全国大会(国立教育会館、石垣ホール、ニッショウホール)	管理研 67名(白井) 高校研 72名(篠田) 生徒研 75名(白田)	会員名簿 26P 会報第14号 78P 研究集録第13号 74P 研究協議会報告第2号 59P 出席 1,101名
〃 62	○中 村(竹早) 白 川(新宿) 廣 瀬(保谷)	○古 賀 赤 津	總会、グランドビル市ヶ谷(161名) 総務部会34名 4回	管理研 84名(高橋) 高校研 61名(田口) 生徒研 69名(栗田)	会員名簿 26P 会報第15号 74P 研究集録第14号 71P 研究協議会報告第3号 63P
〃 63	○白 川(新宿) 廣 瀬(保谷) 中村(新)(千歳丘)	○古 賀 赤 津	總会、グランドビル市ヶ谷(158名) 総務部会34名 4回	管理研 93名(鈴木) 高校研 61名(田口) 生徒研 62名(栗田)	会員名簿 26P 会報第16号 71P 研究集録第15号 69P 研究協議会報告第4号 71P
平成 元	○崎 田(狛江) 奥 井(豊島) 小 峰(練馬)	○古 賀 赤 津	總会、グランドビル市ヶ谷(160名) 総務部会34名 4回	管理研 86名(木村) 高校研 64名(澤井) 生徒研 68名(福島)	会員名簿 27P 会報第17号 73P 研究集録第16号 63P 研究協議会報告第5号 68P
〃 2	○奥 井(豊島) 木 村(国分寺) 和 田(光丘)	○古 賀 赤 津	總会、グランドビル市ヶ谷(151名) 総務部会34名 4回	管理研 85名(井上) 高校研 65名(進藤) 生徒研 68名(延藤)	会員名簿 27P 会報第18号 74P 研究集録第17号 68P 研究協議会報告第6号 73P
〃 3	○木 村(国分寺) 和 田(光丘) 鶴 澤(芝商)	○赤 津 奥 井	總会、青山会館(140名) 総務部会33名 4回	管理研 86名(野中) 高校研 64名(大室) 生徒研 67名(原口)	会員名簿 27P 会報第19号 73P 研究集録第18号 68P 研究協議会報告第7号 69P
〃 4	○高 橋(小平南) 栗 林(大泉学園) 井 上(瑞穂農芸)	○赤 津 奥 井	總会、青山会館(174名) 創立30周年記念式典・祝賀会 青山会館(120名) 総務部会34名 4回	管理研 81名(浦野) 高校研 70名(大室) 生徒研 66名(結城) 創立30周年記念誌 編集委員会(高橋)	会員名簿 27P 会報第20号 78P 研究集録第19号 66P 研究協議会報告第8号 55P 創立30周年記念誌 81P

年度	○会長 副会長	事務局長 次長	総 会 総務部会	研 究 部 部員数(部長名)	刊 行 物
平成 5	○高 橋(小平南) 浦 野(保 谷) 井 上(瑞穂農芸)	○赤 津 奥 井	総会、星陵会館(142名) 総務部会35名 4回	管理研 77名(桑 原) 高校研 71名(武 田) 生徒研 69名(横 田)	会員名簿 27P 会報第21号 67P 研究集録第20号 64P 研究協議会報告第9号 54P
				平成5年1月、奥井	昭和45~58年度について追加
〃 6	○原 口(南 野) 川 島(富 士) 内 海(墨田工)	○赤 津 奥 井	総会、星陵会館(132名) 総務部会34名 4回 全国大会企画委員会(12名) 2回	管理研 74名(牛 島) 高校研 75名(武 田) 生徒研 68名(横 田)	会員名簿 27P 会報第22号 68P 研究集録第21号 64P 研究協議会報告第10号 53P
〃 7	○原 口(南 野) 川 島(富 士) 白 鳥(芝 商)	○赤 津 奥 井	総会、星陵会館(130名) 総務部会35名 4回 全国大会企画委員会(12名) 3回 全国大会準備委員会(全員) 5回	管理研 73名(新 妻) 高校研 75名(森 本) 生徒研 70名(横 田)	会員名簿 27P 会報第23号 68P 研究集録第22号 64P 研究協議会報告第11号 58P
〃 8	○白 鳥(芝 商) 安 盛(小松川) 中 西(井 草)	○奥 井 坪 井	総会、星陵会館(137名) 総務部会35名 4回 全国大会企画委員会(12名) 5回 全国大会運営委員会(65名) 5回 全国大会(国立教育会館、灘尾ホール、石垣ホール)	管理研 74名(新 妻) 高校研 72名(森 本) 生徒研 72名(廣 見)	会員名簿 27P 会報第24号 82P 研究集録第23号 62P 研究協議会報告第12号 60P 出席 1,260名
〃 9	○白 鳥(芝 商) 安 盛(小松川) 中 西(井 草)	○奥 井 坪 井	総会、星陵会館(152名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(松江市) 61名参加	管理研 64名(新 妻) 高校研 74名(東 ) 生徒研 77名(小 泉)	会員名簿 24P 会報第25号 60P 研究集録第24号 54P 研究協議会報告第13号 54P
〃 10	○東 (富 士) 山 口(府 中) 松 尾(農 業)	○奥 井 坪 井	総会、星陵会館(144名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(秋田市) 82名参加	管理研 70名(新 妻) 高校研 73名(松尾川) 生徒研 72名(中 村)	会員名簿 24P 会報第26号 58P 研究集録第25号 56P 研究協議会報告第14号 62P
〃 11	○鈴 木(深 川) 山 口(府 中) 齋 藤(中野工)	○奥 井 高 橋	総会、星陵会館(169名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(高知市) 83名参加	管理研 72名(新 妻) 高校研 71名(小 林) 生徒研 71名(大 澤)	会員名簿 24P 会報第27号 60P 研究集録第26号 49P 研究協議会報告第15号 56P
〃 12	○山 口(府 中) 上 林(武藏野北) 相 川(三 商)	○奥 井 高 橋	総会、星陵会館(108名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(横浜市) 85名参加	管理研 78名(白 木) 高校研 73名(小 林) 生徒研 79名(橋 本)	会員名簿 24P 会報第28号 60P 研究集録第27号 48P 研究協議会報告第16号 55P
〃 13	○相 川(三 商) 矢 鶴(足 立) 渡 邊(向島工)	○高 橋 白 鳥	総会、星陵会館(65名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(長崎市) 83名参加	管理研 78名(平 山) 高校研 79名(村 井) 生徒研 82名(坂 本)	会員名簿 24P 会報第29号 56P 研究集録第28号 48P 研究協議会報告第17号 55P
〃 14	○町 田(保 谷) 坂 本(小平南) 合 津(蕨前工)	○高 橋 白 鳥	総会、フロラシオン青山(59名) 創立40周年記念式典・祝賀会、 フロラシオン青山(83名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(富山市) 82名参加	管理研 72名(針 馬) 高校研 80名(初 見) 生徒研 84名(梶 野)	会員名簿 24P 会報第30号 62P 研究集録第29号 49P 研究協議会報告第18号 55P 創立40周年記念誌 88P

年 度	○会 長 副 会 長	事務局長 次 長	總 會 總 務 部 會	研 究 部 部員數(部長名)	刊 行 物
平成 15	○坂 本(小平南) 錦 織(稻 城) 後 藤(農 業)	○高 橋 白 鳥	総会、星陵会館(28名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(岐阜市) 68名参加	管理研 76名(伊 藤) 高校研 77名(福 鶴) 生徒研 83名(鹿 目)	会員名簿 22P 会報第31号 63P 研究集録第30号 44P 研究協議会報告第19号 47P
" 16	○錦 織(府 中) 和 田(南 野) 高 田(台東商)	○高 橋 白 鳥	総会、公文書館(150名) 総務部会33名 5回 幹事会 48名 1回 全国大会(和歌山市) 44名参加	管理研 88名(北 林) 高校研 68名(根 本) 生徒研 73名(山 本)	会員名簿 22P 会報第32号 69P 研究集録第31号 34P 研究協議会報告第20号 51P
" 17	○錦 織(府 中) 和 田(保 谷) 小 島(蕨前工)	○白 鳥 松 野	総会、都教職員研修センター (約20名) 総務部会33名 5回 幹事会 48名 1回 全国大会(札幌市) 37名参加	管理研 106名(古 山) 高校研 68名(菊 池) 生徒研 54名(長 島)	副校長名簿 23P 会報第33号 88P 研究集録第32号 34P 研究協議会報告第21号 55P
" 18	○和 田(保 谷) 小 島(蕨前工) 玉 井(志 村)	○白 鳥 綿 田	総会、エミール(50名) 総務部会31名 5回 幹事会 38名 1回 全国大会(東京都大田区) 233名参加	管理研 72名(本 多) 高校研 78名(塙 本) 生徒研 84名(都 築)	副校長名簿 26P 会報第34号 101P 研究集録第33号 66P 研究協議会報告第22号 75P
" 19	○和 田(調布北) 玉 井(竹 台) 飯 島(農 産)	○白 鳥 綿 田	総会、都立忍岡高校(28名) 総務部会30名 6回 幹事会 29名 3回 全国大会(山口市) 37名参加	管理研 67名(有 馬) 高校研 71名(佐 藤) 生徒研 76名(都 築)	副校長名簿 27P 会報35号 101P 研究集録34号 48P 研究協議会報告23号 74P
" 20	○錦 織(武 蔽) 玉 井(竹 台) (会長代行) 都 築(雪 谷) 高 橋(市ヶ谷商)	○白 鳥 町 田	総会、家庭クラブ会館(47名) 総務部会 31名 年6回 常任幹事会 23名 年3回 幹事会 年1回 全国大会(郡山市) 41名参加	管理研 68名(下 條) 高校研 75名(志 村) 生徒研 66名(熊 谷)	副校長名簿 28P 会報36号 102P 研究集録35号 53P 研究協議会報告24号 58P
" 21	○玉 井(竹 台) 都 築(雪 谷) 守 屋(墨田工業)	○白 鳥 針 馬	総会、家庭クラブ会館(31名) 総務部会 31名 年6回 常任幹事会 23名 年3回 幹事会 年1回 全国大会(高松市) 27名参加	管理研 71名(宮 本) 高校研 70名(仁井田) 生徒研 67名(鈴 木)	副校長名簿 31P 会報37号 121P 研究集録36号 44P 研究協議会報告25号 68P
" 22	○都 築(雪 谷) 小 堀(農 産)	○白 鳥 針 馬	総会、文京シビックセンター(49名) 臨時総会、文京シビックセンター (46名) 総務部会 31名 年6回 常任幹事会 23名 年3回 幹事会 年1回 全国大会(宇都宮市) 22名参加	管理研 76名(遠 山) 高校研 64名(齋 藤) 生徒研 68名(藪 田)	副校長名簿 30P 会報38号 121P 研究集録・研究協議会 報告37号 128P



## 2. 総務部会報告

会長 都築 功

### 1. 本部の活動（総務部会・幹事会の詳細は別記）

平成 22 年

- 4月 15 日 (木) 都第 1 回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）  
4月 30 日 (金) 都会計監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）  
5月 6 日 (木) 都幹事会（文京シビックセンター・区民会議室 C）  
5月 7 日 (金) 全国会計監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）  
5月 17 日 (月) 第 1 回全国総務部会（アルカディア市ヶ谷）  
6月 7 日 (月) 全国地区研究協議会・第 1 回全国理事研究協議会（アルカディア市ヶ谷）  
6月 18 日 (金) 平成 22 年度 都総会（文京シビックセンター・区民会議室 C）  
7月 1 日 (木) 都第 2 回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）  
7月 2 日 (金) 第 2 回全国総務部会（アルカディア市ヶ谷）  
7月 28 日 (水) 第 2 回全国理事研究協議会・研究部会（栃木県宇都宮市ホテルニューイタヤ）  
7月 29 日 (木) 全国高等学校教頭・副校長会総会・研究協議大会（栃木県総合文化センター）  
7月 30 日 (金) 全国高等学校教頭・副校長会研究協議大会（栃木県総合文化センター）  
8月 17 日 (火) 全国研究集録 編集会議（ナーベルお茶の水・事務局）  
8月 24 日 (火) 都副校長研究協議会（都教職員研修センター）  
8月 25 日 (水) 第 1 回校長協会、経営企画室長会等連絡会（ナーベルお茶の水・会員集会室）  
9月 9 日 (木) 都第 1 回常任幹事会（ナーベルお茶の水・会員集会室）  
10月 1 日 (金) 全国中間監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）  
10月 5 日 (火) 都中間監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）  
10月 7 日 (木) 都第 3 回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）  
10月 18 日 (月) 第 3 回全国総務部会（アルカディア市ヶ谷）  
11月 4 日 (木) 都第 4 回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）  
11月 5 日 (金) 全国常任理事会（アルカディア市ヶ谷）  
11月 19 日 (金) 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会（横浜市西公会堂）  
12月 2 日 (木) 都第 2 回常任幹事会（ナーベルお茶の水・会員集会室）  
12月 9 日 (木) 第 2 回校長協会、経営企画室長会等連絡会（校長協会会議室）  
12月 25 日 (土) 定通副校長会役員との打合せ（ナーベルお茶の水・事務局）

平成 23 年

- 1月 5 日 (水) 臨時総会・指導部との賀詞交歓会（文京シビックセンター・区民会議室 C）  
1月 6 日 (木) 都第 5 回総務部会（会合は行わず、文書の配布で代替）  
2月 3 日 (木) 都第 3 回常任幹事会（ナーベルお茶の水・会員集会室）  
3月 14 日 (月) 都第 6 回総務部会（文京シビックセンター・区民会議室 A）  
3月 29 日 (火) 本部新旧役員引継ぎ会（ナーベルお茶の水・事務局）

## 2. 平成 22 年度予算

### 【一般会計】

平成 22 年 4 月 1 日  
東京都立高等学校副校長会

#### 収 入

(単位 : 円)

項目	前年度決算	本年度予算	備考
一般会費	3,726,000	3,726,000	18,000 円×207 名
研究助成金	800,000	800,000	(財)都教育公務員弘済会
雑 収 入	934	1,000	預金利息
繰 越 金	1,955,378	1,577,918	平成 21 年度より
そ の 他	75,000	0	
合 計	6,557,312	6,104,918	

#### 支 出

項目	前年度決算	本年度予算	備考
運営費	会議費	71,606	150,000 総務部会・幹事会・総会・役員会
	印刷費	86,730	250,000 資料・封筒・コピー・用紙等・教頭日誌
	旅費交通費	138,730	200,000 本部役員交通費・関東大会
	涉外費	100,821	講師謝礼・友好団体祝儀等
	全国会費	931,500	全都立校副校長分 (@¥4500×207名)
	運搬送料費	159,281	宅配郵送料等
	資料費	83,815	教職員名簿・日本教育会(@¥3600×19名)等
	周年行事積立金	300,000	平成 24 年度予定(50 周年)
	全国大会積立金	200,000	平成 28 年度予定
	通信費	236,470	郵券、振込料、HP 作成費
事業費	消耗品費	3,350	事務用品等
	雜費	300	5,000
	小計	2,312,603	2,771,500
	学科別副校長会費	42,765	商業・工業・農業 @¥20000×3
	地区別副校長会費	306,660	@20000×6 地区(A,C) @40000×6 地区(B,D)
	地区研究部会費	30,000	@¥5000×12 地区(全地区)
	研究協議会費	0	200,000
	会員名簿	62,286	A4 650 部
	会報費	433,650	A4 700 部
	研究集録	159,180	0 A4 700 部(22 年度より発行停止)
維持費	研究協議会報告	0	A4 700 部(21 年度分を含む)
	小計	1,034,541	1,680,000
	慶弔費	13,000	香典・見舞金等
	人件費	837,000	全国分担金(実質 1/10)
	家賃・光熱費	690,000	全国分担金(実質 1/4)
	小計	1,540,000	1,550,000
	予備費	92,250	103,418
	合計	4,979,394	6,104,918

## 平成 22 年度積立金会計

平成 22 年 4 月 1 日  
東京都立高等学校副校長会

### 〈創立 50 周年積立金〉

(単位 : 円)

項目	繰越金	本年度積立予定額	合 計	備 考
創立 50 周年積立金	2,000,000	300,000	2,300,000	平成 24 年度実施予定
雑 収 入	11,073	0	11,073	預金利息
合 計	2,011,073	300,000	2,311,073	

### 〈全国大会積立金〉

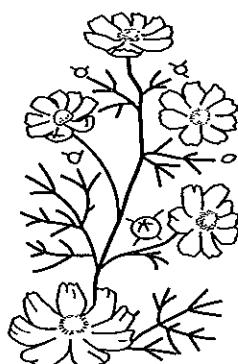
(単位 : 円)

項目	繰越金	本年度積立予定額	合 計	備 考
全国大会積立金	600,000	200,000	800,000	平成 28 年度実施予定
雑 収 入	1,564	0	1,564	預金利息
合 計	601,564	200,000	801,564	

(注) 日本教育会に都会計より振込して、以下の入会する。

- ・常任幹事 13 名
  - ・都会長 (1) ・都副会長 (2) 3 名
  - ・全国会長 (1) ・副会長 (1) ・会計 (1) 3 名
- 19 名

1 人 ₩3,600 (年間)



### 3. 平成 22 年度事業報告

平成 23 年 3 月 31 日  
東京都立高等学校副校長会

#### 会合

幹事会	5月 6日(木)	文京シビックセンター 5階区民会議室C
総会	6月 18日(金)	文京シビックセンター 5階区民会議室C
		講演「高校教育の展望と課題」京都造形芸術大学教授 寺脇 研 先生
臨時総会	1月 5日(水)	文京シビックセンター 5階区民会議室C
副校長研究協議会	8月 24日(火)	都教職員研修センター 講話「新学習指導要領における言語活動の充実について」 文部科学省教科調査官 西辻 正副 先生
総務部会	4月 15日(木) 7月 1日(木) 10月 7日(木) 11月 4日(木) 1月 6日(木) (文書配付代替)	3月 14日(月) ナーベルお茶の水 会員集会室他
常任幹事会	9月 9日(木) 12月 2日(木)	2月 3日(木) ナーベルお茶の水 会員集会室
指導部との賀詞交歓会	1月 5日(水)	総数 61名の参加 文京シビックセンタースカイホール
地区支部副校長会	原則として副校長連絡会の日	地区ごとに開催
学科支部副校長会	原則として副校長連絡会の日 (3 学科)	
研究部会	各地区 部・委員会ごとに開催	

#### 総務部会

- 諸会議についての協議と原案の作成、学科・研究部相互の連絡・情報交換を行った。
- 副校長名簿、研究集録・研究協議会報告等を編集し発行した。
- 教育庁、全国高等学校教頭・副校長会、各種友好団体との連絡・情報交換・陳情・提言を行った。
- 教育庁、校長協会、経営企画室長会等関係団体との連絡・協議・連携の維持を行った。
- 全国高等学校教頭・副校長会第 49 回全国大会〔栃木大会〕への参加と支援を行った。
- 「教頭のホンネ」を、新任副校長に配付した。
- ホームページ及びメーリングリストの管理・運営を行った。

#### 研究部会

- 全会員が管理運営・高校教育・生徒指導の 3 部会 6 委員会に分かれ研究協議を行った。
- 研究成果を研究集録・研究協議会報告にまとめ、教育庁・都立高等学校長・全定通副校長に配付した。
- 都立高等学校副校長研究協議会には各委員会より各 1 主題の発表を行った。  
全国高等学校教頭・副校長会の全国大会には 1 主題(生徒研)の研究発表を行った。  
全国高等学校教頭・副校長会の《特別研究》は各部会が共同して協力し、その成果を調査研究集に発表した。
- 都立高等学校副校長研究協議会発表担当者は、西部 D(管理研第 1)・中部 B(管理研第 2)・中部 D(高校研第 1)・西部 B(高校研第 2)・東部 B(生徒研第 1)・東部 D(生徒研第 2)であった。

#### 全国大会

- 期日 7月 28 日(水) 全国研究部会・全国理事会  
29 日(木) 総会・研究協議大会(分科会)  
30 日(金) 研究協議大会(分科会)
- 開催地 栃木県宇都宮市 栃木県総合文化センター 都の参加者 22 名

#### 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会

- 期日 11月 19 日(金)
- 開催地 神奈川県横浜市
- 主管 神奈川県高等学校教頭・副校長会 都の参加者 5 名

#### 刊行物

総会資料(平成22年度版)	6月刊行 21p	教育庁・校長・全定通副校長等に配付	500部
平成22年度副校長名簿	6月刊行 30p	//	650部
研究集録・研究協議会報告(第37号)	平成23年2月刊行 128p	//	650部
会報(第38号)	平成23年3月刊行 126p	//	650部

#### 4. 総 会

平成22年6月18日(金) 19時00分～21時00分

場所 文京シビックセンター5階 区民会議室C

開会

会長挨拶

議事

1. 平成21年度事業報告 .....会長

2. 同 決算報告 .....会計

3. 同 会計監査報告 .....会計監査

4. 平成22年度役員選出 .....会長

5. 同 部会組織と幹事について .....会長

6. 正副会長他紹介 (全国推薦者を含む)

常任幹事・会計・会計監査・研究部長・

委員長・事務局等紹介 .....新会長

7. 平成22年度事業計画(案)について .....新会長

8. 同 予算案について .....新会計

閉会

講 演「高校教育の展望と課題」

京都造形芸術大学教授 寺脇 研 先生

注 議事はいずれも異議なく承認された。

(出席者 49名)

臨時総会

平成23年1月5日(水) 18時15分～19時00分

場所 文京シビックセンター5階 区民会議室C

開会

会長挨拶

議事

1. 平成22年度役員(会長)選出 .....議長

2. 東京都公立高等学校副校長協会 全日制部  
会細則(案) .....会長

閉会

講 話「東京都の教育施策と課題ー最近の動き」

教育庁指導部指導企画課長

金子 一彦 先生

注 議事はいずれも異議なく承認された。

(出席者 46名)

#### 5. 幹 事 会

総会に次ぐ機関で主に総会提出議案や総務部会からの原案を審議する。

平成22年5月6日(木) 19時00分～20時30分

場所 文京シビックセンター5階 区民会議室C

出席者 本部役員、常任幹事、常任幹事代理、  
常任研究幹事 (研究部長)、研究幹事  
(研究委員長)、幹事補佐、全国役員

【会議次第】

司会・議長 本部役員

1. 会長挨拶 .....会長

2. 平成21年度事業報告と会計報告  
.....会長、会計

3. 同 会計監査報告 .....会計監査

4. 平成22年度役員組織 (都・全国候補)  
.....会長・全国会長

5. 同 部会組織 (全国) .....全国会長

6. 新旧役員挨拶 .....会長、副会長、会計、監査

7. 平成22年度事業計画と予算案  
.....会長、会計

8. 会務運営上の改善策等 .....会長

9. 事務局より .....事務局

10. 地区、学科、研究部からの報告・意見等  
.....常任幹事、部長、委員長他

11. その他

※幹事会は年1回 (5月) に開催される。

(出席者 22名)



## 6. 総務部会・常任幹事会

### 第1回総務部会

- 第1回総務部会は旧年度総務部員及び新年度役員候補者で開催  
平成22年4月15日(木) 19時00分～20時00分  
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 会長挨拶 ..... 会長
  - 2 昨年度の報告と今年度の課題  
(事業計画他) ..... 会長
  - 3 会合日程その他の連絡 ..... 事務局
  - 4 新役員推薦(会長、副会長、会計、会計監査)  
..... 会長
  - 5 全国役員候補(会長、副会長、会計)推薦  
..... 会長
  - 6 新旧役員(全国、都関係)挨拶…新旧役員
  - 7 全国高等学校教頭・副校長会報告  
..... 全国会長
  - 8 地区・学科・研究部からの報告  
..... 各常任幹事他
  - 9 その他

【情報交換会】 20時00分～21時00分

- 司会 新会計
- ① 開会 ..... 新副会長
  - ② 挨拶 ..... 新会長
  - ③ 退任者挨拶
  - ④ 情報交換・懇談
  - ⑤ 閉会 ..... 新副会長
  - ⑥ 万歳三唱 ..... 全国会長

### 第2回総務部会

- 平成22年7月1日(木) 19時00分～20時30分  
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 会長挨拶 ..... 会長
  - 2 全国高等学校教頭・副校長会報告  
..... 全国会長
  - 3 全国大会(栃木大会)について ..... 会長
  - 4 副校長会総会の総括 ..... 副会長
  - 5 副校長研究協議会について ..... 会長
  - 6 校長協会、企画室長会、定通副校長会との  
第1回連絡会について ..... 会長
  - 7 地区、学科、研究部の報告  
..... 常任幹事・委員
  - 8 事務局より(会費納入状況など) … 事務局

- 9 協議・情報交換・今後の課題などについて  
..... 会長他
- 10 その他

### 第3回総務部会

- 平成22年10月7日(木) 19時00分～20時30分  
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 会長挨拶 ..... 副会長
  - 2 全国高等学校教頭・副校長会報告  
..... 全国会長
  - 3 会計中間報告、後期の会費納入について  
..... 副会長
  - 4 副校長協会発足準備(全日制規約(細則)  
変更等)について ..... 副会長
  - 5 臨時総会について ..... 副会長
  - 6 平成23年度全国大会(大分)について、発  
表地区等 ..... 副会長
  - 7 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議  
会について ..... 副会長
  - 8 研究協議会報告、会報38号の作成について  
..... 事務局
  - 9 地区、学科の報告 ..... 常任幹事
  - 10 事務局より ..... 事務局
  - 11 協議・情報交換・今後の課題などについて  
..... 副会長
  - 12 その他

### 第4回総務部会

- 平成22年11月4日(木) 19時00分～20時30分  
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 会長挨拶 ..... 副会長
  - 2 全国高等学校教頭・副校長会報告  
..... 全国会長
  - 3 都公立高等学校副校長協会 全日制部会細  
則(案)について ..... 副会長
  - 4 臨時総会及び指導部との賀詞交歓会につい  
て ..... 副会長
  - 5 後期会費納入の中間報告 ..... 副会長
  - 6 会報第38号(平成22年度)の編集について  
..... 副会長
  - 7 地区、学科の報告 ..... 常任幹事
  - 8 事務局より ..... 事務局
  - 9 協議・情報交換・今後の課題などについて  
..... 副会長
  - 10 その他

## 【講演】

「日本一のマグロ船に学ぶ！ 職場をよりイキイキさせる仕事術」  
～『危険』で『キツイ』仕事だからあみだされた知恵～  
ネクストスタンダード 齊藤 正明 氏

## 常任幹事会

※平成19年度より新設された会合で総務部会の無い月（9・12・2）に会長・副会長・全国会長・常任幹事で当月の副校长連絡会後の地区副校长会への連絡・伝達事項・情報収集のための会合

### 第5回総務部会

平成23年1月6日(木)

第5回総務部会は予定されていた日の前日に、臨時総会と指導部との賀詞交歓会を行ったため、会合としては行わず、文書の配付で代替した。

### 第6回総務部会

平成23年3月14日(月) 19時00分～20時30分

於、文京シビックセンター5階 区民会議室A  
1 会長挨拶 ..... 会長  
2 全国高校教頭・副校长会報告 ..... 全国会長  
3 地区、学科、研究部の報告及び今年度の反省 ..... 常任幹事・委員  
4 事務局より ..... 事務局  
5 協議・次年度の活動目標  
23年度活動計画、体制作り、副校长研究協議会、異動などについて ..... 会長他  
6 その他

### 第1回常任幹事会

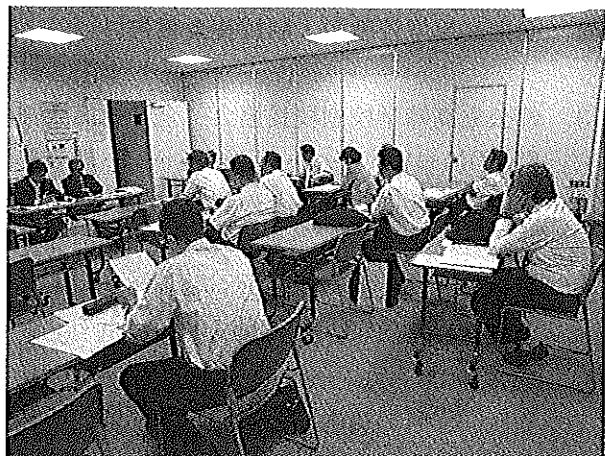
平成22年9月9日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室  
1 会長挨拶 ..... 副会長  
2 全国高等学校教頭・副校长会報告（栃木大会について） ..... 全国会長  
3 副校長研究協議会の報告・反省 ..... 副会長  
4 「研究集録・研究協議会報告」の作成について ..... 副会長  
5 校長協会、企画室長会、定通副校长会との第1回連絡会について ..... 副会長  
6 関東地区高等学校教頭・副校长会研究協議会について ..... 副会長  
7 都公立高等学校副校长協会 全日制部会細則(案)について ..... 副会長  
8 地区、学科の報告 ..... 常任幹事  
9 事務局より ..... 事務局  
10 協議・情報交換・今後の課題などについて ..... 副会長  
11 その他

### 第2回常任幹事会

平成22年12月2日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室  
1 会長挨拶 ..... 副会長  
2 全国高等学校教頭・副校长会報告 ..... 全国会長  
3 都公立高等学校副校长協会 全日制部会細則(案)について ..... 副会長  
4 臨時総会及び指導部との賀詞交歓会について ..... 副会長  
5 校長協会・企画室長会・定通副校长会との第2回連絡協議会について ..... 副会長  
6 地区、学科の報告 ..... 常任幹事  
7 事務局より ..... 事務局  
8 協議・情報交換・今後の課題などについて ..... 副会長



## 9 その他

### 【講演】

「志～人物記念館の旅」

多摩大学経営情報学部教授

久恒 啓一 先生

## 7. 指導部との賀詞交歓会

平成23年1月5日(水) 19時10分～21時00分

場所 文京シビックセンター 26階

スカイホール

文京区春日 1-16-21

### 第3回常任幹事会

平成23年2月3日(木) 19時00分～20時30分

於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室

- 1 会長挨拶 ..... 会長
- 2 全国高等学校教頭・副校長会報告  
(平成23年度東京都の発表についてほか)  
..... 全国会長
- 3 23年度年間行事予定・役員選出について  
..... 会長
- 4 地区、学科の報告 ..... 常任幹事
- 5 会報第38号の作成について ..... 事務局
- 6 事務局より ..... 事務局
- 7 協議・情報交換・今後の課題などについて  
..... 会長他
- 8 その他

### 次第

司会 堀江全国副会長

- 開会のことば ..... 都築都長会  
教育委員会挨拶 ..... 高野指導部長  
乾 杯 ..... 金子指導企画課長  
歓 談  
指導部挨拶 ..... 宮本高等学校教育指導課長  
出張教育計画担当課長  
指導部出席者紹介  
副校長会挨拶 ..... 錦織全国会長  
歓 談  
閉会のことば ..... 小堀都副会長

この指導部との賀詞交歓会は、昨年度に引き続き副校長全員に呼びかけて臨時総会後に実施したものである。参加者は指導部から部長、課長、主任指導主事、統括指導主事が13名、副校長は46名、事務局が2名で合計61名であった。指導部と副校長会との交流ができた。



## 8. 特別委員会

会長 都築 功

1 東京都教育管理職等連絡会理事会

7月23日(金) 16:00より 教育委員会室にて

2 東京都教職員互助会運営委員会

出席実績なし

3 教育公務員弘済会評議員会

出席実績なし

4 日本教育会東京支部役員

理事

錦織 政晴 (武藏) 都築 功 (雪谷)

評議員

小堀 紀明 (農産) 堀江 徹 (武蔵村山) 長島 良夫 (羽村) 有馬 利一 (青山)  
志村 修司 (北多摩) 潤澤 隆司 (荒川工業) 鈴木 春子 (八潮) 守屋 誠一 (総合工科)  
服部幸一郎 (足立工業) 藤田 稔 (竹早) 佐々木 哲 (六郷工科) 長江 誠 (深川)  
小宮 徳健 (狛江) 計良 智子 (桜町) 宮本 信之 (飛鳥) 鶴田 秀樹 (豊島)  
若林 直司 (町田総合) 下田 賢明 (昭和) 原 忍 (小金井北) 中川 徹 (五日市)  
岡本 裕之 (第一商業)

・日本教育会の諸事業に協力し、支部事業（総会・研修会・支部報発刊など）を企画・実施する。

5 東京都公立高等学校PTA連合会相談役

東京都公立高等学校PTA連合会の諸事業に関して、相談を受ける

○ 5月11日(火) 19:00～ 都高P相談役会（事務局）

○ 6月11日(金) 19:00～ 都高P総会（オリンピック記念青少年総合センター）

6 周年行事、開校・閉校式典等

### 3. 主な活動報告

#### 1. 全国高等学校教頭・副校長会

##### 1. 会合

5月 7日 (金) 会計監査・本部役員会	東京・事務局	4県 11名
5月 17日 (月) 第1回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷	7県 20名
6月 7日 (月) 第1回理事研究協議会 (含、地区研究協議会)	"	47県 95名
7月 2日 (金) 第2回総務部会	"	7県 14名
7月 28日 (水) 研究部会 第2回理事研究協議会	栃木県・ホテルニューアイタヤ	13名 47県 110名
7月 29日 (木) 総会・研究協議大会（第1日）	栃木県総合文化センター	47県 666名
7月 30日 (金) 研究協議大会（第2日）	"	47県 666名
10月 1日 (金) 中間会計監査・本部役員会	東京・事務局	4県 9名
10月 18日 (月) 第3回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷	7県 17名
11月 5日 (金) 常任理事会	"	19県 25名

#### 2. 地区研究協議会

北海道地区 ① 5月19日～20日 胆振支部	東海地区 10月15日	愛知県主管
②11月19日 石狩支部	近畿地区 10月28日～29日	和歌山県主管
東北地区 11月 4日～ 5日 秋田県主管	中国地区 本年度開催なし	
関東地区 11月19日 神奈川県主管	四国地区 10月21日～22日	徳島県主管
東京地区 8月24日 東京都	九州地区 10月 7日～ 8日	熊本県主管
北信越地区 11月11日～12日 長野県主管		

#### 3. 刊行物

・発表資料集	第30号 平成22年7月 139頁 2,100部	参加者・県教委・校長会などに配付
・全国要覧	第33号 " 9月 55頁 6,500部	会員・県教委・校長会などに配付
・会報	第78号 " 10月 16頁 6,500部	"
・研究集録	第35号 " 10月 206頁 6,500部	"
・全国大会集録(栃木県)	" 10月 138頁 6,500部	"
・調査研究集	第34号 平成23年2月 135頁 6,500部	"
・会報	第79号 平成23年1月 16頁 6,500部	"
・「教頭のホンネ」	平成22年7月	全国大会参加者に配付

#### 4. 研究発表

県・題（栃木3題、北海道2題、三重2題、兵庫2題、15県各1題）

部 門	全 国 大 会	研 究 集 錄	計
管理運営	栃木、岩手、三重、島根、愛知(誌上)	北海道、茨城、千葉、三重 奈良、兵庫	10県 11題
高校教育	徳島、栃木、鹿児島、兵庫、福岡(誌上)	山形、岡山	7県 7題
生徒指導	東京、北海道、富山、栃木	静岡、広島	6県 6題

#### 5. 特別調査

本年度東京地区（調査研究集に掲載）、来年度は中国地区が担当。

## 2. 東京都立高等学校副校長研究協議会

東京都立高等学校副校長会  
東京都公立高等学校定通副校長会

平成 22 年度東京都立高等学校副校長研究協議会を教育庁指導部及び各地区の学校経営支援センターのご支援をいただき平成 22 年 8 月 24 日(火)に東京都教職員研修センター研修室及び視聴覚ホールを会場として約 180 名の副校長が参加し実施することができました。

分科会は、『都民に信頼される魅力ある都立高校づくりをめざして』を全体のテーマとし、4 分科会（管理運営、高校教育、生徒指導、定時制通信制）において 7 主題の研究発表及び研究協議を実施しました。

午後 1 時 30 分から午後 3 時まで行われた各分科会の内容は以下のとおりです。

### 第 1 分科会 (全日制 管理運営研究部)

#### 601(1)(2) 研修室

主題：「主任教諭の活用状況と課題」

第 1 委員会 西部 D チーム

提案者：遠山 裕之（青梅総合）

主題：「副校長の職務実態と効率化の工夫について」

第 2 委員会 中部 B チーム

提案者：伊達崎 広（総合芸術）

指導講評：教育庁指導部高等学校教育指導課  
統括指導主事 信岡 新吾 先生

### 第 2 分科会 (全日制 高校教育研究部)

#### 602(1)(2) 研修室

主題：「新教育課程に向けた各校の取組について」

第 1 委員会 中部 D チーム

提案者：栗原 健三（鷺宮）

主題：「学力向上の取り組みについて」

第 2 委員会 西部 B チーム

提案者：山口 久（日野台）

指導講評：教育庁指導部高等学校教育指導課  
指導主事 大山 敏 先生

### 第 3 分科会 (全日制 生徒指導研究部)

#### 701 研修室

主題：「学校における個人情報の扱いについて」

第 1 委員会 東部 B チーム

提案者：平野 篤士（大田桜台）

中村 直治（小石川中等）

主題：「生徒会会計の現状と課題」

第 2 委員会 東部 D チーム

提案者：福田 洋三（日本橋）

指導講評：教育庁指導部高等学校教育指導課  
統括指導主事 池上 信幸 先生

### 第 4 分科会 (定時制・通信制)

#### 702 研修室

主題：「定時制・通信制高校の外部人材の活用」

東部研究委員会

提案者：難波 伸一（向丘）

川澄 秀一（蕨前工業）

佐藤 洋彰（江戸川）

加藤 哲次（荒川商業）

指導講評：教育庁指導部高等学校教育指導課  
指導主事 小林 靖 先生

各分科会とも活発な協議と適切な指導助言をいただき、活気ある分科会となりました。

分科会終了後、午後 3 時 20 分から午後 5 時まで教職員研修センター視聴覚ホールにて全体会を行いました。

全体会は、「新学習指導要領における言語活動の充実について」をテーマとして実施しました。東京都教育委員会挨拶として高野敬三指導部長より、来年度に向けて東京都教育委員会の重点施策を含めたお話をうかがいました。高野部長の挨拶は、来年度の予定を含め東京都教育委員会の重要施策についてのお話でした。各副校長は、早速、学校で情報提供を行ったと思います。

その後、文部科学省初等中等教育局 西辻正副教科調査官より「新学習指導要領における言語活動の充実について」と題して講話をいただきました。各学校が新学習指導要領に対応した教育課程編成に取り組む中、学習指導要領改訂の根本的な考え方を直接聞くことができたことは、大いに参考となりました。

副会長 小堀 紀明（農産）記

### 3. 関東地区高等学校教頭・副校長会 研究協議会報告

#### 1 はじめに

関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会は「関東地区高等学校教頭・副校長の連携を図るとともに、高等学校教育の諸問題について、研究協議を実施し、時代の進展に即応する教頭・副校長としての資質の向上と高校教育の充実を図る」ことを目的に昭和62年に始まり、平成22年度神奈川大会で24回を迎える。

東京、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、山梨の各県と神奈川県の横浜市、川崎市、横須賀市の8都県、3市の教頭会及び副校長会で構成され、開催は東京を除く各県・市の持ち回りとなっている。

平成22年度の神奈川大会には、各都県市より280名を越える参加者が集まった。東京からは、事務局を含め5名が参加したが、午後より東京都教育委員会の教育課程説明会があったため、途中退席することとなった。

#### 2 平成22年度神奈川大会の概要

期日 平成22年11月19日(金)

会場 横浜市西公会堂（JR横浜駅下車）

(開会式)

開式のことば

国歌斉唱

神奈川県立高等学校副校長会長あいさつ

全国高等学校教頭・副校長会長あいさつ

来賓あいさつ

閉式のことば

諸連絡・日程説明

<講演>

講師 小野田 正利 先生

(大阪大学大学院教授)

演題「モンスター・ペアレント論を超えて」

～保護者と向き合う気持ち～

教職員の共同性～

<研究協議>

◇テーマ

「未来を拓く 学校づくり 人づくり」

～教頭・副校長として、いま何をなすべきか～

◇発表

① 茨城県立水戸農業高等学校 入野 洋一

#### 「部活動指導の管理運営の現状と課題」

～教頭・副校長として、いま何をなすべきか～

② 千葉県立袖ヶ浦高等学校 青木 正寿

「学校マネジメント支援に係る会議と校務分掌の適正化」

③ 神奈川県立平塚湘風高等学校 神戸 秀巳

「副校長制度・総括教諭・企画会議を活用して学校運営組織の機動力向上へ」

④ 山梨県立甲府昭和高等学校 田中 和恵

「キャリア教育を柱とした教育活動の実践」

～普通科高校におけるキャリア教育をめざして～

(閉会式)

開式のことば

神奈川県立高等学校全日制教頭会会长あいさつ

次年度開催県山梨県高等学校教頭・副校長会会长あいさつ

閉式のことば

#### 3 研究発表の要旨

① 茨城県立水戸農業高等学校 入野 洋一

「部活動指導の管理運営の現状と課題」

～教頭・副校長として、いま何をなすべきか～

全県平均の部活動参加率は、56.9%であり、部活動参加率は、落ち込んでおらず、生徒の部活動に対する期待度が高い。運動部の活動日を7日～5日と答えており、顧問の負担の大きさの一端を表している。

部顧問の委嘱については、どこの学校も頭の痛い問題であり、外部指導者を多くの学校が活用している。

部費の管理(徴収・執行)については、「部活動に係わる運営経費等の適正な取り扱い」等の内規の整備が求められる。

学校の活性化のためには、「部活動の活発化」が必要条件であることを再確認し、管理職がしっかりと取り組み、うまく機能させる必要がある。

② 千葉県立袖ヶ浦高等学校 青木 正寿

「学校マネジメント支援に係る会議と校務分掌の適正化」

今回の調査結果から9割以上の学校が、ミドルアップダウン型の組織を有しており、それを活用した組織マネジメントの可能性があ

ることがわかった。しかし、学校がミドルアップダウン型の組織を有していても、思うように活用しきれていない実態もわかった。管理職としてより一層の双方向的なコミュニケーションが必要であろう。

また、今回の調査では、教頭だけでなく、主任層にも調査を行い、主任層が予想以上に学校を支えているという意識で業務にあたっていることがわかった。組織マネジメントに関するミドル層向けの研修の機会が増えることが望ましいと考える。

- ③ 神奈川県立平塚湘風高等学校 神戸 秀巳  
「副校长制度・総括教諭・企画会議を活用して学校運営組織の機動力向上へ」

#### ○副校长制度

「校長を補佐し、校務の総合調整を行う」と明記され、「教頭業務の進行管理」の他、「校長の専決権の一部の移譲」「校長不在時の代決権の付与」で副校长と教頭との職務上の違いは明確である。それらの職務ゆえに、副校长にはより高い視点、広い視野と深い洞察力が要求される。副校长と教頭がそれぞれの職務を着実に遂行することにより、神奈川の大半の県立高校で校長が校外で活動しやすい環境づくりと校内でリーダーシップを発揮しやすい職場づくりはある程度進んでいると考える。

#### ○総括教諭

導入前と比べ、学校運営の推進力としての総括教諭の貢献は間違いなく大きい。実際に、導入以前に多くの職場で見られた経験年数を優先した分掌配置から、職場全体を見通した積極的な人材配置への転換を可能にした大きな要因の一つとなっている。しかし、一方多くの県立高校で、総括教諭への業務の集中化などの課題が生まれている。強固な組織を創り上げるためにには、職員を「考え続ける集団」にしなければならない。

#### ○企画会議

企画会議の実施により、職員会議に要する時間は確実に短くなっている。平成20年度の調査では「大いに短縮された」「多少は短縮された」が併せて97%となっており、職員会議における協議時間が減少し、業務時間の効率化が図られている実態がわかる。

- ④ 山梨県立甲府昭和高等学校 田中 和恵

### 「キャリア教育を柱とした教育活動の実践」 ～普通科高校におけるキャリア教育をめざして～

学校で行われている教育活動はすべてキャリア育成のために行われていると言ってよい。そのためには、教員が目的を明確に持ち、総合的な学習の時間を各教科や特別活動で行われるキャリア育成の視点での教育を統合・深化させる時間として位置付け、年間を通じた全体計画を作成し周知する必要がある。

組織としての指導力向上のためには、キャリア教育推進委員会が主体となり、教務、進路、生徒指導等各分掌がキャリア教育にどの場面でどのように係わっていくのかを分かりやすいものにする方がよい。

中学校と合同の研修や情報交換の場の設定も今後は必要になる。また、内外へ目を向けると人材が豊富に存在しているので今後も保護者・地域に協力を求めていくことも大切である。

### 4 平成23年度関東地区高等学校教頭・副校长会研究協議会開催要項(案) 一抜粋一

主催 関東地区高等学校教頭・副校长会研究協議会

主管 山梨県高等学校教頭・副校长会

期日 平成23年11月18日(金)

会場 山梨県立文学館

発表 ①東京 ②群馬 ③埼玉 ④栃木

### 5 おわりに

今回は公務の関係で東京都からの参加者が少數で残念だった。

講演の中で印象に残ったこと。親が来たらまずお茶を出す。落ち着かせること。「そういう気持ちにさせてしまって申し訳ありません」と言う。これは謝ってはいない。言い逃れをしない。教職員が共同で当たる。5分たつたら他の人がお茶を持っていく。違った雰囲気の人が入ると出口が見つかることがある。なぜこんなことを言うのかを考えながら聞く。70%で仕事をしましょう。100%ではすり切れてしまします。普通の教師が普通に活躍できる学校であってほしい。定年を前にやめるのは残念です。などでした。

事務局 記

## 4. 地区別支部副校長会報告

### 1. 東部 A 地区副校長会

#### 1 はじめに

平成 22 年度東部 A 地区は、足立区 7 校・葛飾区 5 校の 14 名の副校長で構成され、常任幹事・服部幸一郎（足立工）、常任幹事代理・大塚雅一（足立西）、研究幹事・樋口博文（葛飾野）を中心運営した。

今年度は、TAIMS 端末を活用した成績管理サーバー・自己申告システム・旅費システム・健康管理システムの導入・運用が開始された。

さらに、校内での ICT 研修、情報セキュリティ・個人情報事故再発防止対策に伴う TAIMS 校内ネットワークの構築、校務用パーソナル・コンピューターの転用・廃棄など、管理職として情報関係の対応に追われた 1 年であった。

東部 A 地区副校長会でも毎回話題になり、各システムの利便性の向上・共通化などの要望が出ている。

#### 2 活動報告

##### (1) 副校長連絡会 意見交換・協議

###### ○ 4 月 20 日(火) 多摩社会教育会館（全体）

- ・基調報告「学校経営計画の具現化に向けて」を受け、各校の取組について情報交換
- ・成績管理サーバーの運用について情報交換

###### ○ 5 月 13 日(木) 都立小石川高校（東部所）

- ・基調報告「主幹・主任教諭を活用した校内体制の構築」昼間一雄副校長（葛飾商）を受け、各校の活用状況について情報交換
- ・成績管理サーバーの運用について情報交換

###### ○ 6 月 15 日(火) 都立白鷗高校（東部所）

- ・基調報告「高等学校における発達障害支援」林眞司副校長（足立東）を受け、各校の状況について情報交換
- ・情報セキュリティ対策について情報交換

###### ○ 7 月 13 日(火) 都立工芸高校（東部所）

- ・基調報告「組織運営の工夫と学校の活性化」を受け、各校の状況について情報交換

###### ○ 9 月 14 日(火) 多摩社会教育会館（全体）

- ・校種を越え、相互理解・連携を深め、両者の改革を進めるため、都立高等学校と都立特別支援学校との合同協議会（東部所 A）で

#### 情報交換・意見交換

- ・TAIMS 端末、成績管理サーバー、旅費システムについて情報交換

###### ○ 10 月 12 日(火) 都立上野高校（東部所）

- ・新学習指導要領に基づく教育課程の編成、学校説明会の状況、来年度年間行事計画、旅費システムについて情報交換

###### ○ 11 月 16 日(火) 都立新宿山吹高校（東部所）

- ・基調報告「情報セキュリティの構築に向けた取組」宮下義弘副校長（足立）を受け、各校の取組状況について情報交換
- ・TAIMS 端末に接続可能な周辺機器、インストール可能なソフトウェア、成績管理サーバーについて情報交換

###### ○ 12 月 10 日(金) 都立上野高校（東部所）

- ・基調報告「OJT を活用した人材育成の実践」を受け、各校の実践について情報交換
- ・生徒募集対策について、情報交換・意見交換

###### ○ 1 月 18 日(火) 多摩社会教育会館（全体）

- ・意見交換「校長代理について」を受け、校長代理経験者から情報提供
- ・3 学期の学校説明会・個別相談会の状況、卒業式の準備状況について情報交換

###### ○ 2 月 17 日(木) 都立工芸高校（東部所）

###### ○ 3 月 17 日(木) 教職員研修センター(東部所)

#### 3 おわりに

現在、高等学校における特別支援教育の充実が求められており、6 月の基調報告、9 月の都立特別支援学校との合同協議会は、特別支援教育の充実を図るための、絶好の機会であった。

特に都立特別支援学校との情報交換・意見交換は新たな試みであり、特別支援学校の副校長先生から直接お話をうかがったり、質問に答えていただいたりして、とても貴重な情報を得ることができた。普段の副校長連絡会では同じチームでありながら、ほとんど交流は無いが、このような場を設定していただいたことに感謝する。

東部 A 地区は人数が少ないため、密に情報交換・意見交換ができる。この中で、常任幹事を仰せつかり、とても勉強になった 1 年であった。常任幹事 服部幸一郎（足立工）記

## 2. 東部B地区副校長会

普通科 11校

専門高校 商業 2校 工業 3校  
定時制課程単位制 3校 総合学科 1校  
附属中学校 1校 中等教育学校 2校  
計 23校 36人 の副校長で構成される。  
常任幹事 藤田 稔（竹早）  
常任幹事代理 有馬 利一（青山）  
常任研究幹事 加藤 秀次（蕨前工業）  
研究幹事 藪田 憲正（白鷗附属中）  
の4名で東部B地区副校長会に携わってきた。

副校長数の多い地区でもあり、特色のある学校も多く集まっている。各学校の共通課題であっても取り組み方は一様とはいえない。

今年度提示された新たな共通課題、各学校の課題や疑問、そして思い、今すぐまたは中期的に解決しなければならない事項が積み重なってきてている。

地区副校長会の基調報告、情報交換、意見交換等によって、何らかの解決の手立て（気持ちが少しでもスーと軽く）になればと思う1年間であった。

### （活動報告）

- ・第1回 4月20日(火) 多摩社会教育会館  
基調報告「学校経営計画の具現化に向けて」  
校種別連絡会:総務部会報告、情報交換等
- ・第2回 5月13日(木) 小石川高校  
基調報告「主幹・主任教諭を活用した校内体制の構築」  
校種別連絡会:幹事会報告、情報交換等
- ・第3回 6月15日(火) 白鷗高校  
基調報告「高等学校における発達障害支援」  
校種別連絡会:情報交換等
- ・第4回 7月13日(火) 工芸高校  
基調報告「組織運営の工夫と学校の活性化」  
校種別連絡会:総務部会報告、情報交換等
- ・第5回 9月14日(火) 多摩社会教育会館  
校種別連絡会:幹事会報告、情報交換等
- ・第6回 10月12日(火) 上野高校  
校種別連絡会:総務部会報告、情報交換等
- ・第7回 11月16日(火) 新宿山吹高校  
校種別連絡会:総務部会報告、情報交換等

### ・第8回 12月10日(金) 上野高校

基調報告「OJTを活用した人材育成の実践」

校種別連絡会:幹事会報告、情報交換等

### ・第9回 1月18日(火) 多摩社会教育会館

基調報告「校長代理の経験」

校種別連絡会:総務部会報告、情報交換等

### ・第10回 2月17日(木) 工芸高校

校種別連絡会:幹事会報告、情報交換等

### ・第11回 3月17日(木) 教職員研修センター

校種別連絡会:総務部会報告、情報交換等

### （研究活動）

8月24日(火)に東京都立高等学校副校長研究協議会が開催され、東部B地区は生徒指導研究部第1委員会として、発表の担当であったため今年度早々から準備を始めた。

研究協議会では、平野副校長（大田桜台）、中村副校長（小石川中等教育）による、テーマ「学校における個人情報の扱いについて」と題し、学校としての対応状況を

1. 緊急連絡と個人情報の関わり

2. 生徒の個人情報の取り扱い

の2点について調査・研究をし、発表した。

また、ブログ、プロフやSNS等の個人情報をめぐる諸問題とその対応についても調査し、この問題に対する具体的な対応策を提言した。

### （副校長連絡会）

副校長連絡会では、学校経営支援センターからの連絡、本庁各部・課からの連絡、そして基調報告、意見交換、校種別連絡会等、各回とも日々変化する都立学校の課題とあり方、そして解決への思い・姿勢を目の当たりにしてきた。

このような中で、各学校が課題を整理し、特色を図りながら、改善、解決へと取り組んでいる姿やノウハウを副校長連絡会で知ることは、各学校の取組への基軸にもなっている。

今年度においては、TAIMSにおける自己申告、旅費システム、さらには個人情報の管理等に関わる校務用PCのあり方、またICTの活用・・・と学校におけるPCにまつわる対応に追われてきた。この対応・取り組みについてだけでも、情報交換するたびに苦労の念を感じ取られた。

「感じ、知り、次へ・・・」のできる機会が副校長連絡会であり、今後も大切にしたい。

常任幹事 藤田 稔（竹早）記

### 3. 東部C地区副校長会

#### 1 はじめに

今年度の東部C地区副校長会の構成は、普通科高校4校、専門学科高校2校（商1、工1）、単位制高校1校、総合学科高校2校の9校11名であった。常任幹事は、佐々木（六郷工科）、研究幹事は前田（つばさ総合）、常任幹事代理は菅井（大森）がそれぞれ勤めた。

#### 2 活動報告

##### (1) 副校長連絡会と意見交換会

東部地区では、今年度も意見交換会をCチーム、Dチーム合同で、教育課題別に分科会を設定して実施した。分科会は、進学校班、中堅学校班、専門高校班、生活指導充実班、定時制班の5を置いた。副校長連絡会の意見交換会のテーマについては、協議の結果、校長連絡会の年間計画に連動した形で協議を行った。

4月20日(火) 多摩社会教育会館  
「授業力向上プログラムの実施について」

5月13日(木) 東部学校経営支援センター支所  
「人事考課制度を活用した学校改革」

6月15日(火) 大江戸高校  
「主幹教諭の育成・主任教諭の活用について」

7月13日(火) 東部学校経営支援センター支所  
「ICTを活用した授業研究の実際」

9月14日(火) 多摩社会教育会館  
「保護者・近隣住民等への対応」

10月12日(火) 科学技術高校  
「教育課程改善の取組」

11月16日(火) 東高校  
「自律経営予算の編成と執行について」

12月10日(金) 東部学校経営支援センター支所  
「生徒の学力向上のための取組」

1月18日(火) 多摩社会教育会館  
「授業改善の取り組み一例」

2月17日(木) 東部学校経営支援センター支所  
「学校施設・設備の安全管理について」

3月17日(木) 東部学校経営支援センター支所  
「自律的な学校経営の実際」

全ての発表が副校長の経営管理能力を高める上で有益であった。中でも1月18日実施、前田副校長（つばさ総合高校）の発表は多くの副校長に感銘を与えるものであった。

##### (2) 副校長会

###### ①東京都立高等学校副校長会からの事務連絡

副校長連絡会の教育課題別連絡会の意見交換会後、終了間際に短時間で実施することが多く、副校長会からの事務連絡や打合せ等が中心の会となることが多かった。

###### ②塾長対象説明会

通学区域にある塾や予備校の代表・責任者と高校が懇談を行い、相互理解を深め、中学生・保護者への情報伝達の内容や質の向上を図ることを目的とした説明会である。

6月12日(土)、三原高校を会場として、午前9時30分から午後12時00分まで、次に示す内容で実施した。

###### 第一部 各校による説明（1校あたり5分）

- ・学校概要・特色
- ・学習、部活動等の指導について
- ・卒業後の進路状況、指定校推薦等について

###### 第二部 各校との個別懇談会（ブース方式）

###### ③旧1学区等都立高校合同学校説明会 in 美原

毎年10月にC地区の高校が中心となって美原高校を会場として旧1学区の中学生や保護者を主な対象とした合同説明会を実施した。

今年度は10月3日(日)に実施した。また、来年度は大田桜台高校を会場として実施する予定である。

###### ④東部C地区高等学校副校長会研修会

###### 【研修目的】

東部支所管内に聳える東京スカイツリー建設における先端技術への理解を深め、建設に携わる技術者育成に果たす高校教育の役割を考える。

###### 【演題】

「東京スカイツリーの工事概要と進捗状況について」

【講師】高木浩志 氏

（株）大林組本社 建築本部プロポーザル部課長

【実施日時】3月17日(木) 17時～18時

【会場】東部学校経営支援センター支所

【研修成果】企業が求める人材及び人材育成の視点への理解を深めると共に、アイデアを提案できる能力を育む高校教育の必要性を実感した。

常任幹事 佐々木哲（六郷工科デュ）記

## 4. 東部D地区副校長会

### 自律的な学校経営の実際

#### 1 はじめに

本副校長会は、東部学校経営支援センター支所（以下、東部支所）所轄の普通科高校13校、専門高校6校（商業2、工業2、科学技術1、産業1）付属中学校1校の20校22名の副校長で構成され、常任幹事は長江（深川）、常任幹事代理は藤田（東）、幹事補佐は吉田（両国付中）、佐藤（三商）、常任研究幹事は鹿目（紅葉川）、研究幹事は福田（日本橋）で地区副校長会を運営した。

#### 2 活動報告

##### (1) 副校長連絡会会場と意見交換会内容

東部支所所管のC、D地区副校長会合同で実施される意見交換会では、本年度は、進学校班、中堅校班、生活指導班、専門学校班の4班に分け、東部支所から与えられたテーマに沿って複数の副校長がリポーターとなり、協議が行われた。予め学校経営支援主事よりテーマと発表者が決定され、会の進行について、事前に東部支所から常任幹事に知らされた。以下に、会場と協議テーマを示す。

###### ○ 4月20日 多摩社会教育会館

授業力向上プログラムの実施について

###### ○ 5月13日 東部支所

人事考課制度を活用した学校改革

###### ○ 6月15日 大江戸高校

専門高校における人材育成について

###### ○ 7月13日 東部支所

I C Tを活用した授業研究の実際

###### ○ 9月14日 多摩社会教育会館

保護者・近隣住民等への対応

###### ○10月12日 科学技術高校

教育課程改善の取組

###### ○11月16日 東高校

自律経営推進予算の編成と執行について

###### ○12月10日 東部支所

生徒の学力向上のための取組

###### ○ 1月18日 多摩社会教育会館

授業改善の取組み一例

###### ○ 2月17日 東部支所

学校施設、設備の安全管理について

###### ○ 3月17日 東部支所

##### (2) 副校長研究協議会に向けて

今年度は、8月24日の副校長研究協議会で、東部Dチームが発表することを受けて、チーム内で協議した結果、発表内容は「生徒会会計の現状と課題」と決定した。副題として、生徒会会計における予算編成と執行状況について考察した。

生徒会会計にかかる基礎情報を収集し、生徒一人当たりの部活動費に係わる分析や在籍数との関連、部活動の重要視と実績の関係や運営上の工夫、予算編成主体や編成時における副校長の関与を調べ、会計指導を通して生徒をどう育成できるかまとめて発表した。

##### (3) 副校長会

###### ① 東京都立高等学校副校長会よりの事務連絡

副校長連絡会の最後に時間を確保するが、副校長会からの事務連絡の他は、各校の特色に応じた4班に別れての協議となった。この協議の中で情報交換する工夫をして有益な情報を得ることができた。

###### ② 所轄校内での研修会

11月16日の副校長連絡会後に、指導部高等学校教育指導課の主任指導主事を講師にお招きし、教育課程についての研修会を行った。新学習指導要領への対応等が迫られていた時期であっただけに、副校長としての資質向上に良い機会となった。

###### ③ 今後の検討課題

平成23年度からは、東部D地区から任せられる役員の数が減少する。選出された役員が自らの責任を果たすとともに、役員以外の副校長が積極的に意見を出し、自立的に会の運営が図られるようにする必要がある。

常任幹事 長江 誠（深川）記

## 5. 中部A地区副校長会

### 1 はじめに

新補でやっと1年が終わり、副校長の年間のサイクルをつかみかけた時期に、地区の幹事になりました。自分自身、務まるかどうか不安を感じていましたが、皆様のおかげで何とか1年間を終えようとしています。

Aチームは、島しょの高等学校、特別支援学校、中等教育学校、附属中学校があります。そのような中、定例会では、各学校の様々な取組み状況等の報告があり、大変参考になりました。副校長会では、できるだけBチームと合同で実施し、連携して運営していました。

### 2 活動報告

#### (1) 4月20日(火) 多摩社会教育会館

- ①「適正な個人情報・情報資産管理への本気の取組みについて」
- ②「自律経営推進予算の執行管理（事業進捗管理）について」

中部学校経営支援センター所長 船橋 淳

#### (2) 5月13日(木) 都立戸山高等学校

「副校長の職務：事故防止」

中部学校経営支援センター

担当課長 牛来 峰聰

#### (3) 6月15日(火) 都立第一商業高校

「授業の質的向上・量的拡大に向けた取組み」

都立豊多摩高校 副校長 渡邊 和己

#### (4) 7月13日(火) 都立世田谷泉高校

「『田高進路プロジェクト』による組織的な進路指導体制について」

都立田園調布高校 副校長 浅見 弘

#### (5) 9月14日(火) 多摩社会教育会館

「個人情報の徹底管理に向けた取組み」

都立しいの木特別支援学校

副校長 柳澤 順子

#### (6) 10月12日(火) 都立芦花高校

「学力向上と授業改善へ向けた取組み  
—都立高等学校学力開拓推進校における実践から—」

都立目黒高等学校 副校長 堀切 哲弥

#### (7) 11月16日(火) 都立杉並高校

「校内情報セキュリティを高める取組」

都立松原高等学校 副校長 大西 修

#### (8) 12月10日(金) 都立国際高校

「学校経営の工夫ある取組と戦略」

都立国際高等学校 副校長 寺島 雅夫  
都立大島高等学校 副校長 千葉 勝吾  
都立桜町高等学校 副校長 栄倉 和則  
都立深沢高等学校 副校長 雨森 義勝

#### (9) 1月18日(火) 多摩社会教育会館

「学校経営における実効的な主幹教諭・主任教諭の活用」

都立田園調布特別支援学校  
副校長 大和田 邦彦

#### (10) 2月17日(木) 都立目黒高校

#### (11) 3月17日(木) 都立松原高校

### 3 終わりに

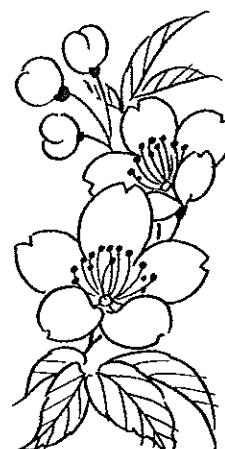
今年度は、成績管理サーバの運用状況やTAIMS以外のPCについて、旅費システムの導入について、新教育課程について各学校で苦労していることなど、様々な情報交換ができたことは大変参考になりました。

副校長の仕事は、たかだか5年目に比べても相当増えていると感じています。情報交換を通して、副校長間の横の連携により助けられました。拙い幹事ではございましたが、皆様のおかげで運営できました。感謝の気持ちを申し上げて結びといたします。

平成22年度役員

常任幹事 小宮 徳健（狛江高校）  
常任幹事代理 渡邊 和己（豊多摩高校）  
研究幹事 安部 卓郎（三鷹高校）

常任幹事 小宮 徳健（狛江）記



## 6. 中部B地区副校長会

### 1. はじめに

中部学校経営支援センターBチームが所管する高等学校・中等教育学校のうち、全日制課程または、前期課程を担当する副校長がいるのは、24校で27名である。全国高等学校教頭・副校長会や東京都立高等学校副校長会等の発表を踏まえ、Aチームと同一歩調で進めるように取り組んできた。また、副校長連絡会が全体会・チーム別意見交換・校種別情報交換で構成されていることを受け、所の学校経営支援主事と連絡を取りながら、円滑に進行できるよう心がけた。

### 2. 活動報告

#### 1 校種別情報交換

##### (1) 4月 多摩社会教育会館

「適正な個人情報・情報資産管理への本気の取組みについて」

「自律経営推進予算の執行管理について」

中部学校経営支援センター所長 船橋 淳

##### (2) 5月 戸山高校

「副校長の職務：事故防止」

中部学校経営支援センター

担当課長 牛来峯聰

##### (3) 6月 第一商業高校

「授業の質的向上・量的拡大に向けた取組」

都立豊多摩高校副校長 渡辺 和己

##### (4) 7月 世田谷泉高校

「『田高進路プロジェクト』による組織的な進路指導体制について」

都立田園調布高校副校長 浅見 弘

##### (5) 9月 多摩社会教育会館

「個人情報の徹底管理に向けた取組み」

都立しいの木特別支援学校

副校長 柳澤 順子

##### (6) 10月 芦花高校

「学力向上と授業改善へ向けた取組み—都立高等学校学力開拓推進校における実践から」

都立目黒高校副校長 堀切 哲弥

##### (7) 11月 杉並高校

「校内情報セキュリティを高める取組」

都立松原高校副校長 大西 修

##### (8) 12月 国際高校

「学校経営の工夫ある取組と戦略」

都立国際高校副校長 寺島 雅夫  
都立大島高校副校長 千葉 勝吾  
都立桜町高校副校長 栄倉 和則  
都立深沢高校副校長 雨森 義勝

##### (9) 1月 多摩社会教育会館

「学校経営における実効的な主幹教諭・主任教諭の活用」

都立田園調布特別支援学校

副校長 大和田 邦彦

##### (10) 2月 目黒高校 総務部会報告等

##### (11) 3月 松原高校 総務部会報告等

### 2 研究活動

(1) 平成22年8月24日(火)都立高等学校副校長研究協議会において、第1分科会(管理運営研究部)で「副校長の職務実態と効率化の工夫について」という主題で発表した。

(2) 平成23年2月4日(金)目黒高校において、多摩大学教授で「知的生産の技術研究会」理事長の久恒啓一氏より「図で考える人は仕事ができる」というテーマのもと、①学校教育と学校運営に図解コミュニケーションを活用する。②ドラッカーのマネジメント理論を副校長が生かすには。を中心とした研修会を実施した。講義後の実習と質疑応答は盛り上がり、副校長の仕事を見直すよい機会となった。



いつの間にか笑顔になっている副校長の面々

### 3. 終わりに

何はともあれ大過なく1年を終えることができたのは、A・B両チームの副校長と中部学校経営支援センターのご協力とご支援、そして、幹事の皆さんとの連携によるものである。この場を借りて心よりお礼申し上げたい。

平成22年度役員

常任幹事 計良 智子 (桜町)

常任研究幹事 伊達崎 広 (総合芸術)

研究幹事 堀切 哲弥 (目黒)

常任幹事代理 笹 のぶえ (都立大付属)

幹事補佐 白田 三知永(桜修館中等)

常任幹事 計良 智子 (桜町) 記

## 7. 中部C地区副校長会

### 1 はじめに

今年度の中部C地区は、9校と1つの開設準備室の副校長10名で始まり、王子総合高校の開校で10校となった。普通科高校5校、単位制普通科高校2校、商業高校1校、工業高校1校、総合学科高校1校となっている。常任幹事は宮本（飛鳥）、常任幹事代理は高橋（板橋有徳）、研究幹事は中神（赤羽商業）が担当した。

幹事は着任4年目の副校長ではあるが、幹事は初めてなので、連絡、進行がうまく行かずご迷惑をおかけした。年度の途中からは、中部D地区の幹事や幹事代理の方に連絡も助けていただき、合同で地区別連絡会を行うようになってしまった。

楽をしてしまった感は否めないが、中部C地区は10名の小所帯なので、情報量も少なく、個人的には、折角おなじ支所の管轄で同じ部屋で協議しているのにわざわざ別れて連絡会で話し合うのもどうかと考えていたので、われわれ中部C地区にとっては、大変ありがたかった。中部D地区の常任幹事の鶴田先生、常任幹事代理の小塩先生を始め中部D地区の副校長先生方には大変お世話になった。あらためて感謝いたします。

### 2 主な活動内容

4月20日 多摩社会教育会館

副校長会 役員選出等

5月13日 戸山高校

6月15日 大山高校

7月13日 板橋有徳高校 懇親会

9月14日 多摩社会教育会館

10月12日 赤羽商業高校

11月16日 桐ヶ丘高校

12月10日 井草高校 懇親会

1月18日 多摩社会教育会館

2月17日 農芸高校

3月17日 北豊島工業高校

地区別連絡会では、話題が多岐にわたり、副校長会の連絡に留まらず、大変有意義な情報交換ができた。

特に情報セキュリティ関連では、改革？がど

んどん進み、現場での対応を副校長が中心になって進めなければならない学校が多く、互いの情報交換が大変重要な年だった。私のような情報機器に詳しくない者は、多くの副校長先生方の情報や示唆に助けられ、校内の指導も進めることができた。月に1度だけとはいって、大変貴重な時間だった。

これまた中部D地区の報告に詳しく書かれているので、お世話になってしまふが、ご参照願いたい。

成績等管理サーバの活用や、校内PCの集約等、対応の早い学校が手本となり、きちんと地区の学校に伝えていただけるのは大変ありがたかった。また、自校での問題点などを挙げて、他校の参考にしてもらい、全体の向上に繋がることも本会の重要な役割であろう。

ただ、もう少し時間があれば、きちんと情報をまとめて問題点を整理して教育庁の担当部署とじっくり相談できたのではないかと思えることもあった。一方的に指示を実行するだけではなく、学校現場での問題点をきちんと伝えていってよりよい都立学校を作り、教育庁といっしょになってすべての学校が教育目標を高いレベルで達成できるようにすることも副校長会の大きな役割である。

来年度は中部C地区が研究発表となる。テーマを新教育課程に設定して、鋭意準備をしているところであるが、今後とも各校のご協力をお願い申し上げる。

最後に、常に副校長地区別連絡会に同席いただき、われわれと共に立場で、疑問点等に真摯にご対応いただいた中部学校経営支援センター支所の支所長はじめ、皆様にはお礼を申し上げたい。本当にお世話になりました。

常任幹事 宮本 信之（飛鳥）記



## 8. 中部D地区副校長会

### 1 はじめに

今年度の中部D地区は、17校 19名の副校長で1年間活動を実施した。半数以上が全日制普通科高校であるが、単位制1校、商業2校、工業3校、農業1校、附属中学校1校が含まれる。常任幹事は鶴田（豊島）が務め、常任幹事代理は小塩（千早）が担当した。また、幹事補佐は渡辺（大泉附属中）が受け持ち、常任研究幹事には栗原（鷺宮）、研究幹事には齋藤（農芸）がそれぞれ担当した。

慣例的に、地区着任2年目の副校長が幹事等を務めることとなっているのでお引き受けしたが、正直なところ、勝手がよく分からず、春から夏にかけては、副校長会の内容を地区のみなさんにお伝えし、また、地区の情報を副校長会にお伝えするだけの、いわばメッセンジャーボーイに終始していた感を禁じ得ない。次年度幹事をお引き受けしてくださる方には、上手に引き継ぎができるようにしていきたいと考えている。

### 2 主な活動内容

それでも幸いなことに、地区のみなさんに支えられ、本地区では比較的活発かつ有意義に情報交換等ができてきたと思う。特に、夏以降は与えられた持ち時間を超過して意見交換を深めるようなこともままあった。主に話題となつた内容については、以下のとおりである。

#### (1) IT関連

昨年度末は、教員一人1台のTAIMS導入と自己申告書の端末入力で幕を降ろしたが、今年度は成績管理サーバの始動に始まり、TAIMSへのソフトインストール、ICT機器関連の話題などが多くの時間を占めていた。特に成績管理サーバについては、一学期（前期）のはじめの中間考查がピークを迎えた後で、その不具合を指摘する情報や、逆にうまく機能した情報など様々な意見や見解を頂いた。成績管理サーバについては、少テストの保存方法、想定外の入力と保存のあり方等々、秋以降もしばしば話題に上ったテーマである。

また、9月から導入された旅費システムにつ

いても話題となることが多かった。主に使い勝手の問題で、旅費システムで入力した旅行内容を、学校日誌にそのまま流し込める方法はないか、あるいは、このシステムをCSVファイルで起動できるようにならないか等々の意見が出された。このことについては、他の地区でも意見が様々出ているようであるから、それらの意見を集約して、改善の用に役立てることはできなかいかと考える。

セキュリティ問題については、例えばデジカメの画像の保存や生徒の健康情報の管理など、極めて実務的かつ細かな内容についての情報を求める声が上がり、現場における日常の生々しさが醸し出されていた。

#### (2) 教育課程への取組

新学習指導要領に係る新教育課程に関する取組については、定期的に情報交換がなされていた。主に、その時その時の各校の進捗状況や教育課程編成の実務的な進め方等についての情報交換が行われた。

#### (3) 副校長会への要望等

この1月の臨時総会で承認された副校長会の幹事人数については、積極的に賛成する意見が見られた。また、校長協会との合同提案事項についても、重ねて強く要望して欲しいなど、特に9月以降には、一方通行的ではない建設的な意見が多数見られるようになっていった。

#### (4) C地区との合同実施

副校長連絡会では、本地区はC地区と同じ会場で連絡会を行っている。意見交換の時間も同じ場所で実施している。そのため、年度発足当初は、CとDは別々に情報交換を行っていたが、いつの頃からか、一緒に情報交換を行うようになってしまった。主観的ではあるが、その方が、幹事は2名いるため、副校長会からの連絡事項の漏れを防止できるし、また、より多くの意見や情報を聴取できるので、バラバラでやるよりも、この形態の方が機能的であるように思う。

常任幹事 鶴田 秀樹（豊島）記

## 9. 西部 A 地区副校長会

### 1 はじめに

西部学校経営支援センターAチームが所轄する都立学校は、全日制・定時制が9校、盲・ろう学校が2校、特別支援学校が12校、計23校である。

副校長会での意見交換会は、様々なテーマについてざっくばらんな雰囲気を大切にしつつ、毎回行われた。日頃の職務を遂行する上での問題点や改善したいこと、各学校の課題などについて、毎回忌憚のない意見交換が行われ、非常に有意義な場になった。

### 2 活動報告

○副校長連絡会後の情報・意見交換会について

(1) 4月20日(火)

多摩社会教育会館

年間スケジュールの確認

年間取組目標の確認・規範意識・心の育成

既存 LAN・PC からのデータ移行状況

(2) 5月13日(木)

翔陽高等学校

幹事会報告

町田・稲城・多摩地区都立高校合同個別相談会について

(3) 6月15日(火)

八王子桑志高等学校

主任・主幹の育成について

学校説明会の日程について

(4) 7月13日(火)

多摩社会教育会館

土曜授業について

教科書の入力システムについて

生徒の使用する USB について

(5) 9月14日(火)

多摩社会教育会館

成績管理サーバーの運用について

ICT 巡回支援スタッフの活用について

(6) 10月12日(火)

立川高等学校

学力向上への取組みについて

町田地区中高副校長会について

(7) 11月16日(火)

多摩社会教育会館

### 広報活動について

町田・稲城・多摩地区都立高校合同個別相談会について

(8) 12月10日(金)

多摩社会教育会館

入学選抜における運営上のチェックポイントについて

既存 PC の取扱いについて

同窓会の同意書の集め方について

(9) 1月18日(火)

多摩社会教育会館

各学校の抱える課題について

(10) 2月17日(木)

多摩社会教育会館

入選・募集対策について

(11) 3月17日(木)

町田高等学校

次期常任幹事選出

### 3 平成22年度役員

常任幹事 若林直司(町田総合)

常任幹事代理 岩坪光吉(町田)

研究幹事 北澤道夫(小川)

### 4 おわりに

西部 A 地区の幹事は、当地区に新任・異動してきた 2 年目の副校長が担当することが慣例になっている。

今年 1 年常任幹事を担当させていただき、各学校の様々な課題について意見交換の場をもてたことは、大変有意義であった。私自身も大いに勉強になった一年であった。

副校長という職務は多忙を極め、ともすれば余裕を失いがちになるが、月 1 回の情報・意見交換の場において、それぞれの学校で工夫していることや悩んでいることなどを、肩肘張らずにざっくばらんな雰囲気の中で共有することができたことは、大変良かったと思っている。

支えていただいた皆様に感謝申し上げます。

常任幹事 若林 直司(町田総合)記

## 10. 西部B地区副校長会

### 1 はじめに

西部B地区は、全日制課程23名、定時制・通信制課程8名、中等教育学校2名の合計33名の副校長で構成される。

西部B地区的情報交換会は、地区別分科会の最後に時間を設けている。そこでは情報交換はもちろんのこと、各校の副校長が課題や苦労していることなどを出し合い、全員で解決のために話し合いを行った。

### 2 活動報告

今年度1月までの副校長連絡会地区別分科会では、まず下記の内容で、講演、講話、実践報告等があった。その中で7月の講演、9月の講話を除いた実践報告会の終了後には、報告内容をもとにしたグループ討議の時間が持たれた。

#### 5月 「学校経営計画の実現」

～職員1人1人に方針が届く  
方策について～

#### 6月 家庭学習時間を増す取組み

～平均30分の家庭学習の時間を  
いかに増やすか～

#### 7月 西部学校経営支援センター所・支所合同 「講演」

西部学校支援アドバイザー  
江原 美規子 氏

#### 9月 西部学校経営支援センター所・支所合同 「個人情報事故防止講話」

武藏高等学校・同附属中学校長

守屋 一幸 氏

多摩桜の丘学園校長 杉野 学 氏

#### 10月 「勉強の仕方を学習する取組み」

～ノートの取り方から  
教え始めた教師たち～

#### 11月 「中学校副校長の意見を聴く」

～中学校の立場から見た高校の  
募集対策について～

#### 12月 「危機管理について」

～入選事故を起こさないために～

#### 1月 B地区全学校より、

～取り組み・課題などを  
はじめとする各学校の近況報告～

グループ討議では、各校の状況などが報告された。ここでは各校の様々な取り組みや実践、また学校経営上の課題等が報告されたが、それ以上に副校長の多忙さや抱えている問題の多さが必ず話題になり、今日の学校における副校長のおかれている状況の難しさが改めてクローズアップされた。グループ討議後に、西部B地区的全員の副校長での情報交換会となる。ここではグループ討議で出なかった各学校で抱えている課題等が話し合われた。1月には、B地区の副校長全員が、1人ずつ自校の取り組み、実践、課題など近況報告をおこなった。

これらの報告会では、課題の解決策として参考になることも多くあったが、各学校の状況の違いから、即、解決策にはならないものも多かった。しかし、状況が異なる学校の副校長が同じ課題に対して話し合う機会は、副校長間の横のつながり（ネットワーク）をもつことに大きな成果があったと思われる。

### 3 宿泊研修会

今年も西部Bチームは研修会を1月8日(土)～1月9日(日)1泊2日の日程で、南熱海伊豆多賀温泉で実施した。

1日目 小田急町田駅に午後1時10分集合。小田急で小田原まで、小田原からJRに乗り継ぎ午後3時16分に伊豆多賀駅に到着。この日は6時の懇親会までの時間を各自が宿でゆっくり過ごすことになっていたのだが、温泉につかってから、我々の職業的習性か？教育現場での様々な話題(四方山話も含めて)について話し合い？の時間となった。

午後6時からの懇談会には、直接宿に着いた者も一緒になり親睦を深めた。

2日目 この土地が故郷の方のお家を見学し、途中熱海に立ち寄り帰途についた。

短い時間であったが、日頃、多忙極まる副校長にとって、こうして仲間とともにゆっくりとした時間を過ごし、考えや悩み、職場の状況など様々なことを語りあう時間こそ、休息(癒し)の時間となると共に実質的な研修の時間にもなり、明日への鋭気が養われる機会だと思われた。

来年以降も、ぜひこの宿泊研修を継続していく欲しいと思う。

常任幹事 下田 賢明(昭和)記

## 11. 西部C地区副校長会

### 1 はじめに

今年度の西部C地区副校長会の構成は普通科高校7校、専門学科高校2校、総合学科高校1校、中高一貫校1校の計11校12名であった。常任幹事は原(小金井北)、研究幹事は阿部(久留米総合)、常任幹事代理は伊東(清瀬)が勤めた。

毎月の副校長連絡会では、全国高等学校教頭・副校長会や東京都立高等学校副校長会の研究協議会等の発表を踏まえ情報交換を密にしながら取り組んできた。そして、副校長連絡会が全体会・チーム別意見交換で構成されていることを受け、支所の学校経営支援主事と連携をとりながら、円滑に運営ができるように心がけた。

### 2 活動報告

#### (1) 副校長連絡会と情報交換会

4月20日(火) 多摩社会教育会館

- ・幹事会報告
- ・「若手教員育成への取組について」
- ・3、4月の成績管理サーバーへの移行状況や問題点等。

5月13日(木) 都立武蔵高等学校

- ・幹事会報告
- ・「学校におけるOJTの推進」
- ・TAIMS(個人端末)の使用状況について

6月15日(火) 都立上水高等学校

- ・幹事会報告
- ・「授業観察における視点及び工夫について」
- ・情報セキュリティについて
- ・TAIMSによる自己申告書作成状況について

7月13日(火) 多摩社会教育会館

- ・幹事会報告
- ・Eラーニング研修
- ・TAIMS入力による旅費管理システムについて

9月14日(火) 多摩社会教育会館

- ・幹事会報告
- ・情報セキュリティについて
- ・ネットワークシステムについて

10月12日(火) 都立秋留台高等学校

- ・幹事会報告
- ・「学校経営計画の中間まとめ」
- ・「経営企画室の学校経営参画」

#### ・旅費システムについて

11月16日(火) 都立青峰学園

- ・幹事会報告
- ・「学校経営診断」について
- ・校務用PC移行について
- ・TAIMS端末のソフトウェアについて

12月10日(金) 都立久留米西高等学校

- ・幹事会報告
- ・「学校評価の有効な活用」
- ・新体力テストについて

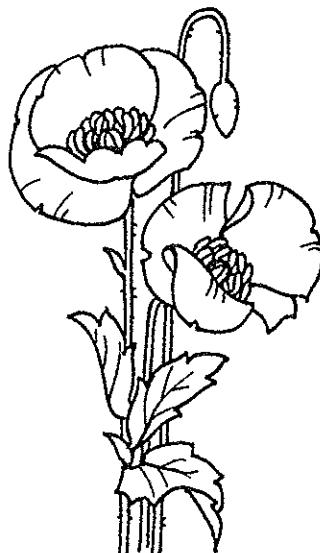
1月18日(火) 多摩社会教育会館

- ・幹事会報告
- ・自転車事故防止に向けた取組
- ・校務用PC移行状況

2月17日(木) 都立田無工業高等学校

3月17日(木) 都立東大和南高等学校

常任幹事 原 忍(小金井北)記



## 12. 西部D地区副校長会

### 1 はじめに

平成22年度、西部D地区は、19校21名で構成されている。普通科高校14校、専門学科高校2校、単位制高校2校、総合学科高校1校である。普通科のうちエンカレッジ2校が2名配置校であり、今年度本地区には昇任を含めて新たに9名の方が着任した。

役員は、常任幹事に中川(五日市)、研究幹事に遠山(青梅総合)、常任幹事代理に矢作(小平)、幹事補佐に常國(東村山)、常任研究幹事に黒澤(多摩工業)の5名を選出した。本地区は、幹事会や総務部会の開催される地より遠方のため、役員間で連携を取り合い、会に欠席することなく情報の伝達にもがれないよう心掛けた。

本地区は今年度の副校長研究協議会の研究発表の順にあたり、前年度からの研究を引き継ぎ「主任教諭の活用状況と課題」という内容で発表した。

### 2 地区別副校長連絡会活動報告

西部地区C地区とD地区は合同で事例発表による研究協議の後、地区ごとの情報交換を行っていた。情報交換会では、幹事会報告の後、月ごとに話題を設定し、各校が抱えている課題やその解決の糸口になることなど情報交換を行っていた。開催場所と事例発表・研究協議等の内容は以下の通りである。

4月20日(火) 多摩社会教育会館

「若手教員育成への取組」

5月13日(木) 武蔵高校

「学校におけるOJTの推進」

6月15日(火) 上水高校

「授業観察における視点及び工夫について」

・成績等管理サーバについて

7月13日(火) 多摩社会教育会館

講演 「今だからこそ、学校経営の「要」である人材・副校長に期待する」

江原美規子 西部学校支援アドバイザー

・成績等管理サーバについて

9月14日(火) 多摩社会教育会館

「個人情報事故防止」講話

・旅費システムについて

10月12日(火) 秋留台高校

「学校経営計画の中間まとめ～学校課題の解決に向けて～」

「経営企画室の学校経営参画」

・新教育課程の進捗状況

11月16日(火) 青峰学園

「平成22年度学校経営診断を受けて」

・TAIMSPC、教育用PC以外のPCについて

12月10日(金) 久留米西高校

「学校評価の有効な活用」

・TAIMSPC、教育用PC以外のPCの廃棄等  
移行計画

1月18日(火) 多摩社会教育会館

・司書教諭の活用状況

・情報セキュリティ対策について

2月17日(木) 田無工業高校

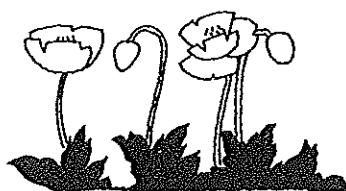
3月17日(木) 東大和南高校

### 3 終わりに

この一年、成績管理サーバの導入、旅費システムの導入、既存PCの転用・廃棄計画等、PC関係の話題に終始した。情報交換の内容もほとんどがPC関係で、各学校の取組や進捗状況がわかり、情報交換が有意義に行われたと感じている。

また、前述の通り本地区は副校長研究協議会の研究発表の順で、「主任教諭の活用状況と課題」という内容で発表したが、原稿を作成する際には多くの学校にアンケートのご協力を頂き、ありがとうございました。さらに、来年度全国高等学校教頭・副校長研究協議大会でも研究発表することになり、発表の内容をさらに高めるために改めて全都の副校長の方にアンケートをお願いし、お忙しい中快く回答していただき誠にありがとうございました。この場をかりてお礼申し上げ、本地区的活動報告の結びとします。

常任幹事 中川 徹(五日市)記



## 5. 学科別副校長会報告

### 1. 工業科副校長会

#### (1) 平成 22 年度役員構成と定例会について

平成 22 年度は都立工業高等学校全日制課程（昼間定時制課程 1 課程含む）20 校 23 名で構成されている。

今年度からは工業高校長会に倣い、役員は選挙で決めることとし、投票の結果、平成 22 年度は以下の役員が決定した。

会長 佐々木哲（六郷工科高校デュ）  
副会長 板倉 哲（田無工業高校）  
会計 磯上辰雄（北豊島工業高校）  
庶務 清水昭弘（町田工業高校）

都立工業高校副校長会定例会は年間 11 回開催。毎月実施される副校長連絡会の午前に、都立工芸高校を主な会場として実施した。

定例会次第を次に示す。

- ①都立学校教育部、指導部の報告・連絡
  - ②都工校長会及び全工協からの報告・連絡
  - ③工業副校長会懸案事項に関する協議
  - ④各研究部会の研究活動及び研究報告
  - ⑤各校の情報交換及び教育に関する研修
- 上記 5 点で構成・実施している。

#### (2) 工業科生徒研究成果発表会の活性化

平成 22 年度本会の最重要課題として「工業科生徒研究成果発表大会の更なる活性化を通して工業高校生の素晴らしいを都民に広報する」を主題に定例会で協議を重ね、副校長の本事業に対する更なる理解と協力を求めた。

本事業は都教育委員会と都立工業高等学校長会との共催事業として実施してきたが、今一歩各学校の関心が高まらず、第 12 回大会では発表応募本数が 7 本しか集まらないなど衰退の一途を辿っていた。

工業科に学ぶ生徒の日常の学習活動における成果発表の場である本大会を活性化させることができることを説き、工業高校全校で本大会を盛り上げる機運を

醸成し、第 13 回大会（平成 18 年）以降、大会参加数、発表本数共に増加した経緯がある。

学校経営のトップは校長であるが、学校経営の要是副校長である。工業副校長会の協議を通して副校長の事業に対する認識と使命感が高められ、協働意欲が醸成された結果、平成 18 年 11 月に都立科学技術高校で開催した第 13 回大会（私立 3 校を含む 24 校参加、口頭発表 24 本、パネル発表 4 本）に次ぐ、18 校参加（口頭発表 18 本、パネル発表 9 本）大会史上 2 番目の参加校数を得て今大会を終えることができた。

生徒の研究内容の水準、発表に当たってのプレゼンテーション技術、研究成果要旨の表現方法・体裁等、全ての面において第 13 回大会と比較して質的に向上しており、審査委員の学識経験者からも高い評価を得た。

詳細報告は別稿に譲り、以下に入賞校を紹介する。

- 最優秀賞 総合工科高校  
「マイクロライントレースロボットの開発」
- 優秀賞 多摩工業高校  
「挑み続けることの意味・ロボット・リベンジ」
- 優秀賞 六郷工科高校  
「学校行事カウントダウンタイマーの製作」
- 優秀賞 北豊島工業高校  
「省エネカーを用いたエコタイヤの研究」
- 優秀賞 府中工業高校  
「燃費競技大会に向けてのエコマイレージカーの製作」
- 特別賞 多摩科学技術高校  
「ロボットの研究～六足歩行ロボットの製作」
- 特別賞 荒川工業高校  
「文部科学省 ICT スクール 2009 に参加して」
- 特別賞 大森学園高校  
「シャボン玉発生器の製作」
- 東京都産業教育振興会賞 蔵前工業高校  
「ものづくりコンテストへの挑戦」
- 東京都産業教育振興会賞（ポスター発表）  
「雨水発電機の研究」多摩科学技術高校
- 東京都立工業高等学校
- PTA 連合会理事長賞 足立工業高校  
「地域貢献するものづくりボランティア活動」

以上の 12 発表が入賞した。入賞を逃した発表には努力賞が贈られた。

来年度は、工業高校以外の副校長にも是非御覧頂きたい。

### (3) 研修活動について

都教委から、平成 23 年度以降、新たに東京版デュアルシステムを導入する都立工業高校 4 校の発表もあり、東京版デュアルシステム制度が求められた背景及び東京版デュアルシステム制度そのものの理解に焦点をあて理解を深める研修を実施した。

#### <研修の目的>

都立工業高等学校副校長としての資質・能力の向上を図り、創造的な教育課程の開発及び編成・管理能力の育成に資する。

具体的には以下に示す 2 点を目的とする。

東京版デュアルシステムのモデルとなった、ドイツにおける職業教育制度デュアルシステムについての理解を深める。平成 23 年度以降デュアルシステム導入予定 4 校及び全ての工業高校に対する、東京版デュアルシステムを取り入れ教育課程の開発及び編成に資する。

#### <研修の方法・内容>

##### ① 第 4 回定例会研修（9 月 14 日）

研修主題「東京版デュアルシステムの成果と課題」

講師：佐々木哲（六郷工科高校デュ副校長）

##### ② 第 7 回定例会研修（12 月 10 日）

研修主題「ドイツにおける職業教育制度デュアルシステムの現状と課題」

講師：坂野慎二（玉川大学教職大学院教授）

### (4) 研究活動について

研究組織は例年通り 3 つの部会で、工業の特色を生かし、日常の学校経営や教育活動に資する研究テーマで取り組み、実践に生かせる成果と次年度に向けての課題を示した。

#### ① 工業教育研究部会

##### 【研究テーマ】

「ものづくり人材育成プログラム事業への取り組みと ICT 活用状況について」

##### 【成果】

・ものづくり人材育成プログラム事業の取り組み状況と課題を明らかにした。

・ITC 活用の現状を明らかにした。

#### 【課題】

- ・大学との日程調整等及びこの事業についてより一層の有効活用を図る。
- ・旅費システム等の稼働時間の改善

#### ② 管理運営研究部会

##### 【研究テーマ】

「都立工業高校における学校運営連絡協議会の現状と課題」

##### 【成果】

- ・都立高校 150 校の報告書の分析を通じ、工業高校の 6 つの課題を明らかにした。

##### 【課題】

- ・学校運営連絡協議会が形式だけの制度とならないよう、組織的対応や経営評価を行うなど、各学校に適応した組織・運営に改革していく必要がある。

#### ③ 生徒指導研究部会

##### 【研究テーマ】

「都立工業高校における生活指導の実態と課題」

##### 【成果】

- ・工業高校で厳しい対応を求められる精神的課題を持つ生徒の実態と対応の問題点を明らかにした。

##### 【課題】

- ・SC の配置や外部機関との相談機能の拡充が必要である。

### (5) おわりに

来年度は本研修研究の成果を基に各工業高校の使命を全うするべく新体制で臨む。

常任幹事 佐々木 哲（六郷工科デュ）記



## 2. 商業科副校長会

東京都商業関係高等学校副校長会は、会員校13校13名で構成されている。商業関係の都立高等学校は商業高校9校、ビジネスコミュニケーション科2校、普通科併設校1校、産業科（ビジネス情報分野）1校である。

商業関係高等学校副校長連絡会には都教委より統括指導主事および指導主事の参加をいただき、学校経営支援センター別副校長連絡会当日の午前中に全商会館（全国商業高等学校協会）を定例会場として実施している。

定例会では、都教委からの連絡・報告、研究協議、情報交換等を行い、商業関係高校の活性化の方策や学校運営について研究を行っている。

今年度の活動実績は、次のとおりである。

### 第1回定例会 全商会館

平成22年5月13日(木) 10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡

- ・教育庁指導部高等学校教育指導課より

平成22年3月末進路状況について

- ・教職員研修センターより

(2) 幹事会報告

(3) 東京都商業教育研究会

総会 6/25(金) 15:30～17:00 芝商業

(4) 情報交換会等

- ・平成22年度活動方針、年間計画

- ・東京都商業高等学校連盟の会費納入について

### 第2回定例会 全商会館

平成22年6月15日(火) 10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡

- ・教育庁指導部高等学校教育指導課より

- ・教職員研修センターより

商業高校ネットワーク連絡会

7月2日(金) 第四商業

(2) 幹事会報告

(3) 東京都商業教育研究会

- ・6月25日(金) 都商研総会・研究協議会

(4) 情報交換会等

- ・商業高校生徒による販売実習について

- ・登校許可の時間等について

・積立金等について

### 第3回定例会 全商会館

平成22年7月13日(火) 10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡

- ・教育庁指導部高等学校教育指導課より

専門高校等学習成果発表会について

→今年度開催なし

- ・教職員研修センターより

東京都教育実践発表会について

10月1日(金) 教職員研修センター

(2) 幹事会報告

- ・都立高等学校副校長研究協議会について

8月24日(火) 教職員研修センター

(3) 東京都商業教育研究会

- ・都立商業高等学校教務主任会議

8月31日(火) 第四商業

(4) 情報交換会等

- ・商業高校生徒による販売実習について

- ・各校の企業からの求人状況について

- ・個人情報の管理方法について

### 第4回定例会 全商会館

平成22年10月12日(火) 10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡

- ・教育庁指導部高等学校教育指導課より

- ・教職員研修センターより

(2) 幹事会報告

(3) 東京都商業教育研究会

- ・全国産業教育フェアについて（つくば市）

10月16日(土) 荒川商業が参加

- ・全商英語スピーチコンテスト

10月16日(土) 江東商業

- ・都立商業高等学校生活指導主任会議

10月22日(金) 芝商業

(4) 情報交換会等

- ・カリキュラム編成について

- ・各校の進路状況（就職状況）について

- ・東京都公立商業高等学校文化交流会について

### 第5回定例会 全商会館

平成22年11月16日(火) 10:00～

(1) 東京都教育委員会からの連絡

- ・教育庁指導部高等学校教育指導課より

- ・教職員研修センターより
- (2) 幹事会報告
- (3) 東京都商業教育研究会
  - ・都立商業高等学校進路指導主任会議  
12月17日(金) 第三商業
  - ・都商研「広告研修会」12月9日(木)
- (4) 情報交換会等
  - ・学校説明会の状況について
  - ・新教育課程編成の取り組み状況について
  - ・情報セキュリティおよび管理運営規則について

#### 第6回定例会 全商會館

- 平成22年12月10日(金) 10:00～
- (1) 東京都教育委員会からの連絡
    - ・教育庁指導部高等学校教育指導課より
    - ・教職員研修センターより
  - (2) 幹事会報告
  - (3) 東京都商業教育研究会
  - (4) 情報交換会等
    - ・進路状況について
    - ・推薦入試の応募状況と学校説明会等の取り組みについて
    - ・情報セキュリティ、個人情報保護に向けて
    - ・校内PC等の廃棄等について

#### 第7回定例会 多摩社会教育会館

- 平成23年1月18日(火) 9:00～
- (1) 東京都教育委員会からの連絡
    - ・教育庁指導部高等学校教育指導課より
  - (2) 幹事会報告
  - (3) 東京都商業教育研究会
  - (4) 情報交換会等
    - ・新学習指導要領の各校取り組みについて
    - ・TAIMSのデータ共有について

#### 第8回定例会 全商會館

- 平成23年2月17日(木) 10:00～
- (1) 東京都教育委員会からの連絡
    - ・教育庁指導部高等学校教育指導課より
    - ・教職員研修センターより
  - (2) 幹事会報告
  - (3) 東京都商業教育研究会
  - (4) 情報交換会等
    - ・情報セキュリティ、個人情報保護に向けて

- ・校内PC等の廃棄等について
- ・入試応募状況と今後の取り組みについて

#### 第9回定例会 全商會館

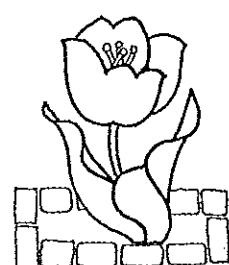
- 平成23年3月17日(木) 10:00～
- (1) 東京都教育委員会からの連絡
  - ・教育庁指導部高等学校教育指導課より
  - ・教職員研修センターより
  - (2) 幹事会報告
  - (3) 東京都商業教育研究会
  - (4) 情報交換会等
    - ・商業高校の活性化について

日本経済回復の兆しがはつきり見えない中、平成22年度も引き続き、四年制大学卒業生の就職状況が非常に厳しい。就業構造の変化や地方から東京への就職希望の増加傾向もあり、都立商業高校生の就職についても厳しい状況が続いている。

このような状況において、商業高校の真価が問われており、特に東京の商業教育をいかに活性化し、発展させていくかが課題である。東京都商業関係高等学校副校長会では、一層充実した就職や進学に向け、情報交換や情報共有をしている。

新学習指導要領の実施に向けて、特色ある教育課程を編成し、今後とも魅力のある商業高校を目指し、学校運営に取り組んでいきたい。東京都商業関係高等学校副校長会が中心となり、見える形で広く中学生に商業高校の良さをアピールしていきたいと考えている。

常任幹事 岡本 裕之（第一商業）記



### 3. 農業科副校長会

東京都農業関係高等学校副校長会は、都教委より平抑指導主事の参加をいただき、会員学校数9校、15名のメンバーで、支援センター別副校長連絡会当日の午前中に都立農芸高校を会場として実施している。

定例会では、都教委からの連絡、各部署からの連絡・報告、情報交換、連携事業などの調整等を行い、農業教育の推進と一層の活性化を目指している。

#### 第1回定例会

日時 平成22年5月13日(木)9:30~11:00  
会場 都立農芸高校  
内容(1) 指導部高等学校教育指導課より  
(2) 幹事会報告  
(3) 平成22年度役割分担  
(4) 全国農業高等学校長協会総会係業務  
(5) 都庁花壇植栽、都農研、都農業クラブ連盟  
(6) 情報交換  
ICT、授業観察、自己申告書、eラーニングなど

#### 第2回定例会

日時 平成22年6月15日(火)9:30~11:00  
会場 都立農芸高校  
内容(1) 指導部高等学校教育指導課より  
(2) 幹事会報告  
(3) 都庁花壇植栽  
(4) 農場主任会議  
(5) 東京都農業祭  
(6) 全国農業高校収穫祭  
(7) 三宅島緑化プロジェクト  
(8) 都農研、農業クラブ関東大会  
(9) 情報交換  
口蹄疫への対応、交通安全指導、梅ウイルスへの対応、授業観察、自己申告書、旅費申請システムなど

#### 第3回定例会

日時 平成22年7月13日(火)9:30~11:00  
会場 都立農芸高校  
内容(1) 指導部高等学校教育指導課より  
(2) 幹事会報告

- (3) 農場主任会議
- (4) 東京都教育実践発表会
- (5) 東京都農業祭
- (6) 全国農業高校収穫祭
- (7) 都農研、農業クラブ関東大会
- (8) 情報交換 ICT研修、FogosPROなど

#### 第4回定例会

日時 平成22年9月14日(火)9:00~9:20  
会場 多摩社会教育会館304研修室  
内容(1) 指導部高等学校教育指導課より  
(2) 幹事会報告  
(3) 東京都教育実践発表会  
(4) 第61回関東甲静地区農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会  
(5) 東京都農業祭  
(6) 全国農業高校収穫祭  
(7) 情報交換 各校から報告

#### 第5回定例会

日時 平成22年10月12日(火)9:30~11:00  
会場 都立農芸高校  
内容(1) 指導部高等学校教育指導課より  
(2) 幹事会報告  
(3) 東京都教育実践発表会報告  
(4) 東京都農業祭  
(5) 全国農業高校収穫祭  
(6) 三宅島緑化プロジェクト  
(7) 都農研、農業クラブ都連盟  
(8) 情報交換  
授業観察、職務面接、学校行事、入学選抜に関する調査、平成23年度体力テストの実施など

#### 第6回定例会

日時 平成22年11月16日(火)9:30~11:00  
会場 都立農芸高校  
内容(1) 指導部高等学校教育指導課より  
(2) 幹事会報告  
(3) 東京都農業祭報告  
(4) 全国農業高校収穫祭  
(5) 三宅島緑化プロジェクト  
(6) 専門高校学習成果発表事業(仮称)  
(7) 都農研、農業クラブ都連盟  
(8) 第62回関東甲静地区農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会  
(9) 情報交換  
文化祭、新学習指導要領への対応、

ICT 研修及び活用状況など

#### 第7回定例会

日時 平成 22 年 12 月 10 日(金) 9:30~11:00

会場 都立農芸高校

内容(1) 指導部高等学校教育指導課より

- (2) 幹事会報告
- (3) 都農研総会・研究協議会
- (4) 全国農業高校収穫祭報告
- (5) 三宅島緑化プロジェクト報告
- (6) 目指せスペシャリスト！ in 虎ノ門  
～専門高校生による成果発表～報告
- (7) 農業クラブ都連盟
- (8) 「ものづくり立国・日本」次世代フェス
- (9) 情報交換  
「個人情報事故紛失再発防止対策について」、鳥インフルエンザ対応、平成 23 年度年間行事予定など

#### 第8回定例会

日時 平成 23 年 1 月 18 日(金) 9:00~9:50

会場 多摩社会教育会館 302 研修室

内容(1) 指導部高等学校教育指導課より

- (2) 幹事会報告
- (3) 都農研総会・研究協議会
- (4) 教育研究事業
- (5) 農業クラブ都連盟
- (6) 「ものづくり立国・日本」次世代フェス
- (7) 情報交換  
実習助手等の TAIMS 個人端末配置についてなど

#### 第9回定例会

日時 平成 23 年 2 月 17 日(木) 9:30~11:00

会場 都立農芸高校

内容(1) 指導部高等学校教育指導課より

- (2) 幹事会報告
- (3) 平成 23 年度係分担
- (4) 都農研総会・研究協議会
- (5) 農業クラブ都連盟
- (6) 都庁花壇植栽
- (7) 情報交換

#### 第10回定例会

日時 平成 23 年 3 月 17 日(木) 9:30~11:00

会場 都立農芸高校

内容(1) 指導部高等学校教育指導課より

(2) 幹事会報告

(3) 平成 23 年度係分担

(4) 都農研総会・研究協議会

(5) 農業クラブ都連盟

(6) 都庁花壇植栽

(7) 農場主任会議

(8) 情報交換

農業科副校長会では、各校が連携して都教委の事業や文科省、農業関連団体等の外部団体との連携事業に取り組んでいる。今年度も「東京都教育実践発表会」10 月 1 日、「東京都農業祭」11 月 2・3 日、「全国農業高校収穫祭」11 月 20・21 日、「目指せスペシャリスト！ in 虎ノ門～専門高校生による成果発表～」11 月 24・25 日、「ものづくり立国・日本 次世代フェス」1 月 15・16 日などで東京都の農業教育の内容について発表した。

#### 平成 22 年度東京都教育実践発表会

本年度の東京都教育実践発表会は、下記の内容で実施された。

- 1 日時 平成 22 年 10 月 1 日(金)午前 9 時から 午後 5 時まで
- 2 場所 東京都教職員研修センター
- 3 内容 (1) 特色ある教育活動  
(2) 優れた教育実践



農業系高校の展示の様子

平成 25 年度実施学習指導要領に対応した教育課程の編成が進む中、今後もスペシャリストの育成、特色ある学校づくり、地域と連携した学校運営などをとおして農業の担い手育成を目指して今後の活動を続けていきたい。

常任幹事 小堀 紀明（農産）記

## 6. 研究部会報告

### 1. 管理運営研究部会

#### 第1委員会（学校管理関係）

##### 1 はじめに

東京都では、主任教諭が導入されて3年目を迎える、今年度から経過措置が終了し、選考も指定された受験会場において出題された課題について記述する形となった。

主任教諭は、いわゆる「団塊の世代」の大量退職により、若手教員が急速に増加するなかで、学校内の双方向・組織的なコミュニケーションの向上を図り、若手教員の育成を職務として担うことが期待され、導入された。そのため、主任教諭には①学習指導力、②生活指導力・進路指導力、③外部との連携・折衝力、④学校運営力・組織貢献力等が期待されている。

各学校では、導入以来、主任教諭がその指導的職責を果たせるように、主任教諭一人ひとりに役割を割り当てる等様々な工夫が行われた。しかし、導入初年度は、意識のうえでも、実際に指導的役割を發揮しているかという面でも課題が挙げられた。そこで、アンケート調査を通して、導入2年目の各校における主任教諭の活用状況の実態を明らかにし、新たな職として、組織に位置付け、管理運営面から、機能させていく上でどのような課題があり、また、その解決に向けて、どのような方策があるかについて考察した。

##### 2 研究の経緯

毎月の副校長連絡会での協議内容や報告等について以下とおりである。

###### (1) 第1回

平成22年4月20日(火) 多摩社教

○研究テーマの確認と前年度までに回収したアンケートについて、追加アンケート依頼

###### (2) 第2回

平成22年5月13日(木) 武蔵高校

○追加アンケート依頼、経過報告

###### (3) 第3回

平成22年6月15日(火) 上水高校

○アンケートのまとめ、一部分析報告

###### (4) 第4回

平成22年7月13日(火) 多摩社教

○副校長研究協議会での発表準備

###### (5) 第5回

平成22年8月24日(火) 教職員研修センター

○副校長研究協議会で成果を発表

###### (6) 第6回

平成22年9月14日(火) 多摩社教

○副校長研究協議会での発表の報告

###### (7) 第7回

平成22年10月12日(火) 秋留台高校

○ 全国大会での発表に向けて

###### (8) 第8回

平成22年11月16日(火) 青峰学園

○ アンケートの規模、依頼について

###### (9) 第9回

平成22年12月10日(金) 久留米西高校

○全都へのアンケート再依頼

###### (10) 第10回

平成23年1月18日(火) 多摩社教

○アンケートの集まり具合報告

###### (11) 第11回

平成23年2月17日(木) 田無工業高校

○アンケートの分析に向けて

### 3 アンケート集計からみえること

#### (1) 主任教諭の割合

平成21年度は9校から、平成22年度は17校からアンケートの回答を得た。それらの学校の主任教諭の割合を示すと、平成21年度の平均は、37%、平成22年度は38%であり、アンケートに回答していただいた学校の平均的な主任教諭の割合は4割弱である。

#### (2) 主任教諭の年齢構成

17校のアンケートの集計数全体でみると、主任教諭の数は、平成21年度は60歳以上が3.0%、50歳代が41.0%、40歳代が44.0%、30歳代が12.0%。平成22年度は、60歳以上が0.9%、50歳代が32.0%、40歳代が57.0%、30歳代が10.1%と、50歳代が9.0ポイント減り、40歳代が13.0ポイント増えている。

### (3) 平成 21 年度・平成 22 年度の活用状況

平成 21 年度も平成 22 年度も「独自の取組を行っているか」という問にはそれぞれ 2 校、3 校が「行っている」と回答している。

- ① 職員会議の記録を主任教諭が担当している。
- ② 教科主任を任命している。
- ③ 主幹教諭以外の分掌主任・副主任、教科主任、年次付の教科担当の委任、研究校・振興事業の責任者等 1 人 1 役を付ける。
- ④ 主幹教諭を核にしたブロックをつくり、学校運営上の重要課題の分担をしている。
- ⑤ 2 年、10 年次研修者の指導育成に学年、分掌担当で 1 名、教科指導で 1 名役割を委任している、等である。特に行っていないという回答もあった。分掌主任以外の主任教諭への役割の委任では、平成 22 年度は、実施していると回答した学校が 9 ポイント増加した。

### (4) 初年度及び今年度の課題

#### <平成 21 年度>

- ① 具体的な役割分担ができず、校内での OJT 体制や主任教諭の役割分担の明確化が必要。
- ② 主任教諭全員に役割を委任することが難しい。
- ③ その職務内容を十分踏まえて意識をもって仕事ができていない人がいる。職としての主任教諭の意識をもたせることが必要。
- ④ リーダーシップを発揮していくための環境整備が必要。
- ⑤ 受験者を増やす。

#### <平成 22 年度>

- ① 進行管理が不十分。
- ② 十分な職責を果たしていない。教員の意識の改革が必要。
- ③ 主任教諭の人数が多いと職層に応じた役割分担が難しい。
- ④ 職員団体の反発が強い。等

主任教諭全員への役割の委任ができていないという管理面からの課題（平成 21 年 100%・平成 22 年 47%）と、主任教諭としての意識が低いという教員の課題（平成 21 年 100%、平成 22 年 30%）がある。

### (5) 今後主任教諭を活用していきたい場面

- ① 各分掌や委員会またはプロジェクトチームの主任または副主任として位置付け、取り組む仕事の当事者となって組織の中で主任教諭

としての職務を発揮する場面を設定する

- ② 教科主任に指名。
- ③ 将来構想委員会、研究協議会、主任教諭による研究授業の担当者。
- ④ 学校説明会、出前授業などへの学校 PR 活動の担当者。
- ⑤ 校内研修のまとめ役。
- ⑥ 分掌業務や OJT 等でリードオフマンとしての役割を果たさせる。
- ⑦ 自己申告の面接等で意識を確認する。
- ⑧ 年間に主幹教諭や副校長等の仕事及び校内の課題の解決のために、いくつのサポートをするか、また、できたかを自己申告時に申告させ、業績評価とも連動させて主任教諭としての意欲を高める。
- ⑨ 人数の少ない定時制では、各種研修に全日制と同教動員されるのは非常につらい。

### (6) 新たな主任教諭の発掘法

- ① 日常の勤務の様子を見て、自己申告の面接で意思を確認し、受験を勧める。
- ② 日頃の言動を観察する。
- ③ 有資格者名簿を基に個別に働きかける。
- ④ 主幹教諭や主任教諭から人材育成の観点から声を掛ける。
- ⑤ 他の学校の主任教諭の活躍などを伝え、意識を高めさせる。
- ⑥ 中期的計画に基づき、受験時期が近づくとプロジェクトチーム等、重要な職務につかせ自覚を促す。
- ⑦ 人材発掘は、きわめて厳しい状況にある。

## 4 まとめ

主任教諭任用 2 年目の活用状況は、1 年目に比べ多くの学校で、委員会・教科の主任・副主任、若手研修の指導教員、校内研修の講師や推進者養成研修受講者をはじめ、広報・調査回答作成の補佐、学力向上の助言者、OJT の推進者等、主任教諭の職務に該当する役割分担が行われている一方で、任用される人数が多いことで職責に基づいた役割分担が組織上難しい等の課題がある。また、全体の 6 割が、現状は主任教諭としての意識が低いと回答しており、その意識を高めていくことも大きな課題である。

組織のなかで新たな職として位置付けていくには、校務上の職務分担を明確にすることが必

要である。また、主任教諭としての意識化を図るには、自己申告・業績評価と連動していくことが効果的な方策として挙げられ、これは、新たな主任教諭の発掘にもつながる。

主任教諭を新たな職として教職員に理解させ、定着をさせていく上で、副校长の役割は大きい。今回のアンケート結果をヒントに、更にその活用状況について情報交換を行い、各校副校长が相互に連携を図って、新たな職を組織の機能の中に定着させていくことが求められている。

ご多用の中、回答を送付くださった皆様にお礼を申し上げます。なお、1月までの再依頼には、88通のアンケートが集まりました。ご協力ありがとうございました。

委員長 遠山裕之（青梅総合）記



## 第2委員会（職務、待遇関係）

### 1 はじめに

本委員会は5年前、「副校长の職務」一副校長の職務実態と能率化の工夫について一という調査研究を行い、副校长の職務実態を20項目にわたりて調査、分析している。今回は、この調査と比較することによって、副校长の勤務実態の変化を見るとともに、効率化の工夫について分析、考察した。

今回の調査では、全日制179校の都立高等学校副校长を対象として、メールによる一斉送信によりアンケートを依頼し、81名から回答を得た。(回答率45.3%)

### 2 副校長の業務は増加している

「一年前と比較して、仕事の量は増えたか」という質問に対して、85.2%の副校长が肯定的答ををしている。副校长の業務は確実に増加している。出勤時間は、午前7時20分以前の副校长が前回16.5%から今回34.6%と倍増し、全体の3分の1を超えている。勤務の早朝化が進んでいる。退勤時間も午後6時30分より前に退勤する副校长がほとんどおらず、午後8時以降に退勤する副校长が9.6ポイント増加して、40%を超えている。勤務時間は、12時間以上勤務している副校长が7.5ポイント増加して53.1%となり、半数を超えている。

土・日曜日の出校日数(月あたり)も増加傾向にある。月4回以上の者が46.9%に達しており、半数弱がほぼ毎週、土曜日か日曜日のいずれかに出校していると推定できる。土・日曜日の仕事内容は、PTA関係と残務整理が60%を超えていて圧倒的に多い。地域行事への参加も13.4ポイント増加し、40%を越えている。また、土曜授業をあげる副校长が34.6%いる。土曜日の学習活動が定着してきているとともに、平日に入りきらない様々な業務が土・日曜日にあふれ出している実態が分かる。

では、出校により変更した週休日は休めているのか。結果は、91.9%が「すべては休めない」という実態であった。週休日の出校の理由として「残務整理」が60%を超えていることを考えれば、変更後の週休日をとることができない実態も理解できる。

これまでの調査結果から平均的な副校长の週当たりの勤務時間を計算すると62時間53分になる。前回調査に比べ1時間43分長くなっている。

### 3 教員の意識を変える

教員に仕事を割り振ろうとすると何が障害となるのか。教員の意識が問題である。新しいことに取り組みたがらない前例踏襲意識、自分の仕事を勝手に決めてしまう業務範囲の固い込み等、教員の良くない特性が数多く指摘されている。また、文書が書けないことや事務的作業ができないこと等、教員の基本的なスキルの欠如もあげられた。そのため、説明に手間がかかり、かえって自分でやったほうが早く感じられることが多い。他には、分担が明確でない業務等もあげられている。新規業務など、分掌や委員会に位置付けられていない業務が副校长の業務となってしまうことがある。

学校運営の中心的存在である主幹教諭について、「副校长の仕事をよく理解し手伝うか」という問い合わせには、肯定的な回答が7.3ポイント増加して70%を超えている。主幹教諭が定着し、活躍している状況がうかがえる。主任教諭については「職務を理解し主幹教諭を補佐しているか」という問い合わせに対して、肯定的な回答は43.2%であった。主任教諭に職務を理解させ、組織的学校運営に参画させることが課題である。

### 4 人材育成を進める

上記のように、教員の意識を変え、積極的に能力開発を進めていく必要がある。学校運営に参画し、自ら考え、周囲と協調して自ら行動できる人材の育成が急務である。そこで、「人材育成は順調に進んでいるか」という問い合わせ新たに設けたところ、肯定的回答は約6割(59.2%)、否定的回答は約4割(40.7%)であった。人材育成については、まだ道半ばの状態であることがわかった。

人材育成の工夫について、最も多かったのはコミュニケーションである。あいさつをはじめとして、声をかけたり、日頃から意図的に時間をとて教員と話したり、特に意欲のある教員との意思疎通を大切にすることがあげられた。また、業務を通じて指導・助言し、良いところ

を積極的にほめる、仕事の割り振りや目標設定を工夫するなどもあげられている。

この調査全体を通して感じることは、若手への期待である。若手教員に働きかけ、将来の有能な教員を育成することに希望を見出す副校長が多かった。また、印象的な意見として、「副校長が元気な後ろ姿を見せること」というものがあった。人材育成の中心となる副校長が、生き生きと職務を行う姿を示したいものである。

## 5 ICT化を推進する

昨年度より本格的にTAIMSや校内ICTが導入された。ICTに対しては、業務改善や授業改善を期待する声がある一方、批判的・否定的意見が数多く存在する。

ICTに期待する声では、年休処理、旅行命令等の手続きの効率化、電子起案、教員への連絡の効率化などがあげられている。ICT機器を利用した授業改善により、生徒の興味・関心を高めることや教材の工夫、授業力向上が期待されている。また、「定着するまでかえって仕事が増える」「使い勝手が悪い」「個人情報の管理が難しくなる」など批判的・否定的意見もあるが、旅行命令などはすでに実現しており、電子決済も使い方によっては大変に便利である。ノーツにもまだ使っていない機能が数多くある。ICTを活用した業務の効率化には大きな可能性がある。

ICTは、まだ教育現場への浸透が十分とは言えず、教員間のスキル差も大きい。今が過渡期であるとすれば、10年後にはICTによる業務が当たり前のことになり、業務全体がTAIMSやICTネットワークなしには進まなくなる時代が必ず来る。今すぐには実現できないことであっても、5年後、10年後には十分に実現される可能性がある。今ある機能を最大限活用し、さらにこういう機能があれば便利である、助かるというアイデアを副校長研究協議会として積極的に考えて行く必要がある。

## 6 効率化の工夫

副校長はこの忙しさを解消するためにどうすればよいのか。「業務を割り振る」「仕事に優先順位をつける」「即実行、仕事を後回しにしない」など前向きな意見が数多くあげられた。また、

「工夫は不可能、できない」というあきらめの声もある。若い副校長への仕事の進め方の具体的なアドバイスとしては、

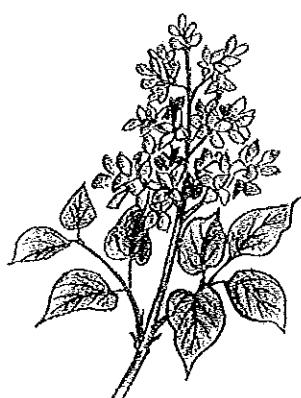
- 一度で高い完成度を求めず、段階ごとに質を高めていく。完璧を期すより、最善を尽くす。
- 何事も勉強。学校を好きになり楽しみを見つける。
- 教員の相談ごとには、どんなに忙しくとも親身になって聞く姿勢をもつ。
- 身を削ってまで仕事をしない。抜ける手は抜く。

などがあげられた。分らないことは聞く、頑張り過ぎない、孤立しない、必要以上に悩まず深く考えないなど、心身の健康を第一に考えることが大切である。

## 7 おわりに

現在、都立高校改革は総仕上げの時期であり、「鍋蓋型組織」から「ピラミッド型組織」への移行、民間より遅れているICT化進行などは急務である。その中で、様々な施策によって副校長の業務量もピークに達している。現在の状況は多忙すぎるものであり、本来の教育活動にゆとりをもって当たることが困難になっている。業務を効率化し、副校長がその力をよりよく發揮することが、これからのが都立高校の発展には欠かせない。今後、教育行政と教育現場との意思疎通をますます円滑にし、魅力ある副校長像を実現する必要がある。

委員長 伊達崎 広（総合芸術）記



## 2. 高校教育研究部会

### 第1委員会（教育課程）

#### 1 はじめに

平成25年度から実施の新教育課程への対応について考察を行うこととし、平成22年6月に全日制担当副校長にアンケートを実施した。

#### 2 アンケート項目について

##### (1) 教育課程委員会の設置について

##### (2) 現教育課程について

①日本史必修化

②週当たり授業数

③国数英の単位数

④選択枠と卒業単位数

##### (3) 新教育課程について

①新課程の理科で総合科目を履修させるか

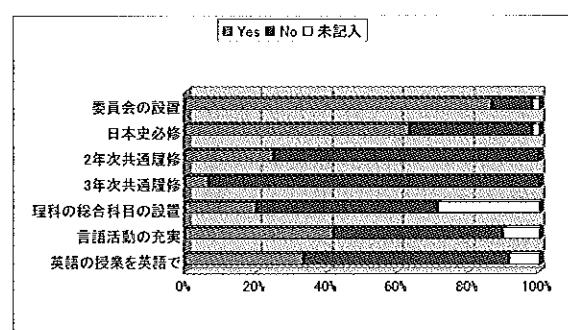
②言語活動の充実

③英語の授業を英語で行うこと

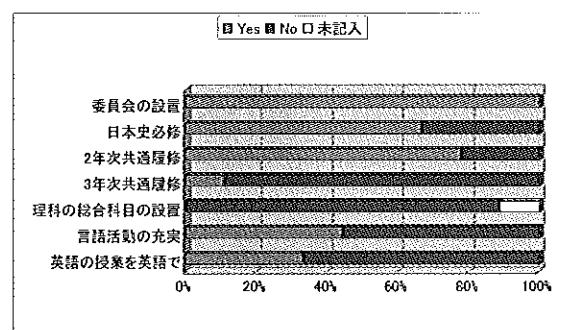
#### 3 集計結果とその考察

60校から回答があり、集計した。

##### (1) 全体の集計結果



##### (2) 進学重点校等



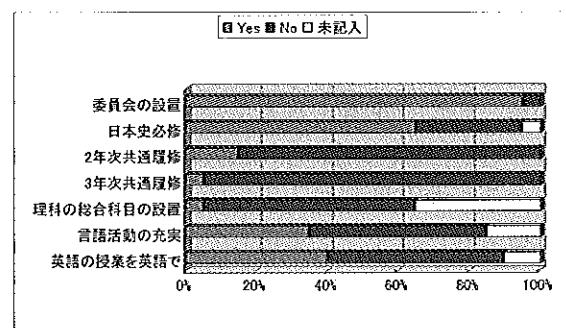
- ・2年次共通履修の学校が多い。
- ・理科では総合科目を設置しない
- ・週当たり授業数は31時間以上
- ・国数英の単位数合計の平均が2年次16.1、

3年次15.4である。

各校の課題は次のとおりである。

- ・進学実績の向上
- ・主要教科の単位数増
- ・国公立大学の入試科目
- ・自由選択の選択枠
- ・習熟度別授業の展開について
- ・総合の内容について
- ・奉仕の内容について
- ・土曜日授業の試行に伴う時間数
- ・センター試験に対応した「公民」科・科目の置き方
- ・進学指導重点校として責任を果たす教育課程のあり方
- ・7時間目の設置

##### (3) 普通科で1年次国数英14時間以上の高校 (進学重点校等を除く)



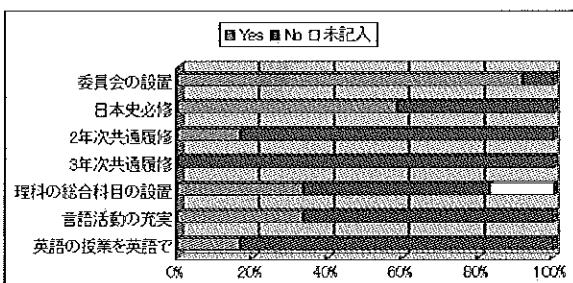
- ・2年次共通履修の学校が少ない
- ・未定が多いが、ほとんどが理科の総合科目を設置しない。
- ・国数英の単位数合計の平均が2年次14.8、3年次11.4である。
- ・「英語の授業を英語で行う」が4つのグループの中では一番多い。
- ・土曜授業を行い、週当たりの授業時間数を確保したいという学校が何校かある。

各校の課題は次のとおりである。

- ・数名の教員のみ意識が高く、ほとんどが看板の付け替えで（科目名の変更）済まそうとする傾向があり、育てたい生徒像の議論を進める風土なし。
- ・教務主幹のリーダーシップがない。学習指導要領の改訂の意義がわかっていない。
- ・教科書選定とのリンクは理解しているが、ぎりぎりにならないと動き出さない伝統がどっしおと根を張っている。

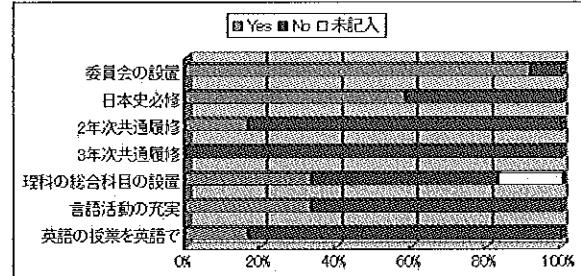
- ・教育課程や科目名を変えたところで、授業の内容は従前のままである。学習指導要領や解説を配付しても、新たな教科・科目について研修している様子は見られない。
- ・教育課程の面から捉える学校の特色化
- ・学力の向上と生徒の学習時間の低下
- ・土曜授業の実施
- ・総合的な学習の時間の履修単位数
- ・平成24年度からの理科、数学の先行実施と日本史の必修化にどう対応するか
- ・平成25年度からの新教育課程は検討中
- ・進学を念頭においているのに、基礎基本の徹底が中心となっており、全体の共通理解ができていない。今年度の教育課程委員会にて検討する。
- ・習熟度別授業の改善
- ・各教科の情報が少ないと（特に英語）
- ・授業時間数確保のため一週間で収まらないなら土曜日を授業日とできないか。
- ・理科の履修について「どこで何をどのくらい？」
- ・英語の履修についてコミュニケーションと英語表現の差は？
- ・3学年の自選の枠について（自選を少なくし、必修選択の枠を増やす）
- ・土曜日授業について（今年度同様、実施する方向で考えている）
- ・理系と文系での日本史のおき方について
- ・新教育課程の編成では、進学対応型の新教育課程の検討、具体的には国公立対応型と私大対応型を作成していくかが課題となる。しかし、来年度から実施可能となる土曜授業の検討が入ってきた。現在、来年度からの土曜授業の実施に向けた検討と新カリキュラムの検討を並行して行わなくてはならない。土曜授業の検討が先行しているというのが実態である。

#### (4) 普通科で1年次国数英13時間以下の高校



- ・「英語の授業を英語で行う」という項目でYesの割合が一番低い。
  - ・いろいろなタイプの学校が入っているため、2年次、3年次の選択枠は0~18時間、0~21時間と差が大きい。
  - ・国数英の単位数合計の平均が2年次11.8、3年次9.2である。
  - ・卒業単位数は74が多い。
- 各校の課題は次のとおりである。
- ・生徒の学力差と進路希望の多様さから来る教育課程の組みづらさ
  - ・第2学年に自由選択を設けるか否か。
  - ・日本史必修化への対応。
  - ・教員の人事（地歴科の専門科目）
  - ・総合学科の教育目標に合った新教育課程のあり方
  - ・現在、23年度入学生の教育課程を検討している。新学習指導要領に関しては、24年度から先行実施の「理科」と「日本史」について、具体的に検討している。他の教科については、これから検討が始まる。

#### (5) 専門高校等



- ・理科の総合科目の設置校が多い。
  - ・言語活動の充実は、4グループの中で一番多い。
  - ・卒業単位数は、74~91までバラツキがある。
- 各校の課題は次のとおりである。
- ・基礎的な学力を確実に定着させること。農業に関する専門的な知識・技術を確実に定着させること
  - ・教科書の早期発行が望まれる。
  - ・教員間の共通理解が難しい。
  - ・舞台表現科、音楽科、美術科の教育課程の見直し
  - ・地歴・公民の置き方
  - ・進学対応など
  - ・工業科の教育課程について
  - ・自由選択科目について

#### 学校外における学習の単位認定について

- ・卒業単位数について
- 選択科目の変更について
- ・総合学科の特徴である多様な選択科目の履修幅を削減しなくてはならない。総合学科としての特徴が出しづらくなる。
- ・本校の特色、生徒の進路希望を考えると、選択も含めて「海洋科」の単位数を 25 とする必要性を感じる。
- ・習熟度別授業の展開について
- 総合的な学習の時間の内容について
- 奉仕の内容について
- ・日本史必修化について
- ・学年での教育課程の編成について
- 先行実施について
- ・2 学年からのクラス編成（成績を考慮したクラスを設けるかという点）

#### 4 まとめ

今回のアンケートは、東京都の新教育課程に向けての各教科説明会が終っていない段階で行ったため、まだ、検討を始めたばかりの学校が多くかった。そのため、現教育課程の分析の部分がほとんどになってしまった。また、母集団が少なかったこともあり、職業科のところは、すべて一緒に集計をしてしまい、分析が不十分であった。このデータ及び各校の課題を参考にして、新教育課程に向けての検討に各校とも入っていただければ幸いである。土曜日授業、日本史必修化、自由選択科目等が各校の課題となっている。2 学期になってから、新教育課程について、もう少し詳細なアンケートを実施したいと考えている。

委員長 斎藤 義弘（農芸）記



## 第2委員会（教育対策）

### 1 研究のねらいと方法

文科省の調査によると「全国大学進学率」の平成19年度は、男子54.9%、女子52.5%、全体で53.7%の高校生が大学に進学している。

社会的背景も大きく影響するが、高校生が大学に進学する目的には、高い学力を獲得する、専門的な知識や技能・技術を習得する、自己実現を図ること等がある。大学に進学し、そこで高等教育を受けるためには、基礎的学力の上に、更なる「学力向上」が求められている。

今回の調査のねらいは、各学校が生徒個々の自己実現を図る上で、生徒や保護者、地域の方からの要望に応え、「学力向上」にどのように取組んでいるかを調査し、その成果や課題を整理することにある。

アンケート調査については、西部学校経営支援センター所管の全日制副校長に依頼し21校の回答をもとに分析・考察を行った。

### 2 アンケート調査項目

各学校の取組みを具体的に回答できるよう質問項目を精選し、分析と考察においては、次の6項目に統合した。

- 「1日の時程」
- 「朝学習の時間」
- 「講習や補習の時間」
- 「土曜授業と週休日の講習や補習」
- 「長期休業日中の講習や補習」
- 「学力向上の取組の成果と課題」

### 3 アンケートの分析と考察

#### (1) 1日の時程と授業時間等について

1日の時程は、多くの学校では、50分授業で6時間(19校)であった。65分授業で5時間(1校)、45分授業で7時間(1校)の学校もあった。

#### (2) 朝学習の時間

A校では、基本的生活習慣の確立を目指す手段として実施している事例があった。また、B校では、進学重点校として、定期考査後の確認講習と位置付け、徹底した復習による学力向上を図る取組みを実施している。学力の定着を図り、進学対応に結び付けている職員集団の意識の高さがうかがえる。

#### (3) 講習や補習の時間

21校中、始業前2校、放課後16校、ほとんどの学校で講習や補習を行っている。教科としては、英数国、理社のほか美術や専門科目である。実施目的については、学力向上、基礎学力の定着、検定試験対策、センター試験対策などである。教養講座として位置づけている学校もある。各校が生徒の実態やニーズに応じて工夫している様子がうかがえる。

担当者については、「担当者（教科）が行う」がほとんどで、「教科が組織的に行う」は2校のみである。「学習クラブ」と称して、生徒が主体的に集まり勉強会を行っている学校もある。

校種によっては、専門科目を入れ資格検定等を取得させ学習意欲の向上を図っている学校もある。また、在籍する生徒の学力幅が大きく、講習や補習の回数も多く設定する学校もある。

#### (4) 土曜授業と週休日の講習や補習

21校の中で、4校が土曜授業及び週休日の講習や補習を実施している。長期休業日の弾力的運用や外部講師任用による講習の実施等の制度の活用等、授業力の向上に取組んでいる。また、教科で組織的に行う、教科担当者や担当学年、外部指導員、生徒同士の学びあい等、各学校の実情に応じた形態が取られている。学校全体で協力しながら組織的に対応する力は弱い。校内での情報交換を通して、生徒や保護者のニーズを理解する必要がある。

#### (5) 長期休業日中の講習や補習

アンケート調査をした全校で実施している。夏季・冬季・春季すべてで実施している学校が8校、夏季・冬季に実施8校、夏季のみ実施5校であった。講座数については、7講座から82講座と学校の実態に応じ幅広く、生徒の進路希望の充実に向け努力している様子がうかがえる。進学校が夏季・冬季・春季すべてで実施しているわけではない。資格検定等の取得と合わせ、学習意欲の向上に向けた取り組みを行う学校も多数ある。

#### (6) 学力向上の取り組みの成果と課題

学力向上の取り組み項目は、朝学習、始業前及び放課後の講習や補習、土曜日授業と週休日の講習や補講をまとめた内容である。

成果としては、模試成績の向上、進路意識の高揚、学習の習慣化、授業全般の意欲の向上、

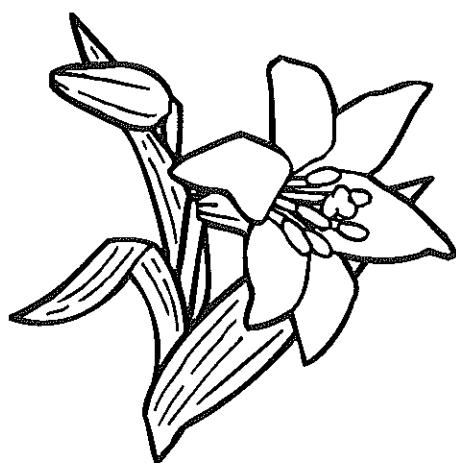
組織全体への波及効果等があげられる。

課題としては、担当する教員個人に負担がかかるケースが多い。また、学校全体で実施しようとする意識が低いなどがあげられる。

#### 4 まとめ

学校の実態に応じ、「学力向上の取り組み」が多様であることがわかった。また、講習や補習は教員の意欲によって支えられていることも明らかになった。副校長の役割として、学校の組織をどのように動かし、取りまとめていくかが課題である。今後も、副校長間の情報交換を密にし、生徒の意欲を高める取り組みを実践していくことが重要である。

委員長 清水 政義（府中工業）記



### 3. 生徒指導研究部会

#### 第1委員会（生活指導・進路指導）

##### 研究テーマ

学校における個人情報の扱いについて

##### 1 はじめに

学校における個人情報の扱いは、多くの新任副校长が頭を悩ませる問題である。昨年度、新型インフルエンザが大流行の兆しを見せ始めたころ、各校では突然の学校閉鎖に備えるため緊急連絡体制の構築が必要になった。しかし多くの学校では、緊急電話連絡網が作成、配布されている状況はなく、それぞれの学校が独自の創意・工夫により対応してきた。

都立高校は今年度から全校一斉に新しいホームページ公開システムを活用した学校ホームページの運用に移行し、コンテンツの更新等もこれまで以上に活発に行われるようになることが期待されている。しかしその反面、生徒の写真等を自校のホームページに掲載するにあたっては、各校とも慎重な判断が求められている。

東京都教育委員会は昨年6月より、東京都青少年の健全な育成に関する条例に示された、インターネット利用に係る都の責任を踏まえ、学校非公式サイト等の監視を委託事業として開始し。これは取りも直さずブログ、プロフやSNSを通じた問題が、どの都立高校にとっても対岸の火事ではない状況になっているということであろう。

今回はこうした状況を踏まえ、学校における個人情報の扱いについて、まず学校としての対応状況を1. 緊急連絡と個人情報の関わりと2. 生徒の個人情報の取り扱いの2点について調査・研究した。そして第3に3. ブログ、プロフやSNSなど個人情報をめぐる諸問題とその対応について調査結果に基づき、この問題に対する具体的な対応策を提言したいと考えた。

##### 2 緊急連絡と個人情報の関わり

情報ネットワークの高度化・複雑化により個人情報の管理責任が学校にもより厳重に求められることとなった。

今回の調査では、緊急連絡網を作成している

学校がほぼ半数だが、全ての家庭が登録しているのはその半数にも満たないという現状が示されている。つまり、この数値は、緊急連絡網という学校文化が保護者の認識の中では損益分岐点に差し掛かっていることを示している。

都立学校情報セキュリティ対策基準では、電子メール等の利用制限について「職員等は都民等外部の複数人に電子メールを送信する場合は必要がある場合を除き、他の送信先の電子メールアドレスが分からないようすること。」となっている。もちろん緊急連絡網は掲載の承諾を得ている電話番号であり、この基準をそのまま適用できないが、本来「bcc」を使用すべきところを「宛先」に入力している状況と同様であることは間違いない。こうしたことから、携帯やインターネットに連絡手段が移行することは、もはや必然と思われる。

しかしそのようなスタイルをとるにせよ、緊急連絡システムは生徒教職員の安全確保と適正な学校運営が目的である。これを見失わないことが肝要であろう。

##### 3 生徒の個人写真の扱いについて

「都立学校情報セキュリティ対策基準」及び「個人情報の安全管理に関するモデル基準」が各校で整備されている。当然、生徒の個人写真も重要な個人情報である。デジタルカメラが主流となっている今日、紙媒体のみならず電子データとしての生徒の個人写真の扱いについては、細心の注意を払わなければならない。個人写真の扱いについては、生徒本人及び保護者にとって大変デリケートなものである。

アンケートの結果から各校での個人写真の扱いについて次のような実態が浮かび上がってきた。

「入学時に一括して」と「使用の度に」を合わせると約46%の学校が文書で許諾をとっている。一方で約41%の学校は口頭による許諾となっている。この調査からだけでは、生徒本人だけに許諾をとっているのか、本人と保護者の両方に許諾をとっているのか明らかではないが、自由記述からは、双方に許諾を得ている様子がうかがえる。また、入学時に一括して許諾を得、更に使用の度に許諾を得ている学校もある。

生徒が撮影した生徒の個人写真については、

50%の学校が「プライバシーの保護の観点から指導」しているが、42%の学校で「特に指導していない」という結果となっている。この問いかからは、今後、情報モラルについての指導を行うとともに、個人情報の扱いについて、生徒にも指導を徹底していく必要があることが浮かび上がってきた。

自校の教育活動の様子を都民に知らせ、開かれた学校づくりを推進していくために、ホームページを充実させていくことが求められている。より具体的に学校を紹介していくためには、生徒の活躍の様子を掲載することも必要となってくる。しかし、個々の生徒及び保護者の人権が損なわれないよう各校で掲載の基準を示し、またそれを守っていかなければならぬ。

写真を掲載する場合、個人が特定できないように顔が見えない向きのものを使用したり、小さく撮ったものに限ったり、顔にぼかしを入れるなどの配慮をするなど、校内基準を作成する必要がある。また、許諾を得る際には、使用する写真を示すと共に、何に使用するのか、見る対象者は誰なのかを明らかにしていくことも大切である。

#### 4 ブログ、プロフや SNS など個人情報をめぐる諸問題とその対応

生徒の個人情報を巡る問題のうちで、学校独自では対応が難しい問題に学校非公式サイト（いわゆる学校裏サイト）やブログ、プロフ、SNSなどを通じた個人情報の漏洩等のトラブルがある。東京都教育委員会が昨年6月より委託事業として行った学校非公式サイト等の監視でも、開始からわずか5か月弱の間に、自身の個人情報の公開が2819件、他人の個人情報の公開が919件も発見されている。

今回行った調査でも以下のようなことが具体的な事例として上がってきた。

「他の生徒の連絡先等を公開した。」

「男子生徒が女子生徒の個人情報を勝手に掲示板に書き込んだ。」

「生徒が自己の個人情報や他の生徒の個人情報（氏名程度）をネット上に載せてしまい、教育庁の業務委託による学校非公式サイト等の監視結果で発見された。」

「個人情報の漏洩（自分のクラス氏名など）が

あった。」

こうした生徒本人の不注意や故意による自己または他者の個人情報のネット上の公開が原因となって、さらに深刻なトラブルや事件・事故につながりかねなかつた危険な事例も何件か報告された。

ネット上で起きているこれらの問題は、学校にとって従前は発見すること自体が困難であったが、昨年の学校非公式サイト監視業務開始以来は、格段に容易になった。今回はこれらネット上で起きる個人情報を巡る問題が発生した場合の学校の対応について考えてみたい。

学校非公式サイト監視業務等により、自校生徒の個人情報がネット上に公開されていることが判明した場合の対応について、まず生徒が自身の個人情報をプロフ等に公開していた場合、そこに非合法な内容が含まれていなければ、生徒に対してネット上での個人情報公開に伴う危険性を周知させる指導が必要である。こうした指導は個々に行うより、セーフティ教室等を通じて生徒全員に指導する機会を設ける方が効果的である。

次に生徒が勝手に他人の個人情報をネット上に公開していることが判明した時、この場合はまず公開した当事者を早期に特定して個別に指導する必要がある。なぜなら多くの場合、ブログ、プロフ等の運営事業者は本人以外からの削除要請を受け入れないので、早期に生徒本人に削除させる必要があるからである。

しかし最も対応が難しいのは、書き込みを行った生徒が特定できない場合であろう。このような場合、例えば内容が悪質な誹謗中傷や悪意による個人情報の漏洩であった場合には、最終的には学校非公式サイト監視業務担当者等と連携しながら警察への通報も視野に入れ、迅速な対応をすることが求められる。

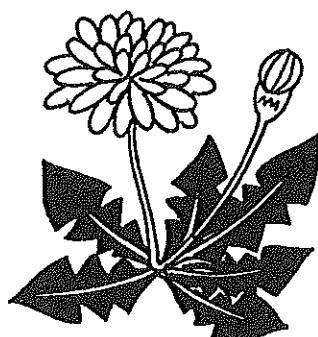
これらネット上の生徒の個人情報を巡るトラブルには、学校は東京都教育委員会や警察等諸機関と連携しながら適切に対応していく必要があるが、その前提となるのは生徒一人一人に対するネットに関する安全教育の充実である。そして個人情報のネット上への漏洩は、重大な人権問題であるという視点に立っての人権教育の視点も忘れてはならない。しかし最善の手を尽くしてもこうしたトラブルを完全に防止する

ことは困難であることも事実である。そうした場合、被害を受けた生徒に対する心のケア等についても十分に配慮する必要がある。

## 5 おわりに

社会では情報化の進展に伴い、個人情報保護の重要性が一層高まっている。学校においても例外ではなく、生徒の個人情報の適切な管理は喫緊の課題である。私たち副校長は校内における生徒の個人情報の管理責任者として、常に校内の隅々まで目配せを怠らず、問題が発生した時には関係諸機関と連携しながら迅速に対応することが求められている。今回の調査で明らかになった事例や各校での具体的な対応例が、各校における生徒の個人情報の適切な管理の参考となれば幸いである。

委員長 藤田 崇正（白鷗附属中）記



## 第2委員会（教科以外の教育指導）

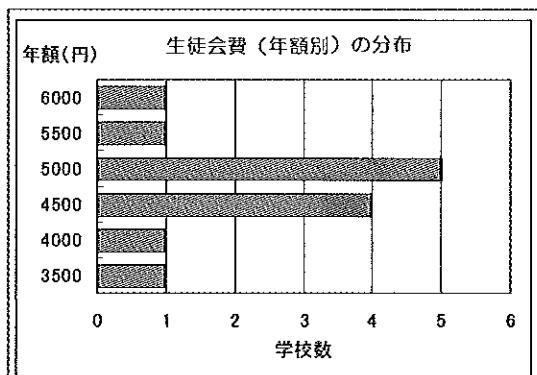
### 1はじめに

本委員会は、「生徒会会計の現状と課題」《生徒会会計における予算編成と執行状況》について研究を行った。研究のねらいは生徒会会計を管理職がどう把握し、生徒会会計が学校経営計画や学校の特色にどうかかわっているか（部活動の位置づけ、予算の部活動への配当比率等）、会計指導を通して、生徒をどのように育成できるかである。現状分析として、アンケート調査を東部C・Dの副校長へ6月に実施した。13校（普通科・総合学科・商業科・工業科）から回答を得た。アンケート項目は以下の9つである。

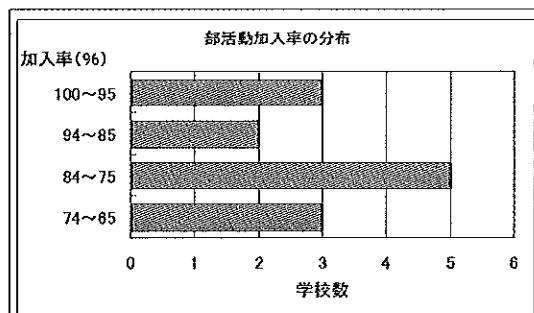
- ①生徒会費にかかる基礎情報
- ②部活動に関する学校全体のスローガンと学校経営計画の部活動に関する記述
- ③部活動の主な成績
- ④予算にしめる部活動と主な行事の割合
- ⑤部活動数と部活動加入率
- ⑥生徒会予算編成の主体
- ⑦生徒会予算編成時の指導
- ⑧予算編成時の副校長の関与
- ⑨生徒会会計の事務を通して生徒にどのような力を育成しているか

### 2 生徒会費と部活動加入率

生徒会費の年額の平均は4762円であった。

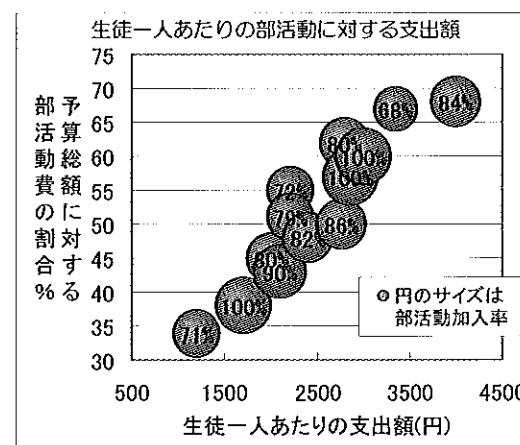


部活動加入率は100%が3校、最低は68%であった。

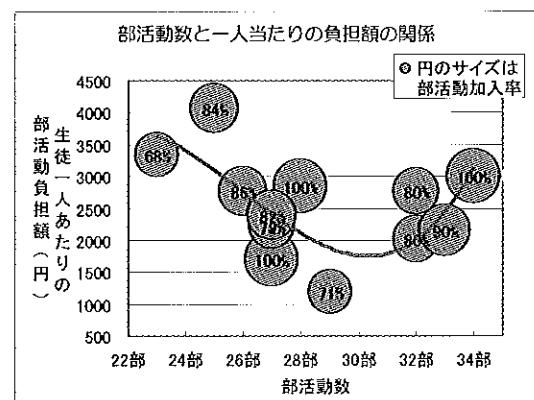


### 3 生徒一人当たりの部活動費支出額の分析

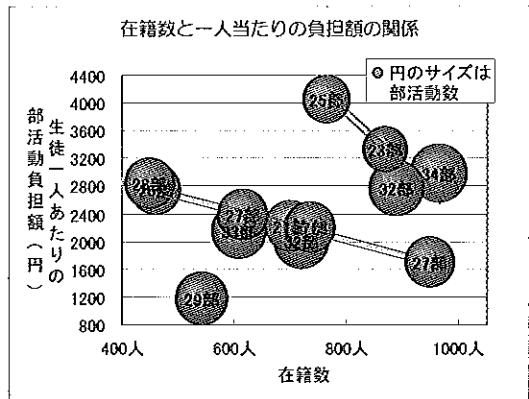
部活動費への生徒一人当たりの支出額の平均は2406円で部活動費の割合の平均は49.4%で、この2つはほぼ比例するが、部活動加入率とは、必ずしも関係していなかった。



部活動費への生徒一人当たりの負担額と部活動数との関係について、部活動数の平均は28.5部、27部が4校で最多であったが、部活動加入率に係わらず、28~30部程度が生徒一人当たりの負担額が低いことが分った。



部活動費への生徒一人当たりの負担額と在籍数（平均712人）との関係は、単純でなかった。



#### 4 学校経営計画と部活動実績・加入率

回答 13 校の一覧は下図で各校各様であった。

方針	実績	加入率
○ ○ ○ ●	○ ○ ○ ●	100%
○ ○ ○ ●	○ ○ ○ ●	84%
○ ○ ○ ●	○ ○ ○ ●	82%
○ ○ ○ ●	○ ○ ○ ●	80%
○ ○ ○ ●	○ ○ ○ ●	80%
○ ○ ●	○ ○ ●	86%
○ ○ ●	○ ○ ●	71%
○ ○ ●	○ ○ ●	68%
○ ○	○ ○	100%
○ ○	● ●	100%
○ ○	○ ○	90%
○ ○	● ●	79%
○ ○	● ●	72%

方針  
○学校経営計画等に部活動に関する記述がある場合  
実績  
○インターハイ等の全国大会出場  
○関東大会等出場、都大会優勝  
●都大会等の地区大会に出場した実績がある

#### 5 生徒会予算編成について

生徒会予算の主な支出項目は、

- ①部活動（平均 218 万円、平均割合 49.4%）
- ②文化祭・体育祭等の行事（平均 140 万円、平均割合 32.8%）
- ③その他（生徒会運営費、慶弔費、広報誌、卒業記念品費、予備費等）

であった。

生徒会予算編成の主体は、

- ①教員主体 10 校
- ②生徒主体 1 校
- ③生徒と教員 1 校
- ④生徒および担当教員 1 校

であった。

予算編成時の指導は、

- ①担当教員が予算案作成時から指導 5 校
- ②企画調整会議で予算案を検討・決定 3 校
- ③ほぼ例年同様の予算編成である 1 校
- ④会計担当生徒の予算編成に任せる 1 校
- ⑤上記①と②両方を実施 1 校
- ⑥生徒会が各部と折衝し、大枠を決め、その後教員が指導に入る 1 校

⑦①とともに生徒会役員が、各部長からヒアリングを行っている 1 校  
であり、教員が生徒をうまく指導して予算を適正に編成していた。

予算編成時の副校长の関与は

- ①会計担当教員に任せ、最終案を確認 5 校
  - ②ほぼ例年同様を踏襲、特に関与せず 4 校
  - ③企画調整会議へ予算案提出前に指導 2 校
  - ④作成時から担当教員を指導している 1 校
  - ⑤事前に校長の方針を示し、企画調整会議等を活用して、担当の生活指導主任を通して生徒会担当者を指導している 1 校
- であり、例年同様の編成の学校も多かった。

#### 6 会計指導を通した生徒の育成について

予算編成や会計指導を通して、育成している生徒の能力については、

- ・コミュニケーション能力 7 件
- ・意見集約・連絡調整能力 6 件
- ・会計処理能力と ICT 活用力 4 件
- ・計画性・公平性・責任感 3 件
- ・自主・自律の精神 2 件

であり、具体的には

○予算編成の仕組みの理解の育成

○企画・立案・準備・段取り力、実行力、評価力、まとめる力の育成

○生徒の活動全体を考えられる視点を育て、学校が活性化する生徒会活動についての指導助言等があげられていた。

#### 7 まとめ

会計指導を通した生徒の育成については、生徒会と各部活動側との調整などを通じて、『生きる力』、コミュニケーション能力、意見集約・連絡調整能力、会計処理能力、ICT 活用力等を育てる効果があげられる。副校长が適切に関与（編成方針の明示、進行管理）することで、よりよい予算を編成するとともに、生徒の『生きる力』、コミュニケーション能力等を育成することができるので、副校长の生徒会会計への積極的関与を期待したい。

委員長 福田 洋三（日本橋）記

## 7. 退任者の声

### 退任にあたって

内田 熟（広尾）

今思うとあつという間の教頭・副校长の12年間でした。特に最終の平成22年度は、私的な事も重なり特に早く感じました。何を書いて良いのかはっきりしませんが、私が教頭・副校长として赴任した3校の状況と、職務として心掛けていた（心掛けるべき）ことや感想を述べます。

初任は、平成11年4月に戸山高校定時制に着任し4年間務めました。

この学校は定時制の“学習院”と言われるように、3年間で卒業できるシステム「三修制」を全都に先駆けて採り入れたため、落ち着いた中で学習や部活動ができる環境がありました。また、全日制は進学重点校として、全都に先駆けて入学選抜問題の自校作成に取り組んでいました。そのため部屋が足りないということで、定時制の自習室を貸し出すなど、全日制教頭と施設面だけではなく、服務や提出書類の作成等についても頻繁に話し合いを持ち、新米教頭にとっては大変有り難く思いました。また、学区の教頭会も盛んであったため、課題等についても適切なアドバイスをいただきました。

次は、調布北高校に3年間務めました。定時制と全日制の規模の違いは、あらゆる面で大きな違いとなって現れ、特に最初は戸惑いました。

この年に、校長、副校长、事務長3人が新しく入れ替わりました。着任して早々の入学式は、フロア一形式の入学式で、全都で4校だけであったと記憶しています。その年度の卒業式からは、通常の壇上での式典に変えました。この学校では、学習や部活動にも生徒は積極的でした。教員は、授業等の学習指導に真剣に取り組んでいました。

最後に、広尾高校に5年間務めました。3年目に異動も考えましたが、他校の新しい環境で2年間を務めることに煩雑さを覚え、改革を実行・継続している広尾高校で少しでも役に立てるのであればと思い残留しました。この学校は、都心に位置し交通至便の中堅校ということで、

人気はあるが生活指導に難のある学校でした。また、自主自立を重んじ過ぎたために、生徒指導への対応が遅れてしまったようでした。それを打開するために、部活動を活性化し、制服を導入しました。さらに、現在は進学指導にも力を入れてきています。

以上のような特色ある学校を経験して、副校长として気を付けてきたことについて述べます。

#### 1 誠実に仕事を行う

多忙極まる職務だが、特に服務に関しては、妥協を許さないよう心掛けている。こちらのスタンスが分かれば、教員は無理難題を持ち込んで来なくなるし、職務上大変な時には、協力する者も出てきた。

#### 2 仲間をつくる

分からないことや判断が付きにくい時に、連絡が取れ、互いに相談し合える人を持つことが大切だ。

#### 3 仕事を分散させる

副校长として、一人で仕事を抱え込まず、適正に割り振ったり、良いタイミングでの依頼を行う。

#### 4 何事にも策を持つ

問題が発生しそうだと感じたら、そのことについて策を考えておく。策が受け入れられなくとも、それはそれで良しとする。

#### 5 自分の趣味を持つ

激務を乗り越えるためには気分転換が必要です。趣味を活かして、次の業務に臨みましょう。

### 振り返って思うこと

小澤 時男（白鷗）

副校长として、その時どきで課題に出来るだけ取り組んできたが、今となって思うことを記してみたい。

平成9年度から都立高校改革が始まった。平成13年度には学校の外部委員の意見や生徒・保護者・地域の意見を聞き、学校を外に開いて、学校の質的向上をめざす学校運営連絡協議会が

スタートした。学校長の学校経営方針や学校の内部委員から教育活動の説明、学校評価アンケートについての検討、外部委員の授業参観など、学校の中に新しい活動が導入され、新しい風が吹き始めたのを感じた。

その内容は、学校の教育活動について、当該年度の目標を具体的に設定して、目標の達成状況や達成に向けた取り組みの状況から、取り組みが適切であったかを確認し、その改善方法を検討する。そして、生徒、保護者、地域住民から寄せられた学校評価アンケートの結果や具体的な意見や要望を活用して、学校をよりよい教育環境となるよう改善していくことであった。

こうした中で、保護者と学校行事や研修会を共催したり、地域の行事に生徒・教員が参加して、学校、家庭、地域が共通認識を持ち、その連携協力により地域を盛りたて、学校運営の改善を図り、結果学校が大きく成長していくようなことをもっと進めることが必要であると思う。こうした活動は、学校の各校務分掌に年間ひとつ分担し、主幹・主任を中心として段取りを検討して実施し、活動内容を年ごとに改善して、高める教育活動にしていく。こうした活動を通して教育活動を活発にし、学校の質的向上を図ればよかったと考えている。

もう一つ、今まで都への書類を期限いっぱいまで引っぱって提出していた。しかし、今年度は、何か新しいことに取り組もうと考え、都からの文書がきたら出来るだけ早く仕上げて提出した。それによって、時間的にも余裕ができ、精神的にずいぶん楽になった。本校職員にもこの方法を進め、実践する主幹・主任がでてきた。ぜひ皆さんにもこのことをお勧めしたい。

最後に副校长会の皆様には、大変お世話になりました。ありがとうございました。

## 退職は一つの通過点

小林 淑訓（大崎）

私は、平成8年からの15年間、大森高校、飛鳥高校、富士高校そして大崎高校と4校の都立高校でお世話になりました。定年退職まで、またたく間に時が過ぎたことを実感しています。

副校长は「クロコ」、校長の下、校長を陰で支

える存在であると思いながら勤めてきました。学校の何でも屋である副校长の仕事は、多忙を極めますがその分醍醐味もあったと思います。

学校予算の削減、授業料未納者の増加など不況の影響も見られ、保護者や地域の学校に対する目も厳しくなってきました。その分、住民の苦情がダイレクトに寄せられ、一つの分掌や学年では対応できない状況も多くなっています。

勤務時間が過ぎたころ、担任や主任が、生徒の指導や保護者の対応で私のところに来て話し合ったことや、病気になったり心を病んだりして休業や休職する教員、そこまで行かなくても体調を崩す教員もいて学校の台所は火の車という状態もありました。

私は、一人ひとりの教員が働きやすい環境づくり、特に真面目に努力している教員が腐ることがないようにすること、職場の中で教員を孤立化させないことを心がけました。校長と相談しながら、日常の声掛けや、教員に仕事を依頼するときは、時間の余裕を持って何度も足を運びました。刑事コロンボのドラマでヒントを得て、工夫したことありました。

遅刻や頭髪で、地域住民の苦情、支援センターの指導を受け、生活指導主任と学年主任で組織した健全育成会議を立ち上げ、学期単位の段階的指導、さらに指導に従わない生徒への指導を学校として行いました。十分な成果を得られたとはいえませんが、校長、教職員が、取り組みの中で一体感を持てたことを喜び合ったこともあります。学校を組織化することの大切さを再認識した瞬間でもありました。

こんなことも思い出します。生活指導の大きな転換を、校長が生徒に知らせる全校集会で、体育館に来なかつた教員に、生徒全員が集まる場所に来ないほど重要な仕事はないと説き、必ず出るようにさせたこと、教員が授業をサボつた生徒等を全校放送で呼びつけることを辞めさせたこと、いつも始業時間ぎりぎりに出勤する教員に余裕を持って出勤するよう指導もしました。しかし、学校にとって一人ひとりの教員が大切なスタッフ、このスタッフを最大限に活かすことこそ副校长の仕事であったと思います。私が若い教員を叱咤激励し、一緒に小さな一体感や喜びを分かち合えることがなくなることは寂しい限りですが、副校长の先生方が、教員で

あることの喜びを是非若い先生に伝えていただきたいと思います。

副校長の仕事は、地味でしんどい仕事です。今思うと副校長の 15 年間自分を見つめ直し反省と挑戦の連続であったと思います。自分のありのままを知ることができたと思います。大切なのは、謙虚に心から自分が納得できることを積み上げて行くことと思っています。どうぞ、副校長の先生方はご自分自身の健康の保持・増進を心がけられて “グッド ジョブ” をなされんことを、さらに東京都立高等学校副校長会が、皆様のお力で益々発展されることを心より祈念いたします。

最後に、私は「学ぶことと教えること」の原点に立ち戻り、今後も元気である限り東京都の一隅で「教育」を探求して行きたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

副校長会をはじめとする都立高校のお世話になった皆様、15 年間本当にありがとうございました。



## 8. 転任者の声

### 2校で共有する校舎環境で

中村 茂（葛飾総合）

向島商業高校定時制課程から葛飾総合高校に異動になりました。向島商業高校は、平成19年3月に全日制課程が閉課程となり、平成22年3月に定時制課程も閉課程となり閉校になりました。

私は、平成19年度から閉校に向けた準備と校舎改修工事の中で3年間校務を行なってきました。生徒は全校で34名という状況でした。3年間で進路変更は1名、退学者0名、特別指導は0件でした。年々生徒が卒業して行き、少なくなっていく中で、生徒に寂しい思いをさせないように学校生活を充実させる努力をしてまいりました。平成21年度には、日本橋高校が引っ越して来て、最後の1年間は同じ校舎に二つの学校があるという状況でした。

葛飾総合高校も本所工業高校定時制課程と同じ校舎を共有しています。両校の生徒がお互いに気持ちよく教育活動が行なえるように調整することも副校長の仕事です。同じような校舎環境の中で新しい生活が始まりました。

葛飾総合高校は、東京23区の東部地区に平成19年4月に開校し、今年で4年目を迎える総合学科高校です。150を超える多様な選択科目の中から自分で選択科目を選択し時間割を組み立てて学習するなど、特色あるキャリア教育を推進し、生徒の希望進路実現を目指す「進路名門校」を目指しています。

本校には総合学科高校の特色を生かした6つの系列（国際コミュニケーション、スポーツ福祉、生活アート、環境サイエンス、情報メディア、メカトロニクス）があります。

この系列を中心に、将来の進路に必要な系列選択科目を「基礎科目（2・3年次履修科目）」から深化科目（3年次履修科目）へと系統的に学ぶことによって、明確な目的意識を持った進路の実現を目指しています。

私は副校長として、このような本校の総合学科としての教育内容を理解し、6月から中学校での学校説明会に足を運びました。開校4年目

の総合学科ということで、東部地区の多くの中学校から説明依頼がきています。

会議等も多い学校で、教職員も毎日遅くまで頑張っています。私も、葛飾総合高校の発展に全力で貢献したいと思っています。

### 全日制課程に転任して

難波 伸一（向丘）

昨春蕨前工業高校定時制課程から向丘高校全日制課程へ異動しました。

蕨前工業高校定時制では、中学校時代不登校だった生徒たち、様々な人生経験をしてきた生徒たちが、生徒会の役員を務めたり、立派に就職したり、大学進学したりする姿を見てきました。先生たちの、一人ひとりを大切にする姿勢のたまものだと思いました。

そのような生徒たちに様々な刺激を与え、コミュニケーション能力や学習意欲を高めたいと、進路指導主任、教務主任等と相談しました。そして外部の方々に多数ご来校いただいたり、生徒たちを地域や企業に送り出したりしました。もし少しでも変容させることができたとしたら、大変幸いです。

向丘高校は、文京区にある生徒総数約750名の高校で、学力等に関しては中堅校にあたります。

前任の蕨前工業高校定時制にもしっかりと生徒たちが多かったですが、向丘高校の1学期始業式の静けさや部活動紹介等でのすばらしい紹介に驚きました。それまでのご指導の成果だと思います。

定時制に比べ、仕事量は基本的に増えました。ですが、各分掌等が、すでにルーティンワークとして実施している仕事は、どんどん引き受けてくれますので、その点大変助かっています。

本校の強みは、先生たちが受験指導、頭髪指導、部活動指導等に真摯に努力していることと、美しい校舎だと思います。

校長のご指導、ご鞭撻のもと、どのように強みを活かし、学校を一層活性化していくかにつ

いて、努力しているところです。

教育庁の「土曜日補習の充実に係る外部指導者活用支援事業」を活用し、土曜日講習を昨年12月25日に始めました。1・2年希望生徒対象で、東大大学院生等に国語、数学、英語を指導してもらっています。

今春から、東洋大学、日本大学、法政大学の講義を、2・3年の希望生徒が聴講できるようになる予定です。現在高大連携プロジェクトを中心準備を進めています。

いずれも、同様のことをすでにご実施なさっている高校の副校長先生方に、お電話で、あるいはお会いした際に、お話をうかがいました。その節は、ご教示ください誠にありがとうございました。

今後とも課題をみつめながら、足元をかためつつ、努力してまいりたいと思います。今後もご指導、ご助言いただければ、大変幸いです。

#### 全日制課程へ転任して

小野寺 真也（小石川）

平成22年4月に鷺宮高等学校定時制課程から小石川高等学校全日制課程へ異動となりました。前任校の鷺宮高等学校定時制課程は平成22年3月で閉課程となりましたが、最後の副校長として、閉課程までの3年間、活気のある学校の維持に努めました。

着任時は、2年、3年、4年各1クラスの計3クラスという状況で、毎年クラスが減っていく中で、特色の一つである体育祭などの学校行事の継続・活性化も大きな課題でした。

しかし、教職員の工夫・努力と全日制教職員・経営企画室の協力、卒業生や外部の方々の援助により、4年1クラスとなった平成22年6月の体育祭も、4年生、卒業生、教職員の3チーム対抗、総勢87名で盛大に実施できました。

また、9月に全日制と合同で実施している文化祭でも、卒業生の参加や時間講師の先生方等の協力により楽しく実施できました。

18名の生徒と5名の教職員での最後の一年間は、家庭のような暖かい雰囲気の中で、生徒一人ひとりを大切にした、教育の原点を学ぶことができました。

平成23年4月からは、小石川高等学校・中等教育学校に着任し、教職員数も多い対照的な学校での職務が始まりました。副校长としての所属は小石川高等学校ですが、小石川中等教育学校も兼務しており、3名の副校长が協力して、小石川高等学校・中等教育学校が一体となった学校経営を行っています。

小石川高等学校副校长としての主な職務は、最後の3年生の卒業・進路実現と、閉校と小石川中等教育学校への円滑な引継ぎですが、小石川高等学校が平成18年度から指定されたスーパー・サイエンス・ハイスクール事業が平成22年度末で指定期間終了となることに伴い、小石川中等教育学校として平成23年度からの新規継続の申請をすることも重要な職務となっています。

小石川中等教育学校ではスーパー・サイエンス・ハイスクール事業を始めとした理数教育の充実に加え、国際理解教育の充実が大きな特色であり、全員参加で行う国内語学研修（2年）、海外語学研修（3年）、海外修学旅行（5年）などの数多くの行事を実施しています。

このような多くの行事の実施に加え、中等教育学校（前期課程、後期課程）という新しい枠組みの中での学校づくりの課題もあり、教職員全員が忙しい毎日を過ごしていますが、生徒の様々な分野での活躍、教職員の意欲的な取組みなどにより、忙しいながらも非常に充実した日々となっています。

どうかよろしくお願ひいたします。

#### 久しぶりの全日制

原田 明（忍岡）

教頭・副校长として、世田谷泉、足立東、荻窪定、そしてこのたび忍岡に回ってきた。10年7月の勤務が終わり、足掛け12年目となる。

この間、特色ある学校で主として教育課程の開発、充実に意を用いて仕事をしてきた。授業や生徒の指導は教員の仕事である。その仕事をどうしたらやりやすくしていけるかが一貫したテーマであった。総合的な学習の時間で実施してもおかしくない内容の科目がいくつもある学校で、どうしたら教員がそれぞれの科目に意義

を見出し、実践していくかが大きな課題だった。A科目とB科目は要するに総合的な学習ではないか、それなのになぜ総合的な学習をさらに実施する必要があるのか。そういう「青写真」を誰がどういう考えで作ったのか。それを受け、現場で生身の教員が生身の生徒と向き合う困難さをいやというほど味わった。財政が年々逼迫する中で頼るものは何もなかった。教員の力量だけが頼りだったし、教員はよく力量を発揮した。感謝している。

閉課程を迎える夜間定時制での勤務は経済的合理性では割り切れぬ教育の実態に触れた。チャレンジ、エンカレッジが高校改革の表の世界なら閉課程の夜間定時制はその裏側である。伝統ある定時制で最後まで授業をやろうという教員の心意気が、あえて学校設定科目を設置し、定年で4年担任をするなど元気のよい学校にした。

この4月からは、52名の教員が勤務する学校に転任した。顔と名前を一致させるのに苦労した。職員室に入りきらないので、教科の準備室等にいる教員の顔と名前がなかなか一致しなかった。しかし、2年の副担任決めやホームルーム合宿の引率者決めをすぐにしなければならなかつた。教員が5名の閉課程校からの激変であったが、多くの協力で何とか決まった。

勤務時間が、3月31日までは夜10時だった。翌日は、8時頃出勤したが、どうも出勤時間が遅いと評判が立つたらしい。どこで誰がどのように見ているか分からぬものだと感じた。

全日制は、やはり教員数が多く、活発であり、多様な教員の考え方や感情が交錯している。副校长は、職員室に席がある。いろいろな人に見られている。どこから矢が飛んでくるのか分からない。反面、塩を送ってくれる人もいる。しかし、その所在は分からない。アンテナを高く、腰を低くして教員に学ばなければならない。

私は、最近、リーダーシップということをよく考える。教員は、ホームルームを経営している。教員は経営者なのである。経営における内部統制は、外部環境によって変化する。したがって、経営者の外部環境を整備することは、学校経営者の仕事となる。それなら、学校経営は教員の経営を支援するため、教員が生徒に対する場面を十分に想定しながら意思決定をするこ

とが必要である。そのため、教員の意向を十分に聞き、建設的な議論ができるよう配慮することは当然であり、アンテナの高さと腰の低さ、そして人への感謝の心は必要な条件である。

リーダーシップは、「上から目線」では決して成立しない。教員数が多ければ多いほど多様な価値観が混在する。まして、高齢教員が多ければ、硬度の高い価値観が多様に存在していることになる。教員に親切で、改革の実を挙げるリーダーシップとはどのようなものだろう。難しいことであると感じる今日この頃である。

最後になって、恐縮ですが、縁あって東部Bチームの一員となりました。何卒、今後ともよろしくお願ひいたします。

### 中等教育学校へ転任して

牧野 敦（九段中等）

本校は都内唯一である区立の中等教育学校で、開校5年目を迎えています。その後期課程（高校課程）の副校长として、4月に転任いたしました。

中高一貫校であることに加え、千代田区として独自に教職員を配置している関係もあり、教員は校長と前期課程（中学課程）・後期課程の各副校长を含め、75名が配置されています。前任校に比べますと3倍近い教員数で、かなりの大所帯となりました。しかし一番の特長は数の多さではなく、先生方一人ひとりの能力が非常に高いことと、仕事熱心であるということでしょう。忙しい学校であることは事実ですが、先生方の向上心とも相まって、校内は常に熱気に溢れています。

区立の中高一貫校であることや、九段下という立地もあって、本校には国内外からの訪問者が多くあります。生徒たちは外部の方と触れ合う機会が多く、学校の立地を生かした企業・大使館・大学との連携授業も多く取り入れているので、人前で話したりすることにものおじしません。事前のコーディネートに先生方は苦労しますが、その分生徒にはプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力が身についています。

本校は区立学校なので、当然ながら TAIMS は

配備されておりません。その関係もあり日頃から意識していないと都立学校の情報から隔絶してしまいます。それを少しでも防ぐためと、高校の教員の場合異動は都立高校と同じであることもあり、高校課程の副校長は都立高校の副校長会に参加させていただいております。今後ともどうぞよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

### 全日制副校長に着任して

奈良井 潔（美原）

平成22年度から開校6年目を迎えた単位制普通科高校である旧第1学区にある美原高等学校に着任致しました。（最寄の駅は京急平和島です）新しく、大森東高校と南高校が発展的に統合された高校であるとともに単位制高校ということで、なにかとそのシステム等に慣れるのに苦労しました。教員は9名程多く配置されていて（単位制）、選択講座や少人数・習熟度別授業を多く設定できるなどのメリットがあります。しかしながら、生徒は、何を選択したらいいか、将来どういう道に進んだらいいのかと戸惑いがちであり、それへの対応として、キャリア教育の充実にも力を入れておるところです。すなわち、総合的学習の時間を利用しての「Gateway To Careers～未来への扉」です。

以上はさておき、副校長として、ハードな毎日を送っている今日この頃であることは間違いない実感です。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

### 全日制課程へ転任して

小林 孝行（松原）

チャレンジスクールである前任の穂ヶ丘高校に開校より3年間勤務し、第1回の卒業生を見送り松原高校へと異動してきた。

穂ヶ丘高校は、全都で5校しかないチャレンジスクールとして最後に開校した学校で、三部制・単位制・総合学科という経験のない学校に昇任副校長として着任し、すべて手探りの状況で大変な目にあった（笑）が、学校を作り上げ

ていく充実感があり、やりがいのある学校であった。

一方、松原高校は、創立60周年を迎える普通科中堅高校。昨年より制服の着用と染髪の禁止を打ち出し取り組んでいるが、全体的に旧習にどっぷりとつかっている雰囲気で、改革・改善に踏み出せないベテラン教員と新しい感覚で実践したい若手教員との考え方の違いが大きい状況の学校であり、先進校より異動してきた私にとっては、驚かされることが多い学校である。

数年前には、全入を経験し、授業が成り立たなかつた状況を生活指導の引き締めで、落ち着いて勉強できる学校へと変革してきているが、教員の意識改革が進まない限りまた逆戻りしかねないという危機感を持っている。

制服導入完成年度を23年度に迎えて、ここ1～2年が、松原高校の踏ん張りどころであると確信している。

現在、在籍している生徒はちょっとのんびり屋で落ち着いた雰囲気の生徒が多いが、積極性にかけるところがあり進級や進路に向けた危機感が薄い生徒が多い。いわゆるこれが、普通科中堅校の特徴もあるのかを感じている。

しかし体育祭や文化祭等では、「やる時はやる」松高生らしく頑張って自分の成果は出せる力は持っているようだ。

さて、幸いいろんな機会でコミュニケーションを図り副校長としての想いを語っていく中で、企画調整会議や主幹会のメンバーと前向きな意見交換ができるようになってきている。さらに若手教員の積極的な関わりで「新生松原高校」に向けての構想を検討できる雰囲気が出来上がってきた。

現在、本校の将来構想を踏まえた新教育課程の完成に向けて企画調整会議と主幹会を中心に行なっており、23年度より導入となる「学力向上開拓推進プラン」とも絡めて検討をし始めているところである。

課題は、挙げれば切りがないが、一つ一つ解決のための手立てを積み重ねていくしかない。今後とも皆様からのご指導、ご助言を賜りますようよろしくお願ひ申し上げます。

## 全日制課程に転任して

武田 尚（杉並総合）

「天然資源に恵まれず、少子化で市場と労働力が今後益々縮小していくであろう日本において、今まで享受できた豊かさと安全を維持していくためには、有能な人材の育成と国際化が不可欠であると考えます。これから時代を任せられるような、自らの力で考え方問題を解決していく有能な人材を、総合学科というシステムの中でしっかりと育てていきたいと考えております。」

私は4月の校長就任挨拶を抜粋したこの文章を紹介しながら、本校学校説明会での学校紹介を次のように締めくくる。

「三橋校長の新鮮な発想のもと、教職員一丸となって教育活動に邁進します。」

杉並総合高校は開校7年目を迎える都で3番目の総合学科高校であり、7年目という数字でご想像いただけたとおり大量人事異動期を迎えている。今年度校長の交代に加え教務・生活・進路を含む6分掌中5分掌の主任が交代する中私も飛鳥高校定時制課程からの転任となった。

陣容の一変する中で、東京都における8人目の民間出身校長のもと安定した校務運営が行えるよう連携を図り、連絡を密に行うとともに、必要な情報を提供すること。学校運営に係る課題を検証し、必要な措置を講ずることが本年の私に与えられたミッションである。

「企业文化」と「学校文化」、「常識」と思われるものに対する認識の差は時として顔を出すものの、三橋校長の懐の深さは問題を殆ど顕在化させず、現在は重点支援校の指定をもとに中期的視点による学校活性化のスタートラインに立った。

杉総の朝は早い。朝陽を受けて輝くレクチャーライドを仰ぎ見ながら校舎各入口を解錠して回り、TAIMS開けば今朝も早々に送信された処々英語混じりの校長メールが目を覚ましてくれる。体育館・多目的ホールでは朝練の生徒の声が響く。教職員60名、講師20名、市民講師11名が支える杉総の一日がまた始まる。

時に夜遅く浜田山近辺で杯を交わしながら、我々教員が経験し得ない民間「異文化」を拝聴することが、今年の私の密かな楽しみとなっている。

## 全日制課程に着任して

清水 進（神代）

石神井高校定時制課程に4年間勤務し、閉課程業務を終え、4月より神代高校に着任しました。

定時制課程は初めての経験でしたので、生徒の抱えている課題の重さや経済的困難さを深く認識することができました。また、定通生徒体験発表大会や定通文化祭に協力することで、定時制通信制に通う生徒の潜在的エネルギーにも感動させられました。今後は定時制課程で学んだ体験を糧に、日々の学校経営に役立てて生きたいと思っています。

さて、神代高校の雰囲気ですが、生徒が落ち着いていて、教員も一生懸命学習指導・部活指導に励んでいます。特色の1つは、部活動が盛んなことです。ハンドボール部・柔道部・吹奏楽部などが都大会で好成績を収めています。他に60名を超えるダンス部・40名を超えるサッカーパー・少数精銳の野球部なども熱心に練習しています。特色の2つ目は、学校行事が充実していることです。6月の体育祭に始まり、9月の文化祭・12月の男子柔道大会と女子ダンス発表会、2月の音楽祭まで、クラスがまとまって練習している風景が、頻繁に見受けられます。

神代高校で尽力したい課題は、3点あります。先ず、土曜日補習の強化です。今年度の6月から外部講師による英語・理科の補習を始めました。希望者は多いのですが、部活との兼ね合いで補習継続が課題になりました。次年度は、日程や時間設定に配慮して、補習に継続して取り組む生徒を増やすことが、希望です。授業と補習との一体化によって、進路実現を強化します。

次に、全日制課程と定時制課程との連携です。全日制課程には部活時間延長の要望があるので、全定間の話し合いを緊密に行い、定時制課程の授業に支障が生じないよう、部活時間延長を実現したいと思っています。

最後は、学校案内の強化です。本校は中学校訪問には熱心でしたが、塾訪問や塾対象の説明会を行っていませんでした。今後は塾訪問を強化して、本校の特色を最大限説明していく方針です。

副校長の皆様よろしくお願い申し上げます。

## 全日制課程へ転任して

濱田 准一（世田谷総合）

昨春、南多摩高校定時制から世田谷総合高校全日制に異動になりました。前任校では、新補の副校長として、閉課程までの2年間を任せられ、右も左も分からぬ中、多くの先輩副校長先生方の御助言と御支援により、何とか使命を果すことが出来ました。

さて、4月から現任校に着任したわけですが、私にとって経験のない「総合学科」という新しいタイプの学校に日々、戸惑う毎日でした。現在、ようやく学校の全体像が掴めてきたところで、改めて総合学科高校としての現任校の使命と課題を捉え直してみようと試みております。

世田谷総合高校では、あいさつの励行に力を入れており、担任を除く全教員が輪番で朝の立ち番を行っています。私も4月より毎朝、校門で生徒にあいさつの声をかけています。なかには、そっぽを向いて通り過ぎてしまう子もいますが、ほとんどの生徒が元気よくあいさつを返してくれます。また、月1回、風紀委員による「あいさつ週間」が行われており、その週は普段にも増して、あいさつの声が響き合い、明るくにぎやかな校門風景が見られます。通勤途中の地域の方々も、校門の前にずらりと並んだ生徒と教員の姿を物珍しそうに見ながら通り過ぎていきます。私にとって、一日の内で一番気持ちの良い時間であり、毎日、生徒から元気をもらっているような気がします。

12月に3年生の課題研究発表会が行われました。本校1期生の力が試される行事でしたが、どの発表もよく準備し工夫されたものでした。予定時間をかなり超過したにもかかわらず、寒い体育館の中でほとんどの生徒が熱心に耳を傾けていました。私はこの発表を聞いて、本校の求める4つのスキル（聴く・調べる・まとめる・伝える）が、生徒に着実に身についていることを確信しました。この成果をより大きなものにするためにも、4月に行われた宿泊行事「フレッシュマンセミナー」で1年生が見せてくれた真剣な表情と真面目な姿勢を大切に育て、3年生でその学習の成果を存分に發揮して自らの進路を切り拓いていってくれるよう、教職員とともに全力で取組んでいくつもりです。

## 全日制課程に転任して

平野 みどり（世田谷総合）

前任校の町田高校定時制課程は、16学級あり、夜間定時制としては都内最大規模でした。新補の副校長として3年間、校長も経営企画室も技能主事さんもいない夜更け、たった一人の管理職（管理人かも？）として、校舎の施錠に身の細る思いをしたり、困難な生育過程をたくましく乗り越えている生徒の姿に自分の生きる姿勢を反省させられたり、家庭事情に追い詰められている生徒をどうしてやることもできない自分のふがいなさを嘆いたり…。自分の価値観が揺さぶられる日々でした。また、教職員とともに、チームワークよく急場を乗り切った数々の体験も、私の宝物です。

昨春、世田谷総合高校に異動。久しぶりの全日制勤務で、夜型の体内時計を昼型に戻すのは割と簡単でした。が、今度は開校三年目で、未完成部分の多いことが課題です。「何も決まっていないし、誰も決めてくれてない」という教員の不満。「普通は…だ」と発言する教員の数だけ学校現場の「普通」は存在するものだと改めて感じています。連絡不足のための混乱もあります。本校における「普通」を作って周知していくのが現時点での大きな仕事かもしれません。

より良い学校作りのために、色々なアイディアを熱く語る教員もいます。PTA（本校ではSTEPという名称ですが）も、こちらが戸惑うほど熱心に活動しています。生徒は、校内ですれ違うと大きな声であいさつをするので、来校者から褒められることもあります。まもなく卒業する一期生の進路結果によっては、本校の教育課程や進路指導をさらに改良することも求められるでしょう。

新設校ゆえの課題は多いですが、教員も生徒も秘めた可能性を探りながら蠢いているというあたりに、本校が飛躍する活路を見出せそうです。本校での副校長の使命は、校長の学校経営計画に沿わせた形に、それぞれの教員の得意分野を生かす条件整備をすることだと思っています。幸い、今年の本校は二人副校長。一人で対応に追われていた昨年よりも「楽」……なんて書くと、今度はとんでもなく困難な職場に異動させられそうなので、このあたりでやめておきます。

## 全日制課程へ転任して

寺島 雅夫（国際）

八王子工業高校定時制から国際高校全日制へ異動となりました。定から全へと勤務時間が大きく変わりましたが、帰宅時間が定時制とあまり変わらない自分の不甲斐なさを日々痛感しています。通勤経路も大きく変わりました。これまで高尾の山に向かって通勤していたのが、池袋～新宿～渋谷周りと、都会の人の波に翻弄されています。ラッシュを避けるために7時過ぎには学校に到着するように心がけています。

さて、勤務校の様子も全く異なるものになりました。国際学科ということで工業高校などと同じ専門学科ですが、雰囲気は全く異なります。女子生徒が80%を占めており、至る所で、英語、中国語、韓国語を始めとするさまざまな言語が飛び交っています。外国人市民講師が14名、英語等教育補助員が9名、日本人の英語教員が16名に非常勤教員2名と時間講師1名。外国語科だけで42名！驚きました・・・。生徒も在京外人生徒、世界各地からの帰国生や留学生などが同じ教室で机を並べて授業を受けています。これが普通の光景なのです。

国際交流活動も活発で、着任早々の4月には韓国から仁川外国語高等学校の生徒240名が来校し、交流行事を楽しみました。国内外を問わず、常に誰かが学校を見学しているという日々です。これも本校では日常の一部です。生徒も気軽に来客の方々に挨拶をしています。自己表現が大好きで常にキラキラしている国際生をいつの間にか応援したくなっている自分に気づかれます。毎日が驚きの連続です。当分は、良い意味で、「今日は何が起きるのだろう？」と新鮮な気持ちで出勤できそうです。

まだまだ皆様のお力をお借りしなければならない若輩です。よろしくご指導のほど御願い申し上げます。

## 全日制課程に転任して

渡邊 英信（総合芸術駒場校舎）

平成22年4月に都立総合芸術高等学校駒場校舎担当として目黒区大橋に着任してまもなく1

年が経過しようとしております。

平成18年度以降、4年間で都立青山高等学校定時制課程と三鷹高等学校定時制課程の2校連続して閉課程業務を行ってきました。

この2校での4年間を振り返ったとき、思うことがいくつもあります。

第一に、在校生や教職員が減っていくなかで、教職員や生徒の「モチベーション」を高く維持してゆくのは容易ではありませんでした。

勤務した定時制課程はいずれも最終年度は1学級でした。教員定数はわずか2名です。閉課程過員1名をつけてもらっても、3名で学校を運営していくことになります。

教員はそもそも勤務する学校が閉課程になることに納得していません。その上に、人数が減れば一人当たり担うべき仕事量が増えます。この状況で閉課程業務を行うことを『納得』させ、様々な業務を率先して取り組むように『意識改革』することは簡単ではありませんでした。

生徒の方は、前年度まで授業を担当していた教員がいなくなり、代わりに講師が授業を担当することになじめない状況があり、その影響を長くひきずることになります。さらに学年が自分たちだけになって、学校行事に取り組む「やる気」を持たせるのにかなり苦労しました。

第二に、規模は小さいとはいえ、定時制課程特有の課題はやはりあり、生徒の出席確保、欠課時数の減少に苦労しました。閉課程となるため、最終学年在籍者は全員卒業を目標に掲げました。私が欠席状況データをとり、学級担任にデータを示して欠席者にはすぐ電話連絡をさせて、出席の確保に努めました。定時制課程向けの合同演劇鑑賞教室でも、在籍者全員参加にならなかつた苦い思いがあります。

一方、うれしい経験もしました。青山高校定時制課程では、私が指導した生徒が「東京都定時制通信制生徒生活体験発表大会」で都知事賞を受賞し、全国大会に出場できました。これは日頃の苦労を忘れる、最もうれしい出来事でした。

さて、現在勤務している都立総合芸術高等学校駒場校舎は都立芸術高等学校の中にはあります。私どもにとって、都立芸術高等学校は「母体校」であり、大事な存在です。その都立芸術高等学校も都立高校改革推進計画により平成23年度

末に「閉校」となります。定時制課程の閉課程を2校経験した私が今の立場にいることに不思議な縁を感じております。勤務校の職務はもちろんですが、「母体校」と緊密な協力・連携が出来るように頑張らねばと気持ちを引き締めております。

### 全日制課程へ転任して

並木 洋之（成瀬）

三部制の大規模昼夜間定時制の八王子拓真から本校に転任して10か月あまりになります。

拓真ではB勤務で夜の時間帯を担当、その前も夜間定、管候補時代も夜間定に配置されていましたので、全日制課程はほぼ9年ぶりということになります。生活のリズムはほぼ半日分ずれた感じです。拓真は19年度に開校し、完成年度40学級という大規模校で、毎年異動してくる教員数も多く、講師時数も120時間を軽く越えるという学校でしたので、定から全への異動ではありました。むしろ落ち着いたこぢんまりとした学校へ異動してきたという印象です。拓真は、自分のこれまでのすべての経験が直接には参考にならないかのような、何もかも新しいことばかりの学校でしたが、新しいタイプの学校作りの難しさを体験することができたと思います。二人副校長でもあり、校長をはじめとして管理職のチームワークが非常に大切であることも体験しました。

成瀬高校は生徒達も問題の少ない、安定した全日制課程です。教職員の多くはその中で大きな変化を望まない傾向があります。その中で校長は「成瀬復活」をスローガンに掲げ、学校改革に取り組んでいます。校長の学校改革の経営手腕は、一見穏やかに見えますが、確実に成果をあげていく考え方抜かれた手法です。補佐する立場ですが大変勉強になります。

土曜授業も定着し、土曜授業実施の条件が厳しくなった来年度以降も継続を決めることができました。管理職の意志がぶれないことと、土曜授業が必要だという意識が教職員の中に定着してきたことが継続決定の何よりのポイントだったと思います。かつては厳しい評価を受けていたようですが、生活指導の充実、奉仕活動な

どで地域社会に参画していく中で、地域からの信頼も回復しつつあります。前任校までと違つて、PTAや地域との連携の諸会議に副校長の立場で参加することがずいぶん増えましたが、信頼感の回復を実感する場面が多いです。22年度からは重点支援校の指定を受け、この3年間が成瀬高校の勝負の年になるだろうと思います。この10か月の間にも、土曜授業継続の決定、学校内外への学力保証の試みである「成瀬スタンダード」の開始など、新しい動きが出ています。

早寝早起きは習慣化し、全日制の体に戻ったようです。副校長として、成瀬高校の着実な改革に向けて校長を補佐していきたいと思っています。

### 全日制課程へ転任して

久保 淳（八王子北）

副校長になり、3年目を迎えています。昨年度までは、三部制の砂川高校で勤務をしていました。砂川高校は定時制課程ではありますが、朝の8時30分から夜の9時まで12時間目まで授業があり、また通信制課程もあるなど、なかなか一口では言い表せない多様なシステムを有している学校でした。1年目はA勤務（8時30分から17時10分まで）、2年目はB勤務（12時30分から21時30分まで）と2年間ではありましたが、昼夜間定時制のすべてを経験することができました。学習時間帯も異なり、様々な生徒がおり、一つの学校として運営する難しさを痛感するとともに、時代とともにこのようなタイプの学校の必要性が増していることも強く感じました。

今年度の4月より、全日制普通科の八王子北高校に赴任しました。生徒たちが遠いところからでも大きな声でいさつをしてくれる、元気な学校です。学校としての力の入れ所は、なんと言っても部活動、行事、そして地域と連携したキャリア教育。生活指導や生徒相談にも積極的に取組み、教員がひとり何役もこなしている学校です。また全校生徒数600名弱と小規模な学校ではありますが、その利点を生かし、生徒と教員の距離が近いのも特徴です（教員が若いことが理由かも）。この秋、サッカー部が地区の

準決勝まで進みましたが、多くの教員と生徒が駆けつけ、心をひとつにして応援しました。

課題もあります。教員が総勢 37 名のところ、昨年は 11 名の異動がありました。この 2、3 年は 10 名前後の異動が予想されます。どのようにして本校の伝統を受け継いでいくか、「ひとり何役もこなす」バイタリティのある教員をどのように育成するか、校長先生と毎日のように密談を交わしています。

どの学校へ行っても課題の無い学校はありません。副校长として多忙な毎日を経験することで、様々なことに気がつきます。多忙だからこそ見えてくるところがあります。それらの課題に対し、どこから手を入れて行くか、どこから解決していくかは、忙しさで汗を拭く中、ふと見えてくるものだと思います。そう信じて、毎日元気に頑張ります。笑顔を忘れずに。

### 全日制課程へ転任して

上野 努（久留米西）

久留米高校定時制から久留米西高校に異動になりました。前任校は平成 22 年 3 月に閉校を迎えた 44 年の歴史に幕を閉じました。その間に 1395 名の卒業生を送り出しました。閉校式典では、日本舞踊家の卒業生に「越後獅子」を演じてもらい、来賓の方々から大きな賛辞を頂戴しました。

久留米西高校は清流黒目川の北岸に位置し、四季折々の花木が美しく咲き誇り、白鳥遊ぶ風光明媚な環境にあります。校章は楳の葉です。本校には約 2,000 平米の雑木林があり、楳・くぬぎ・赤松が生い茂ります。その「楳の葉」が本校の象徴です。

この良き環境にあって、「生徒を伸ばす学校（自分を鍛え、自分が伸びる）」を目指す学校として取り組んでいます。進路決定率は 93% を占め、保護者や地域から信頼を得ています。しかし、進学者の 9 割が指定校推薦・公募推薦・AO です。一般受験によって「ワンランクアップ」を目指す進路指導を目指してきました。具体的な方策としては次の 4 点を始めました。（1）受験対応の土曜講習の実施。（2）語学研修の実施。（3）夏季講習の充実。（4）外部講師による講演

会＜毎学期＞の開催。（5）自宅学習時間の確保。

中堅校にとっては特徴を出し入試倍率を上げることが死活問題となります。本校では「教育情報部」を今年度から立ち上げ、積極的な広報活動を展開しました。HP の更新は 100 回に及び、98000 回のアクセスに及びました。「学校だより」を 10 回発行して、近隣中学訪問（52 中学校）を年 3 回全教員で訪問しました。学校説明会では生徒の「顔」を前面に出すことによって、中学生・保護者に強くアピールしました。

全日制へ異動して 10 か月が経とうとしています。時の流れるのは早く、本校に赴任したのが昨日のようです。日々忙しく慌ただしいのですが、「心にゆとり」を持ちたいものです。「忙中に閑あり」でしょうか。

### 全日制への異動

堀江 徹（武蔵村山）

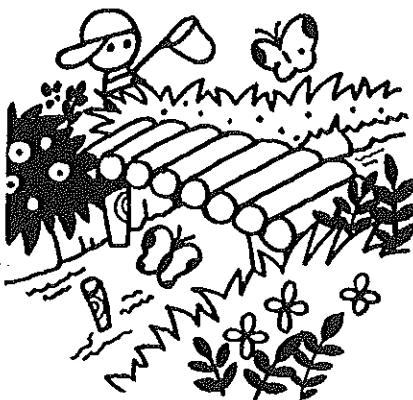
4 年間の第四商業高校定時制の勤務を終えて、全日制に戻ってきました。この 4 年間に我々副校长を巡る状況も大きく変化したと思います。そもそも、この原稿も定時制と全日制の間の異動がほとんど無かった頃に考えられた企画でしょう。今は、当たり前のように全日制と定時制を副校长が行き来しています。そんな中で、2 年前突然副校长会の運営に携わるようになり、全・定の統合という話を進めるようになりました。統合の話自体は全日制の錦織会長から持ちかけられたものではありますが、定時制の会の運営をしていて実感として困ったのは全・定間の異動があまりに多く、役員を決めるどころか候補もないということでした。統合の話は全体になかなか伝わりにくく、定時制の間では反対の意見も出ましたが、結局推し進めようと思った基にあるのはそんな素朴な実感であったといえるかもしれません。

4 年ぶりの全日制勤務で感じるのは、入ってくる情報量の多さです。週休日の半日振替と、部活動の正式勤務扱いが認められたのは、とても良いことですが、それに伴う事務量は、半端ではありません。毎週目を回しそうです。また、業務の ICT 化も進み、それに慣れるために覚えることもまた、あふれんばかりです。

幸い、勤務校である武蔵村山高校は、生徒は落ち着いているし、先生方も熱心で、とても雰囲気の良い学校で、働きやすく感じています。ですから、仕事のあれがいやだ、これはやりたくないということはないのですが、ともかくめまぐるしい気がします。

聖徳太子はいっぺんに7人の人の話を聞き、対応したといいますが、今の都立高校の副校長は皆、聖徳太子並みではないか、一時に10人くらいの依頼・要求に受け答えしている、本当にそんなことを思っています。

さて、武蔵村山高校の課題というと、やはり生徒の学力向上ということになります。生活指導上の問題を起こす生徒もほとんど居ず、遅刻も減り、授業もきちんと聞いている、いわば受け入れる状態が整ってきてている中で、学力をきっちりと与えてあげなければなりません。そういう時期にきているようです。なかなか一朝一夕にはいかない事柄ではありますが、校長先生を始め、学校一丸となって取り組もうとしています。



## 9. 新任者の声

### この10か月間

住吉 貴之（淵江）

このたび初任校と同じ足立区の淵江高等学校に副校長として着任することになりました。伊豆大島に9年間。その間に主幹、管理職候補者という立場を経て、自分の立場と仕事は大きく変わりましたが、やはり4月からの変化はものの比ではありませんでした。自分ではそんなに事務仕事が遅いほうであるとは思っていませんでしたが、PCの前にへばりつかなければならないことが結構増えました。初めてVDT検査の二次検診を受けることになりました。

生活指導と授業規律に学校を挙げて取り組み、いま上昇気流にある学校であると校長から伺つておりましたが、まさしくそのとおりであると感じた第1学期でした。授業観察や行事での教職員の取り組みなど、これまでとは違う視点で見る学校が新鮮に感じられました。しかし、の中では変化を望まない生徒との衝突など、苦労をしながら取り組まれている姿を見るに付け、もっと強力に先生方を支え、後押しできるようにならなければと強く感じました。

そして、学校の外にこれほど多くの学校を支えていただく方がいるということを、痛感しました。PTAを経験された方々で組織されている淵高会の皆さんとは、バス研修旅行や時節ごとの集会でつながりを深め、周年行事など様々な部分で御助力をいただいております。町会長をはじめとする町会の皆さんとは、夏祭りなどの行事や生徒のボランティアの引率などを通じて輪を広げさせていただいております。しょっぱなに強いお叱りをいただいた元区議会議員の方の御意見にも、今では私のなかのルーティンワークとなるものがありました。

若手の教員が多いのも本校の特徴でしょうか。5割弱が入都10年以内の教員です。若手教員育成研修にしっかりと取り組んでもらい、校内における相互授業見学週間を拡充させ、OJTの体制を整えることが必要です。しかし、そのようなこと以上に（と言っては語弊がありますが）、若い先生から元気をもらえるのが嬉しいと感じ

ている自分がいます。

雑多なことを書き連ねてしましましたが、今後の淵江高等学校の充実に向けて、今後も粉骨碎身、頑張ってまいります。重点支援校として、恥ずかしくないように目を配っていきたいと思っておりますが、なにぶん若輩者でございます。副校長の皆様方に、様々なご指導・ご鞭撻、ご支援をいただければ幸いです。事務局からのメールの感動的な話に涙するなど、そんなことが大変嬉しく感じる自分でです。今年、目標を2つ定めました。ここでは秘密にしておきますが、相談させていただいた折には助言を賜りたいと思います。どうぞ、今後とも宜しくお願ひいたします。

### まさか年度途中とは

平塚 浩司（足立 定）

9月16日付で足立高校定時制の副校長に着任いたしました。昨年3月の内示では、年度当初の昇任は無く残留でした。この一年は、生活指導を行つて徐々にフェードアウトしながら副校長への準備を進めていました。ところが突然8月30日の夕刻校長からの呼び出しを受けました。校長からの直接の呼び出しに、生徒が何か大きな問題でも起こしたのではないかと思っていると、校長から「9月16日から足立高校定時制の副校長だから。辞令を受け取るまでは周囲に話しても気付かれてもいけない。引継ぎと、異動の準備をしなさい。」と軽くいわれました。このようなわけで、引継ぎ残務整理もほとんど終わらない状態で現在の職場に異動しました。

足立高校定時制は、普通科と商業科を持ち17クラス生徒数300名を超える夜間定時制としては都立でも1、2を争う大規模定時制です。着任するまでは、“大変なところに行くことになってしまった、困ったな。”という思いがありました。ところが、生徒は、様々な困難な状況を抱えながらも学校生活に取り組んでいました。部活動は、連日放課後は11時近くまでさらに休日も活動しています。近年定時制ではその維持さえ困

難になってきている PTA 活動も盛んで、学校の教育活動を支援してくれています。まさに“古き良き夜学”の姿がまだ少し残っています。今は、その存在自体が薄れ行く夜間定時制に在って、この足立高校定時制の灯を守り続けることが、私に与えられた使命と考えています。

今の夜間定時制には、全日制に行きたかったけれど行けなかった子、どこかの高校で挫折して再チャレンジしてきた子、若いときから働きづめで勉強の時間がなく、ご自身の子供が独立した後勉強の意欲に燃えた方、外国籍の方等様々な生徒が在籍しています。夜間定時制高校は、これらの生徒達に就学の機会を提供するという大きな使命を持っています。今の社会は、夜間定時制高校に対して必ずしも好意的とは言えません。しかし、ここに在籍している生徒にとっては最後の砦なのです。大きなことはできませんが私は、この砦を守るべく、夜間定時制高校の存在意義と、生徒の活動を広く社会に知らせたいと思っています。まだまだ微力な私ですが、先輩諸先生方のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

## 副校長という仕事

前田 平作（工芸）

### 1 4月当初の不安

敷地内異動？（教職員研修センターから工芸高校）ということもあり、まったく初めての学校ではないと甘えた認識は、4月1日でどこかに吹っ飛んでしまいました。副校長という仕事については、前準備として研修受講や先輩副校長の話を聞いていましたが、仕事が始まると、目の前にある課題（4月・5月の調査・報告がこんなに多いとは！）を処理していくことで、一日が過ぎていきました。4月当初は毎日が不安であり、このような状態が一年間続くと考えたら、朝の電車の中で暗い気持ちになっていました。

こんなとき、研修会等で同期と会うと日々感じていることが共通のものであることから、少し安心もしたり、また励ましあったりすることで、心のバランスが正常に戻っていくことを実感したことがあります。「横のつながりを大切に

する」という何度も聞いていた言葉に、励まされている自分がいました。

### 2 多様な業務

5月も過ぎたころに、副校長の業務について自問自答した結果は、「学校のことを何でもやる」という結論を得ました。教育課程の管理から始まり、外部対応、施設設備の不具合の対応と本当に多様であることを実感させられました。また、副校長のスキルとしては、高いICT活用能力が要求されています。ICTのスキルアップには心と時間の余裕すらないのが現状ですが、立ち止まることはできません。このように多岐にわたる業務へのノウハウは、人から引き継ぐものではなくて、自分で蓄積するものだと感じました。

### 3 やりがいを感じるとき

学校には、様々な組織が混在していて、それらが有機的に機能しなければなりません。管理職としての役目は、それぞれの組織が学校経営計画に掲げられている目標を達成させるように導いていくことです。そのためには、普段からの教職員との十分な意思疎通が必要です。何気ない会話から、組織の弱点を発見したり改善のヒントをもらったりすることが実に多かったです。これらの事柄を基にして、企画調整会議等で方向性を提案したときに、活力のある組織に進展していくことを共有できたとき、副校長としてのやりがいを感じます。

### 4 これからの取り組み

管理職を希望する教員が少ないのが現状です。それは、現役の我々副校長が日々笑顔で仕事ができていないからではないでしょうか。そして、副校長という仕事はどれだけ魅力があるのかを伝え切れていないからではないからでしょう。業務が立て込んでいて、つい不機嫌な顔をしてしまいがちですが、そんなときこそ、余裕がなくても笑顔をみせることを心がけることです。すると、ここからは想像ですが、本当に自分に余裕がでてきて、どこからか力がわいてくるにちがいない。さて、明日から実行に移そうか。

## 副校长になって

中間 均（蒲田）

4月からはトラバーユ。2年間の任用前研修の中のどこかで聞いた言葉である。

候補者研修中はどうして実務のことを行なってくれないのだろう？と疑問に思っていたが、いざその職に就いてみると納得できた。

いわゆる、ルーチンワークは職場それぞれで決まった環境があり、すぐに覚えることで副校长として求められている大切な仕事は人材を育成していくことであることが実感できた。

私は、エンカレッジスクールの副校长として配属されて恵まれていると思った。

それは、二人副校长制でパートナーがベテランの副校长であったためである。分からぬことだらけの不安な4月であったが、細かな処理などを親切に教えていただいた。これぞOJTというものであろうか。パートナーが親切してくれた御恩は一生忘れない。

都の人事部の方は、いろいろなことをよくご存じであるとも思った。私のような新米には、二人副校长の所に配属して、まずはいろいろなことに慣れさせていただいたような気がしたからである。

二人副校长という制度はとてもすばらしいものであると思った。私は、趣味で卓球を行っているがダブルスのようである。職場で辛いことがあっても、少なくともこの人だけは味方であるというような安心感がある。だから私の場合には、副校长の方が主幹時代よりも落ち着いて仕事ができていると思う。

ただ、いつまでも二人でやっていけることはないので、実務はもちろんのこと副校长としての本来の仕事である「校長の経営計画の具現化」をめざして早く一人前の副校长にならなければいけないと考えている。具体的に言えば、生徒が卒業式の時に「自分は、高校選びに成功した。」と言って喜ぶ姿を見られるような学校作りの策を校長の経営方針の下で考えることである。

その理想を実現するには、人材育成。教職員の力を最大限に發揮させることが大切である。いかにして発揮させるかがとても難しいことがあるが、そのことに向かって仕事をしていくこ

とが今は充実していてとても楽しい。

私が理想とする副校长像となる先生（かつての上司）は、「プリント1枚渡すときでも足を運んで届けろ。」とか「一人ひとりの教職員に誠意をもって接すること。」「仕事をふる時には、丸投げでなく、昨年の起案を元にしていつまでにこのようにまとめてほしい。というようにしなさい。」とかアドバイスされたことが今では大きく活きている。

新たに感じたことは、副校长の立場としての言動には注意しなければならないということである。生活指導主幹の時のような言動とは重みが違う。校長がバックに控えているが、学校を代表しての意見としてとらえられてしまうこともあるということを認識しなければならない。

学校経営をラグビーで例えると、校長が一番サイドにいて長いラインを作っているようなもの。校長を破られてしまえば、チームは負けである。だから校長の方針を理解しながら、難しい局面で極力校長にパスするようなことがないように二人の副校长と主幹で頑張っている。

## 副校长としての8か月

高 幹明（墨田工業）

この原稿を書いているのが12月2日(木)、約8か月がたちました。

着任前の私は、校長・副校长先生との引継ぎ面接で、「来年度は、10月に110周年記念式典がある、4月になれば早急に具体的な準備を進めていかなければならない。」等とうかがい、果たしてその時期まで副校长としての職務を継続できているのかと、不安ばかりが募る日々でした。

着任当初は春季休業中でもあり、部活動等の関係で先生方の出張・振休用個人ファイルが、提出箱に連日多数積み重なる状況に、副校长としての不安感や緊張感を感じる余裕もなく、事務処理に忙殺されていました。しかしまずは焦らずに、その日すべきことを確認した上で職務をこなし、その日一日一日を乗り越えることを目標としました。次は1週間を目標に、その次はゴールデンウィークまでの1か月間を目標にと、徐々に職務に対する視野を広げて行こうと

心がけました。

2週間ほどすると、日々の職務をこなしていく中で、副校长としてのリズムが少しずつ感じられるようになりました。副校长の主な職務である、学校経営計画を具現化させるために学校長の指導を受けながら、自らも本校の課題を抽出・考察し、教職員に対し組織的な解決策の具現化を促すことや、日々の服務等の事務処理を迅速に処理すること、あるいは TAIMS への対応力を向上させ、TAIMS メール文書を迅速に理解し、必要に応じて担当分掌主幹・主任教諭へ具体的な指示を出すこと等にも、徐々にではありますが対応できるようになり、すべての先生方の氏名も服務処理を行う過程において 3 日程度で覚えることができました。

この間、特に体をこわすこともなく、曲がりなりにも職務を遂行できたことは、校長先生をはじめとした職場の先生方等、職場環境に恵まれたことと感謝しております。

都立高校の先生方の資質・能力は非常に高く、その力は学校を活性化させていく上でもっとも重要な要素であると思います。先生方の力を結集し、学校全体で活性化を図ることができるように、仕切り役としての副校长の役割は重要です。

私自身も、副校长先生方との情報交換等を重視し、仕切り役としての力を身につけていきたいと考えておりますので、今後ともご指導をよろしくお願ひいたします。

## 副校长になって

笠原 聰（神津）

多くの先輩副校长先生からご指導をいただき、これまで、なんとか毎日の仕事をこなしてきました。朝、校内を巡回して異状がないか点検することから仕事が始まります。島なので出勤簿の押印で教員の出勤状況を確認します。全員での職員打ち合わせが終わった後で、校門に立って登校する生徒を迎えます。学校の目の前が海なので、強い海風にふかれながら生徒が登校してきます。生徒に朝のあいさつをするのが毎日の楽しみです。生徒数が少ないので、すぐに顔と名前が一致しました。同じ苗字の生徒が多いので下の名前で呼ぶということも島ならで

はです。

都内への出張があれば、前日の朝 10 時に学校を出ます。そして東京に着くのは夜になります。その日は船に乗るだけで一日が終わってしまいます。翌日出張を終えて夜 10 時の船に乘ります。船で 1 泊して翌朝に島に戻り、船を降りて、そのまま学校へ出勤します。一つの出張で 2 日間は学校を空けることになります。そのため、あらかじめ仕事の指示や段取りを組んでおかないと困ることになります。天候の関係で船が欠航することもあり、ある月の出張では予定通りに島へ戻れなかったこともあります。

本校では養護教諭がいないため、具合が悪い生徒や怪我等への対応は学校全体で行っています。養護教諭の仕事については細かい点がよく分からぬいため、副校长としてとまどうことが多くありました。

神津高校は来年創立 40 周年を迎えます。今は、その周年行事に向けて準備を進めています。私はこれまでいくつかの学校で周年行事や開校式典に関わってきましたが、島で行うということで、これまでの経験だけではうまくいかないことや分からぬこともあります。どうかこれからもいろいろご指導いただきますようお願い申し上げます。

## 早 9 か月

北江 繁治（大島海洋国際）

現任校の内示を受けたとき、副校长の職務の大変さより家族や生活面のことを考えました。1 日でも早く大島へ行き、学校や教職員住宅を確認したい思いました。前任者がオーストラリア語学研修引率のため、大島で引継ぎをしたのが 3 月 30 日でした。住宅も見せてもらい、生活に必要なものや譲ってもらえるものを確認しました。帰り際、校長からのお言葉「ひとつお願いがある。遅くまで仕事をしないこと。」には、着任以来甘え続けています。発送から日のない中でも、運よく荷物は 4 月 1 日の夜に配達され、初日から住宅で眠ることができました。

大島町の人には普通でも、私の感覚では暴風続きの 4 月の新年度・新生活が始まりました。すぐに、始業式・入学式と校舎は大島在住の生

徒や都内から帰舎した生徒の活気に満ちていきました。授業や部活動などは都内の学校以上に特色があり、私の教職経験もここに極まったと感じたほどです。

本校は、都立高校唯一の寄宿舎を持つ学校です。教員は学校勤務に加えて、舎監業務にも従事します。勤務時間の管理や寄宿舎への出張命令・振替などは、都内の学校では経験できないことです。また、私自身を含めた教員の出張は地内・地外に加えて海外もあります。旅行命令の起案や中部学校経営支援センターへの提出も、4月から全開状態でした。

本校独自の教育内容は、大島丸に乗船しての航海学習です。年9回の航海学習では、乗船式・下船式があります。大島に居れば何をおいても参列し、校長の代理でいきつすることもあります。生徒・乗船教員・船員の苦労に敬意を表し、全員の航海安全を祈念するためです。

私自身も5月に、2年生とともに韓国・釜山へ行きました。船酔いしながら船の仕事をする姿や上陸して国際交流・異国の料理を楽しむ様子を見ると、本校ならではの青春の姿があると感じました。9日間も学校を空けると、未決の書類や未読のメールがどれほどたまるか痛いほど分かりました。経営企画室担当者とは「多かったね」と声掛け合っています。

経営企画室の朝の打合せには毎回出席し、職員室打合せの内容や副校长としての連絡をしています。経営企画室とのコミュニケーションも円滑です。昼食は経営企画室で注文してもらいます。野菜不足解消から毎日同じメニューにしていたため、注文表にはあらかじめ「野菜炒め」と印刷してくれました。

日常的な業務では、教員に対してはその場での対応を心がけています。副校长室を撤去するなど風通しもよくなりました。よく言われる地域連携では、仕事や交流事業が向こうからどんどんやってくるため、こちらからも案内を持って島内を回ります。広報活動では中学生・保護者に3つの覚悟を求めることが大事な仕事です。寄宿舎・船・後戻り（転学）しづらい国際学科ということを承知して入学する覚悟です。生徒が納得して学校生活・寄宿舎生活を送り、本校での3年間を全うしてもらうためです。

早9か月です。住宅から徒歩2分の通勤や午

後6時40分には退勤する生活も確立してきました。閉店の7時前に大島や近海の美味しい魚を買って、食生活を楽しんでいます。これからも、校長・舎監長（寄宿舎勤務の副校长）はじめ教職員と協力して、「生徒が誇れる学校づくり」に微力ながらまい進していきます。

## 都立中高一貫教育校に着任して

柳澤 忠男（桜修館中等）

今年度4月に副校长に昇任し、桜修館中等教育学校に着任した。中学校籍の私が都立学校の副校长として赴任することは異例なことであろうと思う。事実4年前に両国高校附属中学校の開設準備にかかわっていた時、当時の校長、副校长からは教員については将来的には高校籍で固めていく構想であるということを聞かされていた。都立高校改革で多くの学校が再編されていく中、「高校籍教員の働く場が狭まってしまうことを考えると当然かもしれない。」と開設準備室の同僚と話し、納得していたものだった。そんな中での開設5年目を迎えた桜修館への着任辞令は私にとって大変驚かされる出来事であった。

本校は公募で教員を採用する学校であり、中高一貫教育校で働いてみたいと考える教員が高校、中学両方から異動してくる。そのため、義務教育ではない高校と義務教育段階である中学の文化の違いは大きく、それを接続して1つの学校にした中等教育学校では生徒指導1つにしてもさまざまな意見があり、共通理解を図っていく必要がある。また、他の中高一貫教育校の多くが母体校の校名を受け継いでいるのに対し、本校は母体校の都立大学附属高校の名前を変え、別の学校として出発しているため、母体校の制度との整合性も考えつつ、新しい取り組みを一からつくっていく必要がある。毎年異動者が入ってくる中で、どう学校のコンセプトを伝え、ブレのない基本方針を貫いていくかという難しさがある。

しかし反面、今までにない新しい学校をつくりていく楽しみがある。さらに、学校現場には近くに生徒がいて、反応や成果がすぐに見える。取り組んだことの手応えがすぐに感じられる喜

びは何よりである。今後、困難な状況に直面した時も生徒の明るい表情を支えに、物事を前向きに考えて職務に当たっていこうと思う。

また、私がこの学校に配属された使命の1つとして、前期課程生（中学生）に対する指導や前期課程（中学校）の教育課程編成等について提言していくことがあげられる。学習指導要領の改訂等、教育の変革期に当たり中高一貫教育校が都民の期待に応えられる魅力ある学校となるよう力を尽くしていきたい。

さて、都立学校の副校長会は、私の前任の区市教委での副校長会から見ると規模も大きく、なかなか一人ひとりの先生方とふれあう機会も少ない。定時制、専門学科、進学重点校等、さまざまな形態の学校があり、校内事情もさまざまである。何か月か連絡会等に出させていただいて、同じような形態の学校同士で情報交換ができる機会がもっとあれば心強いと感じた。経験豊富な諸先輩方にご指導いただき、一日も早く学校を支えられる副校長になりたいと思う。

### 副校長になって

菅 勇真（大島）

平成22年4月15日午前、都庁にて辞令交付、同日午後、ジェット船にて大島岡田港到着、そのまま大島高校に向かうというあわただしい赴任から9か月が過ぎました。着任時、大島に上陸するまで、大島は二度目の赴任となるので「何とかなるだろう」と考えていました。しかし、職員室で高木校長先生から副校長として紹介された私は、その瞬間、頭の中が真っ白になり、すっかり動揺して挨拶も満足にできませんでした。その姿は、教職員の皆さんに、何と頼りない副校長だらうと先行きの不安をかきたてるのに十分であったと推測されます。案の定、あの副校長に任せていたのでは心配だ、自分たちで何とかしなければいけない、という雰囲気が職場に広がりました。教職員の皆さんには、私が何も言わなくても、自らの役割を理解し、校務を円滑に進めてくれています。その心ある教職員の皆さんのお優しさに私は救われますし、感謝もしています。同時にその先生方の心が大島高校をして、生徒が明るく元気に生活できる学校に、

教職員が健康で笑みを絶やさない学校にしていけるよう、私が力を尽すべきなのだと強い思いを抱きました。

大島高校は、中学生からは「憧れを持ち入学したい学校」、保護者からは「入学させたい学校、入学してよかったですと思える学校」、地域からは「応援したい学校」を目指しています。そのためには、学ぶ喜びを感じることができる楽しい授業、活動が活発なだけでなく成果も上がる部活動、参加してみたいと思える魅力ある行事、などを築いていくことが大切であると私自身は考えています。大島では、今後、小中学校に在籍する児童・生徒数の減少が予想されます。これは大島高校の入学者数が確実に減少することを意味します。その影響を真っ先に受けるのが部活動です。結果を残してきた野球部や女子バレー部などの伝統ある部活動さえも、部員数不足で大会参加が不可能ということになります。部活動以外にも、授業そのものだけでなく、学校行事などの教育活動全般、ボランティア活動等の地域への貢献などのあらゆる面で、この生徒数減少が影響します。生徒数の減少は大島高校の存立そのものにかかわる大きな問題です。

この危機的状況に臨み、大島をこよなく愛し、大島高校の発展を誰よりも一番強く望む校長高木先生とともに歩めることに、私は今大きな喜びを感じています。本校の希望の星となる生徒をどのように育てるのか、また、教職員の力を本校の発展にどのように結びつけるのか、副校長としての私の責務は決して軽くはありません。しかし、その重みに負うことなく、与えられる試練をよき経験と思い、大島高校のますますの発展を目指して、組織として取り組むべきことを一つ一つ堅実にこなしていきたいと思っています。そのためには、まず健康であること、そして笑顔を絶やさないこと、大島を誰よりも愛すること、だと思っています。

### 感謝の日々

杉浦 文俊（北園）

平成22年4月に都立北園高等学校に副校長として着任いたしました。

管理職候補者のジョブローテーションで5年間教育行政おりましたので、内示を頂いたときには、久しぶりの学校現場に戻ることに、期待と不安が入り混じったものでした。

前日の夜遅くまで、本庁で引継ぎの書類を作成していましたので、正直言って4月1日の朝、「今日から副校长だ」という実感も薄く、まだ誰もいない職員室の副校长席に座り、目の前の決済箱にある休暇簿の「決定権者」の欄に印鑑を押すときになって初めて、その責任の重さを実感し、身が引き締まる思いでした。

企画調整会議では、その構成メンバーの中で副校长が一番年下であり、全校集会で紹介はあったにせよ、校内を歩いているときでも生徒から「先生は何を教える先生なんですか」と聞かれることや1,2年の校外行事に引率にいけば、「旅行会社の添乗員」と勘違いさせるようなそんなことが、5月まで続きました。

年度当初の副校长の仕事は忙しいとは、聞いていましたが、本当に色々なことを処理していくなくてはならないときに、頼りになったのは、本校の7名の主幹の先生方でした。年下にも係わらず「副校长さん、副校长さん」とさりげなくフォローをしてもらい（今も続いているが…）、本当に感謝、感謝です。

年度の当初は、自席でコーヒーを飲む余裕もありませんでしたが、夏ごろから、若干の余裕が出てくると、耳に心地よく響くのは、生徒たちの声でした。授業観察で教室に行くと「副校长先生こっちに座りなよ」と声をかけてもらえるようになり、改めて学校現場のよさを実感しています。

こんな頼りない副校长として、スタートしまして10か月目を迎えますが、ここまで、何とか職務を遂行できたのも、校長を始め教職員のスタッフ、PTAや地域の方からの支えがあったからです。また、月1回の副校长連絡会では、先輩の先生方から色々と教えて頂くことが多く、多くの方々に本当に日々感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れずにこれからも北園高校の発展に寄与していきたいと思います。

どうぞ御指導頂けますようよろしくお願ひいたします。

## 副校长に昇任して想うこと

生田 武美（王子総合）

平成22年4月北地区総合学科高校開設担当副校长、10月14日に正式名称が都議会で認められ王子総合高校副校长に任せられました。

思えば、管理職候補になった19年4月はそのまま現任校にとどまり、周りの教員からは「いつから副校长になるのか？」という声をかけられ私もいつ昇任するのか気になっていました。

管理職候補の2年目の20年4月、この年は主幹として「教務部」を初めて任せられ、入選や教育課程・成績処理・補欠募集・年間行事計画など教員生活の中で初めての教務部を経験しました。それまでは担任か生活指導部・部活動しか経験していないかった私にはわからないことがいくつもありましたが、幸いにしてそんな素人教務主任に当時の教務部の先生方は非常に協力的で大変助かったことを思い出します。

管理職候補3年目の21年4月は北地区総合学科高校開設準備室に主幹教諭として配属が決まり、副校长に昇任する覚悟でいた私にとっては複雑な気持ちで飛鳥高校の一室に通うことになりました。この1年間、副校长がいない開設準備室の中で校長先生は副校长の業務も兼務しながら私に管理職候補として必要な知識や業務を実践的にご指導してくださいました。

そして管候補になって4年目の22年4月、副校长として昇任しました。

実際に副校长の職務として、『校長を助け、校務を整理し』とあるように、校長の学校経営を理解し、その実現に向け方策を考え、実行しなくてはいけません。特に学校改革推進計画の中で新しく開校する本校の役割には、都教育委員会をはじめ地元からも大きな期待がもたれています。

学校を創るにあたり、『北地区総合学科高校基本計画検討委員会報告書』をもとに、校章・校歌をはじめ新しい教育課程を編成していきます。

王子総合高校は、私が経験してきた普通科高校とは違い、多様な生徒を受け入れその個人の持っている能力に気付かせ将来の進路選択能力を伸ばしていく学校です。そのため多くの選択科目や実習授業を設置し、本校の特徴を創りだしていくという創造力と実行力が必要とされています。

います。現在教員 5 名で準備を進めていますがそれぞれ自分の経験をもとに今までの学校のやり方を続けようとしてしまいます。しかし、学校改革を進める本校としては、今までの発想にとらわれない学校づくりを目指しています。副校长として『学校改革』のもと校長の学校経営を教員に徹底させることには苦労します。

朝は早く、夜も遅くなってしまいますが体力では負けられません。服務管理、教員の指導育成、溜まついく資料の数々、学校経営に関する校務等さまざまなことで自分の能力を超えた仕事が求められています。しかし、自分で決断した副校长への思いを実践し、教員になった時の初心を忘れずに日々の学校生活を充実させていきたいとこの原稿を作成するにあたって決意を新たにしたところです。

校長先生や 18B の仲間、管理職の先輩や指導主事の皆様そして家族に支えられながら、平成 23 年 4 月開校に向け副校长として周囲の期待に応えられるように校長・教職員とともに努力をしていきたいと考えます。どうぞ今後もご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ致します。

### 新米副校长悪戦苦闘奮闘記

高橋 秀信（武蔵丘）

「副校长！」と呼ばれても、びんと来なかつた 4 月から、もうすぐ 1 年になろうとしています。情けないことに、仕事に振り回される毎日です。「倒れてたまるか！」学校から駅への道すがら、毎日呪文のように唱えています。大学時代の柔道部の練習に比べればどうということはない。自分にそう言い聞かせながら、夜のホームでドーナツを 2 個食べる日々が続いた 1、2 学期でした。

TAIMS パソコンの電源をいれ、コーヒーを飲む頃になると保護者からの電話対応や先生方の年休の処理などで、あっという間に時間が過ぎます。校長は昇降口で生徒の登校指導。「俺も行きたいな。以前は毎朝正門で生徒をからかつたり、怒鳴つたり・・・」どうしてこんなに自分のペースがつかめないのでしょうと自問自答の毎日です。常に人のペースで動く毎日。散々わがまま言って人に迷惑かけた分、仕方ないか、

と自分を納得させます。とにかく困っているのは TAIMS パソコンに入ってくる膨大な量の調査です。これは異常です。「もっと現場の状況を考えてくれ」という愚痴は心の中にしまって、今日も「締め切り過ぎてる！」。何でこんなに要領悪いの？能力低すぎないか？この仕事向いてないんじゃない？もう一人の自分がささやいています。

「ちゃんとハンコ押してくれ。記入漏れあるぞ」、「部活動の届けは事前申請だぞ」、「振り休簿の記入の仕方が違う。ちゃんと説明しただろー」、「書類の提出〆切守れー」、「何のんびりこいてんだ。もっと急いでくれ」、「タイムスなんかいらないよ」、「昼飯ぐらいゆっくり食わせろ」、「何でこんなに調査ばっか？見落とすでしょ。当然でしょ」「あー、この調査締め切りすぎてる。やばい。催促のメール來てる」、「飲みに行きてー」、「鮎釣り行きてー」、「眠い、思い切り寝たい」、「生徒と絡みたーい」「子供と遊びたあーい」・・・いつまでたっても要領が悪く、仕事が遅い私の頭の中ではいつもこんな言葉が飛び交っているのです。

本校の課題は、学力の向上と進学実績を回復させ、中堅上位の進学校としての地位を確立することです。全人教育の推進を掲げ、学力、生活、進路、部活動、学校行事などあらゆる面でこ入れを行い、新しい取り組みを行ってきました。朝学習、自学自習ガイダンスなどは今年度から新しく始めた取り組みです。今年度、学力向上開拓推進校に指定され、生徒の学力分析をもとに学力を向上させるため、入試の分析と 2 回の学力調査を実施しました。様々な課題はありますが、校長を軸とした推進体制が評価され、来年度からの重点支援校に指定されました。また、カリキュラムの改定を行う中で、4 月からの隔週土曜授業の実施も確定しました。武蔵丘は今、大きく変わろうとしています。大きな枠組は整いました。今後は、その中身をどう充実させていくかが問われます。課題山積ですが、やりがいのある仕事です。

「夜明けの来ない夜はない」・・・いい言葉だなと思います。そう思える影には先生方の協力があります。遅くまで一緒に仕事をしていると、校長のサポートと同時に、貴重な人材を育成するという責任の重さをひしひしと感じます。今

は校長頼りですが、校長が安心して留守に出来る学校にしなくてはいけません。

最近心の中で唱える言葉は「今に見てろ。もうじき『俺の学校』にしてやるぜ！」に変わりました。

### 副校長になって

渡邊 隆（練馬工業）

早いもので、4月に都立練馬工業高校に副校長として着任し、あっという間に10か月が経ちました。学校に来る毎日が新鮮で、慌ただしくも充実した日々を送っています。最初のころは、挨拶をし通り過ぎると、「今の誰」と言われる声が聞こえて寂しい思いもしましたが、授業参観や部活動を見学したり、様々な学校行事等で交流を図ることで、話しかけてくれる生徒も増えてきて、うれしい日々となっています。また、学期に1回、朝礼で講話をするという貴重な機会を設定していただいています。生徒たちの期待に応えられるよう、唯一の授業であると思い、必ず原稿にまとめて講話を臨んでいます。話の後、「副校長、今日の話、良かったよ」と声を掛けてもらい、嬉しくなるとともに、勇気づけられています。

私は、大学を卒業して、「地に爪あとを残す、人のためになる仕事として土木技術者を志望」し、建設会社に就職しました。エンジニアとして、様々な公共事業に携わったこと、後世に残る構造物を多くの人と協力して造った喜び、たくさんの人と出会えたことは、誇りであり、貴重な財産となっています。そして、民間企業に17年間勤めてから教員となり、指導主事・学校経営支援主事として教育行政にも4年間携わることができました。今までの経験を生かして、エンカレッジスクールとして5年目、第二ステージを迎えた本校の教育活動の一層の充実・発展に努めています。

本校に着任してから、予期せぬ事態が続いても、校長先生、副校長先生（二人副校長）をはじめ、多くの先生方や経営企画室の方々に助けられています。毎日行っている朝の綿密な打合せでは、管理職と経営企画室長で情報を共有しています。また、工業高校で唯一のエンカレッジ

スクールとして、生徒が入学して良かったと思える学校づくりに向けて、様々な教育活動を行っています。先生方も、多様な生徒に対し、個に応じた指導、繰り返しの指導を粘り強く行っています。毎日遅くまで、生徒のための教材づくりなどに取り組んでいる姿や、何事にも全員体制で臨んでいる姿勢には感心しています。教職員一丸となっていることで、生徒も、着実に成長しているという実感があります。

副校長として、日々の業務に追われながらも、本校のこれまでの成果と課題の検証に取り組むことで、責任の重さを痛感しながらも、とてもやりがいのある仕事であることを再認識しています。これからも、教職員とのコミュニケーションを大切にし、生徒のやる気を励まし、可能性を引き出して伸ばし、将来の夢や希望を実現する学校づくりのために、全力を注いでいきたい。

今後ともよろしくお願ひいたします。

### 副校長に昇任して

武田 一郎（第四商業）

副校長に昇任して数か月が経ちました。あわただしくも、自分の中では、充実したこの期間でした。

平成22年度、4月当初の昇任ではなく、この一年教務主幹として来年度の昇任に向けての準備期間とすべく、どちらかと言えば今までどおりの教員生活で特に気が張り詰めたものではありませんでした。

そして、体育祭を控え、6月の授業公開に向けて準備を進めていたところ校長室に呼ばれ、昇任の連絡をいただきました。

着任までは2週間あまり、前任校の整理と引き継ぎ等に追われて、着任準備などはまったくできず、その日を迎えることになってしましました。特に、後任の教務主任を任せてしまつた先生には大変なご迷惑をおかけすることになってしまいました。

6月16日着任校では、着任したその日に職員会議があり、先生方への紹介もありましたが、職員会議の司会も行い、翌週からは、授業観察があり、授業公開週間が始まり、副校長として

のルーティンワークが何やら考える間もなく時間に追われる毎日でした。

当たり前の話ですが、当初は先生方の顔と名前が一致せず、相談しようにもどこへ行って、誰と相談すればよいか、難しい日々がありました。しかし、2週間もすると期末考査が始まり、先生方の動きもひと段落して、コミュニケーションを図るチャンスと見て積極的に声掛けを始めました。どんな些細なことでも話題に取り上げ会話を持つ努力をしました。また、どんなに忙しいときでも、校長室に呼ばれたその移動途中でも手を止め、足を止め、話を聞くようにしてきました。副校长としての仕事は半人前でもこの先生方の話を聞く姿勢は常に持っていたいと思っています。

校長先生の考えをいち早く適確に察して教員に周知し、学校経営計画の具現化に取り組むためにもこのような先生方とのコミュニケーションを図るということを大事にしていきたいと思います。

ただ、コミュニケーションを図ったからといって何事も仕事がスムーズに進むとは限らず、なかなか難しいところもあります。

また、先生方だけでなく、地域や保護者とも連携を図らなければ学校の目指す教育活動には結びつきにくいものとなってしまうと思います。

何事も言うは易し、行うは難し。

その第一歩として、先生方と共にコミュニケーションを図り、問題意識を共有して教育成果を期待して、期待できれば先生方もやる気になつてもらえると信じて頑張りたいと思います。

## 副校长に昇任して

高野 宏（永山）

副校长に昇任して、はや9か月が経過しました。着任以来、校内外では様々な出来事があり、対応に追われる毎日でした。臨機応変の判断が求められる案件を網渡りの心境で乗り切り、膨大なルーチンワークに押しつぶされそうになりながらも、教職員の協力に支えられ、何とか今日にいたっています。

また、新補の副校长といえども学校経営上必要とされる能力は経験豊富な副校长と変わりは

なく、足りない部分は、校長先生の指導を仰ぐとともに、5人の主幹教諭に意見を求めて補っています。

本校は、若手教員の多い職場で、採用4年目までの教員が12名おり、校務や保護者対応等、様々なことについて私のところに相談にきます。教育に対する彼らの真摯な姿を見ていると、自分も初任者時代の気持ちがよみがえり、新たな気持ちで仕事に取り組むことができます。自分も諸先輩方に育てられたことを思い出し、微力ながら後輩たちに経験を伝え、育てていきたいと思います。最近は、ベテラン教員も報告・相談にくるようになり、勤務時間中になかなか自分の仕事ができないことが悩みの種です。

本校は過去において、管理職と教員の間の連携がうまく取れなかった時代があり、学校運営は一部の教員が担っていました。このような経緯から、現在でも仕事が一部の教員に集中している状況があります。現在は、若手をはじめとして優秀な学校運営に協力的な教員が多いので、一部の教員に集中した仕事を分散して個々の力を発揮させ、それを、いかにして集団の力としてまとめていくかが課題と考えています。

また、職員の健康管理にも悩んでいます。非常に仕事熱心な教員が多く、夜8時過ぎまで残って翌日の教材準備をする教員、土日も休まず部活指導を行う教員など、生徒のため我が身を顧みず教育に取り組む先生方を見ると本当に頭が下がります。このような先生方が本校の教育を支えていることは間違ひありませんが、先生方がいつか体を壊すのではないかとはらはらしています。いかに先生方に休みを取っていただくか、健康を害することなく本校の教育に力を発揮していただくかに留意しています。

忙しい毎日ですが、日々充実しています。教員がやりがいを感じて教育に取り組み、生徒が素質を開花させ、自己の可能性を広げられるような学校になるよう、副校长職を楽しんでいきたいと思っています。

## 新任副校长として

深澤 真澄（八王子桑志）

着任初日、上野の東京文化会館で辞令の交付

を受け、昼食を取る間もなく学校へ向かった。学校に着くとすぐに新任教員のオリエンテーションが始まった。

着任の行事が一通り終わり、校長室での打合せを終えて職員室の自席に着くと、春季休業中ということもあり未決箱から休暇・職免処理簿等のファイルや書類が山になって溢れていた。印漏れや、記入ミスを訂正してもらおうとするのだが先生方の名前と顔が一致しない。声をかけたくても広い校舎内にバラバラに散ってしまってなかなかつかまらない。覚悟はしていたものの処理に予想以上に手間取り、呆然とした。

何かをやろうとして動き出すたびに、ことごとく仕事が止まった。また先生方から矢継ぎ早に様々な質問や相談を受けるのだが即答できるものはほとんどなかった。幸いにも本校は二人副校長制のため、隣に行政系の副校長がいてくれたのは大変心強く何でも質問したが、それでもこの有様だった。初日の仕事を終えたとき 1週間分以上の仕事をしたような気分だった。

着任当初は1週間が1ヶ月くらいに、1ヶ月が半年くらいに感じた。夏季休業に入る頃になってようやくペースがつかめ、本来の時間の感覚が戻ってきた。

1日のサイクルは、朝は5時に起床し、7時過ぎに学校に入る。夜は10時半に学校を出て自宅に着くのは午前0時過ぎという毎日が続いた。2学期以降帰宅時間は、やや早まったものの基本的にこのサイクルは変わっていない。

ハードではあるが産業科という特色ある学校で、生徒の成長と学校の発展のために充実した日々を送らせていただいている。また先にも述べたが、副校長1年目にして、行政系の副校長とペアを組ませていただいたことは色々な意味で貴重な経験となった。さらに来年度は民間出身の校長をお迎えすることが決まっており、民間出身の校長の下で仕事のできる良きチャンスをいただいたと思っている。

何はともあれ、ここまで何とかやってくることができたのは本校の関係者はもとより、お世話になった西部学校経営支援センターの皆様、地区の校長先生方、先輩・同僚の副校長の皆様のお陰と感謝している。

来年度は「副校長としての視野」と「校内外のコミュニケーションの輪」をさらに広げて、

一人前の副校長として成長していきたいと思っている。

「皆様今後ともよろしくお願ひいたします。」

## 副校長に昇任して

鈴木 留美子（府中東）

平成22年4月1日、東京都立府中東高等学校の副校長に着任いたしました。

管理職候補としての1年目は、全く違う職業にトラバーユしたかのような指導部高等学校教育指導課での日々でした。戸惑いながらも何とか慣れたと思った矢先、今度は、学校経営支援センターが開設するという立ち上げの時に西部学校経営支援センターに異動になりました。2年間、試行錯誤を重ねながらも、27校34課程を担当し、仕事は基本的には高指課の業務に近いものでしたが、高指課では経験できなかった、学校現場にとても近い立場で学校を支援し、高指課業務とはまた違った総務部や人事部等の他部の業務も経験するという、非常に充実したそしてとても楽しい毎日を送らせていただきました。

ところが、3年目の終わりに、希望していなかった学校現場への主幹教諭としての転出という内示を受け、都立多摩高等学校へ異動しました。

多摩高校では、学校の教員時代ほとんど経験のなかつた「教務」担当主幹教諭ということで、再び、戸惑いの毎日となりましたが、順応が早い得な性格ゆえ、あっという間に慣れ、しばらくぶりに吹奏楽部顧問として棒を振り（もちろん指揮棒です。竹刀ではありません）、かわいい（？）生徒たちと戯れながら、楽しい日々を送っていました。しかし、支援センターでの生活が忘れられず、戻りたいと言い続けるうちに2年が経ち、昨年の3月に、西部所の学校経営支援主事時代担当した府中東高校の副校長という内示をいただき、愛する生徒たちに別れを告げ、杉の花粉舞い飛ぶ青梅の地を後にいたしました。

府中東高校の副校長という内示は、正直言つて驚きました。1学年8クラスの大規模校で、職員数も多く、初心者マークの副校長で務まるか不安でしたし、自分が学校経営支援主事時代

に学校訪問をすると、あの当時、かなり少なくなっていたいわゆる『やまんばギャル』がまだ見受けられ、生活指導に手がつけられていない学校というイメージが強かったからです。

しかし、赴任してみて、学校の雰囲気が全くイメージと違うのに驚きました。金や銀の髪の生徒は全くおらず、茶色もごく少数という感じでしたし、大きな声で明るく元気にあいさつしてくれる生徒たちに、数年でこんなに変わったかと感動すら覚えました。

まもなく、1年が終わろうとしています。

様々な課題を抱え、試行錯誤しながら、何とかやってこられました。

周囲の先輩副校長先生や学校経営支援センターの方々に助言や励ましをいただき、支えていただいたおかげでやっと1年が過ごせた感じです。

『明るく楽しく元気に』をモットーに、これからも頑張っていく所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻の程お願いいたします。

### 副校長になってからのつぶやき

杉本 悅郎（武蔵附属中）

#### ・武蔵とは

母体校の都立武蔵高等学校は府立第十三高等女学校の設置から数えて創立70周年を迎えた伝統校です。また、着任した附属中学校は平成20年度に中高一貫教育校として開校した3年目の学校です。中高一貫としての武蔵の完成にはまだ3年かかります。

#### ・同じ中高一貫校でも

平成16年度の1年間、東京都教職員研修センターにおいて、教員研究生として「中高一貫教育校における教養教育に関する研究」を主題とした研究に参加しました。また、翌年度から都立桜修館中等教育学校の開設準備室と開校からの3年間を勤務しました。しかし、母体校である武蔵と都立大学附属とでは学校の伝統や体制も違い、同じ中高一貫教育校でも併設型と中等教育学校との違いなど、勝手が違い戸惑いの毎日でした。ちなみに6年間入れ替わりのない中等教育学校では適性検査（1000名前後の応募があり、以前は二つの会場で検査をやっていまし

た）を1回実施しますが、高校からも生徒募集のある併設型では適性検査の他に推薦と自校作成の学力検査があります。特殊な入選業務が多く結構気を使います。

#### ・中学生と高校生は全く別のもの

中学生と高校生は似て非なる生態をもっています。どこにでも何か疲れたような様子で座っているイメージのある高校生とは対照的に時間があればかけっこをしている元気な中学生。授業中でも自分の意見を聞いてほしくてしょうがない様子。これも発達段階の違いの一つなのでしょうか。

#### ・二人の副校長で

武蔵では校長は中高の両校を兼務し、副校長は中学校と高等学校にそれぞれ一人ずつ配置されています。二人の副校長がお互いに他方の学校を兼務しているので経験の無い私にとって大変心強いです。その上、高等学校の副校長が全国高等学校教頭・副校長会会長というベテランということもあり、疑問点に対して常に適切なアドバイスを受けることができ、毎日がOJTです。

#### ・生活が大きく変化

副校長と教諭の職の違いについては研修等を通じて分かったつもりになっていましたが、実際にその立場に立ってみると全く違うことに困惑しました。日々の授業や部活動の指導、夏の合宿や冬のスキー教室の引率などこれまでの教員生活で繰り返してきた仕事と全く別の副校長の職務へと変わり、生徒との距離がいきなり広がったような喪失感に似た空虚な感覚がなかなか消えません。皆さんはいかがだったのでしょうか。

#### ・今後は

中高一貫教育校の中学校の校務というのは区市立中学校のものと都立高校のものとも異なります。また、新しく作って行かなくてはいけないものがまだまだたくさんあり、入選・教育課程・生徒指導・キャリア教育など、分掌間や学年との校務分担についても課題があります。今後は校務を整理することなどで、先生方が生徒と関わる時間が少しでも確保できるよう努めていきたいと考えています。

## 副校長になって

木田 貴子（田無）

田無高校の副校長として着任してから9か月が過ぎようとしています。この間を表現するにしたら、長かったような、あつという間のようなという言葉がしっくりくる感じでしょうか。

4月1日の午前2時、前の職場での残務整理をようやく終え、帰宅。ほんの少しだけ横になり気分を新たにし、田無高校に向かいました。

学校に着くと、たくさんの生徒が明るい声で「おはようございます。」とあいさつしてくれました。この声を聞いた瞬間、新しい環境への不安が一気に吹き飛んでいました。今でも、毎日、生徒たちのあいさつに勇気付けられています。

着任して2日目、生徒が登校中に盗撮被害に遭いました。本人のみならず、警察や保護者への対応はもちろんのこと、支援センターへの連絡、教員への周知、登校している生徒への注意喚起などの確かな判断をして行動しなければならない場面がいきなり起こったのです。「あせらず、あわてず、迅速、正確に」と頭では分かっているのですが、いざ行動するととても難しいということを実感した出来事でした。同時に、後日、事故報告を提出するに当たり、時間の記録を正確にしておくことの大切さも学びました。

経験から学ぶことも多い毎日ですが、日々の仕事で役に立っているのが、指導部高等学校教育指導課の「副校長実務必携」です。月のはじめには「学校運営のカレンダー」で1か月の流れを確認し、服務管理、研修についてなど、解らないことがあるとすぐにページをめくって参考にしています。また、着任した際、校長から、「実務必携の根拠文書に当たっておいたほうがいいですよ」と言われました。10cmのファイル2冊分くらいあるので、とりあえず斜め読みしてインデックスを付けておきました。ある日、教員から、生徒の休学の取扱いについて相談されたとき、すぐに根拠書類を提示して答えたところ、「これなら保護者と話すとき、説得力があります。助かりました。」と言われました。「ああ、こういうことだったのだ。」と改めて実務必携と根拠の大切さを知りました。

最後になりますが、ここまでこられたのは、校長先生はじめ、田無高校の教職員の支えのお

かげだと思います。とても感謝しています。

## 副校長になって

早川 信一（多摩科学技術）

平成22年4月、多摩科学技術高校の副校長として着任した。着任の2日前まで部活動の発表大会に参加していたこともあり、副校長としての仕事の準備、意識をする間もなくその日を迎えた。

本校は、都立高校では2校目の科学技術高校で、4月に開校した。学校の全ての活動は新しく展開されるものであり、学校のシステムも確実に定まった状態ではないが、この時全てが動き出した。

正直なところ、この頃は新しい学校をどう動かすかを考えるより、人、予算、新校舎、情報の整理と調整などの事務作業に追われ、日々それらを何とかこなすだけといった状態であった。スタートした新しい学校へ着任したという新鮮さを感じる余裕は全くなかった。

当然、現状は何かに付け現在進行形の状態であり、多くのことが手探りの状態であった。ただ先生方は「副校長なら全てわかっているはず」とでも考えているのか、「とりあえず全てを副校長に聞きに来る」という状況であったように思う。今でも全ては応えられていない。

本校は、小金井工業高校の旧校舎からのスタートであるが、新校舎への準備は予想以上に忙しい。着任当日から、始めて見る新校舎の図面を何枚も広げた。各階・各教室、専門教科の実験室、特別装置と施設設備の状況の確認などにも余念がない。その後、事務担当者と先生方の要望を聞き取り、担当各署へ説明に出かけ、毎週1回の新校舎現場会議に出席している。その作業も現在最終段階に入った。そして、いよいよ今年の7月に新校舎への引っ越しが待っている。その他、初度調査・教材の調整、開校式典の準備など、新設校ならではの独特の業務が常に対っている。

また、小金井工業高校定時制と校舎を共有しているため、両校の調整も欠かせない。学校のスタンスが全く異なる二つの学校が同居している状態であるため、毎週行う2校連絡会は重要

で、新校舎への移動後の学校経営についても詳細な調整が必要になる。

新設校とはいって、普通の一つの学校として休むことなく毎日が過ぎていく。新たな学校づくりと同時に、当然副校長としての通常業務があり、あまりの仕事量に副校長の忙しさを改めて実感している。

最近やっと頭で考え、行動できるようになってきたように思う。生徒が満足でき、自慢できる多摩科技をつくるという先生方の目標は同じである。そのために学校をどのように動かし、先生方の力を最大限に引き出せるか、それを考えるのが私の仕事であろう。

このように慌ただしい10か月であり、まだ後ろを振り返る時間はない。しかし、ここまで何とか仕事が進められてきたのも校長先生をはじめ、ともに着任してきた先生方のおかげであると感謝している。

副校長として私自身が未熟なことは承知している。先生方の「とりあえず副校長に聞いてみよう」に少しでも応えられるよう頑張りたい。

## 地に足をつけて

清水 真（東大和）

4月1日、東大和高校に着任した。それまでの1年間は、総務部主幹として、学校経営を少しでも補佐できるようにと動いてきた。副校長としての視点を考えながら過ごしてきたつもりであったが、実際に着任してみると、毎日が新体験であった。東大和高校は校長・副校長とも前任者がそろって退職されたため、そろって新任という状況であった。

毎日、自分が何をやっているのかわからないうちに一日が終わっていった。自分が自信を持ってできることは、教員の顔と名前を覚えることぐらいしかなかった。業務と格闘しつつ、教員の特徴を探し続けた。右も左もわからぬうちに最初の一週間が終わった。そしてすぐに入学式。入学式では、教員の座席が特定されている。そこで最終的に覚えることができた。

東大和高校の特色は、部活動が盛んなことである。ゴールデンウィークの頃は、運動部の大会がたくさんある。自分自身が体育の教員とい

うこともあり、様々な種目の大会に足を運んだ。陸上部、男子バレー部、男子ハンドボール部が関東大会に駒を進めた。自分と同じく、体育出身である校長と手分けして応援にまわった。日常業務のハードさを忘れて応援できる楽しいひとときであった。

6月になり、さらに状況が変わった。男子ハンドボール部が高校総体で躍進し、都立高校としては37年ぶりに全国高校総体に東京都代表として出場することとなった。陸上部も出場を決めており、ふたつの種目が出場することになった。大変なことになった。自分は、選手としても引率者としても未経験のことである。しかも、開催地は沖縄である。いきなり問題が浮上した。特に大きいのは資金問題。沖縄は交通の問題があり、自由に帰ってくることができない。最低でも7泊を考えなければならない。校長の指導のもと、各方面に資金調達のために動き回った。そんなことをしているうちに、沖縄高校総体が終わった。

そして、次の課題が始まった。11月に創立40周年行事がある。4月の着任早々から記念誌については作業を続けており、8月には初稿があがった。同時に記念式典の準備が本格化した。招待状の発送から始まり、行事の進行や内容に作業は進んでいった。緊張をともなう儀式的行事であり、なかなか進まない。実施要綱を作つては直し、ということが繰り返された。

11月、記念式典が終了した。ここまで8か月、まったく地に足がつかない毎日であった。その後、2か月が経過した。やっと回りを見ながらの生活が始まった。自分なりに自分の役割を考えることができてきた。自分は学校の潤滑油であると考えている。

- 1 校長の意を汲み、全体に浸透させる。
- 2 教員の状況を把握して校長に報告する。
- 3 生徒の状況を把握して校長に報告する。
- 4 P T Aと学校間の潤滑油。
- 5 同窓会と学校間の潤滑油。

まだまだ、できないことが多い、校長に助けてもらつばかりである。特に、TAIMSの端末を見て、必要情報をつかむのが苦手である。現在の取り組みの場、東大和高校で精一杯教育活動に貢献していきたいと考えている。

## 自然の中の多摩高校

西野 良仁（多摩）

1月は青梅駅から朝日を背に山に向かって通勤している。山肌を照らし出す朝日が美しい。家を出るときはまだ真っ暗な世界。電車の中で、白昼と明けていく絶妙なコントラストを楽しむ。拝島からは下りの電車になるので乗客は少ない。上りのホームに列を成している人々を眺めながらの出勤である。電車の窓から見える多摩の山並み、秋川、秋留台地、多摩川、季節の移り変わりがはっきりわかるこの通勤経路を私は気に入っている。都心から約2時間、バーベキュー や川遊びに来るような自然環境の中に多摩高校は立っている。経度でいえば五日市高校のほうが少し西にあるが、多摩高校が東京の西のはずれにあることに変わりはない。

4月に多摩高校に着任して早10か月が過ぎようとしている。この10か月、私にとってはあつという間の出来事だった。とにかく目の前の仕事をこなすのに精一杯で、立ち止まって考える余裕がなかった。学校経営計画を具現化するためにしっかりと実行プランを立てたい、そのため教員と打ち合わせをしたいと思ってはいても、時間だけが過ぎていってしまう。校長先生からは、まず緊急性のあるものから対処しなさいと指導を受けた。副校长として、すべてをこなすことは難しいと実感した。

指導主事や支援主事はよく「ルーチンワークには慣れましたか。」と聞く。私は10か月たった今もまだ慣れていない。4月の自己申告書の電子化、9月の旅費システムと次々と新しいシステムが導入される。でも、使いこなせるようになれば仕事が楽になるはずだと言い聞かせ取り組んでいる。現在、困っているのが旅費システムの差し戻しである。メモは取っているものの（パソコンで処理しているのにメモを取るのはおかしいと思いつつ）いつの出張を誰にどのような理由で差し戻したのか、私自身が忘れてしまう。TAIMS上で確認すればよいのだが、聞いてみないと内容がわからない。再送信されないとそのままになっていたりもする。さらに、TAIMSの未読メールがどんどん溜まっていく。そんなときは、職員室の窓から外を見る。副校长席の左側にちょうど窓がある。窓から見える

青梅丘陵とそれに沿って走る青梅線。ストレスの解消には、これがいいようだ。

校長先生を始め、先生方、経営企画室職員の方々に暖かく迎えていただき、何とかここまでやってこられた。最近は西部学校経営支援センター支所への相談電話の常連になっている。支援主事や職員の方々に毎回丁寧に対応していただき、大変感謝している。皆さんに支えられているということを強く感じ、何とか多摩高校の役に立ちたいという思いでいっぱいである。校長先生の学校経営計画を具現化しながら一歩一歩、多摩高校を魅力的な学校に近づけていきたい。

## 顔を上げて

村山 正仁（福生）

文字通り、「顔を上げて」を心がけています。先生方が、私に声をかけるときに、必ずといってよいほど、「お仕事中に・・・」「お忙しいところ・・・」といった枕詞がきます。全くその通り、手を休める暇が無いのが現状です。私は、職員室にいるとき、殆どの時間「顔を下げ」て書類に目を通し、PCに向かって書類を書いています。先生方が私に話しかけるときに、もっと気楽に話しかけられるようにしなければと思っています。

4月1日、新任副校长となって、ようやく1日が終わろうとしていました。まずは順調な滑り出しと思ったとき、育休代替の先生から、「中学校から採用通知がきました、辞めます。」と突然言われました。昇任直前研修の演習に臨時的に任用教員が休職した場合には、という問題があったなと思いました。その時には、こんなことがあるのかと思っていたが、何があってもおかしくないのだと思い知らされました。とにかく、授業に支障が出ることはなんとしても避けたいと、始業式までに、せめて授業開始に間に合うようにと、一週間の間、無我夢中でした。校長先生、企画室長の力添えを得て、何とか代替教員の手配が出来、授業の開始に間に合いました。これが学校を支えていく管理職の役割と自覚しました。

その後も毎日、様々な調査や報告との格闘で

す。気づけば、回答期限が明日に迫っている、調査の回答の元になる資料を探し、誰にお願いすればよい物なのかを探り、机に向かい忙しくすごして毎日が過ぎてしまいますが、校内を回ると、生徒たちの生き生きとした姿、指導をする先生方の元気な姿が飛び込んでいます。何とか時間を作り、その機会を増したいと願っています。生徒や先生たちにもっと元気になつてもらうにはどうしたら良いか、何が出来るかを考え、実践していく管理職になれればと思っています。

最近、ようやく「顔を上げて」いる時間が増えてきました。仕事の多さと不慣れのせいで、まだまだ「顔を上げて」いる時間は短いままでです。先生方から話しかけられるとき、今も同じに枕詞がつきます。せめて忙しくない振りをしてでも、枕詞をなくし、気楽に話しかけてもらえる、そればかりでなく、自分から積極的に話しかけ働きかける副校长でありたいと思っています。

### 副校长としての10か月

西島 宏和（秋留台）

東秋留駅から20分弱歩くと秋留台高校に着きます。20分のうち、半分くらいは畠の脇の道を歩きます。夏は、トウモロコシやトマトが日々大きくなるのを見ながら、冬は高い建物があまりないので、遠くに白い富士山を見ながらの通勤となります。行きも帰りも空が大きく感じます。そんな通勤をしてはや10か月が過ぎようとしています。

昨年度までの勤務先は、都心に近いところでしたので、昨年度と比べれば、四季の移り変わりを肌でよく感じることができます。

また、秋留台は教員集団が若い。入都4年目未満の教員が全体の半数程度と多く、平均年齢も30歳代半ばと都立高校では比較的若いではないでしょうか。今年度から研修も若手教員育成研修となり、若手育成が喫緊の課題となる中、副校长が若手の育成のためには中心的な役割を担わなくてはならないと感じています。

教員が若いと学校での諸課題の解決への経験がないことや授業展開がうまくできないことが

難点となります。そこは副校长やベテラン教員が粘り強く教えていけば良いことだと思っています。反面、若い教員には機動力と素直さがあります。この若手の性質を利用しない手はありません。マニュアル世代ともいわれていますので、方法や目的をしっかりと教えれば、良く動いてくれます。

授業についても、授業観察をしてからの管理職からのアドバイスには、素直に受け止めてくれます。指導案の書き方から指導技術、授業展開、評価について、若手教員と協議をすることはなかなか楽しいものです。

時々、素直すぎて、思いもかけない行動となることもあります。また、TAIMSなどには、なんの抵抗もないようです。生まれた頃からコンピューターが身近に存在していた世代ですから、当然と言えば、当然かもしれません。

これから東京都の教育を担っていくであろう若手教員を一人前に育てて、次の学校へと送り出していくことが秋留台高校の副校长の使命ではないかと思っています。さらに、この中からも将来、管理職や指導主事になる教員が出てくるはずであると思いながら業務に取り組んでいます。

### 副校长に昇任して

北澤 良浩（東村山）

4月期待と不安のなか、東村山高校に着任しました。東村山高校は今年度からエンカレッジスクールとして再出発し、副校长二人体制になり、私が二人目の副校长として着任しました。

昇任したばかりの私にとって、同じ立場である副校长の先輩がいることは大きな安心感を持つことができました。二人体制は難しいという話も聞いていましたが、懐の深い校長先生の下、協力して職務に励むことができています。

毎日の業務の忙しさは想像を超越しています。もし、一人だったらどうなるだろうと考えてしまうことも多く、一人で学校の運営をされている先輩副校长先生方のご苦労を痛感しています。

東村山高校は教職員も新しい学校を作っていますという意欲にあふれ、1学期は順調に進んでいきました。生徒たちも意欲的に学校生活に

取り組み、1学期を終わって240名中、80名が皆勤という結果も出すことができました。

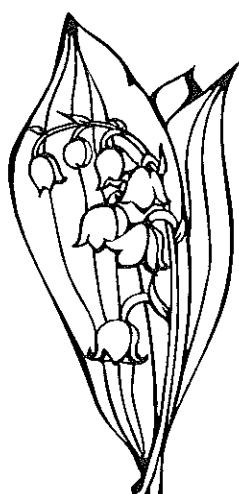
私は、1学年担当としてホームルーム合宿の企画・運営を行いました。富士山の麓、山中湖での合宿は農業体験を含め充実した合宿になりました。エンカレッジスクールでは体験学習を行います。11名の市民講師との連絡や体験学習委員会の段取りなども行っています。また、平成25年に行われる東京国体の強化部活動として、東村山高校がビームライフルとボウリングに名乗りを上げ、その担当として、顧問の決定、講師との打合せや予算・活動日程などの手配をしました。2つの部活動とも部員も集まり、順調に立ち上げることができました。東村山高校としてここ1、2年が勝負だと思っています。経営企画室の協力も得て、教職員・生徒を盛り上げて取り組ませていきます。

そんな中、8月末から9月にかけて残念な事件・事故が起こりました。究極の危機管理を経験することになりました。その際に学校経営支援センターや教育相談センターがすみやかにバックアップしてくださり、本当にありがとうございました。学校のスタッフだけでは対応できない事柄にも力強い支援をいただき感謝の一語につきます。今後ともよろしくお願ひいたします。

昇任1年目から、なかなか経験できることを経験させていただきました。二度と経験しないように先々を読んで行動していきたいと思います。

現在、もうひとつ貴重な経験をしています。事件のあと、授業を週3時間担当しています。副校長になり二度とすることがないと思っていたので不思議な気分です。生徒と触れ合う時間を楽しんでいます。

今後とも校長先生のご指導の下、よりよい学校を作っていくように努力していきます。また、先輩の副校長先生方のご指導をいただき、連携して職務に取り組んでいく所存です。よろしくお願ひいたします。



## 「高校教育の展望と課題」

講師 京都造形芸術大学教授 寺脇 研 先生

皆さんこんばんは、ご紹介いただきました寺脇でございます。こういうところに呼ばれるのは珍しいんですが、私の話などで大丈夫でしょうか。今日はその本を読んでいただければ話はしなくともいいんじゃないかと思いますが。鈴木文部科学副大臣、いろいろ噂には聞いているかもしれません、昨年9月に民主党政権が発足して以来、日本の教育政策を一人で動かしている人です。元々は民主党の文教部会のトップを務めていて、民主党の文教政策をまとめてきた人でもあります。もちろん大臣は川端文部科学大臣ですけれど、大臣は今まで教育の世界に係わっておられた方ではありません。政治家としてはスケールの大きい方ですから、「副大臣が全部やってくれ」ということで鈴木副大臣がこれからも教育政策の全部をやっていく立場にあります。

ところが、鈴木さんには大きな欠点が二つあります。一つは頭が良すぎるために、鈴木さんの話をみんなが理解できないということです。頭が良いから話すスピードが速い、そこに注釈もなしに横文字がガンガン入ってきます。文部科学省の記者クラブの記者、朝日の記者とかNHKの記者とか、一応エリートというか、あいつはいいところに入ったと言われている記者が、記者会見の時に鈴木さんの話は理解できなくて、録音しておいて、後でもう一回聞いて辞書を引いてみたりしてようやく分かると言っていました。それで、これはいかんと、どんなにいいことを言っても意味が分からぬのではしょうがない。その本を読んでいただくと分かりますが、例えば、教員の免許制度を変えようとしています。今度、中教審で6年の課程になる。ところがあれも鈴木さんが言っている6年にするというところだけが理解できるわけですから、6年になるんだなと思って言っているんですが、実際に大事なのは何のために6年にしなくてはい

けないのかというところで、よく聞いておけば、今までやってきた人が全員6年でやらなくてはいけなくなるということを言っているわけではないのだけれど、聞いている人が理解できる「6年」という事だけが聞こえて、「ああ、6年なのか」という話になってしまいます。

そこでその本は、鈴木副大臣よりちょっと頭が悪くて、普通の人には近い立場にある私が聞いて翻訳しているんです。そういうわけで、これをなんとしても今年の4月までに出さなければいけないということで死に物狂いでやって、徹夜でインタビューしたりして作ったんです。新学期に間に合わせようということで3月末に出しましたが、なかなかこんな本を出してくれるところがない。そこには講談社と立派な会社から出ているか見えますけど、これは利益採算を度外視した本で、少なくとも講談社に損をさせないように作られている本なのです。本当は「私の本を読んで下さい」ということはしたくないのですが、そういうのは本人に利益が入るわけですが、これはそういったたぐいのものではないので皆さんに読んで下さいといっています。まあ見事に売れません。何のためにこれが必要かというと、全国の先生方に文科省が何を言っているかわからない、こんなにしゃべってくれるトップはいないものですし、文部省のトップが何を考えているのかということを全部の先生に知ってもらいたいし、出来れば親御さんにも知って欲しい、もちろん教育委員会の職員にも知ってほしい。そして何よりも文部科学省の職員が知らないてはいけない。文部科学省の職員が副大臣の考えていることを理解できないのが今の文科省の困ったところなんです。もちろん理解しようとはしているんだけども理解できない。

鈴木大臣の2大欠点といいまして、もう一つの欠点は人柄が良すぎるんです。普通だったら

副大臣がこうやろうと思ったら下の人間が分かっていなくても「やれ」と言うでしょ。そんな人たちと違って人柄がいいものですから鈴木さんはそれを言わないとやらないですから、せっかく考えていることが、まだしにくいくらいがあつたりしますが、実際にほとんど動いてはいます。高校無償化という画期的なことは、私はこんなことは出来るとは夢にも思いませんでした。文部科学省に30年以上奉職していましたが、高校の授業料が無償になる日が私の生きているうちに来るとは思いもよらなかった。ただ残念なことに高校を無償化にするだけでは意味がないんです。高校無償化にするということは手段ですから、高校無償化することによってどんな高校教育を作っていくのか。あるいは一人一人の子ども達の生涯学習のプロセスというものがどうなっていくのかを考えなければいけないのですが、そのところがまだついていっていない。ついでに言うと、中学までの15才以下には子ども手当が出るわけです。これについても子ども手当を受け取った親がどこに使うのか、何に使うのかということを考えていかなければいけない。何が教育的にいいことなのかということを文部科学省が提案していかなくてはいけない。文部科学省は予算を一円も使わずにやっています。厚生労働省が死に物狂いで予算をひねり出して子ども手当を配ってくれているわけですから、それは当然、教育・学習のために使っていただきたいと文部科学省は言わなくてはいけない。厚生労働省のことなんですからそっち関係で使って下さいという話ではないですよね。だから、例えば幼児期だって親が楽をするために使うというだけの費用ではダメでしょう。幼児くらいになったら幼児が学習するために使って下さい。読み聞かせするための絵本を買ったら良いんじゃないですか。お母さんが自分にご褒美といってレストランに行くのも結構だけれど、そういうこともうですかと、提案をしていかなければいけない。それがまだまだうまくいっていないところがある。

鈴木副大臣は再任をされまして、新たな考え方の下でやっていくわけで、それはだんだん動いてくることになる。今まで現場では、大臣が、文科省が何を考えているのかが問題になってい

たじやないですか。それがはっきりしているということなんです。でも全然売れないです。全国に先生方は、大学まで合わせて100万人くらいいるわけですが、100万部とまでは言わないまでも、まだ1万部に達していない。2~3000部ですか、文部科学省の役人だって読んでません。これで日本の教育界が時代に大丈夫かと思います。落ち着いて考えてみて下さい。4月くらいに本が出ましたが、何で読まないのか聞いたら、普天間の問題で鳩山内閣の支持率もぐんぐん落ちている状況です。だからこの内閣もいつまで続くか分からない。実際、6月の頭に内閣が替わりました。だから「こんなのを読んでたってまた変わっちゃうんじやないか」ということをみんな思ったんです。でも変わらなかつた。変わらないのは当たり前です。今までの自民党というのは、一人一人がバラバラで、統一的政策というものはなかった。特にこの20年くらいの自民党の政策はバラバラだったんです。90年代前の自民党は党全体で政策を考えていた。私たちの教育界で言うならば、自民党文教部会の考えることはきっと筋が通っていた。ところが90年代くらいから、小選挙区制になつたあたりから、みんな好き勝手なことを言うようになってしまった。私の命取りになつたゆとり教育だって、文教部会ではゆとり教育をやろうと言っているのに、昨日、今日、当選してきた議員が「地元で学力がなんだと言われたときに答えられないからそういうことを言っちゃ困る」ということで迷走に次ぐ迷走というふうになつた。そのイメージがずっとあるものですから、また変わるんじゃないかと思っているんです。でも民主党はそういう政党じゃないですから。鈴木さんも文部科学省の役人に言うわけです。「今度内閣改造があれば副大臣はいなくなりますから」。いなくなるんじやなくて、鈴木さんが次になるとしたら大臣になる可能性が一番強いのであって、いなくなるなんてことはない。仮に内閣の外に出たって民主党の文教政策の中心になってやっていくことは確かなんです。はつきり言えば、彼しかそういったことを考えられる人がいないと言ってもいいかもしれません。なんだかんだ言っても、民主党政権は後3年3ヶ月くらいは続くわけです。人々政権を取って4年間の間にこういうことをすると言っている

わけであって、いきなり今年の4月から教員免許が6年制になったわけでもないじゃないですか。それを徐々に変えていって、4年間の政策のうちにこういうことをやっていくんだということを言っているんです。

各論はその中で読んでもらえばいいとして、まず、根本的な問題として、時代が変化する変化するといって本当に変化しているんです。今までの時代は終わると言われ始めたのは80年代くらいです。臨時教育審議会というのが昔ありましたが、あれはそういうことを前提にしていました。今までのようアメリカとソ連が2大対立していて、東西冷戦構造があつてというのが、84年くらいになるとそれが行き詰まつていると分かる人には分かるようになってきていました。その5年後にソ連は崩壊しましたし、ペレストロイカみたいな話は始まってきていました。共産主義対自由主義ということがなくなる。そのなかから各国が経済成長競争をやっていくのも終わらざるを得ない状況になってくる時代が来る。もう割と近くに来る。だからやらなければいけないと言っていたんです。臨時教育審議会が1984年から3年かけて議論したものですから大したものです。87年に出した結論では、2020年くらいには決定的に世の中が変わると書いていました。2020年くらいには「このまま意識を変えないとどうしようもなくなってしまう」と、大体予想通りになってきています。むしろ、10年早く世界はそのことに気付いたわけです。2008年のリーマンショックが起こったときに、「もう今までのようなやり方はダメだ」と。いい学校に入って、いい会社に入って、安穏と暮らして、年金をたっぷりもらえてという話を目標に生きていくのはもうできない。そういうことを世界中が思い知ったわけです。私はそういうことを20何年前からやっていたので、とうとうその時代がきたという感じです。勇気のことですが、鈴木さんはこの本の中で言っています。政治家がこれを言うということは相当な覚悟がないと言えません。まあ、彼が今度選挙に出るのは3年後ですし、今年の7月の選挙に出るんだったらこれは言えなかつてしまふ。鈴木さんはこれではつきり言っています。誰しもが当然そう思っているはずですが、「経済成長はもういらない」。いらないと言うと聞こえ

はいいですが、実際には経済成長はできない。そういう時代なんです。菅内閣の成長戦略が出ましたが、あんなのはごまかしです。昔、我々が味わってきた本当の成長とは全然違います。第一落ち着いて考えてみれば分かります。名目上は、日本はずっと経済成長をしていて、この間の安倍内閣までは戦後最長の経済成長が続く時期だったと言われているんです。それは2000年から2006~7年頃までになります。その頃に我々の生活が豊かになったという実感がありましたか、ないでしょう。私たちが子どもの頃の東京タワーが建ったとか、新幹線が通ったとか、オリンピックをやった、万博をやったというときは、誰が考えても生活が良くなつた。今までできなかつたことがどんどんできるようになつてきて、そういう時代でした。実際のところ1990年代の半ば頃から、日本では前より良くなるということはありませんでした。それを数字の上でごまかして、経済成長をしているかのようにしてきたんですが、数字でいくら上がつたところでしょうがない。貯金通帳の数字がいくら増えたところで自分が使って生活が豊かにならないことには意味が無い話です。そういうことをずっと続けてきました。これは今だから言えますけど、実は鳩山由紀夫は、誰もいないところでは「もう経済成長の時代ではない」と言っていました。「もう経済は成長しない中で新しい幸福を見つけていかなければいけない時代なんだ」「お金の力で幸福を得るのはもう終わりなんだ」と言っているんだけれど、さすがに総理大臣として国民の前でそういうことは言えません。それを言ったら大騒ぎになります。まだ経済成長を欲しいと思っている人はたくさんいるですから。そうは言えませんでしたが、本心はそうあったということです。これは私の本だから買えとはいいませんが、「2050年に向けて生き抜く力」というのを去年作ったのですが、その中でいろいろ証拠を上げています。

今度、カナダでサミットがありますが、あれはもうお飾りになってしまっていて、G8サミットはもう役割が終わつたのです。今、世界のことを決めるときには8カ国だけでは決められないで、今年の秋に韓国でG20が開かれます。G20と言っていますが、その中の一つはEUで、EUには30カ国くらい入っていますから、重複

で入っているのを考えると 40 何カ国くらいが参加しています。地球をどうするかを決めるにはそのくらい集まらないと決めることが出来なくなってきたている。アメリカの一人勝ちという時代は終わってしまったのです。本当に時代の移ろいというのはあれですが、20 何年前からその準備は着々とやってきたので、本当のところはそんなに大変なことにはなっていません。それはあまり言いませんが、20 何年前からそのことを予測して、臨時教育審議会の答申というものはそのことを予測して社会を変えよう、学校を変えよう、地域を変えよう、文化を変えようと言ってきたんです。

私が、全国校長会と敵対関係になって大変になっていたのは 1993 年のことです。今から 17 年前です。何が私と校長会を決定的に対立させていたのかというと、94 年からの高等学校新学習指導要領にあたって、家庭科を男女必修にすることについて校長会と私の間に決定的な対立があったわけです。校長会側はなんで家庭科を必修にしなければいけないのかという考えがあって、私の方は中教審でも教育課程審議会でも決まっていることでもあるしやってほしい。覚えていらっしゃいますでしょうか。最初は原則 4 単位で 2 単位まで減ずることができると書いてあったんです。それでほとんどの高校が 2 単位でやろうとなつたので、それはおかしいだろうと言って、それが争いの発端なわけです。原則 4 単位と書いてあるんだからまずは 4 単位でやってみて、4 単位では多すぎるということになったのなら分かるけれど、最初から例外の方とはどんなものかと、その裏には私立の男子系の進学校で「だれがそんなのやるか」という話もあった。私が忘れられないのは、開成高校生徒が NHK のインタビューを受けていて、家庭科が必修になることについて「文部省の奴ら馬鹿だよな。なんで俺たちみたいなエリートが家庭科なんかやらなくちゃいけないんだよ。関係ないよ。家庭科なんてやる必要ない。」と口々に言ったんです。私は、その 17 年後、今 30 過ぎになっていますが、幸せな結婚、家庭生活をしているのかと思いました。そういう問題です。あのときは大騒ぎだったんですよ。高校がやらない。あの頃は女子でも家庭科をやってない学校があつたりして酷かったです。その時間に

数学の補習をやっていますとか。それから 17 年経って、あのときは家庭科をやつたら学力が下がるとか言っていましたけど、別段問題なくやっているじゃないですか。

この間、ホント恥ずかしい思いをしました。その話をあるところでしていたんですが、欧米の外国人が何人も聞いていたんです。そしたら欧米人の目が点になってしまって、「日本は 17 年前までそういうのをやっていなかったのか」と。男子は体育、女子は家庭科で、男子は家庭体育の時間がやたら多かったです。あれは近代の終焉というのを物語っているんです。あんなのは近代からなんです。近代学校教育が始まるとときに、当時は富国強兵だから、女性は良妻賢母になって、男は軍隊に行って戦わなければならないわけだから体を鍛えなければいけない。女は銃後で家庭を守つていかなければいけない。そういう教育をやっていた。それを 1993 年までやっていたとは今考えてみたら恥ずかしくて言えません。今、それを大学で学生達に話すと、「えー、どういう国だったんですか」というようなことを言われますね。

私は、あの頃から「首を獲れ」とか「辞めさせろ」だとか、圧力がかかっていたわけですが、そういう話です。言われましたよ。「なんで男子も家庭科をやらなければならないのか」と。男の単身赴任が多くなったからとかじやなくて、世の中が近代を脱していくと、全員で、みんなで、例えば育児も介護も男女一緒、かつ社会と一緒にやっていくという事だから、育児介護を「儂は知らん」、炊事洗濯「儂は知らん」なんてことを言っていたってダメです。そういう時代を作るためにやつてきたんです。例えば、学校 5 日制を 92 年に入れたとき、あの裏は自民党、日教組、社会党との政治的談合で始まった話であるにせよ、早晚学校五日制をやらなくてはいけない。それはなぜかというと学校で学ぶことには限界があるから。学校というのは近代の産物ですから。近代という時代をつくっていくための人間を育てる装置なので、近代が終わつていって、そうでない時代が来ることを考えていかなくてはいけない。

例えば、宗教的情操ということを学校ではやれないことになっている。そうだとすると、そ

ういうものは学校以外のところで作っていかなければいけない。学校五日制になってどうこうと学力のことばかり言っていますが、お寺にも神社にも教会にも従来より多く子どもが来るようになったというのは宗教界の常識です。東京の人は関係ないでしょうけど、地方の廃れかかっていた伝統行事やお祭りが軒並み息を吹き返してきています。日本には子供歌舞伎という伝統があったのですが、あれが2002年頃には全国で3つくらいになってしまって、息も絶え絶えという状態だったのが、今子供歌舞伎が復活してきているというのは、なんだかんだ言ったって学校五日制のおかげなんです。

つまり、昔は都会に出て、いい会社に入つて、いい生活をするというのが目標で、みんなそこを目指していたんです。日本中から東京タワーを目指して集まつたんです。かくいう私も30何年前に鹿児島から出てきて、東京タワーを目指してやってきました。そういう時代だから、自分の故郷は廃れてもしょうがないと思って出でてきている。この中にも東京出身でない方もおられると思いますが、自分の故郷には見向きもせずにその時は東京へ來ました。今、私たちが東京へ来て、経済的繁栄に行き詰まつた時、故郷を振り返つてみれば故郷は滅びかかっているという状態になつてしまつていて。だから学校五日制は何が何でもやらなければいけない事柄だと思っていたし、今でも思つてゐるし、やっておいて良かったと思ひます。なぜかというと、これは首都大学東京の宮台真司も言つていますが、近代というのは、自分が幸せかどうかという尺度は、自分の地位が上がつたとか、お金を儲けたとか社会的に尊敬されたとかいうことでやってきました。それがもう行き詰まつてゐるわけです。今はもう公務員以外で終身雇用のところはどこにもないんです。そういう状態になつてしまつていて、例えトヨタに入ろうがパナソニックに入ろうが、もう入つただけでは幸せとはいえません。その中で、いつ整理されるか分からないという状況でやっていく、それでお金はもう入つてこないですよ。ここにいらっしゃるのは私と同年配か少し下くらいでしようけど、年金とかもうまい具合にいくのは団塊の世代くらいまでではないでしょうか。私たちの上ぐらいまでであつて、ましてや若い人

たちは将来年金をもらえるかどうかわからない話になつてきています。そんなときに、そういうことというのは心の支えにならないんです。心の支えにならないので、実は世界中の先進国が、貧しい国は下が貧しいのでまだ上がっていきますが、先進国、OECD諸国、この頃騒がれているPISA調査なんかをやつてある国々はみんなそれを考えているわけです。金以外に何があるだろうかということを考えたときに、欧米諸国は宗教という拠り所があるんです。みんなが同じキリスト教の文化を持っている。その宗教という拠り所、神様がいると思っているわけです。あるいは個人主義というものが近代の間に確立されてきていますから、個人主義という考え方方に立つて、自分は自分、他人は他人というふうに考えていこう、人と比べて生きていこうなんて思わないでいこうということができるかもしれない。だけど、日本とか韓国みたいな国はそれができないんです。日本の場合、宗教が頼りだという人はまずいんですよ。中国もいずれそれに直面する日が来ます。中国はもっと宗教がありません。そうしたときにアジア人にとって、それは故郷なんです。自分のホームタウン、故郷の仲間とか家族とか、いわゆる人間的繋がりみたいなものなんです。そこしか頼るところがないんです。だから学校五日制にしていった意味というのはそういうことなんですね。

今度、長野県の知事選があつて、立候補する方から「教育政策のヒントをくれませんか」と言つたので、「長野だったら学校4日制という提案をしたらどうですか」と言いました。その人は「いいですね。それやりましょう」と。なぜかも聞かず飛びついてきた。それはこういうことです。学校4日制とか5日制とか6日制という問題は、学校に來ている日は、逆に言うと子どもが地域から引き離される日なんです。長野県というのはものすごく細々した谷に集落が分かれているところなんです。私が提案している学校4日制というのは、集落が小さくて子どもの数が減っていくものだから、小さな集落の小学校は全部無くなつてしまつたんです。だから、子ども達は朝にバスが迎えに来て出て行つてしまうわけです。これでは集落は死に絶えてしまう。学校4日制の意味は、スクールバスで通う学校は4日で、後の1日2日は地域の中

で子ども達が学ぶ場を作つて、そこに先生達が出てきて教えるというやり方を考える。つまり学校四日制の意味は、彼らがホームタウンで過ごす日が3日ありますという話なんです。学校の勉強をする日が4日という意味ではありません。そういう事をしていかないと我々のアイデンティティーとはなんなのだろうという話になってくるんです。

もう一つの拠り所は、それと関係してきますけど文化です。貧しいけれど文化的だと。例えば、俳句や短歌、あれはお金がかかりません。ゴルフなんかへ行くと一回いくらとかかかるでしょうが、紙と鉛筆があればできるものがあるわけです。そういうものがあれば、文化で楽しんでいるからいいじゃないかということになります。これは、今話題になっている普天間、沖縄はどうとう独立運動がまた燃え上がつてきました。沖縄が独立すると分かりやすいと思いますが、今でも沖縄は全国で一番貧しいんです。県民所得は東京と比べれば何分の一しかない。東京が一番豊かで沖縄が一番貧しい。じゃあ沖縄の人が日本一不幸かといえば、基地の問題だけ見れば悪いように見えますけど一般的に言えば、沖縄の人たちは歌を歌つたり、踊りを踊つたりいろいろしながら「まあいいさ」と暮らしている部分もあります。豊かな人が幸せだといえば東京の人が幸せだということになりますが、朝の満員電車に乗っている人を見ても、一人も幸せそうな人はいないですよ。そうすると、豊かさ以外の尺度を求めるときに芸術という問題がでてくるんです。

高校の先生ならご存じかもしれません、大学で一番元気がいいのは芸術系の大学なんです。私は本務校が京都造形芸術大学という芸術系の大学で、他にいろいろな大学を行っています。むしろ、京都造形芸術大学には時々授業を行っているだけでほとんど東京にいるのですが、一番幸せなのは芸術系の大学なんです。なぜかというと、彼らは金のことに執着していない。他の大学だと「就活しよう」「就職できるだろうか」「フリーター、派遣社員になって惨めな生活」「ネットカフェ難民になつたらどうしよう」とかいうのが頭の中にある。それが芸術系の子はぜんぜんありません。元々食えないという前提で来ている。僕らが若い頃は芸術系に進みたい

と言うと「そんなんで飯が食えるか、冗談じゃない、やめろ」と先生も周りも止めました。学生に聞くと、今は、先生は止める人がいるみたいですが、昔に比べると親に止められるということはぜんぜんありません。「好きなことやってみろ、どこへ行つたって安全だということはないんだから好きなことをやるのが一番いい」と、好きなことをやりに来ているんだから幸せですよ。芸術が好きで芸術の大学に来ているんだから幸せなんです。だいたい経済学部とか、私なんかも法学部出ですけど、法学部とか経済学部に来ていて、経済が好きで来ている人はどれだけいますかね。法律が好きで好きでたまらないから来ている人がどれだけいますか。とりあえずこういうところは間口が広いし潰しも利くし、偏差値もちょうどあったから来ているというのが大半でしょ。ハッピーにしていないじゃないですか。中央大学の法学部なんかに行くと、私がすごい面白い話をしていたって半分くらいは倒れていますよ。ところが、芸術系の大学へ行くと、目を輝かせて聞いている。それで終わつたら質問をしてきたり、面白かったと言つてくれたりします。ああいうところは就活もあるし疲れているんでしょう。それが芸術系に行くと、元々食えないと言われているんですから食えない心配なんてないですよ。そう割り切っていますから。昔から芸術の人は食えないのが前提だから。売れて食えるようになれば始めたのですけど「食えなくても好きなことをやっているんだからしかたがない」となります。就活にがつがつする必要もないし、そうしていると、会社側も芸術的センスがある人を探りたいという会社が増えてきて、就職も意外にあつたりします。とは言っても一部上場企業のようなところからはありません。ベンチャー産業とか急成長している産業です。専門的な話になりますが、成長している小さな企業というのは、広告とか宣伝とかデザインを外注しません。トヨタとかパナソニックはしますよね。そうすると電通とか博報堂がべらぼうな値段でやってくれます。でもそれはすごくお金がかかります。だから出来るだけお金をかけないでやるために、自分の会社でそういう人を雇つてデザインをやらせる。私の生徒が今年の4月から、くら寿司という回転寿司チェーンに入ったんです。くら寿司とい

うのは広告も宣伝も企画も全部自社でやるので、広告・企画・宣伝・デザインをやれる人を雇わなければいけない。外に頼んでいたら安い寿司が提供できないからということです。そういうこともあります。

それと、芸術系は授業料が高いでしょ。年間170～180万かかります。それでも来ます。芸術系で定員割れというのはあまり聞いたことがありません。大金持ちは子供ばかりではありませんからアルバイトしてでも行きたい。ある生徒にどうやって来たんだと聞いたら、どうしても来たかったので両親に土下座をして「お父さんお母さん、どうしても行きたい大学があるのでお金を出してくれ」と言った。いい話です。そういう高校生ばかりならいかにいいだろうかと思います。ちなみにうちの大学の学生がいつ大学に行こうと思ったのか、私なんかは生まれたときから大学に行くと自他共にやってきました。今でも東大とか京大の学生はそういう人が多いでしょう。それが、ほとんど全員、高校に入つてからと言います。彼らはすごく高校に感謝していますよ。高校に入るまでは大学に行く気なんて全然無かった。勉強が大嫌いだし、数学とか嫌だ。でも高校へは行っておかないとまずいと仕方なく行くけど、卒業したら就職するか専門学校に行って手に職付けていくかと思っていた。ところが高校に入ったら全然違った。ご存じのように日本の高校は、上の方はまだ旧態依然とした体質だけれど、真ん中から下の学校はやっきになって生徒達をなんとか卒業させようと思うし、「何か見つけてやらないと」と思う学校が多くなっている。うちに来ている生徒のほとんどはそういう学校に入っているわけです。そうするとそこの先生達は「おまえ何か好きなものはないのか」と言うと、「デザインとかするならいいかな」とか「絵を描くのがすき」「映画を作つてみたい」とかいろいろあると、「それをちょっとやってみろ」とかで、先生が「こういうことをやる大学があるぞ。行ってみたらどうだ」といって大学へ来る。だからみんな高校には感謝している。高校の先生が大学を紹介してくれなければ来なかった。それで、めちゃめちゃ勉強します。嫌になるほどします。嘘だと思うなら京都造形芸術大学に土曜でも日曜でも来て下さい。普通の大学は土日や夏休みは門が閉

まっていますが、うちは常に開いていてやっています。ああいうところの授業料というのはたいがい設備費に使われています。あんな高い授業料を払つて設備を使わなければもったいないと思っていますので、アトリエとか機材とか使い倒さなければもったいない。日本一勉強する大学だと。もちろん勉強の内容は法学部とか経済学部とかと違うわけだけれど、そういう姿がある。何で彼らがそれだけ出来るのかと思うと、やっぱり自分の人生というものは楽しくありたい。自分の人生を楽しくしてくれるのが芸術なんだ。卒業するときに職も決まっていない連中もいっぱいいますが、彼らと飲むと「何年かはやってみようと思うんです。まだ俺にもチャンスがあるかもしれない」「もう少し芝居をやってみたい」「絵に打ち込んでみたい」それでダメなら後はそれを趣味として乐んで、田舎に帰つて自分に合つた仕事で、芸術は一生をかけてやっていく。みなさんに根本のところを理解していただきたいのはそこなんです。そういう大きな価値観の転換が行われようとしているということなんです。

その背景にはIT社会というのがあるとすごく思います。ITが出来る前は組織に属さないと何もできなかつた。この前もある県の教職員組合の書記長と話していたんですが、組合は必要だけど日教組は必要ない。それは別に日教組だから言つてゐるわけではなくて、何でもそうです。中央組織みたいなものも必要なくなる。教頭会もそうです。全国教頭会とか必要なくなる。何のためにあれらが必要だったかというと、昔は交通機関とか伝達機関が無かつたので、代表の人が聞いてきてみんなに伝えるという仕組みで、全国組織で聞いて各県の組織に流して末端まできていたわけです。それが今は、こうして直接文科副大臣の話が聞けたり、鈴木さんが始めた熟議なんかではコンピュータ上でみんな議論しているじゃないですか。昔は現場の先生の声を聞くことは容易ではありませんでしたが、今はネットを通せばすぐに聞けます。そういう時代になると、むしろ一人一人の人間が発信できるわけです。自分の考え、自分のポリシーを発信できる。私もやっていますがツイッターの様な装置を使うと、ある人間が言ったことに賛同とみんなができるんです。私が関係している

だけで、一高校生が、自分の仲間が一人もいない状況の中から、やりたいことが実現した例がこの2か月の内に3件ありました。そういうことが出来るようになってきたんです。今までだと、自分の学校の中の生徒会で動かなければいけないだとか、部活で動かなければいけないといった事柄が、自分の提案で、自分の学校の中に賛同者がいなかつたら外に求めてやっていくということもできるようになってきています。そういう時代に必要なこと、だからこそ私たちが準備をしてきたことは、自分でも考える形を作っていく。組織の中に属している事が幸せでないとすると、自分で考えなければいけないわけだから、小学校から総合的学習を導入して自分で考える習慣を身に付けてもらわなければいけない。台形の公式を丸暗記するのではなく、見たことのないものが出てきたら、どうすれば面積が求められるか自分で、すでに習った三角形をつかって求めるような経験をしてほしいと思ってやってきたんです。だから自分で考えるということと、自分の意見を人に言うということ、コミュニケーション能力です。

この間、ツイッターをやっていて「医学部の入試の学力試験が難しすぎてしまうがない。だから日本は医師不足でないのに医師不足だ。なぜか」というと地方を全部切り捨ててきて、医者はみんな東京で開業したいと思っているから、いくら医者をつくっても地方の医者が増えないからこんなことになっている。学力一辺倒でやっているからこんなことになる」と言っていたら、反論してきた子の中である子が、「やっぱり学力は必要なんだ」と言ってくるわけです。「おまえがやったゆとり教育なんて日本を滅ぼすろくでもないことなんだ」と書いてきて、またこういうのが来たかと思って、最初はそれは見解の違ひだみたいなことを言っていたんですが、何度もその人が言ってくるから、どんな人なのかと思ってその人のプロフィールを見てみたら大学を目指して浪人している受験生だったんです。受験生だったら今の大学受験を目指して一生懸命勉強しているのに悪かったなど、今の大学受験なんて意味がないと言われたら嫌だらうなと思ったので、「悪かった。あなたは受験生だったんだね。受験が終わったら今度ゆっくり話そうじゃないか」と書いて、その子の日頃書い

ていることを見たら感心しました。日頃書いていることは皆さんのところの生徒がメールで書いているようなことが書いてあるわけです。ところが私と議論している部分だけ、見事に大人と議論するような口調になっているんです。コミュニケーション能力がそのくらいあれば、常にきちんとしている必要はない、きちんとすべきときにきちんとするのがコミュニケーション能力なんだと思って、この子はどういう高校の卒業生なのかと思って、今度会ったら聞いてみようと思っています。

とりとめもないように聞こえたかもしれませんけど、今私が言いたかったのは、各論は見ていただくとして、大きな時代の転換期が来ているということを大人の側が認識しないと子供達からの信頼を失う。子供、ここで言っているのは小学生から大学生くらいまでを念頭においていますが、若い社会人も意識が高いですから、20代くらいの人を念頭に置いて言うと、彼らがどう思っているかというと、彼らは本能的に「世の中が大きく変わると、そこを上手く変わらないと自分たちが一番酷い目に遭う」というふうに思っているんです。その時に、その議論にまともに相手をしてくれない大人、「そんなことを言っていないでこっちの言うことを聞いていればいいんだ」という大人に対しての不信感というの非常に強いものがあります。それは私たちが、考えるのが嫌だったり、怖かったりして、考えていないとそれが起こってしまうんだと思うんです。だからさつき紹介した語り場というのは、大人が考えてくれないから若者同士で話し合おうと、高校生、大学生、若い社会人で話し合ってみようじゃないかということをやっています。でも、そこへ私たち大人ももっと入っていって生徒と話していいんじゃないか。近代の教育というのは教育する側が高みに立って善導、良く導いていかなければいけないという意識だった。近代の教育はそれでいいんです。それで近代は大成功したんです。だけども、近代ではなくなった時代にどうしていけばいいのか分からぬというときにどうするのか。昔は自動車に乗ることがいいことか悪いことかといえば、いいことだとみんな思っていた。今は自動車に乗るのはいい場合もあるけど、環境を悪くして悪い場合もあるということについて、ど

う考えなければいけないのかということは我々にも分からぬ。私のもくろみでは総合的学習の時間とは、教師でも分からぬことを、教師と生徒が一緒に考える時間になるといいなど。特に中学、高校くらいになると、そうあればいいなど。キャリア教育もいいですけど、でも先生方もキャリア教育をあまり受けていなでよ。今は終身雇用ですから転職する必要もあまりないでしようけど、生徒には「いろいろな職があるのを知れ」と言いつつ、先生方は知らない。まあキャリアは知らなくてもいいかもしないけど、環境問題とか国際問題とかいうようなことはみんなで考えていく必要があるんじゃないのか。とにかく未体験ゾーンに突入しようとしているわけです。私たちが生まれてから50年生きてきて、体験しなかった時代に突入し始めている。その時にどうすればいいか。だから高校の時代なんです。高校教育というのは臨機応変に出来るようになってるでしょ。たまたま、半分から上の高校が判で付いたように同じようなことをやっています。判で付いたように世界史をとばすとかいうようなことをやって、あれ凄いよね。それぞれ考えて全国で世界史をとばしていたんだから凄いことだと思います。そうでなくて、日本の高校教育というのは、少なくとも94年の改定以来、私に言わせれば何をやってもいい。生徒という学習者のニーズに応える。つまり生徒という学習者がいい学習をしていい人間になってもらうためにはどんなことをやってもいい。そういう仕組みになっているわけです。小中学校というのはどうしても基礎基本をやっていく中で横並びに確実にやらなければいけない部分が多いけれども、そこが大きく違っているのではないか。都立高校の場合いろんなことをやりますけど、いろんな学校ありますよね。日比谷高校みたいな学校もありますけど、やはりどちらかというと、まだよく分かっていない子供達を受け入れる学校が多いわけだから、そういうところに可能性がある。私はむしろ、進学校の方が、昔いわゆる底辺校といっていた学校に学ばなければいけないときが来ていると思うんです。つまり、進学が自明のことだと思っている子というのはもう保たないですね。進学して結構だけど、何でそこに行くのか、行きたいのかということが分からぬ

で、漠然と行くというのはもう保たなくなっています。大学でも保たなくなっている。社会に出たら完全に保ちません。昔は大学までは保っていたんです。漠然と入って来ても大学で会社まで入れるから、会社に入ったら終身雇用で、仕方がないから会社が教育して自分の会社にあった人間にしようとするから帳尻が合っていたんだけど、今は会社の方はいらなければ切ってしまいますから。いらなければ切る。大学も保たない。つまり内定もとれないような状態になる。はっきりした職業意識のない人間に内定を出すなんてことは私ならできない。私が企業の採用担当者だったらどんなに有名な大学の学生だつて、なんでそれがやりたいのかはっきりしていないならちょっとと思いますよ。そういうところへきているということをご理解いただきたい。私は、都立高校はいい方向へいっていると都民の一人として見てますけれど、もっと子供達、子供達という言い方はあまり好きではないで、学習者の力を引き出す。甘やかせと言っているのではなく、「子供達に」と言うと甘やかす話が出てくるんです。子供に優しくみたいな。「学習者」というのは学習するから「学習者」なので、学習することが前提です。さぼる学習者というのはないです。「学習者本意」というのは相手を甘やかすということにはならないんです。「子供本位」と言うと、子供がさぼることを認めるような話になるので、「学習者本意」という考え方をはっきり出していかなければいけない。

高校授業料の朝鮮学校問題は典型ですよね。朝鮮学校にお金を出しているんじゃないんです。朝鮮学校に通って学習しようとしている人に出しているんです。皆さんのがこども便宜上学校が受け取っていますが、あれは、あなたのところの生徒に一人1ヶ月分の高校の授業料を出しているんだけれど、そっちに渡して持つて行くのが面倒くさいし、手間も費用もかかるから学校にいっているだけで、学校にくれているわけではないというのは分かっていますよね。ところが朝鮮学校の話になると、あんな学校に出してもいいのかと、そういう問題ではないんじやないかと。ちなみに私の知っている多くの在日の人は、朝鮮学校に通ったために北朝鮮が嫌いになったり、あそこの問題点に気付いた人がた

くさんいます。学校の側がこう教育しようと思つても、学習者の側がどう学習しようかといふのは向こうの問題でしょ。それは先生方は嫌というほどおわかりでしょ。子供を型にはめようとしたって、こういうことを学んでほしいといったって、別のこと学ぶという場合だって出てくるわけじゃないですか。だから東京都の、高校のチャレンジスクールの話が出た場合だって、学習するという前提で学習者本意でやるというならいいことだと、まさにチャレンジするのなら、私たちが昔生涯学習とか社会教育の仕事をしているとそういうことがよくあったんです。私の親父が晩年そうでしたけど、年取って何も趣味がない、楽しくないといっている人に「何だったらやるんですか」と聞くわけです。それで聞いていくと、どんな人間だって何かあるんです。これだったら興味あるなと、そこを捕まえて離さずに、この本を読んでみたらどうだとか、この人の話を聞きに行ってみたらどうだとか、こういう番組はどうだとか与えていけば、

どんな子供だって学習者になれる。学習者になれない子供はいないと思っています。だからこれからからの教育に何が必要かというと、生徒を引っ張っていくのではなくて、学習者を作り、その学習者により多く学習してもらえるようなリソースを与えていく。そういうことなんじやないかと思います。

言わんすることは要するに、高校教育の可能性が、今、大きく広がろうとしている状況だということを、全ての高校の先生に自己認識してもらうと、高校は自動的に転がっていくと思っているのですが、今までと変わらないと思っているといつまで経っても変わらない。先生方の意識が変わっていけるように、私たちは外から働きかけていきたいと思いますし、みなさんは学校を預かる副校長として考えていてもらえればと思います。

どうも、ご静聴ありがとうございました。

(文責 事務局)



## 「日本一のマグロ船に学ぶ！ 職場をよりイキイキさせる仕事術」 ～『危険』で『キツイ』仕事だからあみだされた知恵～

講師 ネクストスタンダード 齋藤 正明 氏

齊藤と申します。今日はよろしくお願ひします。今日はマグロ船の話ということで、大抵でかくてごつい人が来るだろうと思われているのですが、期待を裏切ってしまい申し訳ありません。

簡単に自己紹介をさせていただきます。私は見ての通り元々漁師ではありません。元々はバイオ関係の技術者をしていまして、大学卒業後に入った仕事場が民間企業の研究所でした。そこで初めて与えられた仕事が、お刺身の腐る速度を遅らせられる鮮度保持剤の開発をする仕事でした。その研究所に入ったとき、スタッフの名前が並んでいるのですが、その名札に比べて働いている人の数がちょっと少なかつたりして、最初の内はそれが何でなのかわからなかったのですが、働いている内にわかってきたのが、研究所の所長がわりと無茶なことを言うので具合を悪くしたりとか、会社に来たくなくなったりして来れない人がいたようなんです。

私も最初の内は先輩達は大変だと見ていたのですが、働いて1年くらい経ってみると状況が見えてきて、これは自分にも来るぞというのが読めてくるんです。それで、ある日の会議の時に所長が言うわけです。「齊藤ちゃん、魚の鮮度保持剤の開発はどうなってる」、「やつてはいるのですがちょっと遅れています」、「そうか、遅れているのか。お前の鮮度保持剤の開発を一気に進める方法が一つだけある」と言われて、嫌な予感はしていたのですが、「その一つだけとは何ですか」と聞いたら、「お前は一回マグロ船に乗ってマグロの全てを見てこい」と言われて乗せられたのがマグロ船だったのです。ほんとであれば定置網の船とか、2時間で帰れるような船に乗ればいいのですが、わざわざ遠洋のマグロ船に乗せられてしまいました。大分県から

出港して赤道の漁場まで行き、そこでマグロを捕るんですが、「僕は何で今、マグロを捕っているんだっけ」と思うのですが、もう遅いんですね。赤道の辺りはもう何もないですから。私の場合は43日マグロ船に乗っていたのですが、その内、吐かなかつたのが3日だけと、ほとんど役には立たなかつたのです。ただ意外だったのは、マグロ船のイメージと実際のマグロ船はまったく違ったことです。当時、私にとって、マグロ船はすごくイメージが悪い職場でして、「借金がたくさんある人がたどり着く、人間に与えられた最後の仕事場だ」という非常に失礼ながらそういうイメージがありました。実際に乗つてみるとそれとはまったく違いまして、漁師どうしで笑いながら話していたりとか、「困ったことはないか？」と助けあっているんです。マグロ船が予想を裏切って何でそんなに仲が良かったのかということをザックリ3つに分けますと、一つめが、非常に狭いところで40日以上一緒に暮らすので、お互いにストレスに対して上手に受け流す力がないと喧嘩になってしまいます。会社員時代に50隻の船とお付き合いがありましたが、なかには船長さんが刺し殺されるという事件もありました。そうならないようにするためにもお互いに仲良くしなければならない。私が乗せられた船というのが、日本に500隻ある内で毎年トップクラスの売り上げがある船でして、非常に仲が良くて、かつマグロがいっぱい捕れる船だったんです。狭いところだからこそ仲良くしなければならないということが仲が良かった一つめの理由ですが、どのくらい狭いかと言えば、船の大きさは20mくらいで、学校のプールよりも少し狭いくらいです。学校のプールですと一面平らになっていて使えますが、漁船の場合ですとほとんどがマグロをしまうスペ

ースと漁具をしまうスペースで、歩けるところはほとんどないのです。そこに乗員が9人乗っていますので、1人頭のスペース2mちょっとで40何日生きていく。途中で給油とかも何もなくどこにも寄らないですから、40何日を1人2mの幅で暮らしていくのでストレスをいちいち感じていたら仕事にならないということが仲が良かったことの一つめです。

二つ目が、機械などを直すのに電器屋も無ければ病院も無い場所なので、お互いに仲良くやっていないとそうしたものが直らないということがあるんです。海ですから潮をかぶって機械類が壊れてしまうんですが、壊れてしまったからといって電器屋に出せるわけでもなく、「壊れてしまったね」で終わらせると、漁具に必要なものだと戻らなければいけなくなってしまう。漁をやめて途中で戻ることは、すごく損失になってしまふので、何が壊れても自分たちで直さなければならぬという状態にありまして、何かが壊れたときはみんなが集まって、「これ、どうしたら直るかいの」と相談しながらやるんです。これも仲が良くないとなかなか相談できないこともあります。壊れるのが機械類だけならいいのですが、たまには人間も壊れたりします。病気だったり怪我だったりしますがマグロ船には医務室が無いんです。「病気とかしたらどうするんですか」と聞くと、「だいじょうぶじや、そういうのを直せる薬がある」と言われて見せられるのがバファリンだけなんです。「これ、頭痛、歯痛にしか効かない」と書いてありますけど」と言うと「そんなことはない、何にでも効くんだ」と言われるんですが、その頼みの綱のバファリンも使用期限が2年前に切れているやつなので、これはいよいよまずいなと思ったので、「わかりました、とりあえず病気にはならないようにします。でも、怪我をしたらどうするんですか」と言ったんです。やはり怪我も多い職場です。エイに刺されて亡くなる漁師さんがいたり、鮫に噛まれて1週間身動きができなくなる場合もあるので、「怪我をしたらどうするんですか」と聞いたら、「それもだいじょうぶじや、治せるやつがおる」とか言います。「誰が治せるんですか」と聞くとコック長が治せると言うわけです。「コック長は治療の免許とか持っているんですか」と聞くと、「料理

も縫うのも一緒だ」と一言で終わってしまうんです。これはいよいよまずいなと思ったんですが、「傷口が出来たときはまず焼酎で洗う。その後に血管を引っ張り出してライターで血を止めて戻せばだいじょうぶじや」と言われるので、何が大丈夫なのかさっぱり分からぬのです。本当は法律ではダメなのですが、ヘリコプターが来るのだって早く5時間後とかで間に合わないんです。一番近い港に入るのにも3日間かかるので全部自分たちで何とかしなければいけない。だから仲良くやる必要がある。それがマグロ船が仲がいいことの二つ目になります。

最後の三つ目ですが、こちらも非常に単純です。彼らの給料というのは単純に彼らが力を合わせて捕ったマグロを市場でお金に換えて、それをみんなで分配するだけですのでチームワークが悪いと捕れるマグロが少なくなってしまうんです。それであれば、沖に出てみんなで仕事をするのであればたくさんマグロを捕っていっぱい儲けた方がいいという、非常に実利的な理由で仲良くやっているというのがマグロ船の中の生活でした。

ここから学んだことの話を聞いてこうと思うのですが、今のでマグロ船のだいたいの概要が分かっていただけたと思うので、実際にマグロ船の体験というものをしていただきたいと思います。皆さんはマグロ船の漁師だと思っていただけたらと思います。そして一人一隻の船に乗っていると思っていただきますので、ここには10数隻の船があって、一人ずつ乗っている。これから問題を出しますので、それが1問解けるごとにマグロが1匹捕れたというカウントでお願いします。この問題は漢字の問題ですが、携帯電話とか本とかの使用は無しで解いていただきたいと思います。これから出す問題はニンベンの付く漢字を1分間でできるだけ多く書いていただきたいと思います。漢字1個につきマグロ1匹というカウントでいきたいと思います。それでは1分間數えますのでよろしくお願ひします。それでは始めてください。

はい、それではペンを置いてください。では、前後とかお隣の方とかとどんな字があったのか見せ合っていただけますか。1分という短い時間でしたが10匹以上捕れた方はいらっしゃい

ますか。都築先生が 11 回以上いました。

マグロ船の話に戻りますが、最初にマグロ船に乗せられた時に、自分は漁師としてではなくて技術者として乗っているんだから、一応技術の勉強もしなければと船酔いしながらも鮮度保持に関する本を読んでいたんです。そうしたら漁師に、「だから齊藤はいつまでたっても仕事ができん」と怒られて、自分としては意味が分からんんです。自分としては一応仕事の分野の本を読んでいて何が悪いのかと思っていたのですが、その時に漁師に言われたのが「マグロ船がマグロをどうやつたら捕れるか知ってるか」と言われたので「魚群探知機とかを見てマグロがどこにいるかを見ているんですよね」と言ったら、「そんなもんが役に立つかい」と言われるんです。なぜかというと、魚群探知機は基本的に船の真下とちょっと前の方しか見られないそななんです。一方で獲物のマグロは平均時速 60 キロで来るので魚群探知機で見たときには通り過ぎているんです。じゃあどうやってマグロがいる場所を予測しているかというと、各地に散らばっているマグロ船と無線で交信を取りあいながら、「俺のところは捕れてる。俺のところは捕れてない」という情報を教え合い、みんながなるべく捕れているところへ行ってマグロを捕るそななんです。お互いの船どうしで連絡を取らないで仕掛けを投げてしまうとどの船もギャンブルになって、どの船もほとんど捕れなくなってしまうそななんです。だからお互いに連絡を取って、捕れると言っているところに集まって取りに行くと、年間平均である程度はどの船も捕れるようになる。漁師に言われて「お前みたいに勉強しているような、東大を出ているような奴らだからダメなんだ」とか言っていたんです。私は東大から比べると偏差値が 20~30 低い大学だったので、漁師というのは大学と言えば東大しか知らないので「僕は東大じゃないです」と言っても理解してもらえたかったのです。そうやって漁師がずっと言ってくるわけで、彼らが何を言いたいのかというと、学校を出るまでは自分の力で何でも解くことが大事なわけです。隣の人のカンニングをしてはいけないと習いますから。逆に社会に出た後は出来るだけカンニングしていかないといかん。ということを教わったんです。この問題というの

も、さきほど携帯とか本は見ないでくださいとお伝えしましたが、実はそれ以上の条件は何もお伝えしなかったんです。極端な話、後で隣の人のを見たとき、こういう字もあったよねと思ったと思うんです。だからそれを最初からやっていた方が、自分の力で解いたときなかなか思い出せませんが、いい意味でカンニングをしていく。自分の悩みが解けないときに教えてくれる人がいる。話し合うようなことをやっていく。自分 1 人で解いてしまうと、時間がかかるけど解けないことが多いと思います。そこで漁師達は、自分で解かないでみんなでいい意味でカンニングしていくことが大事ということをされました。ただ、この漁師達のカンニングというのはマグロを捕る捕らないの話だけではないんです。何もない赤道のところで 2 隻が合いまして。その 2 隻をロープで結んで、そのロープの間を買い物かごで、お互いの野菜ですとか、娯楽のゲームですとかビデオなども全部交換するんです。それは自分たちで買った私物ですが全部あげてしまう。それで「10 日前に買ったゲームをもうあげちゃうんですか」といったら「そげーじや」と言って自分のものを極力持たないようにしていく、みんなで回しつこしていく。それは問題についてもそうですけど、教え合うと言うことでも共有し合う。そういうふうに自分 1 人で解いていくよりももっと早く、たくさん成果があがっていくということが教えていただいたことの一つでした。ただ、それも乗せられて後で気づいたことであって、最初に乗せられたときは自分にとって嫌な印象でした。周りにいる人が悪役プロレスラーというか凶悪犯みたいな人ばかりですから、髭ぼうぼうの黒くてマッチョな体系の人ばかりなのでこれはまずいなと思っていたんです。何か人質に取られている様な感じでした。一人頭のスペースが漁船は非常に狭くて、プライベートなスペースはベッドの幅だけなんです。ベッドの幅は 60 cm で私の肩幅と同じくらいですので、漁師だと横にならないと入れないくらいのベッドです。長さも 180 cm なので大きい漁師さんだと少し足を曲げないと入れないくらいで、おまけに高さ、天井も 80 cm くらいですので、天井に頭をぶつけるくらい狭いところです。しかもその棺桶サイズのベッドがどこにあるかというとスクリューの

真上で、エンジンルームの隣にあるので道路工事の隣で寝ている方がまだ静かなところです。お客様扱いでもないですし、凶悪犯みたいな人ばかりですし、どうしたら生きていけるかなと思っていたのですけど。刑事ドラマみたいに、「子供もいるし俺がいないとダメなんだ」みたいなことを言って、犯人が油断したところを逃げるみたいに漁師も油断しないかなと思っていたのですが、最初は漁師も私の身上話を聞いてくれたのですけど、日にちがたってくると聞いてくれなくなってきてまして、まずいと思ったときに船長から言われたのが、「齊藤、おまえみんなから好かれようとして自分のことをしゃべっておるじやろ、そんなことをやっても周りから好かれんぞ」と言われて、自分としたら凶悪犯に見透かされているので、半分目が泳ぎながらそんなこと無いですよとか言ってましたが、船長はそれを無視して話をしてくるんで、「俺たちがわけ一こからすかれるのに一番大事なのは自分のことを伝えるより相手のことに関心持つことの方がさきど」と凄く言われたんです。それはホントに小さなことでもかまわなくて、趣味ですか、前の仕事は何をしていただとか、何丸に乗っていた、前の休みにはどこへ行っていたとか何でもいいんですが、まず相手に関心を持って行かないとわけ一こたちは動かんと言われたんです。でも言われてみれば、自分も元の職場に戻ってプロジェクトを行なっているときも、プロジェクトメンバーに対してこの仕事をいつまでにやってくださいとお願いして、遅れると何で遅れたのかと文句は言うんです。お願いと文句は言うんですが相手のことにまったく興味を持っていなかったんです。プロジェクトに入って来た新しい若い子たちにも興味を持っていなくて、その若い子たちから締切が過ぎてから送られてくると何で遅れるんだろうと思っていましたし、それは彼らがやる気がないからだろうと思っていたのですが、それは僕が相手について何にも興味を持っていない、ある意味自分の手足くらいにしか考えていなかったので、相手としてもそんなやつの言うことを聞きたくないと思っていたらうことを初めて気づかされたんです。この人の言うことは聞いてみようと思うときには、まずこの人は俺のことを信頼してくれているとか、興味があるという

ことがあるから、初めてそこに信頼が芽生えて初めて言葉が伝わるんだなど漁船に乗せられて教えられた出来事でした。

ちなみに漁師達の労働時間というのは非常に長いんです。私がぜんぜん漁師の仕事が勤まらなかつたというのはあまりにもハードすぎて務まらなかつたんです。何がハードかというと、漁船は仕事が朝6時にスタートして、仕掛けを流すのですが、延縄漁という漁法でマグロを捕っておりました。延縄と言うくらいだけですから網を使わずに縄を使うんです。長い縄を流していくってその縄に釣り針が2千本付いていまして、そのどこかにマグロがかかるというのがマグロの延縄漁です。どのくらいの長さかというと、お茶の水から流しますと一日に流す長さは富士山まで流します。それでその富士山まで流したもの回収するというのが一日仕事ですので、朝6時に流したら終わるのが5,6時間後のお昼の12時くらいに流し終わるわけです。そこからマグロがかかるのを待つて3時間エンジンを止めて沖に停止しますが、この時が漁師達にとって睡眠時間になるわけです。それで午後3時になつたら、ここから富士山まで流したロープを巻き取る作業が始まるんですが、この作業が終わるのがだいたい翌日の午前3時ということで、一日に17,8時間の肉体労働をしている。私なんかも本の締切が近いと1日1本栄養ドリンクを飲みますけど、漁師は一日7本飲んでいます。これは自分には手に負えない仕事です。それで午前3時に終わって、朝6時のスタートですから2時間半くらいしかその間眠れないという仕事をやっていまして、ずっと同じ人と顔を合わせていなければならないという、普通の職場であればストレスで、特に若い人たちは変なことをしていないかと船長達は気になるわけです。特にマグロ船の場合だと鮫にかじられたり、エイに刺されたりする職場なのでしつかり見てあげないといけない職場なんですが、変な見方をしていると、若手からすると監視されているとしか見えなくなってしまうんです。では監視ではなく若手の部下のどこを見ているんですかと聞くと昨日はできなかつたけれど今日できるようになったところを見よるかいのう」と言っておりました。これは何かと言いますと、どうしても部下を見るときの姿勢という

のが、何か変なことをやっていないかと見てしまうとどうしてもあら探しというかミス搜しというか監視になってしまふ。でもそれをやってしまふと指摘ばかりなので人間関係がおかしくなってしまう。漁師はどうしているかというと、昨日の内に3つくらい小さいことを教えるんです。「こげんすると上手にさばけるぞ」とか、「こげんすると上手に持てる」とか、「そこに足を置いているとロープが絡まって危ない」とかちっちゃいことでかまわないので3つ、4つ教えてあげるそうです。それが翌日になってなにか一個でも出来ることがあったら、出来るようになつたじゃないかと言ってあげると、若手の人は言われたことをやつたのを見ててくれてというのが伝わるそうです。逆に言えば若手としては3つ教えられたことの2つはまだ出来てないと見られていて、そこはあえて言ってないんだなということが、口を酸っぱくして言わなくても伝わるんです。ただほんとに危ないことをしていたらそこは叱らないといけないのですが、船長曰く大事なのは出来ている部分と出来ていない部分の指摘のバランスをとつてあげることが必要で、たいていの場合だと出来ていないことへの指摘に偏ってしまうからおかしくなると言うんです。船長の立場として難しいのは、昨日自分が何を伝えたのかと言うことを覚えていないといけないんです。覚えてないと出来るようになったかどうかということがわからないですから。でもその手間がある分、十分効果があつて、若い入たちはちゃんと見ててくれているんだと思うと、自分たちで動いていくと言つていました。

マグロ船は当然マグロが捕れるのですが、マグロは結構かわいそうな死に方をしていまして、捕れたばかりのマグロは船の上でバタバタ暴れているわけです。この暴れているのを、頭に大きな釘を木槌で叩いて額に大きな傷をあけまして、そこに1mくらいの長細い棒を背骨にそつて入れて神経を壊すのです。それがマグロにとって非常に苦痛なようで入れられるたびにピクピクと口からラグビーボール状の胃袋を吐いたりして非常に残酷なのですが、それをしないといけない理由があります。マグロは一生を平均時速60kmで泳いでいるので、人間に比べると筋肉の塊なんです。寝ている時間も時速60kmで泳

いでいるんです。だからつり上げで暴れているのを放っておくとどうなるかというと、火を使っていないのに体の中が50度くらいになつてしまふのでシーチキンになつてしまうんです。これは漁業の用語で焼けという現象で、こうなつてしまふと、お寿司屋さんがそのマグロを買ったときにシーチキンになついたらお店に出せないです。たちが悪いことに市場で並んでいるマグロを見てもシーチキンになつているか見分けがつかないんです。なので、成績がいい船、私が乗ったのは成績がいい船だったので、絞めるのが上手、神経を破壊するのが早くて上手だからこの船から買うマグロはいつでも安心だということで、値がブランドで付きやすくなるというのがございます。この処理が遅いと、お寿司屋さんが買ったときにシーチキンになつてしまっている。そうなると、この船から買ったマグロはシーチキンだということになつてしまうと、どのマグロも買いたたかれてしまうんです。

そうやって神経を壊して動かなくなったマグロを仰向けにして内臓を取り出すのですが、内臓を取るときにお腹を開けないんです。えらの部分を包丁でざくっと切つて、もう血だらけです。人間と同じくらいの生き物が血だらけになっているんです。そのエラの部分から内臓を一気に引き出します。エラと一緒に心臓も胃袋も腸も全部一緒に出てきまして、心臓なんかドクドクと馬みたいに跳ねているんです。私の拳と同じくらいの大きさで馬みたいに跳ねているんですが、漁師「これ食えるど」と言うんです。「煮るんですか。焼くんですか」と聞くと、生でかじれると言われて、「これを生で食べるんですか」というと「そげーじゃ」といわれて、みんな見ていて逃げられない感じなので、しょうがなく食べてみたんですが、生臭いんですが一応アワビの味でして、生臭ささえ消せれば美味しい感じではありました。

そういう感じで、マグロというのは非常に残酷な感じで死んでくれているわけですが、揚がつてくるのはマグロだけでなく鮫とかも揚がつてくるんです。鮫はフカヒレの材料になりますのでこれも船に上げてヒレを切るんですが、鮫も群れで捕れまして、群れに当たったときは船の床中が鮫になつてしまつて、その時に当たり

前ですが、鮫の頭の前に足とかを置くなと言われていますが、いっぱい捕れて足の踏み場も無く、仕方なしに若手の漁師が鮫の頭の近くに足を置いてしまったんです。そしたら案の定噛まれてしまって「おあ」と声が聞こえて、みんなが「どげーした」と見ると足を噛まれているんです。最初はその漁師もびっくりしていたのですが、気づいたら長靴だけ噛まれていたようでぎりぎりセーフだったんです。みんなもそれを見て「すげーな、神業じやの」とか言っていたのですが、その時に操舵室の方にいた一番上の漁師がそれを見て「なにやってんじや、このばかたれが」と怒るわけなんです。それは当然怒るだろうなと思っていたのですが、その後に来る言葉が大抵の一般企業であれば「お前はいつまでもそんな未熟な仕事をしやがって」みたいなことで怒ってしまうんですが、漁船の場合それで変に傷つけてしまうと、報告、連絡等、何かあったときに人間関係がおかしくなってしまうと連絡してくれなくなってしまふんです。例えばエンジンの音がおかしいといったときに報告を上げてくれないと、それが原因でエンジントラブルで出火して洋上火災で沈んでしまうという場合があるので、コミュニケーションがとぎれるとまずいんです。だから叱るときにも最初には「なにやつとんじやばかたれが」と言うんですが、その後に言う言葉が「せっかくお前がここまで育ってきたのに、ここで怪我をしたら戦力半減じやねーか」ということを言います。それは口調は怒っているんですが、言っている内容はある意味ほめているんです。それは言われている方に見てみるとすごく期待してもらっているのが伝わる言い方なんです。こう言われると「そんなことを言ってもらえる存在だったのに馬鹿なことをしまってますいな」と思い、若手の方もそうやって叱られてすごくうれしかったということを言っていました。叱るときというのはどうしても怒りの感情が先に出てしまうのですが、何で怒るのか考えてみろということを言われるんです。例えばペットの犬に「牛乳を買ってきて」と言ったとき、犬が牛乳を買ってくれなくても怒らないですよね。それは犬が買ってきてくれるのを最初から期待していないから牛乳を買ってきてくれなくとも何とも思わないわけですが、子供に「牛

乳を買ってきて」と言ったとき、買ってきてくれないと腹が立つのは、この子なら出来るだろうと思って、その期待がはずされたから怒りが沸くんだと言うんです。だから、怒るときに伝えないといけないのは、怒りの感情そのものでなく、その手前の部分にあった、その人に対する期待の部分を伝えてあげないといけないということが漁船で教わったことの一つでした。

時間的にもそろそろ最後のエピソードで締めようと思います。マグロ船というのは若手の漁師もすごくよく働くんです。同じ20代前半でなんでこんなに働くんだろうと思っていたのです。最初はお給料がいいから働くんだと思っていたが、今はお給料ではマグロ船の漁師は働いていないです。何かと申しますと、今から30年くらい前ですと景気が良かったので、中学卒業して2年目くらいで100万円もらっていたり、すごく景気が良かったのですが、今は原油代が上がっているとか、マグロが捕れなくなっているとか、あらゆるマイナス要因が働いていまして、今は一般船員で大体、40日出航してお給料30万円くらいです。それでボーナスはない。40日海にいて地上にいるのは3日間だけです。それで40日海のくり返しですので割がいいわけではないです。しかも3日間地上にいる内の1日半は次の出航の準備で潰れてしまいますから、40日行って、実際に休みがあるのは1日半くらい。しかも給料は30万。全然割が良くない。でもそうやって自分たちで工夫して働いていることがすごく不思議で、「なんでそんな風に働いているの」と聞くと、自分たちも船長のようになりたいと言うんです。それは実質的に船を持ちたいかどうかという話ではなくて、仕事のやりがいであるとか、ほめてくれたりとか、自分の居場所を与えてくれている人に憧れを持っているわけです。それが船長達の役目なのですが、そういう人たちに憧れる。ある意味、ちっちゃい子がサッカー選手になりたいとか、アイドル歌手になりたいと言っているのと同じくらいのレベルで、理屈ではなくて感情としてこういう人になりたいという理想があって、自分たちでその理想に向かって努力しているというのが、マグロ船の若い人たちが働いている理由だったのです。それを見て初めて、言われてみればお手本になる上司というのがいただろうかという

のを、自分で中で当時の会社の中と置き換えるとあまりいなかったのです。でもそれは、今考えると人のせいにしてはいけないとは思いますが、若手がそうやって働くためには自分自身がお手本になってしまふ。自分がどれだけ楽しく仕事をしていたかとか、若手の人から見てどれだけ憧れられるかという部分を自分で工夫していって憧れの存在になっていくと、自然に部下の人たちは憧れの人を目指していくということを漁師から学びました。

技術者の時代からマグロ船に乗せられたことで、人を活かすことというのがあるのだと、漁船に乗ったことで初めて知りました。これまで

は、魚とか化学を相手にした仕事でしたが、漁船に乗せられたことで、人とか、部署とか会社とかを活かすということにすごく感銘を受けまして、自分もこんな漁師みたいな仕事をしてみたいと思い、今、こうした仕事をさせていただいている。今日お伝えしたことというのは、漁船の中の話なので全部が役に立つとは思いませんが、一つでも使える部分があれば使っていただきたいと思っております。

今日は平日のお忙しい中、最後までお聞きいただきましたありがとうございました。

(文責 事務局)



## 「志～人物記念館の旅」

講師 多摩大学経営情報学部教授 久恒 啓一 先生

皆さんこんばんは、多摩大学の久恒と申します。私は知的生産技術研究会という会に30歳くらいから入っています。みなさんご存じだと思いますが、今年、梅棹忠夫先生が亡くなったのですが、梅棹忠夫先生の「知的生産の技術」という本が1969年に出了ました。私どもはその一年後の1970年に会を創って40年になります。私はその後半の方に入って来て理事長をしているのですが、都築さんとはこの会で長くお付き合いいただいている友人なのです。今日はぜひここへ来てしゃべってほしいということで、喜んでまいりました。

先ほどご案内があったように、企業に20年ほど勤めまして、その間、企業の中だけでは面白くないと思い勉強会に入りましたのが知的生産の技術研究会です。ここで30歳くらいから40歳くらいまで、いろんな先生を呼んで講演会をやっていました。だから、当時の有名な先生はみんな呼んでいるという感じです。若い頃から司会やったりしまして、必ず本一冊読む癖がついたりしてやってきたのです。40歳の時に、その蓄積ができてきましたので本を書きました。それは「図解の技術」という本でして、文章中心の社会に警鐘を鳴らすと言いますか、文章と箇条書きで成り立った伝達の仕組みが悪いというものです。その本を書きしたら話題になり、それがきっかけで、当時、多摩大学の学長だった野田一夫先生から連絡がありました。「君はいい本を書いた。だからすぐに会社を辞めなさい」と、それで「3年後に宮城に大学を創るのでそこに来なさい」ということで驚いたのです。3年後に会社を辞めて、家族共々仙台に引っ越しまして、そこで10年ほど教鞭をとりました。その後、私の若い頃からの盟友である寺島実郎さん。最近はよくテレビに出てきていろんな論考を行っています。あの人とは30半ばくらいから

付き合っているのです。彼は三井物産の常務をやっていましたが、辞めて多摩大の学長になるということにからんでいますが、彼を助けるために県立大学を辞めてこちらに来て3年目になります。

元々は企業の中で仕事をしてきたのですが、どうも仕事のやり方がおかしいのではないかと思っていました。それは文章というものに問題があるのではないか、文章というのはごまかしが利くというのが最大の特徴であると私は思うのです。自分が分かっていなくても書けますし、相手もごまかすことが出来る。したがって文章を中心としたコミュニケーションは非常に誤解・曲解が多いということです。もう一つは箇条書きです。箇条書きで物事を整理するというのが我々の文化なのですが、箇条書きは1, 2, 3とありますが、どれが大きいか分かりません。大小を表せません。それから、1と2が重なっている可能性もあります。重なりも表せません。それから、3が1に影響を与えている可能性もありますが、そういう因果関係も表せません。したがってキーワードを抜き出しただけの段階であるということです。物事は、大小と重なりと関係で成り立っていますから、そういうものを使って仕事をするのには限界があるという立場なのです。

だから、全体の構造を、関係を表すことの出来る図を使うべきだということで、全体の構造と部分どうしの関係を表す図を作りましょう、図を描きましょうという本を書きました。これを野田一夫先生は教育界に入れなさいということを言われまして、まず大学と私も張り切ってやってきました。現在のところ、地域活性化の議論のとき、大学の選択を作るとき、あるいは世界の名著を理解するときなど、あらゆるところで図は有効です。ちょっと野心的な本を書い

たことが一度あります。それは、世界の名著 50 冊。これは聖書から始まりましてマルクス、毛沢東、モンテスキューとあるのですが、そういうものを一枚の図にするという仕事をやりました。それは縦に繋がっていれば、ほとんどの名著は前の時代の否定ですので、こういうことでこれが出来て、こんな中身で、次世代にこういう影響があったと繋がっていくと世界の創始がわかるのではないかと思いやりました。これには面白い名前がつきまして、「読まずに分かるすごい本」という酷いと言えば酷い名前ですね。私自身は、中国の孔子が言った論語は何が書いてあるかというのを一枚で作りました。これを中国でやつたら中国人が驚いていました。

つまり、論理のあるものは全て図解できるという考え方でやっています。そうすると国語も論理ですから、読解力は図を使うことで上がるし、作文力は図で描いたものを文章化すれば上手い文章が書ける。数学と理科は図と式である。社会は因果関係ですからもっとも馴染む分野である。英語も全部そうなんですが、そういうふうにしていろいろな分野に革命を起こそうとやってきています。それはかなりやってきましたし、海外でも中国、韓国、台湾とかでは私の著作 10 数冊が翻訳されていまして図解ブームになりつつあるところなのです。

皆さんは旅行するときに何かテーマを持ってやられているでしょうか。私は大学を出るときに世界の全百数十カ国を回ろうと思ったんです。どういう観点で回ろうかと思ったところ、梅棹忠夫先生の「文明の生態史観」という本があります。これは私自身がマルクス主義から脱出することができた大変貴重な本なのです。地球の真ん中のユーラシア大陸に砂漠があってここからは時々大きな暴力が発生する。中国とインドとロシアと地中海、イスラムの四つのところは並行進化している。しかし、数百年おきに暴力が現れるのでいつまで経っても成熟しない。この暴力から逃れたところが 2 つあって、西欧と日本だ。この 2 つは内政的発展をしている親戚だから、日本はアジアの国ではない。こういう考え方です。これを確かめる旅をやっています。それで 40 カ国ほど回っています。

それで国内旅行をどうするか。観光地を訪ねて、温泉に入って、グルメで何か食べてもしよ

うがないですし、何かテーマがないかと思ったところ、6 年前に田舎に帰ったときに久しぶりに福沢諭吉記念館に行ったんです。子供の頃から福沢諭吉は偉いと言われてきたのですが、あまりにそう言われているので私は嫌いだったんです。ところが、外に出てみたらこんなに偉い人はいないんじゃないかと思って、帰る度に行っていました。行きましたら、「今日も生涯の一日なり」という言葉があつたんです。いい言葉だと思いました。福沢諭吉ですら「今日も生涯の一日なり」と思いながら過ごしていたんだと感動して、それを私のブログの名前に付けて毎日ブログを書き続けています。2004 年の 9 月 28 日から付け始めまして 2200 日～300 日、毎日毎日付けています。今では、今日あったことを明日の朝書くようにしていまして、いろいろなものを見る目が養われたのではないかと思っています。そこで、「そうだ人物記念館がある」ということで調べましたら、全国に主なものだけでも 1000 館くらいあります。これは行政がやっているものも民間がやっているものもいろいろありますし、実は数を揃めないのですが、これを回ろうと思いました。当時、仙台にいましたので、出張や講演の度に日程を付けて回りました。家族旅行でもそうです。家族を巻き込むといいんです。家内と一緒に行くようになると、女性で見る目が違いますから、「この人は偉いけれど奥さんにとっては悪い人だ」とか言います。それで東北 6 県は全て回りました。私の田舎は九州なので、田舎に帰ったときにはお袋を連れて回ります。そうするとお袋は年齢が上ですから、いろんなことを知っているので知識をくれます。そういうことで、九州と東北はほぼ回ってきたところで「東京に来ないか」と話しがあったので東京へ来て、今は東京近辺と西の方を攻めています。

どれくらい回ったかと言いますと、1 年に 60 ～70 館くらい回っています。結構大変で、お金がかかり、時間が厳しい、そして体が丈夫でないと保たない。ずっとやってきましたが面白くてやめられません。1 人の偉人の人生を丸ごと眺めていくわけです。どの記念館も悪かった記念館はありませんでした。全ての人の記念館が非常に感銘を与える記念館になっています。100 館を超えたときには、日本には昔から「百説」

という言葉があり、何でも百こなせという考え方があります。山を百登るといいとか、絵を百見るといいとかあります。これをやりますと、入門というか卒業というか、そういうレベルに達すると言われています。私も百館を超えたあたりで入門編を終えたと感じました。次に 200 館を超えるました。200 館を超えたときはこれは巡礼の旅ではないかという気がしました。偉い人、聖人の聖地を訪ねる旅。それ以降、300 館、400 館ときていますが、今となってみると私の優れた栄養補給源です。例えば、55 歳の時に訪ねた福沢諭吉の記念館と、58 歳の時に訪ねた記念館はやはり違います。見る目が違いますね。ひじょうに勉強になりますし、その都度、見るものが違ってきます。

そのリストがありますが、その結果、2 つ思いました。1 つは、日本にはなんて偉い人が多いんだろうということです。私は近代の偉人を中心にやっていますが、日本には偉い人が多いことに驚きます。もう 1 つは、どんなに偉い人も必ず死んでいます。不思議です。こんなに偉い人は死がないんじゃないかと思う人も途中で死んでいます。それで、人生は有限であるということを強く意識をしました。最近私が訪ねた記念館で、本物の日本人の条件は何だろうかと考えたものを 7 つ挙げています。

「仰ぎ見る師匠の存在」ほとんどの人には先生がいます。横山大観は岡倉天心でした。会津八一は坪内逍遙、渡辺崑山は佐藤一斎、昭和天皇は明治天皇です。高杉晋作は吉田松陰。山本五十六は河井継之助ですか必ず先生がいることが 1 つ。

2 番目に「切磋琢磨する敵と友がいる」ことです。必ずライバル、あるいは友人がいるということです。岡本太郎の敵は誰か、これはピカソです。ピカソをライバルとしていて「ピカソにどれくらい近づきましたか」と聞かれたときに「追い越した」と言って、皆が絶句したという話も残っています。武者小路実篤は 17 歳の時に 19 歳であった志賀直哉と出会って、それ以来お互いに 90 歳くらいまで生きるわけですから、長い友情関係を持っていた。友人とライバルが必要だということです。

それから 3 番目は「持続する志」途中で投げ出さない人が多いです。ずっとやり続けている

人が多いと思いました。森鷗外、牧野富太郎、大山康晴と言いますが、牧野富太郎は小学校一年生で辞めて、後は 90 数歳まで植物学をやるのですが、一人の人間が全生涯を掛けたらどれくらいのことが出来るかを示したような生涯です。大山康晴は将棋の名人です。この人は、賞を貰うと普通は喜んで酒を飲むわけですが違うんです、「賞はご褒美ではなく激励のしるしである」と言っています。したがってもっと頑張る。それで前人未踏の記録を作るわけです。

それから「怒濤の仕事量」と書いてありますが、私が見たところ寡作、少ない仕事で偉くなかった人はいないということです。みんな超人的な仕事量をこなしている。その結果いくつかの傑作が残る。その中の一作が生涯の代表作となって残っているということにすぎないと思っています。例えば、松本清張は 42 歳にデビューしましたが、84 歳まで書き続けて生涯 700 冊を書いています。あるいは、樋口一葉は 24 歳で亡くなりますが、無くなる前の 14 か月でほとんどの作品を書いて死んでしまいます。奇跡の 14 か月と言われ、毎月名作を書いています。渋沢栄一は日本資本主義の父ということですが、実は日本のほとんどの企業の創始者です。東京海上から第一銀行など 500 社を創立した人です。この人もものすごい仕事量です。与謝野晶子は生涯 5 万首の詩を詠んでいるんですが、近代最高の女性であると私は思っています。この人はものすごい仕事をしました。しかし私生活もすごくて、子どもを 13 人生んでいます。双子が 2 回ですので 11 回出産をしています。この人は出産が重かったので、その都度、死ぬような思いをしています。24 歳で長男を生みまして 41 歳で最後の子供です。つまり 24 歳から 41 歳まで毎年妊娠していたという感じです。その中で、ものすごい仕事量です。驚くべき仕事量です。音楽家で言いますと、古関裕而という人は 80 歳まで仕事をするんですが、生涯に 5000 曲。70 代で無くなっている古賀政男は 4000 曲。60 歳の中山晋平は 3000 曲ですがペースは変わらないですね。力の出し惜しみをしていないということです。

「修養・研鑽・鍛錬」と言いますが、ほとんどの人は自分を磨こうという意識が強い。安岡正篤、渡辺崑山。渡辺崑山は家老で、なおかつ当代一流の画家、そして蘭学者としてもトップ。

したがって時間がありません。睡眠時間3時間。現代の最も優れたビジネスマンで、何でもできる人と同じような生活です。新渡戸稻造は修養の塊みたいな人物ですが、新渡戸が武士道とは何かということを言ったのを記念館で聞いてなるほどと思いました。「武士道というのは神道と儒教と仏教の混合体である」と、なるほどそうかと思います。ところが、もっと偉い人がいました。二宮尊徳です。こう言っています。「神道ひとさじ、儒仏半さじづつ」つまり量があるんです。神道を中心として儒教と仏教を混ぜたのが日本人である。そうなると、日本を勉強するためには神道の本と儒教と仏教の本を読むわけです。そこで日本の名著、これをその通りに読んでいくと日本というものの考え方方が分かるのではないかと思い、そういうものも図解してみようかなと思っています。

それから「構想力」。まったく違うものを組み合わせながら新しいものを作っていく能力です。その最高の人が後藤新平。この人は日本鉄道の父、都市計画の父、放送の父、ありとあらゆる父です。後藤は日本の植民地の台湾を黒字化して、その後に南満州鉄道の総裁になる。それから東京は後藤新平の構想でできています。パリは放射線状、ローマは街の中を一本通っている。東京は環状線です。後藤新平は皇居を中心に環状線を造ろうとしたんです。環状八号線なんかは彼の発案です。地震があると建物が崩れるので、崩れないのは道路と公園だけということで道路と公園を作ることに熱中します。私たちが見ている公園は、その恩恵に与っているわけです。横山大観の構想力は、例えば、一枚の絵の中に日本の四季を全部と日の出から日没までと日本の名所を全部書き込もうとしました。日の出の何とか岬から、日没の何とか寺院まで描きました。それで日本全体を描くということです。考えてみると単なる絵描きではないですね、非常に大きな構想力です。

それから「日本への回帰」とあります。どんな人もだいたい一度は西洋にかぶますが、最後は日本に戻ってくる人が多いということです。絵描きの池田満寿夫は、西洋型の絵を描いたのですが、最後は戻ってきて日本型の絵を描いている。だから、日本の素晴らしいところをもう一回掘り起こす人がかなり多いということが分かっています。

います。

この7つの条件が、本物の日本人の条件ではないかということで、いくつ兼ね備えているかという講義を去年から始めました。毎回学生達に5~10人の偉人を紹介するのですが、自分のモデルをみつけるという講義で、ものすごい影響があります。岡本太郎は圧倒的人気があり「自分の詩を歌えばいいんだよ」と紹介します。自分のモデルを見つけて、それを図にして提出させるというのが私の授業でして、こういう旅を現在しています。

その次の地図ですが、これは私のホームページにもありますが、東京23区で訪れたところです。その裏が、私が今います多摩地区、多摩の人物記念館です。多摩だけでも平櫛田中、昭和天皇、明治天皇、土方歳三、武者小路実篤、水木しげる、村野四郎、中村研一、白洲次郎とたくさんいますが、こういうところを訪ねる度に日本人のルーツを見ている感じがします。その次のページに学生達の反応があります。私のいる多摩大は20年前にできたのですが、その時は40倍くらいのものすごい倍率の学校でした。久しぶりに来てみると少し違った学校になっていました、理念が少し薄れないと感じましたので昔のを読みまして、「現代の私塾」これはいいなと思いました、これを「志塾」にかえようと、教育理念をもう一度つくり直そうと、これを教育理念として提案してもう一度つくりました。ですから志を中心とした学校にしようと、小さい学校ですし、大手と競争する必要はないので志のある学校として突出すればいいだけなんです。学部としては「産業社会の問題解決の最前线に立つ人材を育てる」ことにしました。これを作ったために入試が変わってきます。AO入試と呼ばず、これは名前がおかしいですね、アドミッションオフィス入試なんて意味がわからないでしょ、だから「志入試」と呼ばうということで募集をかけています。つまり、志のある人を探るわけです。もちろん学力試験はやりますが、志のある人を探ろうと。それから、教育プログラムは志教育プログラムにしようということで、来年から本格的に始まりますが、産業社会論と問題解決学と最前线事例で重ねればいい、今の先生の科目を全部入れてくださいということです。いろんな勉強をしても何が問題か

というと、社会には問題だけが転がっていますので、問題解決をすることが仕事ですので問題が解決できればいいわけです。そのためにはマーケティングという分野がありますが、あれは何かと言いますと、マーケティングという手法を駆使する問題解決の手法です。あるいは、私のやっている図解というのは問題解決学です。小論文も問題解決学です。語学と呼ぶからいけないので、語学ではなく、異なる言語を使って問題解決するための手法だと考えるとかなりの分野が問題解決学になります。そして産業社会に問題がありますが、その問題を問題解決学で解いていく、そして、最先端の事例を並べて縦に繋げば良い学生が育つはずです。そして就職は、私の大学は就職がいいので有名だったので、よく考えると、大企業を受けてダメだったら中企業、ダメだったら小企業に行くというルートなんです。それはいけないと思っているので、「君たちは現代の志塾を出るのだから「志企業」に入れ」と言っています。それは何かと言うと、企業の大小にかかわらず、社会の問題を解決しようとする企業に入ればいいんじゃないかということです。つまり、企業の理念の中に社会の問題を解決しようという気があれば、そこにフィットして入っていくという面接をすれば必ず通るということです。そういうことでそれが今できあがってきているところです。

そうしますと、私の頭の中にも志という言葉が大きくなっています。私のところの若い事務職員が来まして、高校生向けに小論文の募集をしたらどうかときました。それをやろうということで、「私の志小論文コンテスト」を昨年から始めました。ところが高校生は志という言葉を知らないんじゃないか、だから来るはずがない、しかも原稿用紙6枚なので非常に評判が悪かったです。それを強行したところ353件集まりました。それで、2年目の今年は実に1157件集まりまして、高校854校から1157件です。これはいろいろな高校から来ました。北は北海道から南は沖縄まで来まして、非常に心強くしています。私はこれを事件だと思って、産経新聞の人には事件じゃないかと言ったんです。そしたら、産経新聞のアピール欄にスペースをくれまして、それを書いたのが一昨日の30日に出来ました。一位は高校2年生の「昆虫と僕」とい

うタイトルでした。これは昆虫研究者になって異なった視点化から医療分野への応用を考えていきたいという論文でした。もう1人は、裁判官になって被害者の苦しみにけりを付けるという人でした。もう1人は中等教育の現場で海外流プログラムを作つて世界に貢献するというひじょうにいい論考がたくさんありました。

私どもは志は何かと定義をしております。志は自分の夢とかではなく、社会に問題がたくさんある。不条理がたくさんあります。例えば、お金がないから学校に行けないと、本人のせいではないことで差別を受ける。そういうことを社会の不条理と言いますが、それを解決するために自分の職業や仕事を通じて解決する場所に入っていくということを増やしていくこと、社会と関係ないものは志ではない。今、日本の問題、世界の問題は、志無き経営者の問題です。リーマンショックはこの典型です。そういう意味で志ある経営者が要るのではないかと思っています。

それで私が思ったのは、1157件集まったという事実です。強い反応があつて未来に希望が灯った感じがしました。若者に志を持続させるためにがんばれるということであるし、教育現場でそういう志に至る筋道を明らかにして、そのためには何を学んだらいいかというプログラムを用意すべきだし、社会はそれを受け入れるべきだと思います。精神的荒廃と言われていますが、こういう論考を読むと、そういうことではないということがはつきり分かります。だから、日本には希望があると我々は確信をしております。だからこういう運動を続けていくこと、来年はこの記事も含めてやりますので、何千件は集めていきながら、こういう運動を進めていくと思っています。

志という言葉がここ1,2年、頭にありまして、志という言葉に関する言葉がたいへん集まっています。全国の記念館で、その偉人がどういう言葉を残したのかをずっと見てきて、かなり収集ができました。大変いい言葉が多く、その言葉を集めたのがこの本です。「志」という本ですが、例えば、「第一に余は生来極めて平凡な人間である。ただ幸いして、余は余自身のまことに平凡である人間であることを承知しておった。平凡な人間が平凡なことをしておったので

は、この世に於いて平凡以下のことしか成し得ぬことは極めて明瞭である」濱口雄幸、ライオン宰相が言った言葉です。濱口雄幸は八重洲口に暗殺された場所があります。八重洲口は暗殺が多いんです。八重洲口は濱口雄幸。丸の内口は原敬です。東京駅は暗殺名所ですが、誰も気が付きません。福沢諭吉は「今日も生涯の一日なり」で、渋沢栄一は「正しい道徳の通りでなければその富を築くことは出来ぬ」とかいいろいろな言葉があるんです。これはすごく影響を与えます。志を立てて磨いていく。私が気に入っている言葉は「少にして学べば、すなわち壯にして成すこと有り。壯にして学べば老いて衰えず。老いて学べば死して朽ちず」この言葉が生涯教育に一番いい言葉だと思って使っております。若者がなぜ勉強しなければいけないのか、「少にして学べば壯にして成すこと有り」つまり若いうちに勉強しないとテーマが決まらないということです。だから勉強しろということです。それから、みなさん方くらいの人には「壯にして学べば即ち老いて衰えず」。壯にして学ばないと老いて衰えるぞと脅かしてやっています。老人クラブに行きますと「老いて学べば即ち死して朽ちず」と言っています。これはどこにでも通用する佐藤一斎の見事な言葉です。ものすごくたくさんありますが、例えば、「一職をすれば一職、一官を挙すれば一官、心頭を離れず、ひたすらにそれにつとめるのみ、他に出世の秘訣あらず」これは意外なことに豊臣秀吉なんです。その仕事を真面目にやっていただけだということです。「凡庸な教師はただしやべり、良い教師は説明する。優れた教師は自らやってみる。偉大な教師は心に火を付ける」これはやはり教育者としてただしやべる、説明する、やってみる、火を付ける。これは私の反省ですけど、そうではないかと思います。それから東芝の会長だった人の「平凡の凡を重ねよ、いつかは非凡になる」いいですね。平凡な人間が長く続けることによって非凡になるのではないかと思っています。棟方志功「わだばゴッホになる」ゴッホになろうとした棟方は世界の棟方になったという詩がございます。岡本太郎「やろうとしないからやれないんだ。それだけのことだ。ぼくはこうしなさいとか、こうすべきと言うつもりなんて無い、ぼくだったらこうすると言うだけだ。それに共感するも反発するもご自由である」こういう言葉が山ほどあります。それから私は

卒業式の時に贈る言葉をこう言っているんです。小林一三、阪急の創設者で「下足番を命じられたら日本一の下足番になってみろ、そうしたら誰も君を下足番にしてはおかぬ」これは非常にいいです。学生達は会社に入りますと、当然下積みから始まりますから「日本一の下足番になれ」と、これに感銘を受ける人も結構出てくるということです。こういう言葉をかなり集めて本にしているんですが、今度の 15 日に「遅咲き偉人伝－人生後半に輝いた日本人」(PHP)という本を出します。早咲きの人はだいたい早く倒れています。遅咲きの人は成熟して世の中に出でていますから倒れません。従って仕事量が多いということになります。松本清張、大山康晴、森鷗外、新田次郎とか 20 人近くの偉人の生涯を書いた本ですが、元気が出る本じゃないかと思います。

皆さん 40 代後半から 50 代だと思いますが、例えば徳富蘆峰という人は 55 歳から本を書き始めます。完成は 89 歳、34 年間書き続けて 100 卷の本を書きます。そして死ぬのが 95 歳。そしてこの本は世界最大の著作としてギネスブックに載っています。つまり 50 代半ばから一つのことを始めて世界一になるということです。そういう人が多いんです。あるいは 50 代半ばになって、これを「中年の危機」と言いますが、この段階で、もう一回やり直して世界一になる人が多いです。そういう人生は山ほどあります。何人かしか皆さんは知らないかもしれません、そういう人は山ほどいますので、是非この本も自分のために読んでいただけたらと思います。

それから、ここ 1, 2 か月は事業家、経営者を訪ねています。ほとんどの人、小林一三とかホテルオークラの大倉喜八郎とか三菱、三井、住友とか全部美術館を残しています。要するに経営者は美術館を残すということです。どんなことを残したのか調べていますが、大変面白い結果になっています。

私はこう考えています、図解コミュニケーションの図解とは日本人の頭（アタマ）の革命です。これをやると考える力が付きます。例えば、全国の教育委員会とか教育センターとかに行っていますが、みんな図解を教えてくれと言います。やってみると、私の仕事を図解しなさいと、先生達が何をやっているか仕事の図を描きなさいと言っても描けません。子供達の考える力を付けようとしていますが、本人達が氣

が付かないということを気が付きます。今、私は、中央省庁から村役場まで、トヨタ、日産から、パチンコ産業までこういう講義をしていますが、日本の問題はただ一つです。どの会社、省庁に行っても、我が組織には考える社員、考える職員がないということを言っています。だから、考える力を付けるのが日本課題だと思っています。問題は提起しても答えはない人が多いのですが、私は図を使うことがその一つの有力な答えだと思っています。これは日本人の頭の革命。

もう一つは心（ココロ）の問題で、優れた日本人のDNAを持った人たちの紹介をすることが重要であり、偉人伝の復活がいいのではないかと思っています。ちょっと前だといろいろ言われたでしょうが、今はもうそういう時代に入っています。アメリカナイズされすぎています。日本人の中に偉い人はたくさんいますので、そういう人の生涯を教育の中に入れることは良いことだと思いますので、こっちを日本人の心の革命と言っています。

私はこの二本柱を教育の分野に入れていくのがいいと思っていまして、その手掛かりに大学で教えていますが、非常に有効ですし、学生達はもっと早く習いたかったと言っています。そして図解を学んだ子達は、就職して「先生、大学を出たらすごく大事なことがわかりました。もっと勉強しておけばよかった」と言うんです。本当の問題にぶち当たらないとなかなかそうはありません。図解コミュニケーションと人物記念館の旅をしながら今後もやっていこうと思います。今、ドラッカーがはやっていますが、私の「図解で身に付く！ ドラッカーの理論」（中経）も12万部出ています。「もしドラ」がはやって、売れるところも自動的に売れる仕組みになっているんです。おそらく「もしドラ」を読んでも感覚的には分かりますが内容は分からぬですが、これは図で80枚ほどありますから、文章を見ずに図だけ見て分かればそれでいいんです。それで分からないところは文章を読んでください。文章を読んだときに、人間の頭はどうなるかというと、管理職になったころの自分の顔を思い出してください。管理職になったときは眉間に縦皺が寄ります。なぜかというと文章を読みすぎです。文章を読むことは苦しいんです。だからそうなってしまう。図の場合はもっと楽でしょ、人間の頭はそうできているんじゃない

かということです。そういうことで、今の日本の教育は文章偏重主義、箇条書き指向ですが、ここに図を入れるのがいいと思っているので「文図両道の勧め」と言っています。両方やることが社会に出てもすごく貴重です。企画が出来る。会議を仕切れる。どんな難しい問題も一つの形に体系化できる。今、求められている能力はそういう能力ではないのか、鳥の目で物事を見ることのできる能力である。それにこれを加えればいいわけです。そう思っています。

後はホームページを見てください。全部載っています。大学も高校も結局同じことをやっていますので、皆さん一緒にやりませんか。先ほどの「私の志論文コンテスト」はひじょうにいいと思いますので参加してもらえるとありがたいです。それから、見所のある子はぜひ寄越してください。私が鍛えます。そして私のところには、寺島実郎学長は歴史の人物のような素晴らしい男ですが、彼が指導する学長ゼミがあります。ここに先生が10人、学生が30人。このエリート教育を毎週土曜日にやっていて、大変良い論文ができあがってきています。志があればここに入って来て、そして普通のゼミと学長ゼミをやって、毎週彼の最新の情報を聞けるのですからものすごいことです。この前、このゼミに一年間入った子に地域活性化フォーラムで発表させたらほとんどこのゼミの学生でした。学長の任期があと4,5年ありますが、一緒にやっていくつもりなので、こういうところから志を持った学生を社会に送り出して、それをずっと縦に繋げて指導していこうと考えています。今日はありがとうございました。

（文責 事務局）



## 「東京都の教育施策と課題—最近の動き」

講師 教育庁指導部指導企画課長 金子 一彦 先生

いよいよ 3 学期が始まり、入学者選抜が推薦、一般入試とありまして、その後に卒業式、進級ということで副校長先生方も一番神経を使われる時期になろうかと思います。今日は貴重なお時間をいただき、お話をさせていただきたいと思います。

私は町田工業高校に 4 年間、それから雪谷高校で 12 年間教員をやりまして、平成 7 年に指導主事になりました。それから 15 年で、ちょうど教員生活と教育行政の時間がほぼ同じくらいになりました。私が指導主事になるきっかけは雪谷高校の当時の伊川教頭先生でございまして、夏休み前くらいに「あなた思い切って書きたいことを書いたらどうだ」と言われました。言うのも私は学校の時は、職員会議で管理職に反対の意見も言っていましたので、ずいぶん目を付けられていたと思います。「そんなに言いたいことがあるなら都教委に直接言ってみろ」というふうに励ましてくれまして、調子に乗って受けましたら一発で落ちました。そこで止めればよかったのですが、一緒に受けた他の学校の人が受かりまして、「なんで彼が受かって俺が落ちたんだ」と頭にきまして、2 回目を受けてこの道に入りました。教頭先生の一言がなければ私はたぶん指導主事にはならなかっただと思います。

指導主事を受けたことは、教頭先生の言葉が一番大きかったのですが、その前に教育研究員をやったことが大きかったです。29 歳のときにやりましたが、その時に初めて指導主事なるものに会いました。御岳合宿もよく覚えています。その後、昔の都立教育研究所で教員研究生をやり、一年間、研究室の指導主事の先生にしごかれたというありました。

もう一つは、私は教科が国語なんですが、都立高等学校国語教育研究会というのがありますで、ここでけっこう勉強させてもらいました。

ほかの学校の先生方と学力テストの作成委員ですとか、全国連の発表やお手伝いなどをしていました関係もありました。教頭先生の一言だけではこの道に入らなかつたのではと思います。やはり教科の指導、授業の充実というのを自分なりに心がけていたので、指導主事になろうという気になったのではないかと思います。

ご案内の通り、現在 A 選考、B 選考共に極めて低倍率でございます。12 年度に始まった A 選考は当時 8 倍近い高倍率でしたが、5 倍、3 倍と落ちてきてまして、なんと今年度は 90 名の募集に対して 70 数名しか受けない定員割れという大変なことになっております。指導主事というのを 5 年やりますと副校長任用審査があり副校長になるわけですが、その副校長になる指導主事が今年 90 人いるわけです。ということは、新たに 90 人指導主事になってもらわないと足りなくなってしまうということになります。つまり、指導主事が副校長になれない。「新しい指導主事が入ってくるまで一生指導主事をやっていろ」と高野指導部長は毎日のようにそう言っているのです。冗談ではないんですよ。

つまり、高校の国語の A 選考の受験者がいないと、5 年目の国語の指導主事が副校長になれないという事態になっており、最初に申し上げたいのは、B 選考ももちろんですが、A 選考の受験の声掛けを是非お願いします。私のように声を掛けられるとその気になってしまう教員も中にはいると思うんです。断られることもあるかと思うのですが、中にはその気になる人もいると思うので、是非しぶとく声掛けをしていただけたとありがたいです。特に教科で言いますと、商業や保健体育ですとまだ A 選考を受けるのですが、地歴公民とか理科、芸術などはほとんど受けないんです。そういう状況ですので是非一声掛けでいただけたらありがたいと思っ

ております。

本題に入ります。今日は A3 版の資料を付けてありますが、最近の主な東京都教育委員会の動きについて、平成 11 年度から昨年度までの内容をまとめた資料となっております。私が高等学校教育指導課に着任したのが平成 11 年度で、国旗国歌の 1 回目の通達が出た年です。こうやって見てみると 11 年度の国旗国歌、それから「学校経営」の方では、都立高校改革の第 2 次計画が出ました。13 年度には日比谷高校から進学指導重点校の指定ですとか、入試制度では 14 年度に学区の撤廃。15 年度の「人事」の所を見ていただきますと主幹制度が始まった。一番下の「指導内容」という所が指導部の与るところなのですが、13 年度には学校運営連絡協議会が全校に設置された。同じ年に通年の授業公開。小中学校では授業公開というのは当たり前だったのですが、高校では一部の限られた学校でしか行われていなかったということで、授業公開を必ず位置付けてくれということもありました。15 年度には国旗国歌の 10.23 通達。さらに、今では当たり前になった生徒による授業評価の試行も始まりました。

こうやって見てみると 11 年度から 15、16 年度までというのは、どちらかと言うと教育委員会の方から高校の方にやってくれと、またやってもらわざるを得ない状況があったということで、ここを「トップダウンの改革」ということで整理してあります。

ところが平成 17 年度に入れると、「全都立高校の進学指導の充実に向けて」といった取り組みの報告ですとか、あるいは、日本の伝統文化理解教育、あるいはキャリア教育を推進していくこと。あるいは学校経営支援センターの開設というのが 18 年度。事務室が経営企画室になりました。また、この頃から部活動の振興ということも謳われておりました。19 年度には教科「奉仕」の必修化ですかいろいろありますが、この辺は制度そして、仕組みとしては教育委員会が作りますが、やっていただくのは学校。中身は学校で計画し、工夫していただかなければならぬ。内容をそれぞれの学校で工夫してほしいという、いわば「学校の創意工夫による改革」が求められた時期が 17 年から 19 年度あたりかと思います。

そして、ここ最近の動きですが、20 年度以降を見ていきますと、基準「東京ミニマム」の作成とあります。東京ミニマムをご覧になつた副校長先生はいらっしゃいますか。それを高校の授業改善に活かされたという学校はありますか。(ほとんど挙手せず) 要するに、これは小中学校の学習で子供たちが躊躇がちな所はこういうところだから、こういうふうに教えないと高校へ行っても分数のかけ算ができないとか、そうなってしまうから小中学校の段階できちんと教えましょうというものです。直轄である都立高校もさることながら、義務教育の小中学校の学力向上に東京都教育委員会が一層かかわるようになり始めたのがこの時期です。

20 年度、教職大学院との連携開始。教職大学院というのは、最近では教職大学院の学生が都立高校にも連携協力校として実習に来ていますが、始まった頃は主に小学校の教員の質を高めなければいけないということでできた国の制度でありまして、この辺りもスポットは小学校、あるいは中学校だったのかなと思います。

それから 21 年度、昨年度になりますと、子供の自尊感情を高める教育の充実ですとか、3 番目に CO2 削減アクション月間というのがあります。CO2 削減アクション月間をご存じの方どれくらいいらっしゃいますか。(数名が挙手) これは毎年 6 月をアクション月間と位置づけ、全公立小・中学校で、各家庭で電気を消したり、水を出しつ放しにしない、テレビを付け放しにしないということをしまして、1 人でどれくらい CO2 を削減できたか、クラスでどれくらい削減できたか、何組が一番削減できたか、うちの学校ではどうなのかということを、家庭を巻き込んで、全校で環境教育の一環として始めました。今年度は、全都で約 450 万トンの CO2 を削減できたと聞いています。

指導企画課に関係するところでお話ししますと、学校問題解決サポートセンター、これはさすがにご存じだと思います。これは高校の皆さんにも活用をしていただいています。特に学校に対して理不尽なクレームを付けてくる保護者。授業を聞いていないのを、聞いていないうちの子が悪いのではなくて、教えている先生の教え方が悪いと言う保護者の方もいるようですが、都教委は使いませんが、世間では「モンスター

「ペアレンツ」などと言っていますが、そうではなくて、基本は子供の成長のために、学校も保護者も同じ方向でやっていこうということです。

次に、登校支援員というのは中学校の不登校対策ですし、中学校の部活動で、顧問の先生が異動すると廃部になってしまふから外部人材を活用したらどうかという事業。昨年度から始まった中学生駅伝まで。こうやって見ていただきますと、最近は、指導部もかなり義務教育を重要視してきているのではないかと思います。

そんな中で高校に関して今一番ホットな話は日本史の必修化です。これは高等学校教育指導課の方で進めているところです。12月28日に「江戸から東京へ」というテキストを東京都教育委員会のホームページにアップしたのですが、ご覧になった方はいらっしゃいますね。(数名が挙手)結構綺麗に写真とかが載っていますから帰られたら是非ご覧になってください。あわせて、各学校においてテキストの活用をよろしくお願ひいたします。

話は変わりますが、国の方では、文部科学省は予算がうまくいかなくて、小学校一年生だけ35人にするという定数で、4,000人の教員を増やすというけれども、定数の純増分は全国で300人あります。これに対して、東京都の方はなんと小一問題・中一ギャップを予防・解決するために、都単独でおよそ300人も加配するのです。これも小中学校を何とかしなくちゃいけないと、都教委が本腰を入れているということです。

このように、小中学校に対して都教委が様々なことをやっているのですが、そういう義務教育を経て子供たちは高校に入学して来ているということを高校の先生方も知らないといけない。皆さんには小中学校の取り組みについても目を配っていただけたらありがたいと思います。

次に、今私ども指導部が何をやっているのかというお話を若干したいと思います。

指導部の三本柱というものは「学力向上」「体力向上」「健全育成」の三本でございまして、これは小中学校だけではなく高等学校も当然この三本柱で進めているところであります。

たとえば、学力向上開拓推進校が高校15校。これは特に進学指導重点校ではない学校で、学力向上で頑張ろうとしている学校に推進校にな

ってもらって進めています。学校ごとに、学力テストを、中間・期末ではなく実力テストを工夫して作成して、平成24年度にはすべての都立高校で実施するとか、今まで聞いたこともないようなことを高指課がやろうとしています。

一方、都教委では「全国に先駆けて」というのがキーワードであります。必ず何か始めるときには、「全国では初めてです」ということを意識して進めています。ですから小中学校の全国学力調査、あれが民主党の政権になってから悉皆調査が抽出調査になりましたが、東京都では約17%しか抽出の対象にならず、23区26市の中では一校も抽出されない地区さえあるんです。そんなのでいいのだろうかと、やはり全ての子ども達に全ての結果を返して授業を改善していくというのは、抽出された学校がやって、されなかつた学校はやらなくていいという話ではないだろうと思います。だから、「国がやらないなら都がやります。都は悉皆でやります」と。

もう一つの都教委のキーワードはこの「悉皆」。ことごとくみんなやる、というのが2つめのキーワードです。「全国に先駆けて」「悉皆」これだけは今日覚えて帰っていただければありがたいと思っています。今年度の小中学校の学力調査はもう終わりましたが、今年小学校5年生、中学校2年生に読み解く力の調査というのを悉皆でやったんです。これを見たことある先生いらっしゃいますよね。それでこれを実際に授業改善か何かに使われましたか。(挙手は皆無)

これはいわゆるPISA型の学力で、日本の子供は知識・理解はそこそこなんですが、考えを書けとか、推論して判断しろとかいうのは非常に弱いということで、そういう問題を作ったんです。これをご覧にならない方には是非一回見ていただきたいのですが、中身もさることながら、この問題の間の1が「～を全て答えなさい。【必要な情報を正確に取り出す力】」。間の2は「～を一つ選び記号で答えなさい。【比較関連づけて読み解く力】」を見る問題だと。子どもが解く調査問題一つ一つにどういう力をこの問題は見ているのかということを全ての問題に明示している。

こういう問題の示し方というのはあまりないと思います。何を言いたいのかというと、これから作成される各学校の実力テストには書かな

くてもいいんですけど、「この間の 1 というのが比較関連づけて読み取る力を見る問題です」などと、作成される先生方が、国語の先生も数学の先生も、こういうことを意識して問題を作るためにも使っていただけるんじやないかと思います。

私どもの方としても言語能力の向上、PISA 型の読解力の向上というのは、小中学生に限らず、高校生にこそ身に付けてほしいということで、来年度の新規事業で言語能力向上推進事業というのを実施します。是非ここにお集まりの副校長先生方には手を挙げてほしいのですが、活字に親しむ学校づくりということで、推進校 65 校を指定します。この内、都立学校は 15 校指定いたしました、予算は一校 45 万程度差し上げます。15 万は報償費。外部の専門家とか新聞記者とかアナウンサーとか大学の先生とかいろんな先生がいますので、外部の人材を活用する報償費に 15 万。それから、本を買ったりいろいろな資料を用意したりと一般需要費に 30 万の合計 45 万で、これを 3 年間指定します。まもなく通知が行くと思いますが、ただ本を読むだけではなくて、先生方の授業改善にも直結する事業だと思っておりますので、是非学校をあげて活用していただけたらありがたいと思います。

それから 2 番目の健全育成でございます。私どもの最大の課題は子供達の自殺防止であります。例年、都立高校生の自殺などの命にかかわる重大事故の発生件数は、死に至らないまでも未遂に終わったのも含めて大体 7~8 件で推移してきているんですが、なんと今年度は 12 月時点で 20 件を超える報告がございます。幸い命は取り留めて、飛び降りても亡くならなかつた件数を含めての数すけれど、極めて深刻でございます。

このことに関して、私どもは平成 22 年 10 月 14 日付けで「自殺防止 12 の提言」というものを出しているのですが、これはご覧になりましたよね。(大半が挙手) 学校はこういうふうにしてほしい、教育委員会はこうすべきだ、関係機関、家庭・地域は、という提言が全部で 12 あります。これは委員として専門家の方とか精神科の先生とか、学校の養護教諭の先生にもお集まりいただいて、いろいろなご意見をいただきました。その中の提言でありますので、すで

に受け止められていると思うのですが、学校では 3 つあります、1 つは自己を大切にする心を育む。2 つ目は早期発見する体制。3 つ目がキーポイントですけど、アンケートなどを活用して生徒理解を深めるというのが学校に提言された 3 つの内容であります。それぞれ組織的に対応されていると思いますが、提言を出した直後に、これは中学校でしたが、自殺して亡くなるという報告がありました。すべてを未然に防止することは極めて難しい。けれども粘り強く、あきらめはいけない、大事な課題だと思っております。

私は、子供の命を守ることに関して大切なのは、学校で勝負するのはよい授業と特別活動ではないかと思います。特別活動と自殺防止と何が関係あるんだと思われるかもしれません、やはり授業で勉強して分かるようになった、成績が上がってうれしかったというのもあるでしょう。でも、何か困ったり悩んだりしたときに相談できる友達がいて何とか救われたとか、あるいは担任の先生や養護の先生に相談できて良かったとか、要するに自分の支えになってくれる人間関係が、学校に無くて自殺防止は図れないのではないかと思っております。授業時数の確保のために、行事を減らすこともあるでしょうが、これは都教委の見解と言うより私個人の見解ですけど、特別活動、学校行事、ホームルーム、生徒会活動、部活動、これらは非常に大事だと思っております。子供たちの命をはぐくむためにも改めてそういったところの充実というのを図ってもらいたいと思います。

それからスクールカウンセラーですが、中学校には全校配置されておりますが、都立高校は現在 60 校しか配置されておりません。これを来年度は全校配置と要求したのですが、予算がつかず、でも 100 校に拡大です。ただ 100 校と言いましても学校数は 190 何校ですので、およそ 2 校に 1 校は来年度は配置できる見込みです。ここで申し上げたいのは、スクールカウンセラーを申し込んでも、「また外れた」「やっぱり無理だった」と言うのではなくて、一声かけてもらえるとありがたい。スクールカウンセラーを申請していく、是非後押ししてくれと支援センターに頼んでいる副校長先生はどれくらいいらっしゃいますか。高指課に直接電話して配置し

てほしいと頼んでいる先生はどれくらいいらっしゃいますか。（挙手は皆無）この前、私が指導主事の時代に鍛えていただいた教頭さんが校長先生になっていまして、その方が珍しく指導企画課に見えて、「金子さん、うちは大変なんだよ。スクールカウンセラーが2年目ではがされてしまう。冗談じやない。3年目、4年目と配置してもらわないとこんな状況だよ」と言ってくれた校長先生がいらっしゃったので、「わかりました。努力します」と言って高指課に行ったらその校長先生は高指課に頼んでいない。大体は高指課が選び、指導企画課がそれを見て、最後は指導部長が決めますから、まずは高指課に押してもらわないとダメなんです。

ところで「支援センターにはどうしたのか」と言ったら「行ってません」と。「何で言わないんですか、支援センターはどこの学校に配置すべきと支援してくれるのが支援センターじゃないですか。是非頼んでみましょう」と順番が逆なんですが頼んでもらいました。そういう学校もありました。来年度のスクールカウンセラーはこれから決定してまいりますので、手を挙げられた学校は是非校長先生に言って「指導部にもう一押ししてみてはどうですか」と金子が言ってましたと伝えてください。私どもは全校配置を毎年予算要求しているんですけど、財政的に難しくて、なかなかそうはいかないというところもありますが、全校に配置すべきだと私は思っております。

3番目は体力向上。これはもうご案内の通りです。東京の高校生の1500mのタイムが全国の中学生の1500mのタイムを下回っている。高校生の記録が中学生を下回るという大変危機的な状況がございます。小学生は少しずつ向上してきていますが、問題は中学生。新聞でもご覧になっていると思いますが、特に男子は47都道府県で46位、極めて深刻な状況でございます。これは大変だということで、来年からは一校一取組運動というのを悉皆で都立高校でもやっていただくわけですが、もう今年度からやっているという都立高校も結構ありますて、たとえば、体育の授業に毎時間筋トレをやりますという本所高校とか、体育祭で山高体操をやるという山崎高校、それから延々と持久走を集中的にやりますという片倉高校など、いろいろな一校一取

組運動がすでに始まっている学校もあれば、まだ決まっていないという学校もございまして、是非この辺りもよろしくお願ひしたい。全学年、全種目、悉皆で行う体力調査もやります。まだ都立高校は35%が全学年、全種目の体力テストをやっていないという状況もあります。もし調査を実施していない学校につきましては、是非、来年度の計画に必ず入れていただきたいと思います。

いろいろお話をいたしましたが、最後に、私が高指課の指導主事のときは学区教頭会というのがあります、しかも全・定別にあります、いろいろ質問やご意見をいただきましたし、終わったら必ず全日制の飲み会の後は定時制の飲み会に行って散々話もしたし、しごかれたものでございます。こういった副校長さんと指導部との連携は大事にしたい。支援センターができるよかったですと思うのですが、その分、副校長先生がほとんど指導部に見えるということがなくなってしまい非常に寂しい思いをしております。知っている人間ですから電話していただいて、学校はこうなんだという話を高指課や指導企画課の方にもドンドン入れていただきたいと思います。

それから、副校長先生方は本当にお忙しいと思います。ただ、副校長先生方が「忙しい忙しい」と言っているのでは困りますので、自分で仕事をするというよりもむしろ教員に指示をして仕事をさせる。馬が合わない主幹教諭もいると思います。言うことを聞かない主任教諭もいるのではないかと思いますけども、やはりきちんと話をして、「あなたはこれをやりましょう。私はこれをやります」といって指示をして仕事をさせるということを心がけてほしいと思います。これは指導企画課の指導主事に対してもそうなんですが、私がやるのはなくて統括指導主事、主任指導主事に全部仕事をやってもらっているんです。それに対して、私が70%くらいやってほしいなと思っていて、50%くらいのバックがあったときでも「よくやった。素晴らしい」と言って毎日褒めては、その後直してもらったりしています。皆さんにも、褒めるときは大げさに大声で褒めていただいて、活力のある都立高校を、先生方のお力では是非作っていただきたいと思います。

駆け足ですみませんでした。どうもありがとうございます。

(文責 事務局)



## 11. 会員異動

定年退職者（9名）

平成 22 年 3 月 31 日

学校名	氏名	21年度副校長会役職名
篠崎	美野輪 武	都副校長会・東部D常任幹事
武藏丘	上原 徹	
第四商業	島村 栄一	
成瀬	竹内 重雄	
南平	長津 平二	都副校長会・会計監査
田無工業	田村 國雄	都副校長会・西部C常任幹事代理
東大和	渡邊 博史	全国・会計
秋留台	上野 敏雄	
瑞穂農芸	大島 敏秋	

校長栄進者（16名）

平成 22 年 4 月 1 日発令

現任校	氏名	前任校	21年度副校長会役職名
足立工業	栗田 博康	荒川工業	
荒川工業	高橋 康宏	練馬工業	
小岩	山田 芳嗣	葛飾総合	
世田谷泉	林 秀吉	北園	
豊多摩	田中 賢二	久留米西	
大崎	小巻 明	神代	
田園調布	桑原 洋	美原	
大島	高木 龜介	橘	
大山	熊谷 通眞	福生	
田柄	佐藤 芳教	国際	
豊島	不殿 讓	新宿	都副校長会・中部B常任幹事
町田工業	高松 清	忍岡	
農業	後藤 哲	園芸	都副校長会・中部B常任幹事代理
多摩	田中 一彦	山崎	
羽村	柴田 英男	武藏村山	
小平西	古川 邦夫	足立新田	都副校長会・東部B常任幹事



## 中学校長（2名）

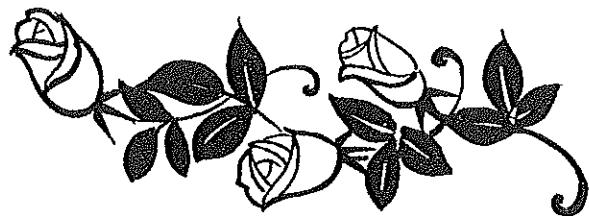
平成22年4月1日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	21年度副校長会役職名
足立区第七	山 本 正	足 立	都副校長会・東部A研究幹事
港 区 三 田	東 保 明	芦 花	

## 全日制間の転任（16名）

平成22年4月1日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	21年度副校長会役職名
足 立	宮 下 義 弘	総 合 工 科	都副校長会・中部B幹事補佐
足 立 新 田	小 澤 彰	大 島 海 洋 国 際	
荒 川 工 業	瀧 澤 隆 司	工 芸	都副校長会・会計
八 潮	鈴 木 春 子	蒲 田	都副校長会・会計監査
晴 海 総 合	岡 島 ま ど か	淵 江	都副校長会・東部A幹事補佐
両 国	藤 井 英 一	九 段 中 等	
新 宿	遠 山 孝 典	両 国	
総 合 工 科	守 屋 誠 一	墨 田 工 業	都副校長会・副会長、工業常任幹事
高 島	金 子 効	練 馬	
練 馬	藤 原 成 憲	向 丘	
杉 並 工 業	松 尾 龍 太 郎	杉 並 総 合	
武 岐 野 北	渕 脇 英 一	拝 島	
田 無 工 業	板 倉 哲	杉 並 工 業	
拝 島	石 井 哲 也	町 田	
瑞 穂 農 芸	久 保 田 弘	農 業	都副校長会・農業常任幹事
国 分 寺	宮 崎 高 一	小 金 井 工 業	



## 定時制から全日制への転任（23名）

平成22年4月1日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	21年度副校長会役職名
葛 飾 総 合	中 村 茂	向 島 商 業・定	
向 丘	難 波 伸 一	藏 前 工 業・定	
小 石 川	小 野 寺 真 也	鷺 宮 ・ 定	
忍 岡	原 田 明	荻 窪 ・ 定	
美 原	奈 良 井 潔	向 島 工 業・定	
本 所	中 山 繁	第 三 商 業・定	
橘	瀧 上 哲	大 泉 ・ 定	
松 原	小 林 孝 行	穏 ケ 丘 ・ 定	
芦 花	西 田 豊	杉 並 ・ 定	
杉 並 総 合	武 田 尚	飛 鳥 ・ 定	
神 代	清 水 進	石 神 井 ・ 定	
世 田 谷 総 合	濱 田 准 一	南 多 摩 ・ 定	
世 田 谷 総 合	平 野 み ど り	町 田 ・ 定	
国 際	寺 島 雅 夫	八 王 子 工 業・定	
総 合 芸 術	渡 邊 英 信	三 鷹 ・ 定	
井 草	東 信 幸	東 久 留 米 総 合・定	
第 四 商 業	塚 本 稔	第 二 商 業・定	
町 田	真 保 俊 哉	新 宿 ・ 定	
成 瀬	並 木 洋 之	八 王 子 拓 真・定	
八 王 子 北	久 保 淳	砂 川 ・ 定	
南 平	宮 澤 良 美	富 士 ・ 定	
久 留 米 西	上 野 努	久 留 米 ・ 定	
武 藏 村 山	堀 江 徹	第 四 商 業・定	

## 他校種から全日制へ転任（2名）

平成22年4月1日発令

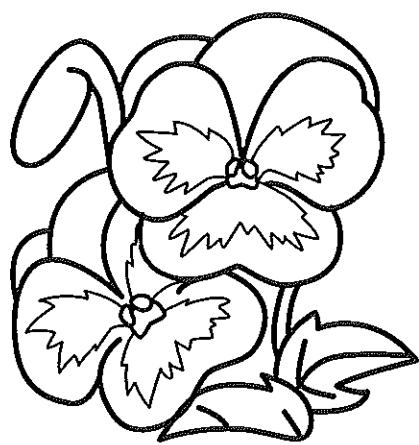
現 任 校	氏 名	前 任 校	21年度副校長会役職名
九 段 中 等	牧 野 敦	葛 飾 区 新 宿 中	
保 谷	山 崎 仁	大 泉 特 別 支 援	



## 全日制から定時制への転任（10名）

平成22年4月1日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	21年度副校長会役職名
江北・定	宮川 隆史	田 無	
南葛飾・定	小宮山 英明	松 原	
一橋・定	山田 温	高 島	
浅草・定	佐々木 雅人	武藏野 北	
桐ヶ丘・定	神永 庄一	井 草	都副校長会・中部D研究幹事
穂ヶ丘・定	佐瀬 千賀良	神 津	
豊島・定	松木 啓展	青梅 総合	都副校長会・西部D幹事補佐
八王子拓真・定	笛沼 正美	永 山	都副校長会・西部A常任幹事
立川・定	戸塚 吉彦	府 中 東	
砂川・定	青木 モト子	八 王 子 北	都副校長会・西部B研究幹事、幹事補佐



## 新任者（27名）

平成 22 年 4 月 1 日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	備 考
瀬 江	住 吉 貴 之	大 島 海 洋 国 際	昇 任
工 芸	前 田 平 作	八 王 子 工 業	昇 任
蒲 田	仲 間 均	大 森	昇 任
篠 崎	鈴 木 康 司	墨 田 工 業	昇 任
墨 田 工 業	高 幹 明	六 鄉 工 科	昇 任
圓 芸	稻 垣 彰	成 瀬	昇 任
神 津	笠 原 聰	蒲 田	昇 任
大島海洋国際	北 江 繁 治	駒 場	昇 任
桜修館中等	柳 澤 忠 男	渋 谷 区 教 委	昇 任
北 園	杉 浦 文 俊	本 所 工 業	昇 任
北地区総合開設準備	生 田 武 美	北地区総合開設準備	昇 任
武 蔵 丘	高 橋 秀 信	南 葛 飾	昇 任
練 馬 工 業	渡 邊 隆	田 無 工 業	昇 任
山 崎	高 島 英 生	調 布 南	昇 任
永 山	高 野 宏	千 歳 丘	昇 任
若 葉 総 合	山 之 口 和 宏	日 野	昇 任
八 王 子 桑 志	深 澤 真 澄	野 津 田	昇 任
府 中 東	鈴 木 留 美 子	多 摩	昇 任
武 蔵 附 属 中	杉 本 悅 郎	青 井	昇 任
田 無	木 田 貴 子	青 梅 総 合	昇 任
多摩科学技術	早 川 信 一	科 学 技 術	昇 任
東 大 和	清 水 真	東 村 山 西	昇 任
多 摩	西 野 良 仁	五 日 市	昇 任
福 生	村 山 正 仁	府 中	昇 任
秋 留 台	西 島 宏 和	上 水	昇 任
東 村 山	北 澤 良 浩	昭 和	昇 任

## 21年度早期退職副校長（1名）

平成 22 年 3 月 31 日

学 校 名	氏 名	21年度副校長会役職名
保 谷	井 口 一 成	全国・管理研究部長

## 平成 22 年度中途発令者（4名）

現 任 校	氏 名	前 任 校	備 考
大 島	菅 勇 真	富 士 森	平成 22 年 4 月 16 日発令
第 四 商 業	武 田 一 郎	美 原	平成 22 年 6 月 16 日発令
足 立 ・ 定	平 塚 浩 司	雪 谷	平成 22 年 9 月 16 日発令
駒 場	青 木 永 二	武 蔵 丘	平成 22 年 11 月 16 日発令

## 編 集 後 記

最初に、東京都立高等学校副校長会会報第38号の発行にあたり、お忙しい中原稿をお寄せいただきました先生方に深く感謝いたします。

さて、今まで東京都立高等学校の副校長会は全日制と定時制・通信制とが別々に活動して参りましたが、来年度から東京都公立高等学校副校長協会として一つになります。この準備として1月5日(水)午後6時15分から文京シビックセンターにて臨時総会を開催しました。臨時総会では、東京都公立高等学校副校長協会全日制部会細則をご審議いただきました。

さらに、臨時総会後に教育庁指導部指導企画課長、金子一彦先生より、「東京都の教育施策と課題ー最近の動き」と題して資料を示していただきながらご講話をいただきました。東京都の教育改革の経過と今後の方向性を分かりやすくご説明いただきました。臨時総会で日程調整も期間が短かったこともあり、46名の参加でしたが、貴重な時間でした。

ところで、「副校長は忙しい」は、いろいろなどところで聞く言葉です。日常の校務処理や緊急対応に追われ、一人でもがき続ける日々を送っていることもあります。

そんな自分に気がついたとき、是非本会報を開いてみていただければと思います。この会報の中には、副校長会の一年間の活動の様子が記録されています。課題解決に向けての研究や中期的な視野を持つのに役立つ講話・講演など、いろいろな情報を得ることができます。また、「退任者の声」や「転任者の声」には、「うんうん」とうなづくことが多いと思います。ちょっとしたことが課題解決の糸口になることがあるかと思います。本会報がその糸口の一つになるようなことがあれば嬉しい限りです。

最後に、今後も、全日制部会と定時制・通信制部会との調整や細則の検討は必要ですが、4月からは、新たに東京都公立高等学校副校長協会としての活動が始まります。本会報もリニューアルされることは間違いないと思います。

今後も、副校長会の活動が会員皆様の業務を支える要素の一つとなるよう努力したいと思います。ご協力よろしくお願ひいたします。

副会長 小堀紀明（農産）

## 会 報

第38号 (平成22年度) 非売品

発行日 平成23年3月31日

編集者 東京都立高等学校副校長会事務局

発行所 東京都立高等学校副校長会

〒113-0034 東京都文京区湯島1-5-28

ナーベルお茶の水2階

電話 5840-6104 FAX 5840-6108

E-mail: info@zenko-kyotou.jp

印刷所 社会福祉法人 東京コロニー 東京都大田福祉工場

〒143-0015 大田区大森西2-22-26 電話 3762-7611



横山大觀 五鄉先生